

博士論文

家族構造と青年のストレスに関する

臨床心理学的研究

— 家族バランス仮説の生成とその検討 —

狐塚 貴博

要約

家族構造と青年のストレスに関する臨床心理学的研究

—家族バランス仮説の生成とその検討—

本研究の目的は、家族構造と青年のストレスとの関連から、青年期の家族構造の望ましい形態を明らかにすることである。第 1 章では、家族サイクルの観点から、青年期は親子関係の質的な変化や再調整が求められる時期であることを指摘した。加えて、青年のストレスに関しては、ストレスターの経験とストレス反応の表出、さらには摂食障害や摂食障害傾向、心身症周辺領域の研究を取り上げ、これら諸変数の問題点を整理した。さらに、家族の査定方法に関する先行研究の概観から、家族内の複雑な関係性を捉える意義を指摘した。

第 2 章では、第 1 章で指摘した諸問題を解決する提案と本研究の目的を示した。家族構造については、青年の視点から、夫婦間、父子間、母子間の 3 者関係を査定し、それらの組み合わせから捉えることを示した。青年のストレスについては、青年が経験するストレスターとストレス反応、さらに青年の摂食障害や摂食障害傾向、心身症周辺領域の問題から捉えることを示した。なお、本研究の目的に沿い、家族成員間の結びつきと勢力のバランスにより青年のストレスを説明しようという仮説を立てた。この仮説を検証するため、5 つの実証研究を行った。

第 3 章では、家族構造を構成する家族成員間（夫婦間、父子間、母子間）の関係性を捉える最少の因子構造を抽出する検討を行った。対象者は大学生 434 名（男性 147 名、女性 287 名）であり、質問紙による調査を行った。質問紙は既存の家族に関する国内外の尺度における述語部分を参考に、計 246 項目を作成した。その結果、「結びつき」、「利害的關係」、「勢力」、「開放性」という 4 因子構造を抽出し、家族構造の下位システムを把握する上で最少の因子構造として 4 因子構造が妥当であることを示した。さらに、この 4 因子の中でも「結びつき」と「勢力」という 2 因子は、家族構造を把握する上で重要な因子であることを指摘した。

第 4 章では、第 3 章で導かれた、「結びつき」、「利害的關係」、「勢力」、「開放性」という 4 因子を家族構造の類型に用い、青年が認知する家族内ストレスター、ならびに成員間のコミュニケーションとの関連について、性差を踏まえ探索的に検討した。対象者は大学生、ならびに専門学校生の計 283 名（男性 104 名、女性 179 名）であり、質問紙による調査を行った。その結果、家族成員間の率直なコミュニケーションの頻度が高く、青年の家族内ストレスターの低い構造は、概して男女共に各成員間の結びつきの強さを基盤として、勢力が 3 者間（夫婦間、父子間、母子間）で均衡している特徴がみられた。一方、男女共に、家族成員間の率直なコミュニケーションの頻度が低く、家族内ストレスターが高い構造の特徴は、成員間の結びつきの弱さを基盤として、夫婦間や親子間での極端な利害的關係の

高さ、閉鎖的、開放的な組み合わせ、そして極端に勢力の差がある組み合わせを示した。

第 5 章では、青年の認知する家族内外のストレスとストレス反応に関連する家族構造の特徴を検討した。家族構造の測定においては、各関係の「結びつき」と「勢力」という 2 因子に限定して用いた。対象者は高校生 441 名（男性 187 名、女性 254 名）であり、質問紙による調査を行った。その結果、家族内外のストレスと家族構造との関連が認められ、高結びつき・勢力均衡型の構造は、家族内外のストレスの低さとの関連が認められた。青年のストレスに関与し、ストレス反応を軽減する可能性を有する家族構造の特徴として、成員間の強い結びつきと勢力が均衡した構造を見出すことができた。

第 6 章では、青年の摂食障害傾向の実態の報告、ならびに家族構造との関連を検討した。その際、第 4 章ならびに第 5 章で得られた結果から、「家族成員間の結びつきが強く、勢力が均衡した家族構造では、青年の摂食障害傾向が低く、一方、結びつきが弱く、勢力の差が大きい場合、摂食障害傾向が高い」という仮説を提示した。この仮説を家族バランス仮説 (Family Balance Hypothesis: FBH) とした。大学生ならびに高校生 663 名（男性 341 名、女性 322 名）を対象に質問紙による調査を行った。摂食障害傾向の実態の報告と共に、家族構造の類型による青年の摂食障害傾向の関連を検討した。クラスタ分析を用いた検討の結果、4 タイプの家族構造を見出し、家族成員間の結びつきの強さと 3 者が互いに同程度の影響力を持つといった勢力が均衡した家族構造は、青年女子の摂食障害傾向の抑制と関連することが示された。この結果は、概ね FBH を支持する結果であった。

第 7 章では、摂食障害、ならびに心身症周辺領域の疾患を有する青年と家族構造との関連について、事例による FBH の検討を行った。3 事例における調査時までの心理面接の経過と家族構造の変遷、ストレスについてインタビューの結果から、摂食障害（神経性無食欲症制限型）の女性 2 事例においては、面接の経過と共に FBH のバランス型への移行、ならびに症状や心理・社会的な適応の改善が確認された。さらに、身体不定愁訴を呈する男性 1 事例において、症状や心理・社会的な適応の改善と FBH のバランス型の家族構造を確認できた。この結果は、3 事例において概ね FBH のバランス型を支持する結果が得られたことを意味する。

これら実証研究を通して検討した FBH の家族構造は、概ね本研究の仮説を支持する結果であった。つまり青年のストレスという観点において、青年期の望ましい家族構造は、家族成員間が親密なつながりで結ばれた関係を基盤とし、夫婦間、父子間、母子間の勢力が均衡している形態であることが示された。第 8 章、ならびに第 9 章では、本研究の結果を基に、家族構造と青年のストレスとの関連を考察し、心理臨床場面への示唆と本研究の意義を提示した。

Abstract

A Study Concerning the Association of Family Structure with Adolescent Stress —Development and Examination of Family Balance Hypothesis—

The purpose of this study was to identify the most affirmative family structure in adolescence. Chapter 1 was to point out family cycle theory implies parent-child relationship changes in adolescence. In addition, I reviewed the research on adolescent stress variables (stressor, stress reaction, eating disorder, eating disorder tendency, and psychosomatic-related problem) and family relationship assessment. Given those findings, I maintained the significance of assessing complex family relationships.

In chapter 2, I showed the purpose of the present study and proposed to solve the problems pointed out in Chapter 1. Family structure concerned three dyadic relationships (marital, father-adolescent and mother-adolescent). Adolescent stress concerned adolescent stressor, stress reaction, eating disorder, eating disorder tendency, and psychosomatic-related problem. Participants were adolescents. According to previous studies, I hypothesized adolescent stress was associated with dyadic cohesion and power between family members.

Chapter 3 aimed to determine the types of relationship between dyads (marital, father-adolescent and mother-adolescent). Participants were 434 university students (147 men and 287 women) and answered a questionnaire. I developed a 246-items scale based on previous family relationship studies. The result suggested that family structure was sufficiently assessed with four aspects of family dyads (cohesion, interest relation, power and openness). I maintained dyadic cohesion and power are two aspects for assessing family structure.

Chapter 4 examined family structure with in-family stressor. According to Chapter 3, I measured four aspects of dyadic relationships (cohesion, interest relation, power and openness) for assessing family structure. Participants were 283 adolescents (104 men and 179 women). The results showed low-in-family stressor was associated with adolescents in a family structure: high cohesion and balanced power relationships between all dyads (marital, father-adolescent and mother-adolescent). In contrast, high-in-family stressors appeared adolescents in a family structure: low cohesion between all dyads, high interest relation and excessive openness in marital dyad, and excessive father power relationship.

The purpose of Chapter 5 was to examine the relation between adolescent psychological stress and family structure. The stress was adolescent subjective

evaluation of stressors and stress responses. Two adolescent stressors were in- and out-of-family ones. Participants were 441 high school students (187 men and 254 women). The survey queried cohesion and power for three dyadic relationships (marital, father-adolescent and mother-adolescent). The result showed both in- and out-of-family stressors were associated with family structure. Furthermore, lower stressors were shown for adolescents in a family structure: high cohesion and balanced power in all dyads (marital, father-adolescent and mother-adolescent). The result suggested family structure differentiates out-of-family stressors as well as in-family ones.

Chapter 6 aimed to reveal the association between adolescent eating disorder tendency and family structure. Participants were 663 high school and college students (341 men and 322 women). Based on aforementioned findings (Chapter 4 and Chapter 5), I developed Family Balance hypothesis (FBH) that high cohesions and balanced power relationships in family dyads are associated with high eating disorder tendency of adolescents. The results of the survey revealed female adolescents in high cohesion and balanced power family reported less eating disorder tendency. The result supported FBH.

Purpose of Chapter 7 tested FBH with clinical samples. Participants were three adolescents who suffered from eating disorder or psychosomatic-related problems. I assessed family structure and adolescent stressors in therapy sessions. For female adolescents of eating disorder (the restrict type of Anorexia Nervosa), treatments improved their family structure, symptom and psychosocial adaptation. For one male adolescent with psychosomatic-related problems, similarly, treatments improved their family structure, symptom and psychosocial adaptation. The results supported FBH with clinical samples.

The results generally supported FBH and suggest a desirable adolescent family structure: high cohesion and balanced power relationship in three dyads (marital, father-adolescent and mother-adolescent). Finally, I discussed clinical implication and argued a new perspective to use in examining the relation between family structure and adolescent psychological stress (Chapter 8 and Chapter 9).

目 次

序 文	1
第 1 部 問題と目的	
第 1 章 先行研究の概観と問題点の整理	5
1-1 青年を取り巻く社会状況	
1-2 家族サイクルからみる青年期の子どもの家族関係	
1-3 ストレスとは何か	
1-4 青年期の家族関係と青年のストレス	
1-5 家族構造と青年の摂食障害，ならびに摂食障害傾向	
1-6 家族構造と成員間の関係性	
1-7 家族の査定方法	
第 2 章 本研究の目的と実証研究の構成	41
2-1 本研究の目的	
2-2 家族構造の測定因子に関する提案	
2-3 家族構造と青年のストレス	
2-4 家族構造と青年の摂食障害，摂食障害傾向，および 心身症周辺疾患	
2-5 本研究の仮説と実証研究の位置づけ	
第 2 部 実証研究	
第 3 章 【研究 I】 家族構造の測定における構成因子 に関する研究	59
3-1 目 的	
3-2 方 法	
3-3 結 果	
3-4 考 察	

第 4 章	【研究Ⅱ】青年期の家族構造と青年の認知する 家族内ストレスとの関連	70
4-1	目 的	
4-2	方 法	
4-3	結 果	
4-4	考 察	
第 5 章	【研究Ⅲ】青年のストレスとストレス反応 に関連する家族構造の検討	96
5-1	目 的	
5-2	方 法	
5-3	結 果	
5-4	考 察	
第 6 章	【研究Ⅳ】青年期の家族構造と青年の摂食障害 傾向との関連	115
6-1	目 的	
6-2	方 法	
6-3	結 果	
6-4	考 察	
第 7 章	【研究Ⅴ】青年の摂食障害，ならびに心身症 と家族構造との関連	130
7-1	目 的	
7-2	方 法	
7-3	結 果	
7-4	考 察	
第 3 部 討 論		
第 8 章	総合考察	163
8-1	仮説の検証	
8-2	家族構造について	
8-3	家族構造と青年のストレスについて	

8-4	家族構造と青年の摂食障害，摂食障害傾向，および心身症周辺疾患について	
第 9 章	今後の課題と展開	182
9-1	今後の課題	
9-2	心理臨床場面への示唆	
9-3	本研究の意義	
引用文献		193
付 記		212
謝 辞		213
資料 1	第 4 章で使用した家族構造，コミュニケーション，家族内ストレスナーについての測定項目	
資料 2	第 5 章から第 7 章で使用した，ICHIGEKI(Inventory for Character of Intra-Inter Generation in Kinship)による家族構造の測定項目	
資料 3	第 5 章で使用したストレスナーとストレス反応に関する質問項目	
資料 4	第 6 章で使用した EAT-26	
資料 5	第 7 章で使用した研究同意書とインタビュー内容	

序 文

家族は誰もが経験する集団である。それは子どもとして、父親や母親という親として様々な立場で経験する。その関係は生涯に渡り持続し、人生全般に大きな影響を及ぼす。このような重要な社会システムの一つでありながらも、家族を客観的に定義することは容易ではない。より一般的には、“夫婦・親子・兄弟など少数の近親者を主要な成員とし、成員相互の深い感情的関わり合いで結ばれた、幸福（well-being）追求の集団”（盛岡・望月，1997，p.4）といった、主として自らの体験に基づき、情緒的な結びつきを基盤として構成される集団であるといえる。しかし、石原（2004）が指摘するように、近年の核家族化にみられる形態や行動の基準となる規範の多様化、家族成員の個人化といった変化に伴い、様々な問題を抱えていることも事実である。それに起因するように、不登校や引きこもり、ニート、家庭内暴力、虐待等の問題も指摘され、家族関係そのもののあり方が問われている。このことは、もはや関係が良いか悪いかという一元的な視点のみでは家族を理解し、そして説明する十分な指標とはならないことを示唆している。

家族という集団は、家族成員のどの立場から自分自身の家族をみるかによっても家族像は異なるであろうし、また、家族以外の者の視点からでも家族像は異なる。たとえ、家族の各視点（父親や母親、子どもの視点）を統合したとしても、さらに家族以外の者が観察した視点を統合したとしても、いわば客観的な家族として記述することはできず、むしろ実態像とはかけ離れた描写になる。この意味において、客観的な家族は存在しない。家族成員間の言説（discours）¹により社会的に構成され

¹ 言説（ディスコース、もしくはディスクール）とは、Foucault（1969, 中村（訳），1981）により使用された用語の一つである。Foucault は言葉、あるいは文章は、それが用いられる文脈や状況により、どのような意味を示すかが決定されるとした。例えば、家族という言葉が、行政の

(Gurium & Holstein, 1990, 中河・鮎川・湯川(訳), 1997), その実態は社会的産物として流動的であり変化する過程に存在する。したがって, いかに客観的であるかという問いに対する答えを導き出すことよりも, 家族の誰の視点から家族を解釈, 説明していくかという視点の統一が有効である。いずれにせよ, どのような家族であれ, 日常生活を共にし, 持続する関係にある家族という集団は, 子どもの適応を考える上で考慮すべき重要な集団である。このことを踏まえ, 本研究では青年の視点を採用する。青年の主観のうちに家族関係がいかに映し出され, それをどのように解釈するかという点に着目したい。例えば, 親が青年を心配している意図から, 何らかの言動を青年に示したとしても, 青年は親の意図した心配しているというメッセージ通りにその言動を解釈するとは限らないからである。

一言で家族といえども, そこには父親や母親, 子どもといった複数の成員から成り, また夫婦関係や父子関係, 母子関係といった様々な関係性がある。この複雑な成員間の相互関係を記述, 説明するためには, 家族という集団を一つのシステムとして, その相互関係を捉えるシステム論²の知見を用いることが有効である。すなわち, 父親や母親, 青年という個人の特性ではなく, 家族全体, または夫婦関係や父子関係, 母子関係等の関係性の組み合わせ, さらにそれらの相互関係から家族を捉える視点である。

本研究では, 青年期の家族関係に着目する。青年期の家族は,

書類や何らかの申請書といった定式化された文章内で用いられるのであれば, それは同居している血縁者を指し示すという意味で用いられる。一方, 「私にとって犬は家族です」といった文脈で用いられるのであれば, それは愛情や結びつきの強さを指し示す言葉を意味する。このように, 用いられる文脈や状況の違いによって, どのような意味が強調されるかが異なるわけである。

² システム論については若島(2005)に詳しい。本研究では個人という構成要素に着目するのではなく, 構成要素間の関係, つまり夫婦関係や父子関係, 母子関係の組み合わせから構成される家族を一つのシステムとして扱う視点で論を進めていく。

青年の発達に伴い，これまでの相互関係から，再度，調整を行うことが求められる時期の一つである。そのため，親子関係のみならず夫婦関係においても，その在り方次第で家族成員間のストレスは高まると考えられる。青年期というこれまでの家族関係からの再調整が求められる時期に，その関係の在り方を検討し，ストレスが少なく適切な関係への移行を成し遂げることは，青年のみならず両親にとっても意義あることと思われる。よって，家族の形態を各関係の組合せから包括的に捉え，青年のストレスにどのように関与しているかについて，心理学的観点から青年期の家族関係の在り方を示していく。

第 1 部

問題と目的

第 1 章

先行研究の概観と問題点の整理

第 1 章では，青年期を“第二次性徴の出現に始まる急速な身体的成熟を特徴とする思春期（一般に 10 代前半の二年間）から，社会的に自立するまでのほぼ 10 年間”（岡堂，2006, p.155）と捉え，家族サイクルの側面から青年期の子どもとの家族関係，青年が家族内外で経験するストレス，青年のストレス反応の一つとしての摂食障害について，これまでの知見を踏まえ問題点を指摘する。その際，家族という集団の構成要素である関係性とコミュニケーションとの関連性，さらには，家族構造の説明を踏まえ，家族を査定する方法についても検討していく。

1-1 青年を取り巻く社会状況

はじめに、家族と青年との関連に先立ち、本邦における現代の青年がどのような社会的文脈の中にあるかについて概観する必要がある。それは、本論の主軸である家族と青年との関係を論じる上で、青年の家族という集団もまた地域や社会という、より大きな文脈の中に位置するからである。青年という個人の身近な集団である家族は、社会という環境の中に位置すると共に、青年と家族、そして社会という関係は常に相互に影響している（Coleman & Hendry, 1999, 白井・若松・杉村・小林・柏尾（訳）、2003）。

青年に影響を与える社会的変化の一つに青年の進学率の推移が挙げられる。近年、本邦における青年の進学率は増加が続いている。内閣府（2011）の報告によれば、大学や短大への進学率は、2005年に50%を超え、2010年には男女の平均は56.8%と半数以上である。さらに、2010年には大学学部の卒業者は54万1000人（男性30万7000人、女性23万4000人）であり、このうち60.8%が就職し、13.4%が大学院等に進学している現状である。このような現状は、青年の労働市場への参入までに多くの期間を要すると共に、青年期という時期の長期化を意味している。つまり、このことは青年がより家族と共に生活する期間が長くなる、もしくは、同居という形態をとらなくとも経済的な面で家族の協力が必要となることを意味する。したがって、それぞれの青年や家庭環境による個別性はみられるが、青年期という時期をより拡張して検討すること、そして幼少期のみならず青年期という時期においても家族関係の在り方を検討する重要性がみえてくると考えられる。

1-2 家族サイクルからみる青年期の子どもの家族関係

人間が誕生し、はじめて所属する集団は家族であり、個人は家族という環境の中で成長し、やがてはその家族から自立し自

らの家族を形成していく。その意味で、家族関係が否定的なものであれ、肯定的なものであれ、家族を経験しない人はいない。青年期の家族関係を捉えるにあたり、まず、家族の形成から新しい家族を形成する過程を概観する。青年期は分断された時期ではなく、幼児期や成人期といった様々な時期の連続線上に位置するからである。その過程を概観することを通して、青年期の家族関係にはどのような特徴があるかを検討する。

かつて Erikson (1963, 仁科 (訳), 1980) は、心理・社会的発達理論の中で、個人の発達を生涯の連続線上で捉え、そこで生じる課題と危機により人生を 8 つの段階に分け説明した。ここでは、個人を環境と切り離しえない社会的存在として捉え、社会との葛藤に直面し、それを乗り越えていくことの重要性が示されている。個人にとって身近な社会システムの一つである家族は、時には子どもとして、時には父親や母親として、それぞれの人生周期を生き、各自の課題と危機を抱える。このように人の一生で経験される規則的な推移は、ライフサイクルと呼ばれる(盛岡・望月, 1997)。個人の生涯における発達と同様に、家族という集団においても、成員各自の発達や変化そして社会の変動と連動し、その形態や機能、構造を変化、発達させていく(柏木, 2003)。盛岡・望月(1997)は個人のライフサイクルを明らかにする諸研究において、それは生命のライフサイクルではなく、生活のライフサイクルであること、そして個人の生活の場をまず家族に求めるがゆえ、家族のライフサイクルと個人のそれは表裏一体であるとしている。加えて、家族にもライフサイクルと呼べる時間的展開の規則性が認められるとしている。つまり、個人同様、家族にも一生に起こる生活の規則的な推移が認められるわけである。

子どもの発達に伴う親子関係の質的变化は、例えば幼少期に親が主導的だった関係が、青年期になるにつれ、青年の自立を意識し、主体性を尊重する関わりへ移行することを考えてみる

と容易に想像できる。夫婦関係も同様に，子育ての時期と子どもが家族から独立し，再度夫婦二人となる時期では，その在り方が異なってくる。このように家族という集団は構成概念であるため，それ自体に生命をもたないものの，家族成員の発達に伴い，親子関係や夫婦関係といったある単一の関係における変化のみならず，それら様々な関係が複雑に絡み合い相互に関連しながら，変化，発達していく。家族成員に生じる変化，発達にともなう家族の形態や構造，機能の変化に関するプロセスは，家族サイクルといわれる（柏木，2003）。そこでは，家族の発達過程において，ある段階から次の段階への移行期に家族危機は生じやすく，親子間で独立と分離の移行が阻害されたときに高まるとされている（Haley, 1976, 佐藤（訳），1985）。したがって，自らが育った家族（以下，原家族と記載）から経済的，精神的に自立し親密な異性関係を築く時期，結婚し配偶者と共に新しい家族を形成していく時期，出産により新しいメンバーを家族に迎え入れ夫婦で養育という機能を果たす時期，子どもが成長し，家族から自立し，再度夫婦二人となる時期等の移行期に問題が形成されやすい。

家族サイクル論の代表的なモデルには，例えば Erikson(1963, 仁科（訳），1980) の発達課題を家族サイクルに反映させた Rhodes (1977) による 7 段階説，また本邦では家族を生活体と位置づけ，時間的展望の規則性が認められる集団として論を展開する，盛岡・望月（1997）の 8 段階説が提唱されている。しかし，家族の発達をより包括的，且つシステミックに捉えたモデルは，Carter & McGoldrick (1989) の知見にみられる（Table 1-1）。

Table 1-1 Carter & McGoldrick (1989) の家族サイクル論

第1段階	親元を離れて独立して生活しているが、まだ結婚していない若い成人の時期
①	心理的な移行過程 親子の分離を受容すること
②	発達に必須の家族システムの第二次変化 <ul style="list-style-type: none"> ・自己を出生家族から分化させること ・親密な仲間関係の発達 ・職業面での自己の確立
第2段階	結婚による両家族のジョイニング、新婚夫婦の時期
①	心理的な移行過程 新しいシステムへのコミットメント
②	発達に必須の家族システムの第二次変化 <ul style="list-style-type: none"> ・夫婦システムの形成 ・親の家族と友人との関係を再構成すること
第3段階	幼児を育てる時期
①	心理的な移行過程 家族システムへの新しいメンバーの受容
②	発達に必須の家族システムの第二次変化 <ul style="list-style-type: none"> ・子どもを含めるように、夫婦システムを調整すること ・親役割の獲得 ・父母の役割、祖父母の役割を含めて、親の家族との関係を再構成
第4段階	青年期の子どもをもつ家族の時期
①	心理的な移行過程 子どもの独立をすすめ、家族の境界を柔軟にすること
②	発達に必須の家族システムの第二次変化 <ul style="list-style-type: none"> ・青年が家族システムを出入りできるように、親子関係を変えること ・中年の夫婦関係、職業上の達成に再び焦点を合わせる ・老後への関心をもち始めること
第5段階	子どもの出立ちと移行が起こる時期
①	心理的な移行過程 家族システムからの出入りが増大するのを受容すること
②	発達に必須の家族システムの二次変化 <ul style="list-style-type: none"> ・2者関係としての夫婦関係の再調整 ・親子関係を成人同士の関係に発達させること ・配偶者の親・兄弟や孫を含めての関係の再構成 ・父母（祖父母）の老化や死に対応すること
第6段階	老年期の家族
①	心理的な移行過程 世代的な役割の変化を受容すること
②	発達に必須の家族システムの第二次変化 <ul style="list-style-type: none"> ・自分および夫婦の機能を維持し、生理的な老化に直面し、新しい家族的社会的な役割を選択すること ・中年世代がいっそう中心的な中心的な役割を取り入れるように支援すること ・経験者としての知恵で若い世代を支援するが、過剰介入はしないこと ・配偶者や兄弟、友人の死に直面し、自分の死の準備をはじめること ・ライフ・レビュー（life review）による人生の統合

柏木（2003, p.30）より引用

Carter & McGoldrick (1989) は、原家族からの独立にはじまり、世代的な役割の受容と自身の死の準備に至るまでの過程を6段階により説明する。ここでは家族内部の変動のみならず、仲間関係や職業といった社会的な視点や原家族との関係まで考慮されている。各段階はその段階に応じた心理的な移行過程と発達に必須の家族システムの二次変化³により説明される。ここで述べる二次変化とは、家族というシステムに課題として求められるシステム自体の質的な変化であり、前段階の家族システムにおける規則や習慣、課題、それに基づく家族関係とは異なるシステムへの変化である。第4段階の青年期の子どもをもつ家族の時期においては、心理的な移行過程として、子どもの独立をすすめる、家族の境界を柔軟にすることを挙げている。さらに、発達に必須の家族システムの二次変化として、青年が家族システムを出入りできるように、親子関係を変えること、中年の夫婦関係、職業上の達成に再び焦点を合わせること、老後への関心をもち始めること、という3つが課題とされる。青年はこの時期、友人との関係に代表される家族外との接点、いわば社会との関わりを重視するようになり、家族への依存と自立へ

³ 二次変化とは、Watzlawick, Weakland & Fisch (1974, 長谷川 (訳), 1992) により数学基礎論の群論、ならびに論理階型論を比喻として用い説明する変化のタイプである。彼らは、変化には二つのタイプがあり、一つはシステムの内部で生じるシステム自体は不変の変化である。もう一方の変化はシステム自体の変化であるとする。彼らはある家族の比喻を用いてこの二つの変化を説明する。彼らの比喻を要約すると、ある4歳の少女が幼稚園に通い始めるが、通園初日に母との別れを激しく恐れ、母親はその日一日を幼稚園で少女と過ごした。そして、その後も同様に母親と少女が幼稚園で一緒にいる日が続いた。関係者はこの状況に対し様々なことを試みるが、ことごとく失敗していた。ある日、母親が娘を幼稚園へ送っていく事ができず、代わりに父親が娘を送っていった。すると娘は最初少し泣いたもののすぐに落ち着いて登園した。翌日、再度母親がいつものように幼稚園に送ると娘は泣かなかった。そしてその後、二度とこの問題は起きなかった。この例が説明するように、娘が母との別れを激しく恐れることに対して、母親がとっていた行動、つまり母子というシステム内で、母親が良かれと思っていた娘の言動に対する解決行動が一次変化である。一方で、父親が娘を幼稚園に送るという行動、つまりこれまでの母子というシステム内で行われてきた行動とは質的に異なるものが二次変化である。二次変化からみると一時変化は問題を維持・存続させている行動連鎖である。

の葛藤に揺れ動く状況に対して、家族の柔軟性が求められるわけである。一方で、親自身も親役割として子どもに接する以外に、夫婦としての在り方や自分自身の職業への関心、親世代の老後に目を向けるといった、親自身の変化も求められる時期である。個人と家族サイクルの両面から検討した渡辺(1996)は、青年期の子どもがいる時期は、家族サイクルにおいて、最も困難で問題が表面化しやすい時期であることを指摘し、上記した青年期の特徴に加え、青年の生活範囲の拡大により、親子間の価値観の相違が顕著になることを指摘している。

この青年期の親子間における価値観の相違は、親子両視点にどのように反映されるのかについて、岡堂(2006)は信頼関係という観点から検討している。岡堂(2006)は、この時期、特に自立と責任と制御の面で基本的な信頼関係を損なわずに親子関係を再規定することの重要性について論じている。親の子どもに対する信頼の動揺は、家族外における子どもの活動についての情報が不足した時や子どもに対して親が自身に従うことを求めている場合に不信感を募らせる。一方、子どもの親に対する信頼感の揺らぎは、子どもの意思を認めない親の態度に直面した時に起こり、それらは、親が子どもに対して年齢相応の自立性と自由を認められないときに生じやすい。

このように家族内、とりわけ親子関係の再規定に伴う葛藤は、病的なものとして捉えるのではなく、いわゆる反抗期と呼ばれる一般的な現象であり、その葛藤を通して、親子関係の再規定が促されるとも考えられる。しかしながら、青年期の子どもをもつ家族において、青年と親、そして夫婦の関係は、これまでの関係からの変化がとりわけ求められる時期であり、その在り方によっては家族内で生じるストレスが高まる時期と考えられる。この青年期の家族内ストレスという点について、若島・狐塚・板倉・宇佐美(2010)、ならびに Usami, Kozuka, Hiraizumi, Morikawa, Furuyama, & Wakashima (2011) は、回想法を用

い、歴史的観点から家族関係を査定する Family Relationship History Graph (FRHG) を用いて家族関係、ならびに家族内外のストレスの推移を青年の視点から検討している。その結果、家族内のストレスについて、男女共に思春期・青年期にあたる時期からの上昇傾向を認めている。

思春期という青年の顕著な身体的変化に始まる青年期は、身体面と同様に心理的な変化も大きい。同時に、青年の活動範囲の拡大に伴い、友人関係に代表される家族外との関係も活発になる。そのため、青年は家族内でのストレスのみならず、家族外での軋轢も生じやすい。青年の経験する家族内外のストレスの検討に先立ち、ストレスとは何か、そして家族内で経験されるストレスにはどのようなものがあるかについて、心理学領域にもたらされた代表的なストレス学説を概観し説明していく。

1-3 ストレスとは何か

ストレスという用語がメディアを中心に幅広く汎用されるようになって久しい。青年のみならず中高年の職場ストレスや母親の育児ストレスといった使い方ができるように、もはや私たちが日常語として当たり前のように使用している用語の一つである。ストレスを心理学的に定義すると“心身の適応能力に課せられる要求 (demand) およびその要求によって引き起こされる心身の緊張状態を包括的に表す概念” (岡安, 1999, p.475) とされる。心身の適応能力に課せられる刺激や環境をストレッサー、その刺激や環境に対する心身の状態をストレス状態、その結果起こる心身の反応をストレス反応 (ストレイン) と呼ぶことに関しては心理学的なストレス研究においてコンセンサスが得られよう。ストレスという用語がいつ、誰によって最初に普及されたかについては、いくつかの議論を要するが (例えば, Cooper & Dewe, 2004, 大塚・岩崎・高橋・京谷・鈴木 (訳), 2006), ストレスという概念の学問的発展に最も貢献した人物の一人は

Selye であろう（例えば，Cooper & Dewe, 2004, 大塚他（訳），2006；林，2008；小杉，2006）。Selye は 20 世紀前半の感染症を引き起こす病原菌の発見にみられる特異的な症状を重視する医学の風潮に疑問を抱き，非特異的な症状，つまり原因が異なっても同じように現れる一般的なありふれた症状（生理的変化）に着目し，病気に抵抗する身体の働きやそのメカニズムの解明こそが重要であると考えた（林，2008）。Selye はこの非特異的な症状を，まさに病気である症候群（the syndrome of just being sick）と呼んだ（Selye, 1976, 杉・藤井・田多井・竹宮（訳），1988）。Selye（1976, 杉他（訳），1988）のストレス学説では，動物実験により，あらゆる要求によってもたらされる身体の非特異的反応，例えば副腎皮質の肥大やリンパ組織の委縮，胃腸の内部出血や潰瘍等の生理的変化に着目し，生体の刺激に対する反応の過程を系統的に示した。その過程は，全身適応症候群（General Adaptation Syndrome）と呼ばれ，生体が生存を脅かす有害な刺激や環境に曝されると，警告期，抵抗期，疲憊期といった 3 つの経過を経るとした。最初の警告期には，抵抗力の低下を招くショック相を経て，身体の防衛パターンとして警告反応が表れ，抵抗力が上昇する反ショック相に移行する。さらにストレスに曝され続けると抵抗期に移行し，抵抗力とストレスのバランスが保たれる。最終的に，ストレスの持続は抵抗力の消耗を招き，疲憊期には死に至る。

Selye が行った学問領域への偉大な貢献は，①そもそも工学分野で使用されていたストレスという用語を使用し，非特異的な生理的変化をストレスという用語でラベリングを行ったこと，②そして，その変化を，生体が生存を脅かす有害な刺激や環境に曝された時に生じる適応的な反応として解釈したことにあると考えられる。

以上，Selye は生理的側面，つまり心身の消耗過程に着目したため，心理的側面や適応過程への関心が強調されなかったも

のの、彼のストレス学説はストレス研究の発展の上で重要な役割を担っていた。ストレス研究において、その発端は生理学的な研究として始まっていったが、徐々に生活環境の変化や生活上の出来事といった心理・社会的な要因との関連に発展していった。

ストレスに関連する心理・社会的要因の解明に向けた代表的知見は、1960年代後半、Holmes & Rahe (1967)による **The Social Readjustment Rating Scale (SRRS)** の作成にみられる。ここでは、生活環境の変化や生活上経験する様々な出来事である **ストレスフル・ライフ・イベント (stressful life event)** に着目し、個人のストレスレベルの測定と心身疾患との関連について検討している。Holmes & Rahe (1967) は、人間は環境に適応して生き、様々なライフイベントに遭遇し、そこから再適応するまでの労力が心身の状態に関連するとした。そして、5,000名以上の患者から疾患と関連するライフイベントの質や量を検討し、そこから43項目を選定した。そして、性別や年齢、学歴、人種、経済状況、宗教等が異なる394名に対し、その項目に示されるライフイベントを経験した際に要する労力の評定を求めた。その結果、各項目に記述されるライフイベントに重みづけされた得点 (**Life Change Unit: LCU**) を付与した (**Table 1-2**)。LCU得点が高いほど、イベントを経験してから再適応までの労力を要し、心身の疾患との関連が高まるとされる。加えて、ライフイベントに関する項目は通常の状態からの変化ということが重要であることを示している。

Holmes & Rahe (1967) の **SRRS** は、青年に特化したライフイベントではなく、また日本と欧米との文化的特性や慣習の違いを考慮する必要がある。しかしながら、**Table 1-2** に示されるように、配偶者の死や離婚、夫婦別居といった家族関係で起こるライフイベントは、いずれもLCU得点の上位項目に多く、**SRRS** の全項目である43項目中12項目を占める。このことか

らも個人にとって身近であり，持続する関係にある家族内で起こるライフイベントは，個人の心身の健康と関連するストレスフルな要因の一つとなる。

Table 1-2 社会的再適応評定尺度 (Holmes & Rahe, 1967)

生活上の出来事		LCU
1 配偶者の死	○	100
2 離婚	○	73
3 夫婦別居	○	65
4 刑務所等の施設での留置		63
5 近親者の死	○	63
6 本人の怪我や病気		53
7 結婚	○	50
8 失業		47
9 婚姻関係の調停	○	45
10 退職		45
11 家族成員の健康の変化	○	44
12 妊娠		40
13 性的問題		39
14 新たな家族成員の増加	○	39
15 仕事の再調整		39
16 経済上の変化		38
17 親しい友人の死		37
18 転職による仕事の変化		36
19 配偶者との口論の変化	○	35
20 1万ドル以上の抵当借金		31
21 抵当借金やローンの抵当流れ		30
22 仕事上の責任の大きな変化		29
23 息子や娘が家を出る	○	29
24 親戚とのトラブル		29
25 個人の際立った達成		28
26 妻が仕事を始める, または辞める	○	26
27 就学や卒業		26
28 生活状態の大きな変化		25
29 個人的な生活習慣の修正		24
30 上司との軋轢		23
31 労働条件の変化		20
32 住居の変更		20
33 転校		20
34 娯楽の変化		19
35 教会活動の変化		19
36 社会活動の変化		18
37 1万ドル以下の抵当借金やローン		17
38 睡眠習慣の変化		16
39 家族の集まりの回数の変化	○	15
40 食習慣の変化		15
41 休暇		13
42 クリスマス		12
43 軽度の法律違反		11

注 1. LCU (Life Change Unit) とはその出来事を経験した後に、再度適応するために要する重みづけの得点

注 2. 家族関係と関連する項目は筆者により○を記した

Holmes & Rahe (1967, p.216) より引用 (筆者訳)

Selye (1976, 杉他 (訳), 1988) の生理学的研究から, Holmes & Rahe (1967) に代表されるライフイベントとの関連で説明してきたストレス研究であるが, 徐々に個人差に焦点が当てられることとなった。つまり, 様々なストレッサーとストレス反応との間にある個人の認知的な評価や個人の対処, 個人が持つ資源といった媒介変数との関連である。このような現在の心理学的ストレス研究の先駆者の一人は, Lazarus, そして共同研究者の Folkman であろう (Lazarus & Folkman, 1984, 本明・春木・織田 (訳), 1991)。彼らは心理的ストレスを“人間と環境との間の特定な関係であり, その関係とは, その人の原動力 (resources) に負担をかけたり, 資源を超えたり, 幸福を脅かしたりすると評価されるもの” (Lazarus & Folkman, 1984, 本明他 (訳), 1991, p.22) と定義し, ストレスを人と環境との相互関係で捉えている。つまり, 身体の不調や病気, 職場や学校での困難, 家族内でのいざこざ等, 環境上の出来事それ自体がストレスフルな出来事となるのではなく, その出来事を個人がどのように評価し, それに対処するかといった個人の認知的評価や対処に依存するとしている。この心理学的ストレスモデル (Folkman & Lazarus, 1988; Lazarus & Folkman, 1984, 本明他 (訳), 1991) を簡潔に説明すると以下のようになる。まず, 心理的ストレスになる刺激や環境は, 個人の一次評価を介してその刺激が個人にとってストレスフルな刺激となりうるかが判断される。その結果を受け, 二次評価として, いかなる対処が必要かという対処努力の選択へと進み, 対処がなされ, その結果を再評価した後に様々なストレス反応が表れるとされる。

近年の心理学的ストレス研究の動向は, この Lazarus & Folkman (1984, 本明他 (訳), 1991), そして Folkman & Lazarus (1988) のモデルを中心に展開し, パーソナリティやコーピング, ソーシャル・サポート等, ストレッサーとストレス反応の媒介変数との関連に展開していくが, 青年期の家族関

係と青年のストレスとの関連を検討するという本研究の目的に沿い省略したい。

以上、心理学領域にもたらされた代表的なストレス学説を中心に概観した。彼らの功績を本研究の主旨に即して検討すると、かつて Selye (1976, 杉他 (訳), 1988) が主張したように、ある疾患に対する特定の原因を求めるよりも、その疾患に寄与するストレスという概念を検討することが重要であると考えられる。そして、Holmes & Rahe (1967) のライフイベント研究は、文化や習慣、年齢等の違いを考慮する必要性がある。さらに、ライフイベントにみられる客観的な生活上の大きな出来事よりも、日常生活で起こり、主観的に感じる苛立ちごとや不快な出来事の積み重ねの方が心身の健康を脅かすという指摘もある (Kanner, Coyne, Schaefer, & Lazarus, 1981; Lazarus & Folkman, 1984, 本明他 (訳), 1991)。しかし、生活の基盤である家族との関係は、個人の心身の健康と関連する主要な要因の一つであることは否定できない。

しかし、Lazarus & Folkman (1984, 本明他 (訳), 1991) が示したストレスラーとストレス反応の媒介変数としての個人差の重要性、そして本邦においても、青年に対する有形無形のソーシャル・サポートの重要性 (和田, 1992, 1998) や青年のストレスラーに対するコーピングの在り方とストレス反応の表出の違い (尾関・原口・津田, 1991) が検討されているが、その中心は個人であり、家族との関連については十分な検討が行われていない。つまり、ストレスラーに対して個人のもつ資源や対処によりストレス反応が異なるように、日常生活を共にし、持続する関係にある家族との関係の在り方によっても、個人のストレス反応は異なってくると考えられる。この点については今後の検討の余地を有し、十分な実証研究による検討を行うに値する観点であると思われる。

1-4 青年期の家族関係と青年のストレス

青年期という時期は、かつて Hall により、疾風怒濤^{しつぷうどとう}の時代と表現されたように、様々な動揺を経験する不安定な時期とされてきた (Muuss, 1996)。この見解は、この時期の青年は身体的、精神的な発達に加え、対人交流のパターンや社会への参加に代表される変化が生起することに関連する。一方で、青年は様々なストレスをもたらすライフイベントを経験するものの、多くの青年の適応的な側面が指摘され (Coleman & Hendry, 1999, 白井他 (訳), 2003)、青年個人の認知や対処の重要性に焦点が当てられている (Folkman & Lazarus, 1988; Lazarus & Folkman, 1984, 本明他 (訳), 1991)。

青年期という時期は、青年自身の属する家族関係において親子関係の質的な変化の時期 (Carter & McGoldrick, 1989) であり、同時に、対人関係や学業、進学^{しんがく}の達成等にみられる日常生活においても様々なストレスを経験する時期でもある (例えば, LaRue & Herrman, 2008; 三浦・川岡, 2008)。青年期の家族内外のストレス^{ストレス}サーについて、大学生を対象に FRHG を用いた Usami *et al.* (2011) の知見では、幼少期に比べ青年期への移行にかけての家族関係、ならびに友人関係に関するストレス^{ストレス}サーの上昇を認め、また、大学生を対象に回想法を用い、中学・高校・大学時代の家庭・家族のストレス状況を調査した皆川・村井・渡部 (2003b) の調査では、ストレス状況として最も多く挙げられているのは高校時代であると報告している。

青年期にあたる男女は、友人関係に代表される家族外の対人関係を重視する時期 (Larson, Richards, Moneta, Holmbeck, & Duckett, 1996; 中釜, 2000) であり、その在り方によって学校への適応感を規定する要因となりうるが、家族関係の在り方が軽視されるわけではない。とりわけ職業決定のような青年期の重要な関心に関わる領域では、親子間で議論が行なえる関係であることや親が受容的、支持的であると認知している青年では、

青年のアイデンティティ感覚の確立や職業決定への積極的な取り組みに関連することが指摘されている（高橋，2008）。この見解は Hendry, Shucksmith, Love, & Glendinning（1993）も同様に，余暇活動にみられる友人との交流の増加がみられる一方で，教育やキャリアに関する領域においては親子関係の重要性は保持されることを指摘している。

さらに，青年期でしばしば扱われる概念に，この時期の課題であるアイデンティティ探究に関する問題が挙げられる。この領域において特記すべき研究は，Grotevant と Cooper による個性化モデル（individuation）についての一連の研究（Cooper, Grotevant, & Condon, 1983; Grotevant & Cooper, 1985, 1986）で検討されている，親子間の結合性に関する知見である。彼らは，青年と両親間の分離と結合は相反するものではなく同時に生起することを指摘し，親子間の意思決定場面における相互作用の観察から，独自性（individuality）と結合性

（connectedness），さらに下位分類として独自性は分離（separateness）と自己主張（self-assertion），結合性は相互性（mutuality）と浸透性（permeability）にやりとりを分類し検討した⁴。その結果，独自性は結合性の文脈において生起し，それらの組み合わせは青年のアイデンティティ探究や役割獲得スキルの高さに関連することを指摘している。つまり，青年は家族との親密な関係を保持しながら自立の過程に向かうのである。この見解は，女子青年を対象とした Fullinwider-Bush & Jacobvitz（1993）においても支持されている。青年の情緒的な自立や個別化に関する見解は，一見すると親からの分離を促す過程によってなされるものと想定されがちであるが，家族との情緒的なつながりや親密な関係において青年の独自性が促進

⁴ Grotevant & Cooper（1986）では，独自性を自分自身の意見を明確に伝達することや自他の見解の違いを述べること，結合性を他者の信念や感情の尊重，他者の考えを進展するための承認や励ましを伝えることとしている。

されるといふ逆説的な構造を有している。これら青年期における家族成員間のつながりに関する知見は、幼少期の親子関係にみられる養育態度のような、いわば直接的な関連とは質的に異なるものの、青年期においても良好な家族との関係は、青年の行動に間接的に関連する要因と考えられる。いずれにせよ、幼少期のみならず青年期においても日常生活を共にする家族との関係は、青年の適応にとって重要な変数であるといえる。

青年のストレスに関連する家族関係は、青年のソーシャル・サポートの一つとして検討されている。ソーシャル・サポートとは Caplan により概念化された個人のストレスに緩衝要因となる対人的援助である（嶋，1992）。ソーシャル・サポートの知覚はストレスフルな状況や出来事により生起する青年のストレス反応を軽減する要因となる（例えば，Cohen & Wills, 1985; Roosa, Dumka, & Tein, 1996）。本邦においても、家族からのソーシャル・サポートは、岡安・嶋田・坂野（1993）による中学生 917 名を対象とした学校ストレスとの関連や菊島（1999）による大学生 444 名を対象に行った中学校時代の回想法による不登校傾向との関連、嶋（1992）による大学生 424 名を対象とした日常生活ストレスとの関連、皆川・村井・渡部（2004）による大学生 727 名を対象としたストレス反応との関連が検討されている。いずれも中学生から大学生という青年期の幅広い時期において、青年のメンタルヘルス領域に肯定的な要因として関連することが指摘されている。しかし、その多くは家族からどのようなサポートがどの程度かという一元的な視点にとどまり、青年を含む家族の相互関係を詳細に検討するまでには至っていない。

一方、青年の認知する家族関係そのものに起因するストレスは、皆川らによる大学生を対象とした一連の研究（皆川・村井・小野，2001；皆川・村井・渡部，2003a；皆川他，2003b）において検討されている。ここでは、家族の結びつきの強さが青年の

ストレス認知の低さやストレス状況の改善と関連することが報告されている。青年期は親子間の葛藤が顕著になり，青年は両親と関わりを持たなくなることが増える一方，親子間の親密で暖かい関係を求める（Steinberg & Morris, 2001）。そのため，程度の差はあれ，家族との結びつきの強さが青年のストレス認知の軽減やメンタルヘルスに対する肯定的な変数との関連性を示していると考えられる。しかし，家族関係と青年のストレスの関連を扱う研究の多くは，家族関係そのものに起因するストレスのみで検討されている。家族関係のみならず，青年の日常生活の主体となる学校，そしてそこでの対人関係等の重要性を踏まえ，青年が家族内外で経験するストレスを含めた包括的な視点による検討が求められる⁵。

1-5 家族構造と青年の摂食障害，ならびに摂食障害傾向

青年期の家族関係と青年のストレスに関する研究領域において，青年のストレス反応の一表現型としての摂食障害が心身症⁶領域において指摘されている（例えば，Garner & Garfinkel, 1997, 小牧（監訳），2004）。この病態は主として思春期から青年期に多くみられ，青年自身の体重やボディーイメージへの認知的ゆがみによる過度の体重調整や食行動の異常に特徴付けられる（American Psychiatric Association, 2000）。また，食行動の異常は，10代後半から20代前半が好発年齢とされ（山中・

⁵ 青年のストレスに関連する家族構造の検討は，第2章の目的，ならびに第5章（【研究Ⅲ】）において再度，詳細に記載する。

⁶ 心身症とは，“身体疾患の中で，その発症や経過に心理社会的要因が密接に関与し，器質的ないし機能的障害の認められる病態をいう。ただし，神経症やうつ病などの他の精神障害に伴う身体症状は除外する”（日本心身医学会教育研修委員会，1991, p.541）と定義される。つまり，身体症状の発症や経過，増悪に何らかの心理社会的要因が強く関連する病態の総称である。なお，American Psychiatric Association（2000）による精神疾患の診断・統計マニュアル第4版 Text Revision（DSM-IV-TR）においては，心身症という名称は記載されていない。また，消化性潰瘍等の器質的なものと，過敏性胃腸症候群や偏頭痛といった機能的なものに大別され，青年期においては機能障害としての心身症の頻度が高いことが指摘されている（日本心身医学会教育研修委員会，1991）。

宮坂・吉内・佐々木・野村・久保木, 2000), 男性に比べ女性において多くみられる (American Psychiatric Association, 2000; Bruch, 1978, 岡部・溝口 (訳), 1979)。

American Psychiatric Association (2000) による精神疾患の診断・統計マニュアル第4版 Text Revision (DSM-IV-TR) によれば, 摂食障害は神経性無食欲症 (Anorexia Nervosa: AN) と神経性大食症 (Bulimia Nervosa: BN) の2つに大別され, その他, これらに分類されない特定不能の摂食障害 (Eating Disorder Not Otherwise Specified: EDNOS) に分けられる。さらに, ANならびにBNは体重増加を抑制するための排出行動の有無によりそれぞれ2つの下位分類が設けられている。American Psychiatric Association (2000) による摂食障害のANならびにBNの診断基準を **Table 1-3** に示す。ANの特徴として, ボディーイメージの障害, 肥満への恐怖, 過剰な痩せ願望のために拒食や過剰な食事制限を行う, もしくは規則的にむちゃ食い (過食行動) を行い, それらを排出する行動により著しい痩せを特徴とする。一方で, BNの特徴は自己抑制できない摂食に対する欲求から, 短時間で大量の食物摂取を繰り返す行い, 自己誘発性嘔吐や下剤による代償行動により正常体重範囲を保つ。有病率は, ANで0.5%, BNで1~3%である (American Psychiatric Association, 2000)。

Table 1-3 摂食障害の診断基準 (American Psychiatric Association, 2000)

307.1 神経性無食欲症 Anorexia Nervosa

- A. 年齢と身長に対する正常体重の最低限、またはそれ以上を維持することの拒否 (例: 期待される体重の85%以下の体重が続くような体重減少; または成長期間中に期待される体重増加がなく、期待される体重の85%以下になる)
- B. 体重が不足している場合でも、体重が増えること、または肥満することに対する強い恐怖
- C. 自分の体の重さまたは体型を感じる感じ方の障害、自己評価に対する体重や体型の過剰な影響、または現在の低体重の重大さの否認
- D. 初潮後の女性の場合は、無月経、つまり、月経周期が連続して少なくとも3回欠如する (エストロゲンなどのホルモン剤投与後にのみ月経が起きている場合、その女性は無月経とみなされる)

病型を特定せよ

制限型 現在の神経性無食欲症のエピソード期間中、その人は規則的にむちゃ食い、または排出行動 (つまり、自己誘発性嘔吐または下剤、利尿剤、または浣腸の誤った使用) を行ったことがない

むちゃ食い／排出型 現在の神経性無食欲症のエピソード期間中、その人は規則的にむちゃ食いまたは排出行動 (つまり、自己誘発性嘔吐または下剤、利尿剤、浣腸の誤った使用) を行ったことがある

307.51 神経性大食症 Bulimia Nervosa

- A. むちゃ食いのエピソードの繰り返し、むちゃ食いのエピソードは以下の2つによって特徴づけられる
 - (1) 他とはっきり区別される時間の間に (例: 1日の何時でも2時間以内の間)、ほとんどの人が同じように食べる量よりも明らかに多い食物を食べること
 - (2) そのエピソードの間では、食べることを制御できないという感覚 (例: 食べることをやめることができない、または、何を、またはどれほど多く食べているかを制御できないという感じ)
- B. 体重の増加を防ぐために不適切な代償行為を繰り返す、例えば、自己誘発性嘔吐; 下剤、利尿剤、浣腸、またはその他の薬剤の間違った使用; 絶食; または過剰な運動
- C. むちゃ食いおよび不適切な代償行為はともに、平均して、少なくとも3ヶ月間にわたって週2回起こっている
- D. 自己評価は、体型および体重の影響を過剰に受けている
- E. 障害は、神経性無食欲症のエピソード期間中にのみ起こるものではない

病型を特定せよ

排出型 現在の神経性大食症のエピソードの期間中、その人は定期的に自己誘発性嘔吐をする、または下剤、利尿剤、または浣腸の誤った使用をする

非排出型 現在の神経性大食症のエピソードの期間中、その人は、絶食または過剰な運動などの他の不適切な代償行為を行ったことがあるが定期的に自己誘発性嘔吐、または、下剤、利尿剤、または浣腸の誤った使用はしたことがない

摂食障害は、かつて欧米工業先進国における白人女性に多くみられる疾患であったが、本邦においても石川・岩田・平野（1960）による報告、ならびに下坂（1988）の詳細な臨床像の描写を初めとして、心理臨床場面における援助対象となって久しい。また摂食障害の診断基準を満たさないまでも、食行動の異常を摂食障害傾向として摂食障害の連続線上で捉える非臨床研究も散見され（例えば、嘉手納・今井・嶋崎，2004；前川，2005；上長，2007；齋藤，2004；鈴木・伊藤，2001），摂食障害の問題は、一精神疾患という枠を超え、青年を対象とする心理臨床場面において心理的、社会的文脈に拡大した理解が求められる重要な課題の一つである。

摂食障害は、生物・心理・社会的な要素が複雑に関与する疾患と考えられる（Garner, 1993, Garner & Garfinkel, 1997, 小牧（監訳），2004）。Garner（1993）の多次元要因モデルによれば、準備因子、誘発因子、持続因子が多元的に関連して疾患を構成していることが指摘されている。準備因子には、心理的（うつや不安、人格等）、遺伝的、身体的（消化器系の問題等）、生物学的（例えば、セロトニンの代謝異常等、神経伝達物質の問題）な要因が関与する個人的要因、家族の非機能性等の家族的要因、やせ志向にみられる文化的要因が含まれる。この準備因子に、様々なライフイベントに伴うストレスや自尊心、自制心を増加するためのダイエット行動等の誘発因子が加わり、飢餓状態に伴う身体的、心理的変化、他者からのフィードバック等が持続因子として病態を維持する。さらに、これら3因子は一方方向ではなく相互に関連し、それぞれの因子に影響を与える。つまり、個人や家族の脆弱性といった準備因子は、ダイエット行動等の誘発因子に刺激され、不適切な食行動、それに伴う心理、身体的変化が持続因子として作用し、持続因子もまた準備因子に拍車をかけるという循環である。Garner（1993）の多次元要因モデルを **Figure 1-1** に示す。

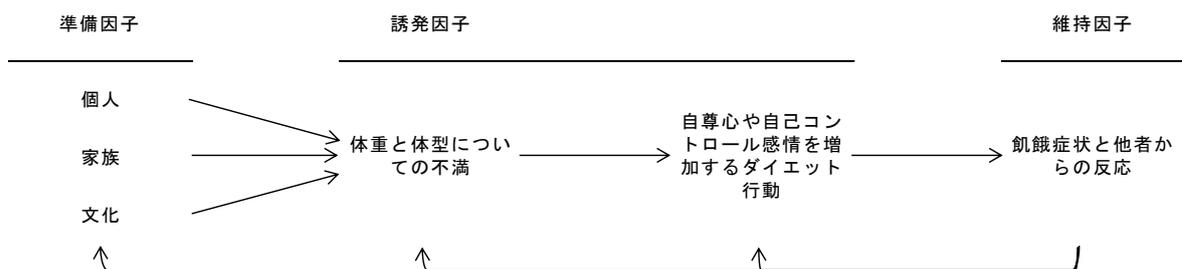


Figure 1-1 Garner (1993) によるAnorexia Nervosaの多次元要因モデル

このような多元的な疾患の構成要因の中でも，青年が日常を共にし，生涯にわたり持続する家族との関係はとりわけ重要な環境要因である。例えば，Woodside, Lackstrom, Shekter-Wolfson, & Heinmaa (1996) は，摂食障害と診断された 57 名（AN と BN を含む）を対象に，医療機関における治療プログラムを実施した。2 年後のフォローアップでは，治療的予後が良い対象者に家族機能の改善がみられたことを報告している。加えて，Wewetzer, Deimel, Herpertz-Dahlman, Mattejat, & Remschmidt (1996) も，AN 患者 22 名を対象とした，治療後 3.8 年のフォローアップ研究において，治療的予後が良い対象者は，家族関係を肯定的に捉えていることが報告されている。また，大場・安藤・宮崎・川村・濱田・大野・龍田・苅部・近喰・吾郷・小牧・石川 (2002) による摂食障害の発症にかかわる家族要因の検討を目的とした健常群と臨床群との比較研究では，「母親に甘えられずさびしい」という項目がどの病型でも抽出され，患者群では，「父親との接点が乏しい」という項目が危険因子として抽出されている。加えて，AN むちゃ食い排出型や BN の患者において，「両親間の不和」や「両親の別居・離婚」が報告されることを指摘している。

治療の側面では個人療法よりも家族療法において，若年発症で慢性化していない摂食障害患者に対し，とりわけその効果が

認められている (Russell, Szmukler, Dare, & Eisler, 1987)。例えば, Minuchin, Rosman, & Baker (1978, 福田 (監訳), 1987) は, AN の青年を有する 50 家族に対して, 週に 1 度, 2 ヶ月から 16 ヶ月の家族介入を行った。AN の症状の回復という医学的評価と心理・社会的に機能しているかという臨床的評価から判断し, 1 年半から 7 年のフォローアップにおいて 86% の回復を報告している。加えて, Selvini-Palazzoli, Boscolo, Cecchin, & Prata (1978, 鈴木 (監訳), 1989) のシステム論的モデルに基づく家族療法の実践では, Stierlin & Weber (1989) の摂食障害を有する青年の家族への介入について, フォローアップ研究を報告している。Stierlin & Weber (1989) は, AN と一部 BN を含む青年の患者を有する 42 家族に 1 家族平均 6 セッションで家族療法を施行した結果, 治療はほぼ 6 ヶ月以上続くことなく (25% が 1 年以上継続), 2 年から 9 年に渡るフォローアップでは 3 分の 2 の患者がほぼ正常体重に達し, 月経の回復がみられたことを報告している。

摂食障害という疾患は, 食行動に異常をきたし, 重症の場合, 生命の危機にさらされる。とりわけ AN においては 4% ~ 18% が深刻な病態や死に至ることが報告されている (Patton, 1988)。それゆえ, 青年に対する家族の関与, そしてそれに伴う家族間の相互影響過程はより顕著になると考えられる。例えば, van Furth, van Strien, Martina, van Son, Hendrickx, & van Engeland (1996) は, 摂食障害の青年 49 名を対象に, 親の Expressed Emotion (EE) との関連を検討している。その結果, 母親の娘に対する批判的コメントが青年の予後にとりわけ関連することを報告し, 母子間の分化や独立の必要性を指摘している。しかしながら, 家族内において, 父親に比べ母親がもつ子どもの情報量は多く (Christensen, Margolin, & Sullaway, 1992; Robyn, Christy, & Jackson-Newsom, 2004), 母子関係は父子関係に比べ, 親密な関係を築きやすい (中見, 1999)。こ

の点を踏まえると、青年の食行動の問題があるがゆえ、とりわけ母親は青年に対し強制的な言動の行使や否定的なコメントを行うよう駆り立てられる。その結果、否定的な家族関係が構成される可能性も否定できない。つまり、食行動の異常という青年の問題が、不均衡な家族成員間の相互作用を促進し、それぞれの関係を構成していくと考えられる (Archibald, Linver, Graber, & Brooks-Gunn, 2002; 下坂・秋谷, 1988)。いずれにせよ、摂食障害という疾患の発症や経過、予後といった一連の過程の理解、さらには予防や援助の視点においても、青年を取り巻く家族関係の在り方を検討することは重要なことと思われる。

家族関係の相互影響過程から疾患の理解や治療の理論体系を示した第一線の研究は Minuchin の知見にみられる (Minuchin *et al.*, 1978, 福田 (監訳), 1987)。青年の摂食障害、ならびに心身症周辺領域の問題と家族関係を扱う多くの知見に、Minuchin の理論体系、および優れた臨床実践から得られた家族関係の描写についての見解が記述されており、この領域に彼が与えたインパクトは多大なものであることがわかる。

Minuchin の理論体系 (Minuchin, 1974, 山根 (監訳), 1984) は、家族を成員間の相互交流パターンを通じて作用する一つのシステムとして捉え、家族構造 (family structure) に焦点を当てる。ここでいう家族構造とは“家族員の相互作用のあり方を組織化している目に見えない一連の機能的要求” (Minuchin, 1974, 山根 (監訳), 1984, p.63) であり、不可視である家族構造を把握する上で、概念図式 (conceptual schema) を用いて、夫婦や父子、母子関係といった、家族システムを構成するサブシステムに着目する。とりわけ、家族成員間の相互作用において、誰が、誰と、どのように関わるかを規定する規約を意味する、サブシステム間の境界線 (boundary) を重視する。境界線は、あいまいな (diffuse)、明瞭な (clear)、固い (rigid) 境

界に大きく分けられ，あいまいな（diffuse）から固い（rigid）境界の連続線上のいずれかに位置付けられ，家族が適切に機能するためには境界の明瞭さが必要であるとされる。特に，あいまいなものと同固いものという極端な境界は，病理的な可能性を有している。極端に固い境界を主とする家族は，乖離した関係（disengagement）と呼ばれ，成員間が乖離し，サブシステム間の交流は阻害され，相互に援助を求めることが困難になり，相互の支持的，協力的関係は失われる。一方，あいまいな境界を主とする家族は，絡み合った関係（enmeshment）と呼ばれ，互いが必要以上に関与することで相互に巻き込まれやすい関係を形成し，各自が問題を自律的に探究し解決することが困難となる。例えば，夫婦サブシステムと子どもの境界線があいまいで，母子サブシステムが強固となる場合等，世代を超えた境界の侵入，もしくは世代間の結合の交錯は，親の子に対する影響力を低下させ，機能不全の交流パターンが発展する。また，硬直した3者関係（父-母-子）では，境界の線引きにおいて，親の子に対する管理機能を高めるため，夫婦サブシステムの境界を強めると共に，母子サブシステムの境界を弱める等の介入を行い，子どもの自立性の促進や夫婦葛藤に巻き込まれることにより生じるストレスの低減を行う。

このような理論的背景から，Minuchin *et al.*（1978，福田（監訳），1987）は，摂食障害，ならびに心身症の子どもを有する家族にみられる特徴について以下3点を指摘している。第一に，子どもは生理学的な脆弱性を有すること。第二に，その家族は，①絡み合い関係（enmeshment），②過保護（overprotectiveness），③硬直性（rigidity），④葛藤が解決されない（lack of conflict resolution）という，4つの成員間の交流の特徴を持つこと。第三に，疾患を有する子どもは，家族の葛藤回避に重要な役割を担い，この役割は子どもの症状を強化する重大な源となる。

Minuchin *et al.*（1978，福田（監訳），1987）では，第一の

特徴として挙げた、子どもの生理学的な脆弱性について、家族が疾患、ないし症状を引き起こすのではなく、子どもの疾患と家族の相互交流パターンは相関関係にあると説明する。さらに、第二の特徴で挙げた4つの家族成員間の交流パターンを以下のように説明する。①絡み合い関係(enmeshment)とは、家族成員間が極度に互いに関与することであり、家族の相互交流におけるお互いの強さや接近が極度な形態である。絡み合い関係は、個人の分化や親の子どもに対する統制、世代間の境界が低い水準にある。②過保護(overprotectiveness)とは、家族がお互いの幸福に多大な関心を寄せることであり、お互いの苦痛のサインや緊張に過敏になる。③硬直性(rigidity)とは、現状維持を保持する傾向であり、身体的発達や成熟に対する心理的反応を困難にする。④葛藤が解決されない(lack of conflict resolution)こととは、葛藤を避け、問題の解決を迂回することや慢性の葛藤状態にあることを意味する。さらに、これらの一つだけでは症状の増減に大きな関連がないとした上で、こうした4つの家族成員間の交流パターンの重なりが青年の身体化を促進することを指摘している。また、第三の特徴は、親の葛藤に巻き込まれる、もしくは子どもから親の葛藤に入る場合がみられる。このような夫婦間の葛藤への子どもの巻き込みは、夫婦間の葛藤において子どもがいずれかの親に味方するといった三角構造(triangulation)や親子連合(parent-child coalition)、さらには子どもの病気を気遣ったり非難したりすることで夫婦間の葛藤を回避し、表面上一致をみせる迂回(detouring)というパターンで表現されることを指摘している。これらの心身症の家族にみられる特徴的なパターンについて指摘した上で、家族が青年の疾患を引き起こしているのではないことを強調し、家族内における循環的相互作用が疾患を悪化させる、つまり家族内でのストレスが子どもの生理的反応を誘発し、疾患の過程を悪化させることを指摘している(Minuchin,

Nichols, & Lee, 2007, 中村・中釜（監訳）, 2010）。

その後の実証研究では、30名のAN、およびBNを含む女性の家族を対象に観察法を用いた Kog & Vandereycken（1989）やANの女性30名の家族を対象に質問紙による検討を行った Rowa, Kering, & Geller（2001）の研究により、摂食障害の女性を有する家族に境界線に関連する問題の存在が概ね確認されている。また、ANを有する青年の家族における境界線の問題として、拒食症の子どもは家族からの個別化が低く（Smolak & Levine, 1993）、また Kog & Vandereycken（1989）でもANを有する子どもの家族関係は、凝集性が高く葛藤の回避や葛藤の存在を知覚しない傾向を指摘している。その他、青年の問題や適応、自我発達といった心理的変数と家族関係に関連する研究領域において、境界線の問題が論じられている（Jacobvitz & Buch, 1996; Mann, Borduin, Henggeler, & Blaske, 1990; Perosa & Perosa, 1993）。Mann *et al.*（1990）による、様々な問題行動を有する45名の男女の家族と16名の健常群の家族（いずれも13～17歳）の比較研究では、様々な問題行動を有する子どもの家族に世代をまたぐ連合の形成を指摘している。また、Jacobvitz & Buch（1996）による、19～22歳の93名の女性と家族関係の関連では、父親、母親、子どもの3者関係における三角関係化は、娘の低い自尊心や不安、うつと関連することを指摘している。青年期のアイデンティティに関する領域において、18～24歳の女子青年45名を対象とした Fullinwider-Bush & Jacobvitz（1993）の知見では、境界線の侵害と青年の異性関係における同一性の探究とに関連性を見出している。これらの知見は、摂食障害や心身症の家族のみならず、青年の諸問題や適応、自我発達における研究領域においても同様に、境界線の問題が支持される見解を示している。

一方で、55名のANおよびBNを含む女性の家族を対象に質問紙法と観察法を併用した Kog, Vertommen, & Vandereycken

(1987)の研究では、摂食障害の女性の家族関係における境界線の問題を概ね支持する見解を示す一方、Minuchin *et al.*

(1978, 福田 (監訳), 1987) の指摘する心身症の家族の特徴が当てはまらないケースの存在も認めている。また, AN, および BN を含む摂食障害の青年とその家族を比較した研究において, Dare, Le Grange, Eisler, & Rutherford (1994) や Waller, Slade, & Calam (1990) の知見では境界線の問題が認められないことを指摘している。

加えて, 182名 (18~28歳) の青年を対象に, 青年の自我発達やコーピングスタイルと家族関係を検討した Perosa & Perosa (1993) は, 親子間の明瞭な境界や葛藤解決の表明, 世代をまたぐ同盟がみられないことが, 青年の同一性達成や肯定的な対処方略と関連することを指摘している。しかしながら, 親子間の絡み合いの高さと青年の自我同一性確立とに正の関連を報告し, Minuchin (1974, 山根 (監訳), 1984) の理論における, 絡み合いと遊離のバランスのとれた家族構造を支持しない結果も指摘している。さらに, 興味深い考察として, 母子間, ならびに父子間の結びつきと絡み合いという因子に強い関連 ($r = .64 \sim .66$) がみられることを報告し, これら変数の精緻化を指摘している。

以上, 青年の摂食障害と家族との関係について, Minuchin *et al.* (1978, 福田 (監訳), 1987) の示したモデルを中心とした研究の概観を行った。青年の問題を取り巻く家族関係は様々に論じられ, 本研究の主たる目的である青年のストレスと家族関係との関連を検討する上で重要な領域である一方, 方法や測定尺度の違いはあれ, 必ずしも一致した知見の蓄積が得られていない。この動向は AN や BN, さらにそれらのサブタイプの相違という病態の違いや家族成員の視点の違いといった細分化した検討が散見される (例えば, 名越・原田・山下・加嶋・岡本・榊井・角掛・和田・福居, 2003)。しかし, Minuchin *et al.*

(1978, 福田 (監訳), 1987) がそうであったように, 家族という集団を一つの特徴としてのみならず, 成員間の複雑な関係を考慮した視点やその関係を捉える概念的整理, さらに家族を理解, 記述するためのモデルの生成を含め, さらになる検討の余地を有する領域であると考えられる⁷。

1-6 家族構造と成員間の関係性

家族という集団を成員間の相互影響の過程から捉えるシステム論の視点では, “複雑な相互作用による関係性に基づくシステム” (若島他, 2010, p.92) と表現されるように, 父親や母親, 子どもといった個人とそれぞれのコミュニケーションやそれに基づく夫婦間, 父子間, 母子間等の関係性のあり方を通して家族を捉える。このようなシステム論の視点から, 家族という集団の理解やそこで起こる事象の記述, さらには援助においても, 1950年代以降, 欧米を中心に家族システム論や家族療法といった名称で飛躍的な発展を遂げてきた (Hoffman, 1981, 亀口 (訳), 2006)。ここでは, 家族をシステムとして理解するため, しばしば家族の構造 (structure) と機能 (function) という概念が使用される。遊佐 (1984, pp.39-41) によれば, 家族のような生物体システムの観点において, 構造とは “ある与えられた時点でのシステムの様態”, 機能とは “ある程度の規則性をもって再度繰り返される出来事のパターン” と定義されている。加えて, 家族の構造と機能は相関関係にあり, 構造の規定は機能を明確化することを通して理解しうることを指摘している。しかしながら, これら構造と機能という用語を, 不可視な家族構造という構成概念に当てはめる場合, 理論的な整理は困難を有する (若島, 2010)。

この点を説明するため, 一般的には物理的な用語で説明され

⁷ 摂食障害, 摂食障害傾向, および心身症周辺疾患と家族構造との関連は, 問題点と実証研究の提案を踏まえ, 再度第2章で扱う。

る構造と機能の意味を踏まえ、機械の仕組みについての比喩を用いたい。例えば、空調設備として室内の温度を調整するエアコン（air conditioner）の構造では、コンセントやモーター、ファン、室外機等の各部品はコード等につながり、その組み合わせから、エアコンという全体が構成され、室内を暖めたり冷やしたりといった室内温度を調節する役割や動きにみられる機能を生み出す。つまり、エアコンの部品の組み合わせという構造が温度を調節する機能を規定する。この物理的なエアコン

（air conditioner）の仕組みを家族の構造に当てはめてみると、各部位（各部品）にあたるものは、父親や母親、子どもといった可視化できる要素であり、その組み合わせが家族の構造である。しかし、その各部位同士のつながりは、物理的な構造にみられるコードと異なり、コミュニケーションといった不可視な概念で説明しなければならない。したがって、家族の構造の説明には、家族成員間のつながりにおいて機能を含んだ概念で説明するという側面をもつ。このような問題を指摘した上で、本研究では、家族成員の相互関係から構成される家族という集団を家族構造として定義する。

一言で家族構造といえど、そこには夫婦や父子、母子、きょうだい、祖父母関係等、複数の関係がある。これら複数の成員や関係について、長谷川（1987）は、人間関係はどんなに入り組んでいても3者関係の集合体に類型しようと指摘している。こうしたことから、本研究では青年と父親、母親という3者で構成される、夫婦関係、父子関係、母子関係という3者関係に着目していく。3者関係は2者関係と異なり、また、単純に3者の集合体とも異なる特異な性質を表す。それは複雑な相互作用と関係性から一様な形態をとらない。この複雑な3者間の関係性を扱うにあたり、1950年代に提案された、人間と物または概念を含む3者間の関係や態度に関する理論である、Heider（1958）のバランス理論（P-O-X理論）は示唆的な視点を提示

している。

バランス理論 (Heider, 1958) では、ある人物 (P)、他者 (O)、人・物・概念 (X) で構成され、単位関係と心情関係に基づき、諸関係はバランス状態に向かう傾向、すなわち、調和的に適合している状態へ向かう傾向があるとされる。単位関係とは、2つの実体が類似性や因果性、所有等の関係を持っている場合、それらは関連づけられ一体とみなされやすい傾向のことである。一方、心情関係とは、人やものに対してもつ好き嫌いの心情である。さらに、三つ組 (triad) の関係において、3つの関係が全て正のとき、あるいは2つが負で1つが正のとき、バランス状態にあるとされる。このバランス理論が示す、3つの関係のバランス状態は、複雑な3者関係を紐解く示唆的な視点である一方、この理論を家族のような持続が見込まれる関係性へ適用する際の困難も有している。それは、バランス理論の関心は、PからO、OからX、PからXの3つの関係に焦点を当てた個人 (P) の視点からの態度変容に焦点を当てているため、厳密には相互作用の視点とは異なるという点である。

この指摘を踏まえ、狐塚・若島 (2009) では、バランス理論のシエマを応用したコミュニケーション・パターンに基づく関係性のモデルを提示し、持続が見込まれる3者関係を対象としたアナログ研究により、関係性の変化を実証している。狐塚・若島 (2009) の実験は、関係の持続が見込まれる友人関係10組 (3人1組) を対象に、2人の被験者 (A-B間) が課題について話し合った後、その2人の被験者に第3者 (C) が加わり、3人 (A-B-C間) で同様の課題について話し合うというものである。この研究の着眼点は、第3者 (C) が2者それぞれ (A-C間、B-C間) と、どのように関係性を定義するかに伴って変化する2者間 (A-B間) の関係性の変化であった。VTRを基にしたプロトコルから、コミュニケーション・パターンを、類似性に基づく相称性と相違性に基づく相補性の2つに類型して分析

したところ、以下の結果が示された。3者間（A-B-C）において、第3者と2者それぞれ（C-A間、C-B間）の相補度が同程度の場合、2者間（A-B間）の相補度は増加し、異なる程度の場合、2者間（A-B間）の相称度が増加する傾向にあった。この結果は、Heider(1958)の示した個人の態度変容のシエマが、関係性という観点にも当てはまることを意味すると共に、2者関係は、第3者との関係のあり方により変容を示したことであった。また、花田（2010）は、未解決の問題を持続が見込まれる関係で話し合うという葛藤意思決定場面において、2者関係（11組）と3者関係（11組）のコミュニケーション・パターンを会話の冗長性の観点から検討した。その結果、2者葛藤意思決定場面よりも3者葛藤意思決定場面の方が、相互交流パターンである冗長性の得点が高く、2者関係より3者関係の時に、より関係性が硬直しやすいことを実証した。

Weakland（1979）が指摘するように、コミュニケーション・パターンによるメッセージの交換を通して関係性が構成されてくという指摘、さらに持続が見込まれる関係におけるコミュニケーション・パターンの知見（花田，2010；狐塚・若島，2009）を家族内の諸関係に当てはめて家族構造を記述する際、3者の相互関係から検討する必要性がみえてくる。つまり、母子関係や父子関係といった単一の関係のみならず、夫婦関係の関連を踏まえた3者の関係からなる家族構造を検討していく必要があるということである。これは、例えば母子関係の在り方には、父子関係や夫婦関係といったその他の関係が密接に関連していると考えられるためである。家族構造は、母子関係のような単一の関係よりも安定した構造として記述される可能性を有し、複雑な家族構造の縮図として、また、複雑な関係性の性質を失うことなく記述できる妥当な視点であると考えられる。よって、本研究では、家族構造を「夫婦間、父子間、母子間という3者関係の組み合わせから構成される形態」として定義する。

1-7 家族の査定方法

1950年代、家族研究は欧米を中心に、家族の中で問題を呈する人物の観察を通して、その人物を含む家族の特性の記述から始まった（Hoffman, 1981, 亀口（訳）, 2006）。その後、家族研究は、システム論の発展や対人援助領域における家族療法の発展と共に展開し、様々な理論とそれに基づく査定方法が開発された。本邦においても、1980年代の家族心理学という学問分野の確立と共に、個人の様々な問題を、家族との関連において理解する視点が発展した（草田, 1995）。ここでは、人は個人として存在すると同時に社会の中に存在するため、個人に起こる様々な現象を説明し理解するためには、個人が所属する身近な社会システムの一つである家族との関係を理解する視点が重要視された。

このような動向を受け、家族の特徴や性質をより分かりやすく理解、分類するために、家族関係に焦点を当てた理論がいくつも存在し、それに基づいた測定尺度も開発されている

（Grotevant & Carlson, 1989）。家族の査定方法は、主として観察法と自記式尺度の二つに大別される（Grotevant & Carlson, 1989）。しかし、例えば実験室や観察室で行うVTRを基にした観察法に比べ、自記式による質問紙法は記入者による回答の歪みが懸念されるものの、実施が容易で大量のサンプルを被験者の負担が少なく収集できる。さらに、実験室や観察室という特殊な空間ではなく、被験者の置かれているフィールドで捉えることが出来る利点がある。このような利便性の観点からも質問紙に基づく査定法は様々な開発されている。

例えば、Olson, Sprenkle, & Russell (1979) の円環モデル（circumplex model）では、家族機能を凝集性（cohesion）と適応性（adaptability）、コミュニケーション（communication）の3次元により説明する。凝集性とは家族メンバーが相互にもつ情緒的な結びつきやつながりを表し、その度合いにより低い

段階から、遊離 (disengaged)、分離 (separated)、結合 (connected)、膠着 (enmeshed) の 4 つの段階で表される。適応性とは内的・外的な危機に対して、家族内の役割や勢力を柔軟に変える力を表し、その度合いにより低い段階から硬直 (rigid)、構造化 (structured)、柔軟 (flexible)、無秩序 (chaotic) の 4 つの段階で表される。コミュニケーションの次元は、実際に質問紙には反映されないが、凝集性と適応性の 2 次元の促進次元として機能する。円環モデルでは、凝集性と適応性の組み合わせによりバランス型 (balanced)、中間型 (mid-range)、極端型 (extreme) に分類され、バランス型が最も家族機能が働くとされるカーブリーニア仮説を特徴とする。この円環モデルに基づく質問紙として Family Adaptability and Cohesion Evaluation Scales III (FACES III) が開発されている (例えば, Olson, 1991; Olson, McCubbin, Larsen, Muxen, & Wilson, 1986)。FACES III は、本邦においても様々な実証研究が行われている (例えば, 草田, 1995; 名越他, 2003; 貞木・榎野・岡田, 1992; 立木, 1999)。Epstein, Baldwin, & Bishop (1983) は、システム論に基づくマクマスターモデル (McMaster Model of Family Functioning: MMFF) を提唱し、家族機能を問題解決 (problem-solving)、コミュニケーション (communication)、役割 (roles)、情緒的敏感性 (affective responsiveness)、情緒的関与 (affective involvement)、行動の統制 (behavior control) の 6 次元でとらえている。Epstein *et al.* (1983) は、このマクマスターモデルの 6 次元に基づく質問紙、Family Assessment Device (FAD) を開発している。本邦においても、佐伯・飛鳥井・三宅・箕口・山脇 (1997) により、妥当性、信頼性の検討が行われている。Moos & Moos (1974, 2002) による家族を環境として捉える Family Environment Scale (FES) では、関係性、人間的成長、システム維持の 3 次元でとらえ、それらの下位尺度として、凝集性 (cohesion)、表出性

(expressiveness), 葛藤性 (conflict), 独立性 (independence), 達成志向性 (achievement orientation), 知的文化的志向性 (intellectual-cultural orientation), 活動娯楽志向性 (active-recreational orientation), 道徳宗教性 (moral-religious emphasis), 組織性 (organization), 統制性 (control) の 10 次元で捉える。FES は家族療法の効果測定として (Santisteban, Perez-Vidal, Coatsworth, Kurtines, Schwartz, LaPerriere, & Szapocznik, 2003), また本邦においても妥当性や信頼性の検討 (野口・齋藤・手塚・野村, 1991) が行われている。西出 (1993) は, 従来の家族を測定する質問紙における翻訳や信頼性・妥当性, 調査対象等の問題点を指摘し, 質問紙法による Family Assessment Inventory (FAI) を作成している。FAI では, 家族に対する評価, 家族の凝集性, 家族組織の柔軟性・構成度, 家族内の秩序・ルール, 親密で自由な家族内交流の 5 次元に基づく。増田・平川・山中・志村・武井・古賀・鄭 (2004a) や増田・山中・武井・平川・志村・古賀・鄭 (2004b) も, 単一次元, 6 項目に基づく家族機能調査票 (Child-Evaluated Family Function: CEFF) を作成し, 主に心身症やその周辺領域との関連について検討している。

以上, 本邦で家族を査定する実践が行われている主要なものをいくつか取り上げた。ここでは, 家族を理解するために用いられている理論やそれに基づく尺度は数多くあり, その基準ともなるべき測定因子は, 凝集性や勢力といった各尺度で類似する因子もあれば, 本邦と文化的な相違が認められる宗教的な因子を含むもの等がある。そして, それら尺度の依拠する理論的背景に違いはあるものの, それぞれの尺度で多様な因子構造を持ち, 一定の知見の蓄積が得られない現状が見受けられる。さらに, 例えば円環モデルを理論的基盤とする FACESIII (Olson, 1991; Olson *et al.*, 1986) においては, 20 の質問項目で簡易に家族機能を測定する尺度として, 家族研究で頻繁に使用される

一方，家族全体のみの特徴を捉えるにとどまる。本研究の主軸となる，夫婦間，父子間，母子間の 3 者関係の組み合わせから構成される形態として定義した家族構造を捉える場合，家族全体の特徴ではなく，その全体の構成に寄与する各成員間の関係性の査定が不可欠となる。そのため，従来の質問紙では，家族成員間の関係性については捉えられず，仮に家族全体を捉える **FACESIII**（草田・岡堂，1993）の 20 項目を，夫婦間，父子間，母子間といった関係の査定に当てはめたとしても，3 倍の項目を必要とし，被験者の負担や煩雑性から妥当な方法とはいえない。このような家族構造の査定法に関する問題点を踏まえ，家族構造を構成する各 2 者関係を査定するための要因やその質問項目の精緻化が必要となる。

第 2 章

本研究の目的と実証研究の構成

第 2 章では、第 1 章で行った家族構造と青年のストレスに関する研究領域の概観を踏まえ、青年のストレスという観点から青年期の家族構造の望ましい形態を示すという本研究の目的を示す。そこで、家族構造の測定因子、家族構造と青年のストレス、摂食障害、摂食障害傾向、心身症周辺疾患の研究についての問題点を整理し、それらを克服する提案を行う。さらに、本研究の仮説を示し、仮説を検討するための実証研究の構成について説明する。

2-1 本研究の目的

家族成員の価値が多様化し個人化の促進（石原，2004）が指摘される今日においても，日常生活を共にし，持続的な関係にある家族との相互作用は，子どもの適応や発達にとってとりわけ重要な変数である。また，近年の本邦における進学率の増加は（内閣府，2011），青年の労働市場への参入までに多くの期間を要すると共に，青年が家族と関わる期間も長期化する。このことは，幼少期のみならず，青年期という時期を拡張し，青年と家族との関係を検討する必要性が示唆される。家族サイクル（Carter & McGoldrick, 1989）から青年期をみると，家族システムの質的变化が示唆されている。例えば，渡辺（1996）は，青年期の子どもをもつ家族の特徴について，親子間の価値観の相違が顕著になり，親自身の夫婦関係や青年の自立に意識を向け，家族の境界の柔軟性を増すことが求められる時期であると指摘し，岡堂（2006）も，信頼関係を損なわずに，親子関係の在り方を再検討することの重要性を指摘する。このように，青年期という時期は，青年自身や青年を取り巻く家族環境において，質的な変化や再調整の時期であり，この時期の家族関係のあり方を検討し，親子間の適切な関係の移行を成し遂げることは，青年のみならず両親にとっても意義あることと思われる。本研究では，青年が家族との関わりをいかに認知し体験するかということを重視し（嘉手納他，2004；下坂，1988），青年の視点から家族構造を捉えていく。家族成員の視点の違いにより，どのように自身の家族を捉えるかという違いはあれど（Rowa *et al.*, 2001），青年からみる家族関係は青年自身の問題との関連が高いことが指摘されている（Grych & Fincham, 1993；Rowa *et al.*, 2001；Waller *et al.*, 1990）。家族関係については，家族という集団を“複雑な相互作用による関係性にに基づくシステム”（若島他，2010）とする観点を採用し，夫婦間，父子間，母子間の3者関係の組み合わせから構成される形態として定義

した家族構造という概念から，家族の下位システムの相互関係を包括的に捉える。この青年の認知する家族構造を評価する指標として，青年のストレスという観点を用いる。心理学的ストレスモデルの主流とされる Lazarus & Folkman (1984, 本明他(訳), 1991) の関心は，認知や対処といった主として個人を中心とした観点であった。一方，青年期においても家族との関係の重要性が指摘されているが，青年のストレスと家族構造との関連性を扱う知見は乏しく，実証研究による検討が求められる。そこで，本研究では青年のストレスという観点から，青年を含む家族構造を検討し，青年期の家族構造の望ましい形態を示すことを目的とする。この目的を検討するため，第1章で指摘した家族構造の測定や家族構造と青年のストレスとの関連，さらに，家族構造と青年の示すストレス反応の一つとして，食に関する行動障害の諸問題をまとめ，それらを克服する提案と実証研究を行う意義について示していく。

2-2 家族構造の測定因子に関する提案

家族を取り巻く環境の変化に伴い，不登校やひきこもり，児童虐待やドメスティック・バイオレンス (Domestic Violence: DV) といった様々な問題が家族病理として取り挙げられている (池田, 2000; 村瀬, 1988)。それに起因するように，本邦においても家族に関する多くの研究が行われている。例えば，西出・夏野 (1997) は，家族成員それぞれの家族認知と子どもの抑うつ感の認知について検討した結果，家族内コミュニケーション，家族に対する評価，家族の凝集性の3つがポジティブな評価である場合，子どもの抑うつ感を減じる作用があると述べている。また，茂木 (1998) の個人の精神的健康と家族システムの関連についての研究では，父親，母親，子どもの3者の精神的健康度が良好な家族は，夫婦間と母子間の結びつきが強く，母親の家族に及ぼす影響力が強い，という特徴が挙げられている。こ

の他にも、両親の不和が子どもの自尊心の低さや情緒の不安定性、攻撃性の高さに関連していること（前島・小口，2001）や、親子関係と子どもの対人恐怖心性との関連（久保，2000）、非行との関連（小保方・無藤，2005）が指摘されている。このような動向の中で、第1章で概観したように、家族の特徴や性質を記述するための測定尺度が様々に開発され、様々な変数との関連が検討されてきた（例えば、Epstein *et al.*, 1983; 増田他，2004a; 増田他 2004b; Moos & Moos, 1974, 2002; 西出，1993; Olson, 1991; Olson *et al.*, 1986）。しかしながら、Olson (1991) の FACES III では 3 次元，Epstein *et al.* (1983) の FAD では 6 次元，Moos & Moos (1974, 2002) による FES では 10 次元，西出 (1993) の FAI では 5 次元といったように家族を捉えるための因子構造は多様である。また、その多くは家族の下位システムである夫婦関係や父子関係，母子関係を捉えることができず、本研究で主張する関係性の組み合わせからなる形態とする家族構造の観点では、被験者の負担や煩雑さの観点から、従来の質問項目を適用することは困難である。

このような問題点を踏まえ、回答者の負担が少なく、家族内の諸関係を複数要因から捉え、高次の家族システム自体の研究を行うための査定方法が求められる（野口・狐塚・宇佐美・若島，2009; 狐塚・野口・山本・若島，2010）。そのためにも、家族構造の測定には、最少の因子構造を単一の項目で査定するような尺度の精緻化が必要となる。この点について、投影法に位置づけられるシンボル配置技法を用いた、Gehring (1993, 八田 (訳), 1997) の Family System Test (FAST) や 亀口 (2003ab) の家族イメージ法 (Family Image Test: FIT) は示唆的な方法を提示している。これらは、人形やシールを家族成員に見立て、それらが配置される相対的な距離や人形の高さ、シールの濃さや向きから家族構造を把握していく。FAST では家族メンバー間の情緒的な結びつきや愛情を表す凝集性 (cohesion) と権威

や決定力, 影響力を表す階層性(hierarchy)で家族構造を捉え, FITでも同様に, 家族内の2者における結びつきと発言力や影響力, 元気の良さといった力で捉える。いずれの査定法も2因子に基づき家族構造を査定し, それら因子はそれぞれ単一の教示を用いる。FAST, ならびにFITは, 質問紙法に比べ測定するための機材の必要性や手間を要するものの, 各因子を単一の質問項目により査定を行う可能性を有する知見である。

そこで, 家族構造と青年のストレスとの関連に先立ち, まず本研究の主軸となる家族構造の査定の検討から始める。家族構造は下位システムである, 夫婦関係や父子関係, 母子関係の組み合わせであるため, その関係性を測定する因子構造を特定しなければならない。そのために主として本邦で開発された尺度, ならびに本邦において翻訳され研究に使用されている尺度を参考に, 第3章(【研究I】)において因子構造の検討を行い, 最少の因子構造を抽出する。さらに, 様々な家族関係の査定法に関する知見との異同から, 家族構造の査定法に関する提案を行う。加えて, 家族構造を構成する関係性について, 具体的なコミュニケーションとの関連についても検討する。家族のような持続する関係では, コミュニケーションの連鎖を通して, パターンが形成されやすく(Watzlawick, Bavelas, & Jackson, 1967), コミュニケーション・パターンによるメッセージの交換を通して関係が構成されると考えられている(Weakland, 1979)。家族構造とコミュニケーションの関連について, 若島・佐藤・長谷川(2000)は, システム論の展開, および家族療法を用いた事例を検討し, 時間概念を導入した情報の回帰の速度という観点からシステムを記述する情報回帰速度モデル(Speed of Information Reflective Model: SIRM)を提唱している。SIRMでは, システムは情報によって規定され, サブシステム(システム内の下位システム)の境界は情報回帰の速度によって規定されるとしている。情報回帰の速度というのは,

ある個人の行動が他者に影響し、再びその個人に戻ってくる相対的時間を意味する。したがって、母親と子どものコミュニケーションが父親と子どもよりも情報回帰の速度が速ければ、情報量の差異から母子間にサブシステムが規定されていると想定していく。SIRMは、若島・松井（2003）による集団変容のシミュレーションを用いた数理モデルによる検討、さらに、若島・松井（2004）により事例的検討が行われている。いずれの研究においても、SIRMは実証研究による検討が可能な水準まで精緻化されたモデルである。しかし、Watzlawick *et al.*（1967）のコミュニケーション理論の知見において、情報の複雑性が指摘されたように、システム内での情報のルートは複雑に生起し回帰することが想定される。また、どのような情報がどの程度行われるかといった詳細な検討がなされていない。よって、家族構造を構成する関係性について、どのような関係ではどのようなコミュニケーションが生起するかについての検討も必要となる。この点は、第4章（【研究Ⅱ】）の一部で扱う。

2-3 家族構造と青年のストレス

第1章で示したように、青年期という時期は家族内における親子関係や夫婦関係の質的な変化の時期（Carter & McGoldrick, 1989; 岡堂, 2006; 渡辺, 1996）であり、同時に、対人関係や学業、進学の達成等、家族外においても様々なストレスを経験する時期でもある（LaRue & Herrman, 2008; 三浦・川岡, 2008）。多くの青年の適応的な側面が指摘される（Coleman & Hendry, 1999, 白井他（訳）, 2003）一方、青年期は最もストレスを経験する時期であり（皆川他, 2003b; Usami *et al.*, 2011）、青年が家族内外で経験するストレスを扱う重要性がみえてくる。青年と家族との関連は、青年のキャリアやアイデンティティに関連する領域（例えば、Cooper *et al.*, 1983; Fullinwider-Bush & Jacobvitz, 1993; Grotevant &

Cooper, 1985, 1986; Hendry *et al.*, 1993; 高橋, 2008) では, 家族との情緒的なつながりや親密な関係の重要性が示され, また, 家族からのソーシャル・サポートの観点においても (Cohen & Wills, 1985; 菊島, 1999; 皆川他, 2004; 岡安他, 1993; Roosa *et al.*, 1996; 嶋, 1992), 青年のメンタルヘルス領域に肯定的な要因として関連することが指摘されている。また, 家族関係に起因するストレスナーにおいても, 皆川らによる大学生を対象とした一連の研究 (皆川他, 2001; 皆川他, 2003ab) において, 家族の結びつきの強さが青年のストレス認知の低さやストレス状況の改善と関連することが報告されている。一方で, 両親関係の不和や葛藤と子どもの不適応や親子関係の不和との関連 (Grych & Fincham, 1993; 飛田・狩谷, 1992), またそれらが子どものストレスナーと関連すること (Neighbors, Forehand, & Bau, 1997) が指摘され, Minuchin (1974, 山根 (監訳), 1984) が指摘するように, 夫婦や親子関係のもつれによる青年の病理性に高く寄与するストレスナーが仮定される。これら家族関係と青年のストレスナーとの関連は, 家族からのサポートがどの程度かという一元的な視点, さらに父子関係や母子関係といった青年を含む単一の関係のみならず, 夫婦関係といった青年の認知する家族内の様々な関係性との関連を検討する必要があることを示唆している。すなわち, 本研究で主張する家族構造という概念から家族の下位システムの相互関係を踏まえ, 青年のストレスナーを包括的に捉える必要がある。その際, 友人関係に代表される家族外の対人関係を重視するという青年期の特徴 (Larson *et al.*, 1996; 中釜, 2000) やそれに起因するストレスナー (例えば, LaRue & Herrman, 2008; 三浦・川岡, 2008) も考慮し, 家族内外のストレスナーを含めた包括的な視点から青年のストレスを検討することが必要と思われる。したがって, 青年の家族内外のストレスナーやストレス反応に対し, 家族構造のあり方がどのように関与するかを第 4

章（【研究Ⅱ】）、ならびに第 5 章（【研究Ⅲ】）において検討する。具体的に第 4 章（【研究Ⅱ】）では、第 3 章（【研究Ⅰ】）で導かれたの因子構造を家族構造の査定に用い、家族内で青年が認知するストレスと家族構造の形態について検討する。次に、第 5 章（【研究Ⅲ】）では、第 3 章（【研究Ⅰ】）、ならびに第 4 章（【研究Ⅱ】）で検討した家族構造を査定するツールを精緻化すると共に、野口他（2009）の妥当性の検討を踏まえ、夫婦間、父子間、母子間から家族構造を査定する家族構造測定尺度（Inventory for Character of Intra-Inter Generation in Kinship: ICHIGEKI）を使用する。さらに、青年が認知する家族内外のストレスと青年のストレスに関連する家族構造を検討し、青年のストレス反応の低減に寄与する形態を明らかにする。ここまでの実証研究の結果から、家族成員間の結びつきと勢力のバランスにより、青年のストレスを説明する、家族バランス仮説（Family Balance Hypothesis: FBH）を提案する。

2-4 家族構造と青年の摂食障害，摂食障害傾向，および心身症周辺疾患

青年期が好発年齢とされる摂食障害は、ストレスの関与が認められる疾患であり（例えば，Garner & Garfinkel, 1997, 小牧（監訳），2004；小林・栗田，2005；Minuchin *et al.*, 2007, 中村・中釜（監訳），2010），家族関係が重要な役割を担うことが指摘されている。例えば，病態の成立要因の一つとして（Garner, 1993；大場他，2002），良好な治療的予後として（Wewetzer *et al.*, 1996；Woodside *et al.*, 1996），家族療法を用いた治療的側面として（Minuchin *et al.*, 1978, 福田（監訳），1987；Russell *et al.*, 1987；Stierlin & Weber, 1989）等，多くの知見がある。摂食障害という疾患は重症の場合，生命の危機にさらされるがゆえ，家族成員間の相互作用はより顕著になるものと考えられる。青年の摂食障害を家族構造から詳細に検討した Minuchin

et al. (1978, 福田 (監訳), 1987) は, とりわけ世代間の境界線にまつわる家族関係のもつれを指摘し, この問題と青年の摂食障害や青年のアイデンティティの問題において様々な実証研究が行われた (例えば, Dare *et al.*, 1994; Fullinwider-Bush & Jacobvitz, 1993; Kog & Vandereycken, 1989; Kog *et al.*, 1987; Mann *et al.*, 1990; Perosa & Perosa, 1993; Rowa *et al.*, 2001; Smolak & Levine, 1993; Waller *et al.*, 1990)。しかしながら, 方法や測定尺度の違いはあれ, 必ずしも一致した知見の蓄積が得られず, AN や BN, さらにそれらのサブタイプの相違という病態の違いや家族成員の視点の違いといった細分化した検討への動向が散見される。家族構造と青年の摂食障害の問題との関連は, 本研究の主たる目的である家族構造と青年のストレスとの関連を検討する上で重要な領域である一方, 2つの問題点を有していると考えられる。

第一には, 家族成員間の結びつき (*cohesion*) と絡み合い (*enmeshment*) という概念の混合に関する指摘である (例えば, Perosa & Perosa, 1993; Rowa *et al.*, 2001)。例えば, Perosa & Perosa (1993) は, 母子間 (父子間) の結びつきと絡み合いに強い関連 ($r = .64 \sim .66$) がみられ, これらは類似した概念であることを報告する一方, Rowa *et al.* (2001) は, これらの変数について関連が認められないことを報告している。Perosa & Perosa (1993) では, The Structural Family Interaction Scale-Revised (SFIS-R; Perosa & Perosa, 1990) による同一尺度内の関連であるのに対し, Rowa *et al.* (2001) では Parent-Child Boundaries Scale (PBS; Kering & Brown, 1996) による, 絡み合いと FACESIII (Olson, Portner, & Lavee, 1985) の結びつきといった異なる尺度間の関連である。このような測定尺度の違いはあるものの, 一致した結果が得られていない。これら変数は, 概念的整理の必要性はあるものの, 結びつきという概念は家族成員間の情緒的つながりや絆, 愛情, 親密さを

表す変数として多くの知見で家族関係の把握に用いられ（例えば，Epstein *et al.*, 1983; Gehring, 1993, 八田（訳）, 1997; 草田・岡堂, 1993; Moos & Moos, 1974, 2002; Nichols, 1984; 西出, 1993; Olson, 1991; Olson *et al.*, 1979; Wood, 1985), 家族関係を把握する上での主要な概念であると考えられる（野口他, 2009）。したがって，本研究では，第3章（【研究I】）の結果を参照しつつ，結びつきという概念で統一した検討を行うこととする。

第二に，家族関係と青年の摂食障害の研究において，家族の特徴が強調され，家族に病因を求める嫌いが少なからず存在するのではないだろうか。先に示したように，Garner（1993）の多次元要因モデルでは，家族関係は準備因子に分類され，誘発因子や持続因子との悪循環を指摘し，また Minuchin *et al.*,（2007, 中村・中釜（監訳）, 2010）では家族内でのストレスが子どもの生理的反応を誘発し，疾患の過程を悪化させるという家族関係の循環的相互作用を指摘している。これらの観点を踏まえれば，青年の病態は個人の脆弱性を基盤として，環境要因により誘発されることが想定される。つまり，どのような家族関係であれ，疾患の脆弱性を有する青年は存在する可能性があり，家族関係に病態を起因する視点ではなく，青年の病態と家族関係の相互作用により病態の維持や存続を検討していく必要がある。すなわち，家族関係と青年の病態との相互作用，さらに家族関係の調整は治療的予後が良好である（Wewetzer *et al.*, 1996; Woodside *et al.*, 1996）という知見を踏まえると，青年が病態を有したとしても，家族構造のあり方により病態の改善や心理・社会的な面での適応の回復が早いという観点が導かれ，この観点から家族構造を検討することは妥当であると思われる。

加えて，摂食障害の問題は，病態を有しているにも関わらず医療機関へなかなか受診しないこともあり，一般市民を対象と

した実態調査の重要性が指摘されている（中井，2000，2003，2010；中井・佐藤・田村・杉浦・林，2003；中井・田村・杉浦・林・佐藤，2004）。例えば，中井他（2004）によれば，女子中学生，女子高校生，女子大学生の3分の1から2分の1，また男子中学生，男子高校生の5分の1が何らかの食行動異常を有していることを報告している。さらに，中井（2010）は，1982年，1992年，2002年に高校・大学の女子学生を対象とし，①痩せ群と肥満群，②痩せ願望を有する割合，③食事制限，むちゃ食い，浄化行動等の食行動異常，④無月経の頻度，⑤摂食障害の推定発症頻度に関する大規模調査を行い，これらはいずれも増加していることを報告している。また，摂食障害はダイエット志向から進展する可能性が指摘されている（例えば，筒井，1999；山登，2003）。この点について，Patton, Johnson-Sabine, Wood, Mann, & Wakeling（1990）によるダイエット行動を行った青年女子群とそれを行わなかった群の1年後の追跡調査では，ダイエット行動を行った群は，摂食障害になる相対的な危険度が8倍高く，また食行動の異常に関する調査票であるEAT⁸でハイリスク群に分類された21%が摂食障害を発症していることを指摘した。その後の追跡調査では（Patton, Selzer, Coffey, Carlin, & Wolfe, 1999），極端なダイエット行動を行う青年女子は，3年以内に摂食障害を発症する可能性が18倍とも報告されている。これらの知見は，摂食障害が一般的な青年女子に多く，食行動の異常と摂食障害の連続性を示唆するものである。このことから，摂食障害の問題は，診断基準を満たすか否かという枠を超え，青年を対象とする心理臨床場面において，心理・社会的文脈に拡大した理解が求められる重要な課題の一つといえる。そこで，本研究では調査時点において摂食障害と診断されてはいないが，摂食障害のさまざまな特徴を示す非臨床群を摂食障害傾向群として用いる。

⁸ EATの詳細は，第6章（【研究Ⅳ】）で説明する。

非臨床群の青年を対象とした家族関係と摂食障害傾向の調査では、高圧的・専制的な親 (Abrantes, Strong, Ramsey, Lewinsohn, & Brown, 2006)、不安定な家族関係 (McGuire, Story, Newmark-Sztainer, Halcon, Campbell-Forrester, & Blum, 2002)、葛藤的な家族関係 (Byely, Archibald, Graber, & Brooks-Gunn, 2000) とダイエット行動やボディーイメージへの関心といった摂食障害傾向が関連することが指摘されている。一方で、家族成員の結びつきの強さは、肥満の青年に対し不健康な食行動を抑制することが指摘されている (Mellin, Neumark-Sztainer, Story, Ireland, & Resnick, 2002)。また、父子関係、ならびに母子関係といった単一的な関係に着目した研究も行われている。父子関係においては、摂食障害傾向群では父親からのソーシャル・サポートが低いことが報告され (小林・栗田, 2005)、父親からの関わりは摂食障害傾向を抑制することが指摘されている (嘉手納他, 2004; 前川, 2005)。一方、母子関係においては、母親自身の価値観や容姿、体型への関心 (向井, 2010)、また母親の食事に対する態度 (齊藤, 2004) と摂食障害傾向との関連が指摘されている。

しかしながら、家族関係の重要性が指摘されているにも関わらず、家族全体の特徴、また、父子関係や母子関係といった単一の関係を扱うにとどまっており、より詳細な検討が必要とされる。すなわち、本研究で主張する家族構造の視点から、夫婦間や父子間、母子間を包括的に捉えて検討することが求められる。よって、第 6 章 (【研究Ⅳ】) では、青年期の問題として家族との関連が指摘されてきた青年の摂食障害傾向を取り上げ、家族構造がどのようにその問題と関連するかについて検討する。さらに、第 7 章 (【研究Ⅴ】) では、少数事例に基づく臨床研究として、摂食障害や心身症周辺領域の疾患を有する青年とその家族を対象とした検討を行う。

2-5 本研究の仮説と実証研究の位置づけ

以上、家族構造と青年のストレスに関する研究領域の問題点とそれらを克服する提案について、本研究の目的に沿って検討した。これらの論点を踏まえ、本研究では青年のストレスという観点から、夫婦間、父子間、母子間の組み合わせにより構成される青年期の家族構造の望ましい形態を示すことを目的とする。そこで、本研究の目的を検討するための仮説を以下に示す。

家族システムを家族成員の相互関係から読み解く試みは、シンボル配置技法の知見に散見される（例えば、Gehring, 1993, 八田（訳）, 1997; 亀口, 2003ab; 中見・桂田, 2007）。Gehring（1993, 八田（訳）, 1997）は、家族構造の理解には、家族とその下位システムを把握することが重要であるとした上で、健康な家族（nonclinical family）では、成員間の凝集性が高く、親子間に適度な階層性、つまり世代間境界を有し、柔軟性があることを指摘している。一方、問題をもつ家族（clinical family）では、健康な家族に比べ、凝集性が低く、階層性においては極端に過大か過少か、つまり親子間において親の力が強すぎる、もしくは、子が親よりも力が上回る構造を指摘している。さらに、FASTを用いた健常児と精神障害児（発達・行動・情緒障害等）における家族の比較から、健常児の家族は精神障害児の家族よりも家族全体の凝集性が高く、階層性では世代間境界が明確であることを見出している（Gehring, 1993, 八田（訳）, 1997）。加えて、亀口（2003ab）のFITを用いた知見においても、青年（大学生）の家族イメージとして、家族がまとまり、発言力や影響力、元気の良さといった階層性と類似した概念において、世代間境界の存在を認めている。一方、本邦においてFASTを実施した知見では（中見・桂田, 2007）、主として欧米で導かれた階層性についての基準が当てはまらないことが指摘されている。例えば、FASTを用い大学生の精神的健康と面接の応答から家族構造の詳細な検討を行った中見・桂田（2007）

によれば、Gehring (1993, 八田 (訳), 1997) の知見で、バランス型とされる凝集性が高く(もしくは中程度)、親子間の階層性の差が中程度を示す群と、アンバランス型とされる凝集性が高く、階層性の差が小さい群では、同様に青年の精神的健康度、ならびに家族を肯定的に捉えていることを報告している。Gehring (1993, 八田 (訳), 1997) が用いたデータは、1~12年生(平均年齢 16.1 歳)である一方、中見・桂田(2007)は大学生(平均年齢 20.5 歳)を用いているという年齢の違いがある。年齢の上昇と共に、凝集性の低下と階層性の差の減少(Feldman & Ghering, 1988)が指摘されているが、中見・桂田(2007)の知見は、本邦の青年期における親子間の階層性の差の小ささを実証した有益なものである。シンボル配置技法の知見では(Gehring, 1993, 八田 (訳), 1997; 亀口, 2003ab; 中見・桂田, 2007), 結びつきの高さは共通しており、この点は、先に示した青年のキャリアやアイデンティティに関連する領域における家族との情緒的なつながりや親密な関係の重要性(例えば, Cooper *et al.*, 1983; Fullinwider-Bush & Jacobvitz, 1993; Grotevant & Cooper, 1985, 1986; Hendry *et al.*, 1993; 高橋, 2008)や家族からのソーシャル・サポートの高さと青年のメンタルヘルス領域の肯定的な関連(Cohen & Wills, 1985; 菊島, 1999; 皆川他, 2004; 岡安他, 1993; Roosa *et al.*, 1996; 嶋, 1992), 家族成員間の結びつきの強さと青年のストレス認知の低さやストレス状況の改善への関連(皆川他, 2001; 皆川他, 2003ab)においても支持される。一方、階層性については、中見・桂田(2007)が示した親子間の階層性の差が小さい点、つまり、世代間の境界が曖昧である点が異なるものの、Feldman & Ghering (1988)における、子どもの年齢の上昇と親子間の階層性の差の減少、さらには家族サイクル(Carter & McGoldrick, 1989)で示される青年の自立の観点を考慮すると、中見・桂田(2007)の指摘は妥当なものと考えられる。さらに、本邦にお

ける戦後の伝統的な家族制度の崩壊に伴う親子関係を律する規範の変化について、波多野・江口（1965）は親孝行という観点から親子関係の垂直的關係から水平的關係への変化を指摘している。すなわち、この変化は子どもが親に対する恭順や服従ではなく、友人関係のような親和的關係への変化であり、建前としての親ではなく、人間としての親という視点への移行である。以上、結びつきと階層性⁹に関する知見を参照しつつ、青年期の望ましい家族構造の形態を示すという本研究の目的に沿い、「家族成員間の結びつきと勢力のバランスにより青年のストレスを説明しうる」ことを仮説とする。

この仮説を検証するため以下5つの実証研究を行う。まず第3章では、家族という複雑な相互関係を包括的に理解するため、家族構造を構成する関係性の査定に必要な最少の因子構造を抽出し、それぞれの因子について検討する（【研究Ⅰ】）。第4章ならびに第5章では、第3章で検討した家族関係を査定する最少の因子構造を、家族という複雑なシステムの縮図として3者関係（夫婦間、父子間、母子間）に当てはめ、青年の視点から家族構造を査定し、青年の認知するストレスやストレス反応への関与を検討する（【研究Ⅱ】、【研究Ⅲ】）。具体的には、第4章において、青年期にあたる大学・専門学校生を対象に、家族構造の形態の違いにより、家族内で青年が認知するストレスについて検討する（【研究Ⅱ】）。第5章では、高校生を対象に、社会との交流が増加する青年期の特徴を考慮し、青年が認知する家族内外のストレスとストレス反応に関連する家族構造を検討する（【研究Ⅲ】）。その際、第3章で抽出した家族を捉えるための因子構造を、第4章での検討、ならびに野口他（2009）の妥当性の検討を踏まえ、家族構造を、結びつきと

⁹ 階層性（hierarchy）という用語は、亀口（2003）の発言力、影響力、元気の良さと同様の概念と考えられるため、第3章（【研究Ⅰ】）のデータを踏まえ、以下、勢力という用語で統一する。

勢力で捉える家族構造測定尺度（Inventory for Character of Intra-Inter Generation in Kinship: ICHIGEKI）を使用する（狐塚他，2010；野口他，2009）。ここまでの一般的なストレスに関する実証研究の結果を基に，第6章では，家族成員間の結びつきと勢力のバランスにより，青年のストレスを説明する，家族バランス仮説（Family Balance Hypothesis: FBH）を提案する。青年の特殊なストレス反応の一つとして摂食障害傾向の問題を取り上げ，その問題に家族構造がどのように関連するかを検討する。さらに，FBHの検討も行っていく（【研究Ⅳ】）。実証研究の最後に，第7章では，少数事例に基づく臨床研究として，摂食障害や心身症周辺領域の疾患を有する青年とその家族を対象とし，FBHを検討していく（【研究Ⅴ】）。本研究の構成を **Figure 2-1** に示す。

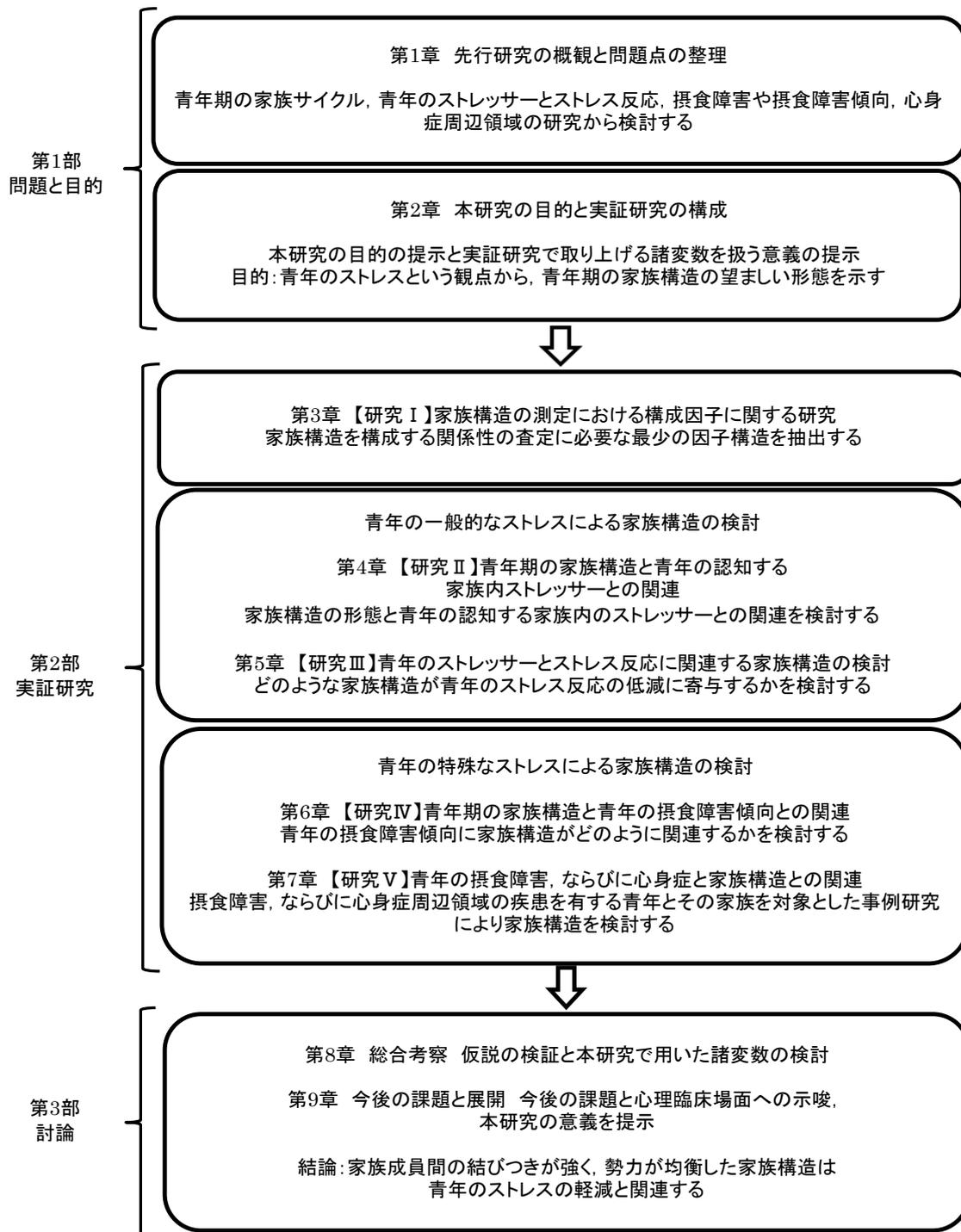


Figure 2-1 本研究の構成

第 2 部
実証研究

第 3 章

【研究 I】 家族構造の測定における構成 因子に関する研究

第 3 章では【研究 I】として，家族の構造を測定するため，家族成員間（夫婦間，父子間，母子間）の関係性を捉える因子構造の検討を行う。家族構造を構成する成員間関係性を捉えるためには，どのような因子が強い関連を示しているのかを明らかにする。その際，被験者の負担や煩雑性の観点から，最少の因子構造を検討していく。さらに，抽出された因子の持つ特性や因子間関係について考察する。

3-1 目 的

本章（【研究 I】）の目的は，家族構造を各成員間の関係性の組み合わせとして捉える際，その関係性を捉える最少の因子構造を明らかにすることである。第 1 部で示したように，これまで家族を捉えるための多くの査定法の紹介や開発が行われている（例えば，Epstein *et al.*, 1983; Gehring, 1993, 八田（訳），1997; 亀口，2003ab; 増田他，2004a; 増田他，2004b; Moos & Moos, 1974, 2002; 西出，1993; Olson *et al.*, 1979）。しかしながら，家族を捉える因子構造は多様であると共に，被験者の負担や煩雑性の観点から従来の質問項目により家族構造を捉えることは困難である。そのような中で，複数の因子から家族構造を測定しようとした場合，数多く存在する尺度の数多く存在する因子の中で，どのような因子をいくつ選択すればよいのだろうか。そして，査定法として用いられている因子の中で，家族構造ととりわけ強い関連を示している因子とは何であろうか，という探索的な目的を検討する。

3-2 方 法

1. 対象者と調査時期

調査対象者は関東の私立大学生 436 名であった。分析には回答の不備を除外した 434 名（男性 147 名，女性 287 名）のデータを用いた。対象者の平均年齢は 23.4 歳 ($SD=7.08$) であった。

調査時期は 2007 年 12 月上旬～同年 12 月下旬であった。

2. 質問紙の構成

家族機能や構造を査定する計 9 つの質問紙，Family Assessment Device III (FADIII; Epstein *et al.*, 1983) から 53 項目，The Family Assessment Measure (FAMIII; Steinhauer, 1984) の General Scale から 50 項目，Family Assessment

Inventory (FAI; 西出, 1993) から 30 項目, Family Adaptability and Cohesion Evaluation Scales III (FACES III; Olson *et al.*, 1986; Olson, 1991) の翻訳版 (草田・岡堂, 1993) から 20 項目, Self-report Measures of Family Functioning (SMFF; Bloom, 1985; 渡辺, 1989) から 75 項目, The Family Relationship inventory (FRI; 宮川, 1992) から 10 項目, Differentiation of Self Inventory (DSI; Skowron & Friedlander, 1998) から 21 項目, Family Environment Scale (FES; Moos & Moos, 1974, 2002) から 90 項目, Child-Evaluated Family Function (CEFF; 増田他, 2004a; 増田他, 2004b) から 6 項目を選択し, それら項目で使用される述語部分を抽出した。次に, 主語の違いによる回答の偏りを統制するため, 主語を「私の家族は」に統一し, 主語に準じて趣旨が異ならない程度に改訂した(日本で標準化されていないものは, 翻訳して用いた)。また, 宗教的な行事等が表現された項目は, 日本文化に合うよう, それらを「特別な日」と変更した。さらに, 投影法である Family System Test (FAST; Gehring, 1993, 八田(訳), 1997), Family Image Test (FIT; 亀口, 2003ab) の教示文を参考に, 同様の手続きを用いて 10 項目作成し, 計 365 項目を作成した。最後に, 質問項目における意味内容の重複を避けるため, 心理学の知識を有する 3 名の判定者により, KJ 法を用いて同一の趣旨と判断された項目をまとめた。最終的に 246 項目の家族構造に関する質問項目を用いた。回答は「非常にあてはまる」～「全くあてはまらない」の 6 段階評定により評定を求めた。

3-3 結 果

前述した家族構造に関する 246 項目を, 天井効果およびフロア効果の検討を行い分布の偏りを検討した。その結果, 8 項目を分析の対象から除外し 238 項目となった。次に, この 238 項目に対し主因子法・Promax 回転により探索的な因子分析を行

った。この際、初期の共通性、および因子負荷量（絶対値.50以下の因子負荷量は除外）、信頼性係数の観点から項目を除外し、49項目を選択した。この49項目に対し、再度、主因子法・Promax回転により因子分析を行った。その結果、固有値および因子の解釈可能性から8因子解を採択した（第1採択）。さらに、家族構造に高く寄与する最少の因子を特定するため、第1採択で採択された8因子49項目のうち、信頼性係数の観点から12項目を分析から除外した37項目に対し、主因子法・Promax回転により因子分析を行った。その結果、4因子解が採択された。因子分析の結果を **Table 3-1** に示す。

Table 3-1 家族構造に関する質問項目の因子分析結果(Promax回転後の因子パターン)

	F1	F2	F3	F4	h^2
第Ⅰ因子 結びつき ($\alpha=.98$)					
222 自分にとって安全な場所である	.89	-.04	-.01	-.11	.69
228 お互いにとてもうまくいっていると思う	.88	-.10	-.02	.01	.70
229 幸せである	.87	-.07	.01	-.01	.70
130 お互い仲良く生活している	.87	.01	-.07	-.02	.72
243 お互いに助け合っている	.84	.00	.07	-.05	.70
122 お互いを認めている	.83	.06	-.03	-.03	.71
93 お互いを思いやっている	.81	.02	.04	-.02	.68
111 お互いに気持ちはよく合っている	.81	-.05	-.10	.11	.66
29 温かく明るい感じがする	.79	.02	-.01	.07	.68
49 私の気持ちをよく理解してくれている	.79	-.04	-.04	-.01	.58
201 家にいると気持ちがゆったりとして落ち着いている	.79	-.04	-.09	-.09	.53
191 お互いに家族に愛情を感じている	.79	.05	.14	-.07	.69
47 生き生きと楽しく毎日を過ごしている	.78	-.12	-.06	.01	.52
109 お互いに親密である	.78	.02	.01	.01	.64
58 お互いの意見をしっかりと聞く	.78	-.01	-.02	.06	.62
238 家族メンバー間の結びつきが強い	.77	.01	.01	.05	.63
196 家の中で何でも話しができる	.76	-.04	-.05	-.03	.53
89 連帯感がある	.76	-.02	.03	.14	.67
44 お互いに充分な関心を持って接している	.74	.02	.07	.00	.59
142 困った時お互いに助けを求める	.74	-.06	.02	-.05	.48
82 私の支えになってくれる	.73	.11	.06	-.05	.63
140 優しさを表現する	.71	-.03	.09	.03	.54
107 みんなが自分の考えをはっきりと口に出して言いやすい	.71	-.06	-.14	.01	.44
83 自由な時間を家族と一緒に過ごしている	.63	.11	.02	.01	.48
13 お互いに助けたり元氣付けることがよくある	.59	.16	.11	.09	.56
99 優しさや愛情をあまり重要としていない*	.56	.20	.02	-.02	.47
156 お互いを理解していないので家族の活動を計画する事は難しい*	.54	.21	.00	.05	.48
第Ⅱ因子 利害的關係 ($\alpha=.80$)					
80 家族のために何か得られるものがある時だけお互いに興味を示す	.05	-.78	-.03	.00	.58
40 自分に何か得られるものがある時だけお互いに興味を示す	.03	-.76	.07	-.04	.57
136 家族に何か重要なことがある時だけ家族に関心を示す	-.10	-.70	.02	.04	.55
19 何か興味を持つものがある時だけお互いが関係する	.05	-.63	.04	.02	.37
第Ⅲ因子 勢力 ($\alpha=.82$)					
8 力を持つ人がいる	-.04	-.02	.85	.00	.70
5 影響力を持つ人がいる	-.03	-.02	.73	.03	.54
119 強いリーダーシップをとる人がいる	-.03	-.05	.70	.03	.48
230 発言力を持つ人がいる	.03	.00	.69	-.06	.48
第Ⅳ因子 開放性 ($\alpha=.75$)					
88 家庭に他の人が遊びに来たり夕食を共にすることはめったにない*	-.09	.03	-.02	.84	.65
94 人々を家に招くのが好きである	.12	-.05	.02	.72	.59
因子間相関			F1	F2	F3
			F2	.51	
			F3	.22	.13
			F4	.38	.17
					.16

*は逆転項目を示す

第 i 因子は、「自分にとって安全な場所である」、「お互いにと
てもうまくいっていると思う」、「幸せである」、「お互い仲良く
生活している」、「お互いに助け合っている」等 27 項目で構成
されており、家族内でのお互いの愛情や仲の良さ、親密さ、ま
とまりを表すと解釈した。よって、第 i 因子を「結びつき」と
命名した。

第 ii 因子は、「家族のために何か得られるものがある時だけお
互いに興味を示す」、「自分に何か得られるものがある時だけお
互いに興味を示す」、「家族に何か重要なことがある時だけ家族
に関心を示す」、「何か興味を持つものがある時だけお互いが関
係する」という 4 項目から構成されている。よって、愛情や仲
の良さ、親密さによる関係ではなく、家族という集団の形態維
持や自分自身の利害においてお互いが関わる道具的な関係を表
すと解釈し、第 ii 因子を「利害的關係」と命名した。

第 iii 因子は、「力を持つ人がいる」、「影響力を持つ人がいる」、
「強いリーダーシップをとる人がいる」、「発言力を持つ人がい
る」、という 4 項目から構成されている。よって、家族内にお
ける相対的な影響力や決定力、発言力を表すと解釈し、第 iii 因
子を「勢力」と命名した。

第 iv 因子は、「家庭に他の人が遊び来たり夕食を共にしたりす
ることはめったにない（逆転項目）」、「人々を家に招くのが好き
である」という 2 項目から構成されている。よって、家族が家
族外に対してどれだけ開かれているかを表すと解釈し、第 iv 因
子を「開放性」と命名した。

以上 4 因子について内的整合性を検討するため、 α 係数を算
出したところ、第 i 因子「結びつき」で $\alpha=.98$ 、第 ii 因子「利
害的關係」で $\alpha=.80$ 、第 iii 因子「勢力」で $\alpha=.82$ 、第 iv 因子「開
放性」で $\alpha=.75$ であり、全ての因子において高い信頼性が確認
されたといえる。加えて、4 因子間の相関では、とりわけ「結
びつき」得点と「利害的關係」得点に、比較的強い正の相関(.51)

が示されている。しかし「利害的關係」の各項目の因子負荷量は、全て負の値を示していることから、「結びつき」得点と「利害的關係」得点は負の相関であり、「結びつき」得点が増えるほど、「利害的關係」得点が増えるという負の相関を示しているとして解釈できる。また、「結びつき」得点と「開放性」得点に、弱い正の相関が確認された (.38)。これは、「結びつき」得点が増えるほど、「開放性」得点も増えるという相関を意味する。

3-4 考 察

本研究により、家族に強い相関を示す最少の因子構造として、「結びつき」、「利害的關係」、「勢力」、「開放性」という4因子が抽出され、それらは、高い信頼性を持つ因子であった。そこで、これら4因子が家族にどのような相関を持つかについて、先行研究における指摘を踏まえながら考察する。

1. 「結びつき」因子

まず、「結びつき」因子は、「自分にとって安全な場所である」、「お互い助け合っている」、「幸せである」、「お互い家族に愛情を感じている」、「お互いを思いやっている」といった親密さや家族内の愛情についての質問項目で構成されていた。これは家族内でのお互いの愛情や仲の良さ、親密さ、まとまりを表す因子と解釈できる。詳細にみると、第1因子にはFAI(西出, 1993)やFES(Moos & Moos, 1974, 2002), FADIII(Epstein *et al.*, 1983)を参考にして作成された質問項目が多く含まれていた。それぞれの尺度の因子をみると、家族の凝集性に含まれる項目が多く含まれていた。その他、親密や調和、コミュニケーションの因子として扱われている項目が含まれていた。FAI(西出, 1993)やFES(Moos & Moos, 1974, 2002), FADIII(Epstein *et al.*, 1983)等の凝集性の因子に含まれる項目でも、因子の定義

については尺度により異なっている。例えば *FACES* (Olson *et al.*, 1979) では、凝集性とは「家族成員の情緒的絆」を表すとされ (草田, 1995), 一方で *FES* (Moos & Moos, 1974, 2002) では「家族成員が他の家族成員に与える援助やサポートの程度」を表すとされている (野口他, 1991)。このように, 尺度により定義の異なる項目が同様の因子構造を示したことで, それぞれの尺度の項目が同様の因子についての質問項目であることが理解できる。

2. 「利害的關係」因子

次に, 「利害的關係」因子は「自分に何か得られるものがある時だけお互いに興味を示す」, 「家族のために何か得られるものがある時だけお互いに興味を示す」, 「家族に何か重要なことがある時だけ家族に関心を示す」, 「何か興味を持つものがある時だけお互いが関係する」という 4 項目から構成されていた。これは家族という集団の形態維持や自分自身の利害においてのみ, 各自が関わる関係を表す因子と解釈できる。この因子は *FAD III* (Epstein *et al.*, 1983) の情緒的関与 (*affective involvement*) の因子に含まれる項目を参考にして作成した項目であった。*FAD III* (Epstein *et al.*, 1983) では, これら項目からなる因子について, 「家族成員の重大事を重要と考えるかについて」を表すとしている。本研究では自分自身の利害においてのみ家族と関わる項目で因子が構成されたため, その内容から「利害的關係」と解釈した。自分自身の利害のためにだけ関わる関係も, 片岡 (1997) が述べるように, 家族の中で平等化や個人化, 多様化等の現象が生じている現代では, 家族の構成因子として重要であると考えられる。

3. 「勢力」因子

「勢力」因子は, 「力を持つ人がいる」, 「影響力を持つ人がい

る」,「発言力を持つ人がいる」,「強いリーダーシップをとる人がいる」という4項目から構成されている。これは家族内における権威や決定力を表すと解釈できる。4項目のうち3項目はFAST (Gehring, 1993, 八田 (訳), 1997), およびFIT (亀口, 2003ab)の教示文を参考に作成した項目であり,1項目はSMFF (Bloom, 1985; 渡辺, 1989)を参考に作成した項目であった。FAST (Gehring, 1993, 八田 (訳), 1997)では,家族構造理論と家族発達論を基に,凝集性と階層性の2つが家族構造を理解するための鍵概念であるとし,同様にFIT (亀口, 2003ab)でも,上記の2次元に基づいている。また,Minuchin(1974, 山根 (監訳), 1984)においても家族構造を把握するための指標の一つとして勢力を挙げている。Haley(1976, 佐藤(訳), 1985)は,組織化する生物は階層性を形成することを指摘しているように,家族成員の勢力は重要な概念であることがわかる。家族の中に強い勢力を有する者がいる場合,その者の影響で成員全体が同じ方向を向きやすく,家族の安定が保たれやすいことが考えられる。一方,家族に強い勢力を持つ者がいない場合,まとめ役が存在しないため,家族成員のそれぞれが好きな方向に向き,混乱しやすいことも考えられる。

4. 「開放性」因子

「開放性」因子は「家庭に他の人が遊びに来たり夕食を共にしたりすることはめったにない(逆転項目)」,「人々を家に招くのが好きである」という2項目から構成されていた。この因子は,SMFF (Bloom, 1985; 渡辺, 1989)とFES (Moos & Moos, 1974, 2002)を参考に作成された項目で構成されていた。参考にした尺度では,「活動的レクリエーション態度」,および「活動娯楽志向性」の因子に属する項目がまとめられている。しかし,本研究では,項目内容から,家族が家族外にどの程度開かれているかを表す因子と解釈した。この「開放性」を,家族外

の開放性と捉える場合，社会との関わりを持つ開かれた家族構造を意味し（野末，1991），また家族内の各関係における開放性と捉える場合，Minuchin（1974，山根（監訳），1984）のいう家族成員間が柔軟に関わりを持てることを意味すると解釈できる。

また因子間相関の結果から，第 i 因子の「結びつき」は，とりわけ第 ii 因子の「利害的關係」と比較的強い負の関連を示した。この結果は，仲の良さや親密さといった情緒的な関係が強くなるほど，自分に何か得られるものがある時，また家族に何か重要なことがある時だけ家族と関わるという道具的な関係が弱くなることを示唆する結果である。つまり，家族成員間の「結びつき」という情緒的な関係は，「利害的關係」という道具的な関係とは対概念として解釈することができる。

最後に，本研究では家族構造を測定するため，家族構造の最小単位である関係性を査定する因子として，最少の 4 因子構造を抽出した。その中でも，結びつきは，凝集性や親密さ（例えば，Bloom,1985; Gehring, 1993, 八田（訳），1997; 草田・山田，1998; Moos & Moos, 1974, 2002; 西出, 1995; Olson *et al.*, 1979) として，さらに，勢力は，階層性という概念（Haley,1976, 佐藤（訳），1985）や Minuchin（1974，山根（監訳），1984）の理論的基盤の一部として，家族を査定する際の重要な概念として扱われてきた。また，項目数は異なるもののこの 2 因子は信頼性という観点からも，4 因子の中で上位を占める。よって，「結びつき」と「勢力」という概念は，家族構造を測定する上での主要な因子であると考えられる。

5. 第 4 章（【研究 II】）への示唆

本章（【研究 I】）では，家族構造を構成する関係性の査定として最少の 4 因子構造を抽出した。この結果により，今後はこれらの因子に基づき，家族構造を捉える査定法の提案が課題と

なる。しかし、そのためにはいくつかの課題がある。

例えば、家族の査定に関する質問紙法の多くは、家族全体を捉えることは出来るが、家族成員間の関係性を査定するには、項目数に制約が生じる。心理臨床場面や研究において、夫婦関係や父子関係、母子関係といったサブシステムやそれらの関連を把握することにより、家族を理解、説明するための多くの情報が得られる。しかし、野口（2009）は、夫婦間、父子間、母子間の結びつきを測定することで家族構造の分類を試みたが、結びつきという概念だけでも分析が煩雑であることを指摘している。このような観点からも、4因子を用いて家族成員間の関係を詳細に検討するためには、査定方法や分析方法の精緻化が求められる。また、家族成員の誰の視点から査定するかによっても、その評価が異なるという問題点も想定される。例えば、家族成員の一方の視点からの満足や良好さが、他方の視点での不満足や不仲である可能性も十分に考慮しなければならない。さらに、家族成員の発達的变化を考慮する必要がある。とりわけ勢力に関しては、幼少期に比べ青年期では親子関係における相対的な勢力関係が異なることが想定される。

以上、第4章（【研究Ⅱ】）に進むにあたり、①家族構造を測定するための最小単位である2者関係の測定方法と分析方法の精緻化、②青年期の対象者を用いること、③青年の視点に統一すること、④青年のストレスという観点から家族構造を評価することを踏まえた検討を進める。

第 4 章

【研究Ⅱ】 青年期の家族構造と青年の認知する家族内ストレスとの関連

第 4 章では【研究Ⅱ】として、青年の視点から夫婦間，父子間，母子間という 3 者関係を測定し，それら組み合わせを家族構造として捉えていく。家族構造を構成する各関係は，第 3 章（【研究Ⅰ】）で検討した，「結びつき」，「利害的關係」，「勢力」，「開放性」という 4 因子を用いて査定する。さらに，家族構造と成員間のコミュニケーション，ならびに家族構造と青年の認知する家族内ストレスとの関連について，性差を踏まえ探索的に検討していく。なお，本研究における本章の位置づけは，青年期の家族構造を，家族内ストレスという青年の一般的なストレスにより検討することである。

4-1 目 的

本章（【研究Ⅱ】）では，青年の視点から家族構造を類型し，その類型の差異による青年の認知する家族内ストレスについて性差を踏まえ探索的に検討することを目的とする。その際，第3章（【研究Ⅰ】）で抽出した4因子を，夫婦間，父子間，母子間という3者関係の査定に使用し，それら下位システムの相互関係から家族構造を包括的に捉える。加えて，第3章（【研究Ⅰ】）で抽出した4因子それぞれが，各成員間のコミュニケーションの頻度とどのように関連しているかを，若島他（2000）の情報量の差異とサブシステム間の関連を踏まえ，各成員の直接的なコミュニケーションの頻度を双方向で捉えて検討する。Watzlawick *et al.*（1967）が指摘する，情報の円環的・循環的な複雑性を踏まえると，成員間の直接的なやりとりのみならず，青年が夫婦間の相互作用を観察することやそれぞれの関係における媒介的な情報伝達もメッセージとして成立し，それぞれの関係に影響を及ぼすことが想定される。例えば，母親が父親と子どもの媒介的役割となることが，子どもの両親や父親に対する親和性を高める（宇都宮，2005）という知見，さらには両親関係の不和や葛藤と子どもの不適応や親子関係の不和との関連（Grych & Fincham, 1993; 飛田・狩谷，1992）が指摘されている。これらの知見を踏まえ，複雑なコミュニケーションの1ルートとして，一方の親から他方の親についての情報を青年に伝えることを媒介伝達として用い検討する。

4-2 方 法

1. 調査対象者と調査時期

調査は関東および東北地方の大学，ならびに専門学校に通う学生439名に対し質問紙による調査を行った。これらの回答から欠損値のみられた回答や極端に偏った回答，母子家庭や父子

家庭の回答を除外した計 283 名（男性 104 名，女性 179 名）のデータを分析の対象とした。対象者の平均年齢は男性 22.0 歳（ $SD=3.28$ ），女性 21.6 歳（ $SD=4.29$ ），対象者全体は 21.7 歳（ $SD=3.95$ ）であった。調査時期は 2008 年 9 月中旬から 2009 年 11 月下旬であった。

2. 質問紙の構成

1) 家族構造の測定

第 3 章において示した家族構造の構成因子である「結びつき」，「利害的關係」，「勢力」，「開放性」という 4 因子構造に基づき（【研究 I】），各因子に対し因子負荷量が高い項目を教示文に加え，4 因子それぞれの説明に用いた（以下，家族構造測定尺度と記述する）。なお 3 者関係を視覚的にイメージしやすいよう配慮し，夫婦間，父子間，母子間を線で結ぶ逆三角形の図を用いて，以下に示す教示を基に 10 件法の点数の記入を求めた。下位項目である「結びつき」については，お互いの仲の良さや親密さ，連帯感の強さを表すことを示し，それぞれの関係において「非常に弱い」～「非常に強い」までの 10 件法により回答を求めた。「利害的關係」については，お互いが自分に何か得られるものや興味がある時だけお互いに関係する，または，家族に何か重要なことがある時だけお互いが興味・関心を示す程度であることを示し，それぞれの関係において「非常に弱い」～「非常に強い」までの 10 件法により回答を求めた。「勢力」については，誰の誰に対する勢力かを明確にするため，夫婦間，父子間，母子間の双方向（計 6 方向）から査定を行った。それぞれの影響力や発言力，決定力の強さであることを示し，「非常に弱い」～「非常に強い」までの 10 件法により回答を求めた。「開放性」については，家庭に他の人が遊びに来たり夕食を共にしたりすることや家族以外の人を家に招くことを好む，また，2 者の関係を家族以外の人に話す（オープンにする）程度であ

ることを示し，それぞれの関係において「非常に低い」～「非常に高い」までの 10 件法により回答を求めた。

2) 直接的コミュニケーションの測定

黒川（1990），および草田・山田（1998）の家族コミュニケーション尺度，さらに榎本（1997）の自己開示の知見を参考に，発話行動に焦点を当てた 17 項目を作成した。回答は「まったくない」～「いつもある」までの 5 件法を用い，夫婦間，父子間，母子間の双方向（計 6 方向）により回答を求めた。

3) 親から青年への媒介伝達の測定

落合・佐藤（1996），および小高（1998）の親子関係を測定する項目，さらに榎本（1997）の自己開示の知見を参考に，発話行動に焦点を当てた 15 項目を作成した。これらの項目を，父親を介した母親から青年への媒介伝達，および母親を介した父親から青年への媒介伝達という 2 つの方向により回答を求めた。回答は「まったくない」～「いつもある」までの 5 件法を用いた。

4) 配偶者についての媒介伝達の測定

諸井（1996）の夫婦関係満足尺度，および宇都宮（2005）の両親のコミットメント認知尺度を参考に，発話行動に焦点を当てた 12 項目を作成した。これらの項目を，母親を介した父親についての媒介伝達，および父親を介した母親についての媒介伝達という 2 つの方向により回答を求めた。回答は「まったくない」～「いつもある」までの 5 件法を用いた。

5) 家族内ストレスの測定

青年の認知する家族内のストレスを測定するため，項目内容から判断し，主として親子関係における親からのストレスに焦点を当てた，林・小杉（2003）の家族ストレス尺度を用いた。本尺度は 24 項目で構成されており，「無関心」，「不和」，「親への不信感」，「過干渉」の 4 因子構造である。本研究では 3 者関係（夫婦間，父子間，母子間）に焦点を当てたため，

「親が兄弟姉妹を比較する」という項目を除外した 23 項目を使用し、「全くあてはまらない」～「よくあてはまる」の 5 件法で回答を求めた。

4-3 結 果

1. 各尺度の因子構造の検討と得点化

1) 家族構造測定尺度における 4 因子の得点化

はじめに，夫婦間，父子間，母子間における家族構造測定尺度の各因子得点の記述統計量を算出し得点化を行った¹⁰。

2) 直接的コミュニケーションにおける因子構造の検討と得点化

次に，直接的コミュニケーションの測定項目における因子構造の検討と得点化を行うため，夫婦間，父子間，母子間の各方向における直接的コミュニケーションの測定項目（各 17 項目）それぞれに対し，主因子法・プロマックス回転により探索的な因子分析を行った。この際，項目選別の基準として回転後の共通性，因子負荷量（絶対値.35 以下の因子負荷量を示す項目，および 2 つ以上の因子に多重付加量を示す項目），信頼性係数の観点から項目を選別し，再度，同様の方法により検証的因子分析を行った。その結果，固有値および因子の解釈可能性から各方向に共通し，概ね同様の項目内容（6～10 項目）からなる 1 因子解を採択した。各方向で項目数が異なるのは，例えば青年から母親には情緒面のことを話すことが多いが，父親には進路のことを話すことが多いといったように，各関係において会話の内容の重み付けが異なるためと考えられる。各測定項目は

¹⁰ 勢力得点は，父親から母親への得点から，母親から父親への得点を引いた値を夫婦間の勢力得点とした。また，父親（母親）から青年への得点から，青年から父親（母親）への得点を引いた値を，それぞれ父子間，母子間の勢力得点とした。夫婦間では，得点が高いほど父親の勢力が強いことを意味し，父子間・母子間では，勢力得点が高いほど父親（母親）の勢力が強いことを意味する。

自分自身の仕事や職業，ものの見方や考え方を話すといった内容で構成されているため「率直なコミュニケーション」と命名した。信頼性の基準として各方向における測定項目の α 係数を算出したところ $\alpha = .77 \sim .90$ という高い信頼性が確認された。分析の結果から直接的コミュニケーションは単一構造となったが，コミュニケーションの頻度と関係性がどのように関連しているかという知見が少ないため，単一構造でも検討する意義があるものと判断し，その後の分析を進めた。各関係における「率直なコミュニケーション」の因子分析結果を **Table 4-1** から **Table 4-6** に示す。次に，各関係における双方向の「率直なコミュニケーション」の得点を合計し，夫婦間，父子間，母子間の「率直なコミュニケーション」得点を算出した（以下，「夫婦間 Co」，「父子間 Co」，「母子間 Co」と記述する）。

Table 4-1 父親から母親への率直なコミュニケーションの因子分析結果

No	F1	h^2
11. 父は母に自分自身の仕事や職業のことについて話す	.79	.63
15. 父は母に自分自身のものの見方や考え方を話す	.79	.63
5. 父は心配事や悩みがあったら母にそのことを話す	.75	.56
16. 父は母に自分自身の病気やけがなど身体面のことを話す	.73	.53
13. 父は母に自分自身の友人関係のことを話す	.70	.49
6. 父は母に自分自身の仕事（学校，アルバイト，パート）でのグチを言う	.67	.45
7. 父は母に気軽に頼みごとをする	.67	.44
9. 父は何か重要なことがあると，母に話をきり出す	.67	.44
4. 父は母に自分自身の人生設計について話す	.64	.40
2. 父は母に伝えたいことを率直に伝える	.53	.28
	因子寄与率 (%)	48.72
	α 係数	.90

Table 4-2 母親から父親への率直なコミュニケーションの因子分析結果

No	F1	h^2
15. 母は父に自分自身のものの見方や考え方を話す	.78	.61
13. 母は父に自分自身の友人関係のことを話す	.77	.60
11. 母は父に自分自身の仕事や職業のことについての話をする	.74	.54
6. 母は父に自分自身の仕事（学校，アルバイト，パート）でのグチを言う	.73	.53
16. 母は父に自分自身の病気やけがなど身体面のことを話す	.71	.51
5. 母は心配事や悩みがあったら父にそのことを話す	.71	.50
7. 母は父に気軽に頼みごとをする	.69	.47
4. 母は父に自分自身の人生設計について話す	.61	.37
9. 母は何か重要なことがあると，父に話をきり出す	.55	.30
2. 母は父に伝えたいことを率直に伝える	.54	.29
	因子寄与率（％）	52.28
	α 係数	.90

Table 4-3 父親から子どもへの率直なコミュニケーションの因子分析結果

No	F1	h^2
15. 父は私に自分自身のものの見方や考え方を話す	.74	.55
11. 父は私に自分自身の仕事や職業のことについての話をする	.72	.52
13. 父は私に自分自身の友人関係のことを話す	.60	.37
16. 父は私に自分自身の病気やけがなど身体面のことを話す	.56	.31
7. 父は私に気軽に頼みごとをする	.52	.27
2. 父は私に伝えたいことを率直に伝える	.43	.19
	因子寄与率（％）	40.25
	α 係数	.77

Table 4-4 子どもから父親への率直なコミュニケーションの因子分析結果

No	F1	h^2
11. 私は父に自分自身の仕事や職業のことについての話をする	.81	.66
4. 私は父に自分自身の人生設計について話す	.80	.64
15. 私は父に自分自身のものの見方や考え方を話す	.78	.61
13. 私は父に自分自身の友人関係のことを話す	.68	.46
16. 私は父に自分自身の病気やけがなど身体面のことを話す	.62	.39
9. 私は何か重要なことがあると、父に話をきり出す	.60	.36
2. 私は父に伝えたいことを率直に伝える	.47	.23
	因子寄与率 (%)	50.25
	α 係数	.86

Table 4-5 母親から子どもへの率直なコミュニケーションの因子分析結果

No	F1	h^2
5. 母は心配事や悩みがあったら私にそのことを話す	.78	.61
13. 母は私に自分自身の友人関係のことを話す	.76	.58
4. 母は私に自分自身の人生設計について話す	.68	.46
16. 母は私に自分自身の病気やけがなど身体面のことを話す	.63	.40
15. 母は私に自分自身のものの見方や考え方を話す	.58	.34
7. 母は私に気軽に頼みごとをする	.58	.33
9. 母は何か重要なことがあると、私に話をきり出す	.56	.32
6. 母は私に自分自身の仕事（学校、アルバイト、パート）でのグチを言う	.51	.27
	因子寄与率 (%)	45.84
	α 係数	.84

Table 4-6 子どもから母親への率直なコミュニケーションの因子分析結果

No	F1	h^2
11. 私は母に自分自身の仕事や職業のことについて話す	.81	.66
5. 私は心配事や悩みがあったら母にそのことを話す	.79	.62
13. 私は母に自分自身の友人関係のことを話す	.77	.59
15. 私は母に自分自身のものの見方や考え方を話す	.73	.54
6. 私は母に自分自身の仕事（学校、アルバイト、パート）でのグチを言う	.70	.49
16. 私は母に自分自身の病気やけがなど身体面のことを話す	.69	.48
9. 私は何か重要なことがあると、母に話をきり出す	.67	.45
7. 私は母に気軽に頼みごとをする	.61	.37
2. 私は母に伝えたいことを率直に伝える	.56	.31
	因子寄与率 (%)	47.04
	α 係数	.90

3) 親から青年への媒介伝達における因子構造の検討と得点化

親から青年への媒介伝達における測定項目の因子構造の検討と得点化を行うため、母親を介した父親についての媒介伝達に関する質問項目（15項目）に対し、直接的コミュニケーションと同様の基準を用いて因子分析を行った。その結果、固有値および因子の解釈可能性から計7項目からなる1因子解を採択した。母親を介して父親の青年に対する信頼感や尊重、賞賛等を表す項目内容から「父親からの肯定的な媒介伝達」と命名した¹¹。信頼性の基準として α 係数を算出したところ $\alpha=.84$ という高い信頼性が確認された（Table 4-7）。

¹¹ 父親を介して母親からの媒介伝達に関する項目は、得点分布を検討した結果、全ての項目でフロア効果が見られたため分析から除外した。

Table 4-7 父親からの肯定的な媒介伝達の因子分析結果

No	F1	h^2
3. 父は私のすることに賛成していることを, 母から聞くことがある	.85	.71
4. 父が私を信頼していることを, 母から聞くことがある	.79	.63
9. 父が私の言動に対して喜んでいてくれたことを, 母から聞くことがある	.76	.57
1. 父は私のものの見方や考え方を尊重していることを, 母から聞くことがある	.75	.57
2. 父は私に直接は言えないが言いたいことがあるということ, 母から聞くことがある	.57	.32
7. 父親自身の病気やけがなど身体面のことを, 母から聞くことがある	.48	.23
14. 父親自身の仕事や職業のことについて, 母から聞くことがある	.47	.22
	因子寄与率(%)	46.44
	α 係数	.84

4) 配偶者についての媒介伝達における因子構造の検討と得点化

配偶者についての媒介伝達における測定項目の因子構造の検討と得点化を行うため, 質問項目(15項目)に対し, 直接的コミュニケーションと同様の方法を用いて因子分析を行った。その結果, 固有値および因子の解釈可能性から計3項目からなる1因子解を採択した。母親が父親についての称賛や信頼を青年に伝えるという項目内容から「父親についての肯定的な媒介伝達」と命名した¹²。信頼性の基準として α 係数を算出したところ $\alpha=.80$ であり高い信頼性が確認された(**Table 4-8**)。

¹² 父親を介した母親についての媒介伝達に関する質問項目は, 得点分布を検討した結果, 2項目を残してフロア効果が見られたため, 信頼性の観点から分析から除外した。

Table 4-8 父親についての肯定的な媒介伝達の因子分析結果

No	F1	h^2
6. 父を信頼していることを，母から聞くことがある	.87	.76
12. 父に対する褒め言葉を，母から聞くことがある	.86	.75
3. 父と一緒に出かけたときの話を，母から聞くことがある	.56	.31
	因子寄与率(%)	60.61
	α 係数	.80

5) 家族内ストレス尺度の因子分析と得点化

家族内ストレス尺度における因子構造の検討と得点化を行うため，家族ストレスに関する質問項目（23項目）に対し，直接的コミュニケーションの方法と同様の基準を用いて因子分析を行った。その結果，固有値および因子の解釈可能性から3因子解を採択した（Table 4-9）。

家族内ストレス尺度の第i因子は，両親の葛藤や親のグチを聞かされる，家族同士で悪口を言う等の計4項目から構成され，家族成員間の不和を表す内容から「家族の不和」と命名した。第ii因子は，親の過保護や青年への過剰な心配，青年の異性関係への干渉といった計3項目から構成され，親の青年に対する過干渉を表す内容から「親の過干渉」と命名した。第iii因子は，親の意見を押し付けられる，わかってくれない，しつげが厳しいといった計3項目から構成され，親が青年に対して理解を示さないという内容から「親の無理解」と命名した。信頼性の基準として各因子における α 係数を算出したところ $\alpha=.76\sim.80$ であり，概ね高い信頼性を示した。よって各因子の合計得点を算出し，「家族の不和」得点，「親の過干渉」得点，「親の無理解」得点とした。

Table 4-9 家族内ストレス尺度の因子分析結果 (Promax回転後の因子パターン)

	F1	F2	F3	h^2
第 i 因子 家族の不和 ($\alpha=.80$)				
11. 両親がよくケンカをする	.79	.04	-.10	.58
12. 親のグチを聞かされる	.73	.15	-.13	.53
6. 家族同士で悪口を言う	.69	-.03	.17	.59
13. 家族としてのまとまりがない	.59	-.19	.16	.40
第 ii 因子 親の過干渉 ($\alpha=.76$)				
7. 親が過保護である	.01	.88	.00	.77
15. 親が私のことを心配しすぎる	-.08	.74	.08	.59
1. 親が異性との交際に干渉する	.08	.51	.03	.30
第 iii 因子 親の無理解 ($\alpha=.76$)				
10. 親の意見を押し付けられる	-.05	.02	.93	.86
2. 親が私のことをわかってくれない	.07	.01	.61	.41
9. 親のしつけが厳しい	.03	.23	.44	.37
因子間相関				
	F1	F2		
	F2	.22		
	F3	.38	.53	

2. 家族構造の類型とコミュニケーション, および家族内ストレスとの関連

家族構造と家族内のコミュニケーション, および家族内ストレスとの関連の検討に先立ち, 各変数間の性差を対応なしの t 検定により検討した。その結果, 家族構造では女性は男性より母子間の「結びつき」が強く ($t(281) = -2.31, p < .05$), 父親の子どもに対する「勢力」が弱い ($t(281) = 3.20, p < .01$)。さらに母親の子どもに対する「勢力」は女性の方が男性よりも強い ($t(281) = -2.79, p < .05$)。コミュニケーションにおいては, 「夫婦間 Co」 ($t(281) = -1.99, p < .05$), 「母子間 Co」 ($t(281) = -6.08, p < .001$), ならびに「父親についての肯定的な媒介伝達」 ($t(281) = -1.94, p < .05$) の性差が有意であり, いずれも男性より女性の平均得点が高かった。「家族内ストレス」においては, 「親の過干渉」 ($t(281) = -4.68, p < .001$),

ならびに「親の無理解」($t(281) = -3.20, p < .001$) がいずれも男性に比べ女性の平均得点が高かった。よって、本研究の中核的変数となる家族構造において性差がみられたため、男女別に家族構造の類型を行った。

家族構造の類型には夫婦間，父子間，母子間における家族構造測定尺度の下位尺度得点に対し，男女共に ward 法によるクラスタ分析を行った。クラスタ数の検討には，デンドログラムを基準に各クラスタに含まれる被験者数やクラスタの解釈可能性の観点から検討し，男女共に解釈可能な 3 クラスタを採択した。クラスタ分析の結果を **Figure 4-1**，**Figure 4-2** に示す。

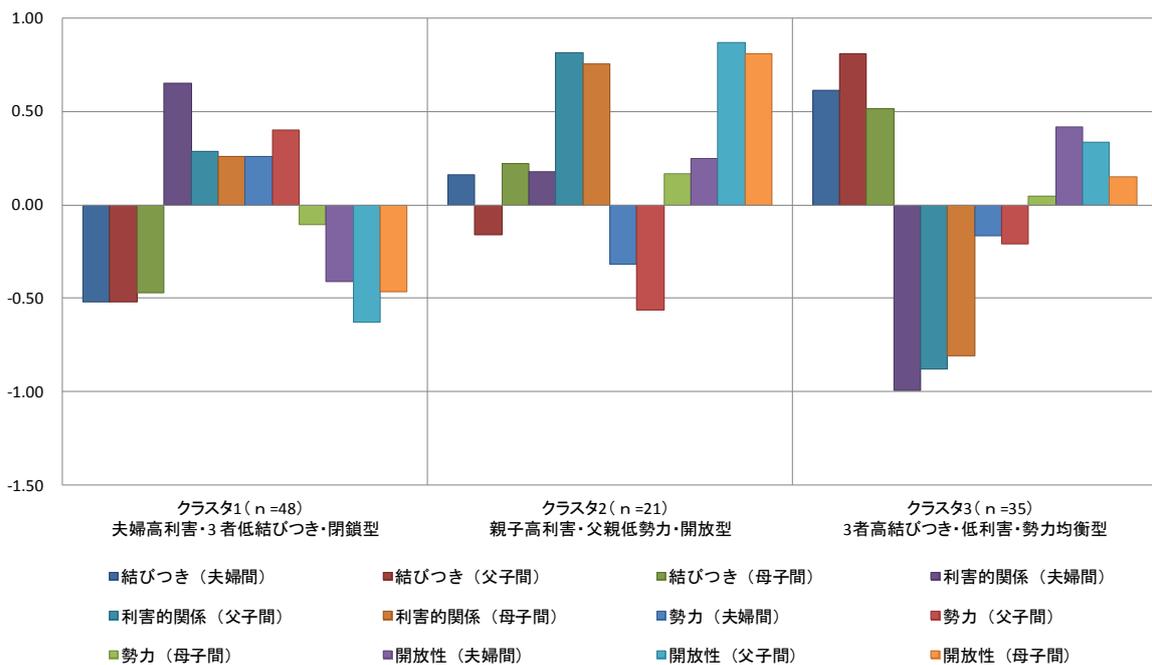


Figure 4-1 男性における3クラスタの家族構造プロフィール

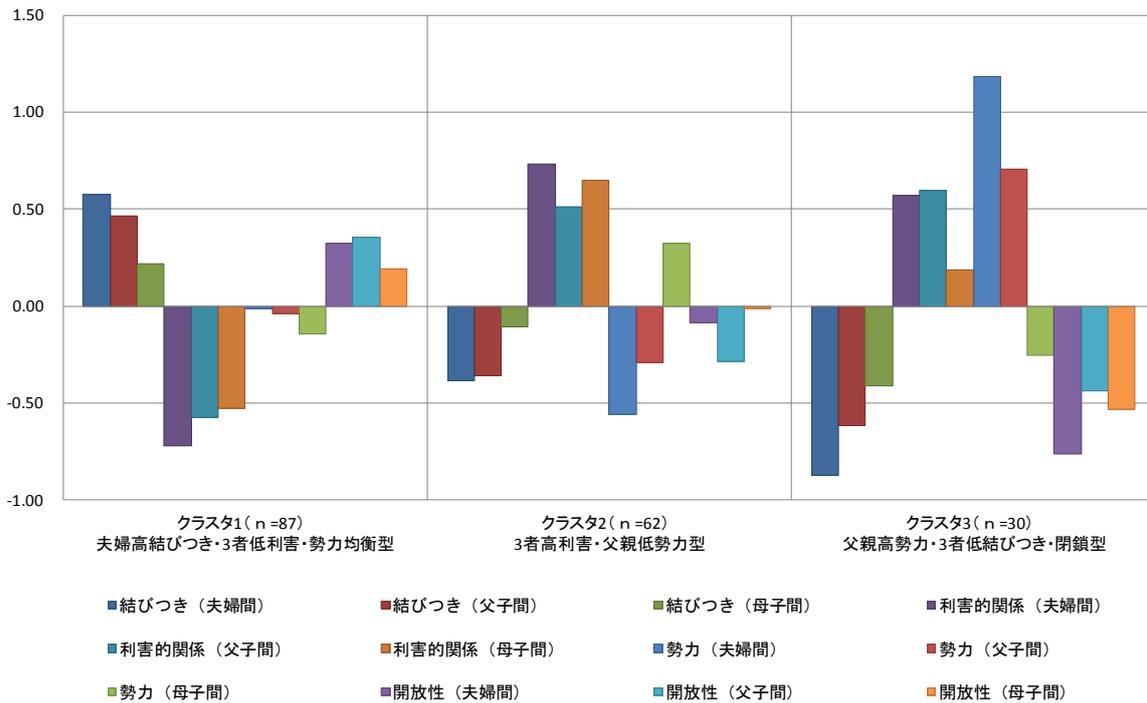


Figure 4-2 女性における3クラスターの家族構造プロフィール

男性においては、第1クラスターの特徴として、各サブシステム間の「結びつき」が、およそ -0.50 、「開放性」がおよそ -0.50 、夫婦間の「利害的關係」が $+0.50$ 以上の値を示していることから、「夫婦高利害・3者低結びつき・閉鎖型」と命名した($n=48$)。第2クラスターの特徴として、父子間、ならびに母子間の「利害的關係」が $+0.50$ 以上の値、父親の子どもに対する「勢力」が -0.50 以下の値、父親の母親に対する「勢力」もやや低い値を示している。さらに父子間、ならびに母子間の「開放性」が共に $+0.50$ 以上の値を示していることから、「親子高利害・父親低勢力・開放型」と命名した($n=21$)。第3クラスターの特徴として、各サブシステム間の「結びつき」が $+0.50$ 以上、「利害的關係」が -0.50 以下、「勢力」においてはほぼ平均に近い値を示している。よって、「3者高結びつき・低利害・勢力均衡型」と命

名した ($n=35$)。

女性においては、第 1 クラスタの特徴として、夫婦間、ならびに父子間の結びつきが、およそ $+ .50$ を示し、各サブシステム間の「利害的關係」が $- .50$ 以下、「勢力」においてはほぼ平均に近い値を示している。よって「夫婦高結びつき・3 者低利害・勢力均衡型」と命名した ($n=87$)。第 2 クラスタの特徴として、各サブシステム間の「利害的關係」が $+ .50$ 以上の値を示し、父親の母親に対する「勢力」が $- .50$ 以下の値を示している。よって、「3 者高利害・父親低勢力型」と命名した ($n=62$)。第 3 クラスタの特徴として、夫婦間、ならびに父子間の「結びつき」が $- .50$ 以下、母子間の「結びつき」もやや低く、「利害的關係」が $+ .50$ 以上、「勢力」では $+ .50$ 以上、さらに各サブシステム間の「開放性」がほぼ $- .50$ を示している。よって「父親高勢力・3 者低結びつき・閉鎖型」と命名した ($n=30$)。

次に、家族構造のクラスタ（男女共に 3 クラスタ）を独立変数、「夫婦間 Co」、「父子間 Co」、「母子間 Co」、「父親からの肯定的な媒介伝達」（以下、「父親からの媒介」と記述）、「父親についての肯定的な媒介伝達」（以下、「父親についての媒介」と記述）、「家族内ストレス」の 3 下位尺度（「不和」・「過干渉」・「無理解」）の平均得点を従属変数とした一元配置の分散分析を男女別に行った。分散分析の結果を **Table 4-10**, **Table 4-11** 示す。

Table 4-10 男性クラスタにおける率直なコミュニケーションと媒介伝達, 家族内ストレス-
の下位尺度得点の分散分析($n=104$)

	①夫婦高利害・3者低 結びつき・閉鎖型		②親子高利害・父親低 勢力・開放型		③3者高結びつき・低 利害・勢力均衡型		<i>F</i>	多重比較
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>		
率直なCo								
夫婦間 Co	2.71	0.44	2.78	0.67	3.45	0.68	18.00 (2, 101)***	① = ② < ③
父子間 Co	2.32	0.62	2.33	0.63	2.91	0.69	9.57 (2, 101)***	① = ② < ③
母子間 Co	2.81	0.67	2.71	0.60	3.06	0.75	2.18 (2, 101)	<i>n.s.</i>
媒介伝達								
父親からの	2.05	0.71	2.10	0.55	2.50	0.99	3.55 (2, 101)*	① < ③
父親についての	2.15	0.91	2.35	0.93	2.97	0.98	7.92 (2, 101)***	① < ② < ③
家族内ストレス								
家族の不和	2.81	0.85	2.18	0.81	2.18	0.67	8.24 (2, 101)***	② = ③ < ①
親の過干渉	2.49	1.04	2.13	0.62	2.31	1.01	1.07 (2, 101)	<i>n.s.</i>
親の無理解	2.49	1.02	1.73	0.65	1.93	0.75	7.08 (2, 101)***	② = ③ < ①

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$.

「Co」は率直なコミュニケーション, 「父親からの」は父親からの肯定的な媒介伝達, 「父親についての」は父親についての肯定的な媒介伝達を示す。

Table 4-11 女性のクラスタにおける率直なコミュニケーションと媒介伝達, 家族内ストレス-
の下位尺度得点の分散分析($n=179$)

	①夫婦高結びつき・3 者低利害・勢力均衡型		②3者高利害・父親低 勢力型		③父親高勢力・3者低 結びつき・閉鎖型		<i>F</i>	多重比較
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>		
率直なCo								
夫婦間 Co	3.47	0.83	3.01	0.83	2.55	0.92	14.65 (2, 176)***	③ < ② < ①
父子間 Co	2.64	0.78	2.30	0.80	2.27	0.74	4.57 (2, 176)**	② = ③ < ①
母子間 Co	3.50	0.69	3.40	0.67	3.11	0.71	3.47 (2, 176)*	③ < ①
媒介伝達								
父親からの	2.52	0.87	2.17	0.85	2.06	0.88	4.77 (2, 176)*	② = ③ < ①
父親についての	3.24	1.11	2.39	1.02	1.92	0.93	22.18 (2, 176)***	② = ③ < ①
家族内ストレス								
家族の不和	2.41	0.70	2.76	0.76	3.01	0.67	9.44 (2, 176)***	① < ② = ③
親の過干渉	3.01	1.25	3.06	1.14	2.81	1.09	0.47 (2, 176)	<i>n.s.</i>
親の無理解	2.38	1.00	2.66	1.09	2.79	1.15	2.20 (2, 176)	<i>n.s.</i>

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$.

「Co」は率直なコミュニケーション, 「父親からの」は父親からの肯定的な媒介伝達, 「父親についての」は父親についての肯定的な媒介伝達を示す。

その結果、男性においては「夫婦間 Co」得点、「父子間 Co」得点、「父親からの媒介」得点、「父親についての媒介」得点、「家族の不和」得点、「親の無理解」得点に有意差（0.1～5%水準）が認められた。Tukey の HSD 法による多重比較（5%水準）の結果、「夫婦間 Co」、および「父子間 Co」、「父親からの媒介」、「父親についての媒介」得点は、「3者高結びつき・低利害・勢力均衡型」が他の構造に比べ最も高かった。さらに、「家族の不和」、「親の無理解」得点においては「夫婦高利害・3者低結びつき・閉鎖型」が他の構造に比べ最も高く、「母子間 Co」と「親の過干渉」得点には有意差が認められなかった。

女性においては、「夫婦間 Co」得点、「父子間 Co」得点、「母子間 Co」得点、「父親からの媒介」得点、「父親についての媒介」得点、「家族の不和」得点に有意差（0.1%～5%水準）が認められた。Tukey の HSD 法による多重比較（5%水準）の結果、「夫婦間 Co」得点は、「夫婦高結びつき・3者低利害・勢力均衡型」が最も高く、次いで「3者高利害・父親低勢力型」、次いで「父親高勢力・3者低結びつき・閉鎖型」の順であった。「父子間 Co」、「母子間 Co」、各媒介伝達得点は、「夫婦高結びつき・3者低利害・勢力均衡型」が他の構造に比べ最も高かった。「家族の不和」得点は、他の構造に比べ「夫婦高結びつき・3者低利害・勢力均衡型」が最も低かった。「親の過干渉」と「親の無理解」得点には群間差が認められなかった。

3. 家族構造とコミュニケーションとの関連

次に、家族構造とコミュニケーションとの関連を検討するため、夫婦間、父子間、母子間における家族構造測定尺度の下位尺度得点（4因子）と各率直なコミュニケーション得点、各媒介伝達得点との相関（Pearson）を検討した。さらに、各コミュニケーション得点と各媒介伝達の得点を独立変数とし、各関係における家族構造測定尺度の下位尺度得点（4因子）を従属

変数とした重回帰分析（ステップワイズ法）を行った。いずれも男女別に分析を行なった。相関分析と重回帰分析の結果を **Table 4-12**, **Table 4-13** に示す¹³。

Table 4-12 男性における率直なコミュニケーション，媒介伝達から家族構造へのステップワイズ重回帰分析結果 ($n=104$)

説明変数／ 基準変数	結びつき			利害的關係			開放性		
	夫婦間	父子間	母子間	夫婦間	父子間	母子間	夫婦間	父子間	母子間
率直なCo									
夫婦間Co	.49*** (.51***)	.20* (.42***)	.16 (.32***)	-.48*** (-.48***)	-.32*** (-.32***)	-.07 (-.21*)	.12 (.32***)	.11 (.21*)	-.12 (.07)
父子間Co	.11 (.33***)	.58*** (.60***)	.12 (.28***)	.00 (-.25**)	-.21 (-.32***)	-.19 (-.31***)	.17 (.33***)	.26** (.26**)	.01 (.18)
母子間Co	-.28** (-.03)	-.22** (.07)	.49*** (.49***)	.16 (-.03)	-.05 (-.15)	-.40*** (-.40***)	-.12 (.04)	.04 (.13)	.26** (.33***)
媒介伝達									
父親からの	-.13 (.31***)	-.09 (.28***)	.03 (.29***)	-.02 (-.33***)	.13 (-.06)	-.01 (-.13)	.10 (.31***)	.04 (.14)	.22* (.30***)
父親についての	.20* (.39***)	.01 (.34***)	.16 (.31***)	-.18 (-.39***)	.13 (-.10)	.05 (-.09)	.41*** (.41***)	.05 (.17)	-.02 (.21*)
<i>F</i>	17.05***	24.10***	32.38***	29.84***	11.45***	19.94***	20.83***	7.55**	8.96***
(<i>df</i>)	(2, 101)	(3, 100)	(1, 102)	(1, 102)	(1, 102)	(1, 102)	(1, 102)	(1, 102)	(2, 101)
<i>R</i>	.58	.65	.49	.48	.32	.40	.41	.26	.39
Adj, R^2	.32	.40	.23	.22	.09	.16	.16	.06	.13

各説明変数上列は標準回帰係数 (β)，下列カッコ内はPearson相関係数。 * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$.

「Co」は率直なコミュニケーション，「父親からの」は父親からの肯定的な媒介伝達，「父親についての」は父親についての肯定的な媒介伝達を示す。

¹³ 勢力と各コミュニケーション間には相関關係が認められなかったため省略した。

Table 4-13 女性における率直なコミュニケーション，媒介伝達から家族構造への
ステップワイズ重回帰分析結果 ($n=179$)

説明変数／ 基準変数	結びつき			利害的關係			開放性		
	夫婦間	父子間	母子間	夫婦間	父子間	母子間	夫婦間	父子間	母子間
率直なCo									
夫婦間Co	.39*** (.59***)	-.10 (.27***)	-.09 (.16*)	-.12 (-.30***)	-.01 (-.19**)	.03 (-.11)	.60*** (.60***)	.04 (.20**)	.07 (.24***)
父子間Co	-.09 (.20***)	.49*** (.56***)	-.04 (.16*)	-.11 (-.22***)	-.28*** (-.31***)	.10 (-.02)	-.06 (0.21**)	.39*** (.38***)	.02 (.17*)
母子間Co	-.10 (.26***)	-.03 (.25***)	.65*** (.55***)	-.01 (-.15*)	.01 (-.12)	-.26*** (-.26***)	.01 (.31***)	.05 (.20**)	.38*** (.38***)
媒介伝達									
父親からの	-.12 (.31***)	-.09 (.21**)	-.20** (.13)	-.02 (-.21**)	.17* (-.06)	-.09 (-.20**)	.01 (.32**)	-.02 (.11)	.02 (.21***)
父親についての	.34*** (.57***)	.20** (.36***)	.07 (.19**)	-.38*** (-.38***)	-.27** (-.27***)	-.09 (-.18*)	.10 (.41***)	.07 (.19**)	.09 (.22***)
<i>F</i>	64.37***	46.70***	43.32***	29.25***	10.29***	12.80***	97.66***	30.76***	30.08***
(<i>df</i>)	(2, 176)	(2, 176)	(2, 176)	(1, 177)	(3, 175)	(1, 177)	(1, 177)	(1, 177)	(1, 177)
<i>R</i>	.65	.59	.57	.38	.39	.26	.60	.39	.38
Adj, <i>R</i> ²	.42	.34	.32	.14	.14	.06	.35	.14	.14

各説明変数上列は標準回帰係数 (β)，下列カッコ内はPearson相関係数。* $p < .05$ ，** $p < .01$ ，*** $p < .001$ 。

「Co」は率直なコミュニケーション，「父親からの」は父親からの肯定的な媒介伝達，「父親についての」は父親についての肯定的な媒介伝達を示す。

男女に共通して，家族構造における「結びつき」，「利害的關係」，「開放性」の重回帰式が有意であり，各關係の率直なコミュニケーション，ならびに各媒介伝達の関連が示された。

主な結果を男女別にまとめると，男性の「結びつき」では，各關係の「率直なコミュニケーション」は，家族構造の各下位尺度の「結びつき」に対して正の関連 ($\beta = .49 \sim .58$) を示し，「父親についての媒介」は夫婦間の「結びつき」に対して正の関連 ($\beta = .20$) を示した。さらに，「母子間 Co」は夫婦間，および父子間の「結びつき」に負の関連 ($\beta = -.22, -.28$) を示し

ていた。「利害的關係」では、「夫婦間 Co」は夫婦間、および父子間の「利害的關係」に対して負の関連 ($\beta = -.48, -.32$) を示し、「母子間 Co」は母子間の「利害的關係」に対して負の関連 ($\beta = -.40$) を示していた。

女性では、各関係における「率直なコミュニケーション」は家族構造における「結びつき」と「開放性」の各下位構造に対応するように正の関連 ($\beta = .38 \sim .65$) を示し、「父子間 Co」、および「母子間 Co」は父子間、および母子間の「利害的關係」と負の関連 ($\beta = -.28, -.26$) を示していた。「父親からの媒介」は母子間の「結びつき」に対して負の関連 ($\beta = -.20$) を示し、父子間の「利害的關係」に対して正の関連 ($\beta = .17$) を示していた。「父親についての媒介」は夫婦間、および父子間の「結びつき」に対して正の関連 ($\beta = .34, .20$) を示し、夫婦間、および父子間の「利害的關係」に対して負の関連 ($\beta = -.38, -.27$) を示していた。

4-4 考 察

本研究は青年期の子どもの視点から、家族構造と家族内のコミュニケーション、ならびに青年の認知する家族内ストレスとの関連について性差を踏まえ探索的に検討することを目的とした。

1. 家族構造の類型とコミュニケーション、および家族内ストレスの差異の検討

各変数間に性差が認められたため男女別にクラスタ分析を用いて家族構造を類型し、成員間のコミュニケーション、ならびに青年の認知する家族内ストレスの類型による差異を検討した。その結果、男女共に3つのクラスタに類型され、男性では「3者高結びつき・低利害・勢力均衡型」の構造が他の2つ

の構造に比べ、各コミュニケーションが相対的に多かった。しかし、「家族の不和」、ならびに「親の無理解」ストレスについては、「親子高利害・父親低勢力・開放型」との差異が認められなかった。女性では、「夫婦高結びつき・3者低利害・勢力均衡型」が他の2つの構造に比べ、各コミュニケーションが多く、「家族の不和」ストレスが最も低いことが示された。男女のストレスが低い構造の特徴の類似点をみると、夫婦間、そして父子間の「結びつき」の強さを基盤として、「勢力」が3者で均衡している組合せが示された。一方で、男女共にストレスが高い構造の特徴は、「結びつき」の弱さを基盤として、極端な夫婦間の利害的関係の高さと閉鎖的、開放的な組み合わせ、そして父親の極端な勢力の強さや弱さとの組み合わせが示された。

以上のことから、青年の認知するストレスが低い家族構造、つまり青年の情緒的安定に寄与する構造は、夫婦間のみならず父子間が結びつきという親密なつながりで結ばれた関係を基盤として、各関係で率直なコミュニケーションを介した相互交流が行なわれていることが分かる。加えて勢力に着目してみると、3者で均衡している構造、つまり親子のどちらかが家族内で一方的に強い影響力を持つといった構造ではなく、3者それぞれが互いに同程度の影響力を持つといった、いわば対等な関係を意味しているものと考えられる。この3者が対等な勢力構造を、結びつきという関係を踏まえて解釈すると、親のみならず青年にも家族内の事柄に対して影響を与え、決定することができるといった、青年の自己決定を促し尊重するような柔軟な構造形態を示しているものと考えられる。草田・山田（1998）は、家族が健全に機能するためには父親が子どもとの関係のみならず、夫婦の絆を強めお互いが信頼できる関係の重要性を指摘している。本研究の結果も、青年の情緒的安定という側面において、夫婦間、ならびに父子間の親密なつながりがとりわけ

重要であり、父親が母親や青年と情緒的なつながりを築くことが、家族という集団全体のつながりに密接に関係すると考えられる。

しかし、男性においては「3者高結びつき・低利害・勢力均衡型」と「親子高利害・父親低勢力・開放型」との間に家族内ストレスの差異は見いだされなかった。後者の特徴をみると、夫婦間や父子間が利害的な関係性を示し、父親の勢力が相対的に低く、開放的な構造を示している。よって、家族成員が利害的な目的により、その形態が保たれ、青年が親からの統制を受けない、いわば青年主導型の構造と解釈できる。そのため、青年が家族に関わるか否かを選択できる自由を有しているため、家族内ストレスの認知が低いと考えられる。

さらに、男女共に、「親の過干渉」ストレス、女性においては「親の無理解」ストレスと家族構造の類型に差異が示されなかった。落合・佐藤（1996）は大学生の時期では子どもを信頼する親子関係が多くなると指摘している。本研究でも同様に、青年期の親子間では、ある程度分離が促進され、親の過干渉自体が低い可能性が推察される。さらに男性より女性の方が親の過干渉や無理解に関するストレスが高いという結果から、家族構造の類型に関わらず女性は親の過干渉や無理解に関するストレスを少なからず感じていることも推察されよう。

2. 家族構造とコミュニケーションとの関連

次に、各関係における率直なコミュニケーション、ならびに媒介伝達から各関係の家族構造への男女別の重回帰分析の結果から、男女共に家族内の率直なコミュニケーションの頻度の高さは、各サブシステムの「結びつき」を強め、「利害的關係」を弱めることが示された。つまり、率直なコミュニケーションは、家族成員間で利害のような道具的關係のためでなく、つながり

といった情緒的な関係のために使われている、あるいは利害的に結ばれた関係では、率直なコミュニケーションが少なく、何か重要な用件や当該の問題に関するコミュニケーションが多く生起している可能性が示唆される。つまり、コミュニケーションという情報により各関係の結びつきという関係が構成されると考えられる。この結果から、若島他（2000）のいうサブシステム間の境界は情報が回帰する速度の相違によって規定されるとする知見を検討すると、結びつきという関係によってサブシステム間の境界を規定しうると考えることができる。

一方、媒介伝達においては、男女に共通して母親を介した父親についての肯定的な媒介伝達の頻度の高さは、夫婦間の「結びつき」を高めることが示された。さらに女性においては、父親についての肯定的な媒介伝達の頻度の高さは、夫婦間、ならびに父子間の「結びつき」を強めていることが示された。この結果は、とりわけ女性において母親から青年に父親についての肯定的な情報を伝達することが、夫婦間の結びつきのみならず、父子間の結びつきも強めるといえよう。

次に、各関係の「結びつき」とコミュニケーションとの関連をみると、男性では、夫婦間の「結びつき」を最も説明する変数は「夫婦間 Co」であり、次いで「母子間 Co」、「父親についての媒介伝達」の順である。一方、父子間の「結びつき」では3者関係の率直なコミュニケーション全体が説明し、母子間の「結びつき」では、母子間 Co のみが説明しており、各関係における「結びつき」を説明する変数に相違がみられる。また、女性では母子間とその他の関係での「結びつき」を説明するコミュニケーションの説明率に差がみられる。

この違いについて、第一に家族内のコミュニケーションは母子関係を基盤として生起していることが考えられる。つまり母子間は他の関係に比べ相対的につながりが強いため、コミュニケーションが生起し易く、直接的に結びつきに関連してくる。

よって、母子間のコミュニケーションを相対的に減らすことが、夫婦間や父子間のコミュニケーションを増やし、各関係の結びつきに関連すると考えることができる。

第二に、夫婦間や父子間の「結びつき」は、男女共に同一ペア間の「率直なコミュニケーション」が最も説明し、他の関係の率直なコミュニケーションや媒介伝達はそれに比べ「結びつき」との関連が低い。このことは、媒介伝達や同一ペア以外の関係で生起するコミュニケーションは、率直なコミュニケーションの媒介的役割を担う性質があると考えられる。つまり、男性の夫婦間の結びつきとコミュニケーションとの関連が示すように、母子間のコミュニケーションを減らすことや媒介伝達がなされることが夫婦間の率直なコミュニケーションを促進させるためのいわば架け橋のように機能していると考えられる。

さらに男女の差異の検討から、男性の場合とりわけ夫婦間や母子間の「率直なコミュニケーション」は様々なサブシステム間の「結びつき」に関連している。そのため、結びつきを高めるためには、3者間での均等な相互作用が必要といえる。一方、女性では、母親から、父親からの肯定的な情報を青年に媒介伝達することは、父子間の「利害的關係」をわずかに高めるが母子間の「結びつき」を弱め、父親についての肯定的な情報を青年に媒介伝達することは、夫婦間や父子間の「結びつき」を強め利害的關係を低下させる。この結果は、女性は男性に比べ母子間の結びつきが強く直接の相互交流が多いため、母親からの情報伝達による影響を受けやすいと考えられる。これまで母子密着（例えば、飛田・狩谷，1992）の問題が指摘されてきたが、母子間の結びつきが強いという関係のみに焦点化するのではなく、3者間の均等な相互作用にも着目する必要がある。さらに、母子間で伝達される父親の肯定的な情報が、夫婦間や父子間といった他の関係の結びつきを強め、さらには母子間自体の結びつきを適度に調整しうる一情報伝達の回路として機能している

と考えられる。

3. 第 5 章 (【研究Ⅲ】) への示唆

本章 (【研究Ⅱ】) では青年の視点から夫婦間, 父子間, 母子間という 3 者間の家族構造を「結びつき」, 「勢力」, 「利害的關係」, 「開放性」という概念から類型し, 男女共に概ね類似した構造が成員間の率直なコミュニケーション, ならびに青年の認知する家族内ストレスと関連することが示された。すなわち, 成員間の率直なコミュニケーションの頻度の高さや青年の家族内ストレスの低さと関連する構造は, 女性においては母子間の結びつきが男性に比べやや低いものの, 概ね各成員間の結びつきの強さを基盤として, 勢力が 3 者で均衡している組合せであった。一方で男女共に率直なコミュニケーションの頻度の低さ, ならびにストレスが高い構造の特徴は, 結びつきの弱さを基盤として, 極端な夫婦間の利害的關係の高さと閉鎖的, 開放的な組み合わせ, そして父親の極端な勢力の強さや弱さの組み合わせであった。この結果から, 家族構造を構成するサブシステム間の関係性を測定する上で, 「結びつき」と「勢力」の 2 因子は家族構造の主要な因子と考えられる。この 2 因子は, 明確な定義の差はあれど, 家族構造の査定において多くの知見で支持され (Nichols, 1984; Wood, 1985; Olson, 1991; Gehring, 1993, 八田 (訳), 1997; 亀口, 2003ab) ている。また, 野口他 (2009) による妥当性の検討によれば, 複数項目で測定される「結びつき」ならびに「勢力」と ICHIGEKI における単一項目との相関は, 「結びつき」で $r = .70$, 「勢力」で $r = .52$ という高い関連を示し, 単一項目による一定の妥当性を認めている。さらに, 第 3 章においても, この 2 因子は, 4 因子構造の中で信頼性が高いことが示されている (【研究Ⅰ】)。よって, 煩雑性の観点から, 「結びつき」と「勢力」を家族構造の査定における主要因子と捉え, 第 5 章 (【研究Ⅲ】) 以降, この 2 因子

を使用していく。

加えて、各関係の率直なコミュニケーションは、同一ペアの結びつきとの関連が高く、家族成員間で利害のような道具的關係のためでなく、つながりといった情緒的關係のために使用されることが示唆された。このことは、勢力とコミュニケーションについてはさらなる検討の余地を有するものの、結びつきという関係性を表す因子と率直なコミュニケーションには、高い関連があることを意味する。したがって、関係性を捉えるための研究手法として、具体的で即時的に変動するコミュニケーションを測定する項目に比べ、より抽象度が高く長期的で安定した性質を有する関係性の概念を測定する項目を用いて家族構造を捉えることにより、安定した結果を導けることが想定される。

第 5 章

【研究Ⅲ】 青年のストレッサーとストレス反応に関連する家族構造の検討

第 5 章では【研究Ⅲ】として、青年の視点から家族構造を類型し、青年のストレッサーとストレス反応との関連を検討する。夫婦間、父子間、母子間それぞれの関係を測定する上で、主要な因子と考えられる「結びつき」と「勢力」の 2 因子に限定し、それら 2 因子で測定した各関係の組み合わせを家族構造として類型する。また、ストレッサーについては、家族内のみならず、家族外で青年が経験するストレッサーについても検討していく。なお、本研究における本章の位置づけは、青年期の家族構造を、青年が経験する一般的なストレスにより検討することである。

5-1 目 的

本章（【研究Ⅲ】）では，青年の認知する家族内外のストレスとストレス反応に関連する家族構造を青年の視点から検討することを目的とする。第4章（【研究Ⅱ】）では，ストレスの低い家族構造が示されたものの，それは青年の家族内のストレスの認知にとどまる検討であった。よって，個人のストレスモデルの主流となる，ストレスとストレス反応の媒介要因としての認知や対処（Lazarus & Folkman, 1984, 本明他（訳）, 1991），さらに，ソーシャル・サポートとしての家族関係（例えば，Cohen & Wills, 1985; 菊島, 1999; 皆川他, 2004; 岡安他, 1993; Roosa *et al.*, 1996; 嶋, 1992）の知見を踏まえ，青年のストレスの認知とストレス反応の媒介要因として，家族構造の主効果や緩衝効果について検討する。その際，青年のストレスと関連する家族関係の重要性（例えば，皆川他, 2001; 皆川他, 2003ab）を基盤としつつ，青年の認知するストレスを家族関係に起因するストレスと家族関係以外に起因する友人関係や学業に関するストレスとに分類し包括的に捉える。加えて，青年の家族構造については，その関係が良いか悪いか，サポートが高いか低いかという一元的な視点に基づくものではなく，第4章（【研究Ⅱ】）において検討した「結びつき」と「勢力」という2因子に着目し，青年の認知する，夫婦間，父子間，母子間といった諸関係の組み合わせから捉えていく。

5-2 方 法

1. 調査対象者と調査時期

東北，ならびに東海地方の4つの高校の生徒507名を対象に質問紙による調査を行った。質問紙の配布と回収方法については，授業，またはホームルームの一部の時間を利用し，生徒に

一斉配布を行った。生徒にはクラス担任より任意による調査であること、調査は成績に関連しないこと、途中で記入を止めても何ら不利益をもたらさないことを説明した上で、同意した生徒のみ回答、一斉に回収を行なった。これらの回答から質問紙の不備、ならびにサンプル数の制限から母子、父子家庭の回答を除外した計 441 名分のデータを分析の対象とした。対象者の内訳は男性 187 名（平均年齢 16.2 歳、 $SD=.71$ ）、女性 254 名（平均年齢 16.2 歳、 $SD=.70$ ）、全体 441 名（平均年齢 16.2 歳、 $SD=.71$ ）であった。

調査時期は 2012 年 1 月初旬から同年 3 月下旬まで実施した。

2. 質問紙の構成

1) 基礎情報

対象者の年齢、性別、生活形態（家族と同居・一人暮らし・その他）の記入を求めた。

2) 家族構造の測定

青年の認知する家族構造の測定には、第 3 章（【研究 I】）、ならびに第 4 章（【研究 II】）で検討した「結びつき」、「利害的關係」、「勢力」、「開放性」という各関係を把握する 4 因子構造のうち、「結びつき」と「勢力」の 2 因子に限定して用いた。この 2 因子を用いるにあたり、家族内の各 2 者関係を効率よく包括的に把握できる Inventory for Character of Intra-Inter Generation in Kinship (ICHIGEKI; 狐塚他, 2010; 野口他, 2009) を使用した。ICHIGEKI は、高次のシステム研究を行う目的で開発され、調査対象者に負担が少なく各関係（夫婦間、父子間、母子間）を単一項目で捉えることが可能である。「結びつき」については、お互いの仲の良さや親密さ、連帯感の強さを表すことを示し、夫婦間、父子間、母子間において「全くそう思わない」～「非常にそう思う」までの 6 件法により回答を求めた。「勢力」については、誰の誰に対する勢力かを明確にす

るため、夫婦間、父子間、母子間の双方向（計 6 方向）から査定を行った。それぞれの影響力や発言力、決定力の強さであることを示し、「全くそう思わない」～「非常にそう思う」までの 6 件法により回答を求めた。「結びつき」は得点が高くなるほど各関係における「結びつき」が強いことを表し、「勢力」においても得点が高くなるほど、各関係における個人の相対的な「勢力」が強いことを意味する。

なお、母子や父子のみの家族構成も想定できるため、その場合でも回答できるよう、「ご両親のどちらかがいらっしゃらない場合には、あなたと父親、もしくはあなたと母親との関係でお答え下さい」という教示文を加えた。

3) 家族内外で認知する青年のストレスターの測定

青年の認知するストレスターの測定には、菊島（1999, 2004）の児童青年期用ストレスター尺度（Stressor Scale for Children and Adolescents: SSCA）を用いた。SSCA は児童や青年の日常生活全般にわたるストレスターを測定する目的で開発され、個人のストレスターの経験頻度と個人的体験である不快感からストレスターの個人に対する衝撃度を測定できる。本研究においても SSCA は、青年期のストレスターを測定するための尺度として妥当であると判断し採用した。SSCA は、「親に関するストレス」9 項目、「友人に関するストレス」11 項目、「集団生活および日常生活に関するストレス」10 項目、「教師に関するストレス」5 項目、「学業に関するストレス」全 5 項目の全 40 項目で構成されている。

各項目は、「親が自分の要求を聞き入れてくれなかった」、「授業の内容に興味を持てなかった」、「何か気の合わない先生がいた」、「友人に誤解された」といった内容で構成されている。得点化は菊島（1999）の方法にならい、経験頻度得点については「なかった」を 0 点、「時々あった」を 1 点、「よくあった」を 2 点とし、不快感得点については、「全然気にならない」を 0 点、

「気にならない」を 1 点, 「あまり気にならない」を 2 点, 「少し嫌だ」を 3 点, 「嫌だ」を 4 点, 「非常に嫌だ」を 5 点として得点化を行い, 経験頻度得点と不快度得点を掛け合わせた点数を各項目の得点とした。なお, 得点が高くなるほど青年が経験するストレスが高いことを意味する。

4) 青年のストレス反応の測定

青年のストレス反応を測定するため, 尾関他 (1991) の大学生用ストレス自己評価尺度 (Stress Self-Rating Scale: SSRS) のうち, ストレス反応尺度を用いた。尾関 (2004) によれば, 本尺度は高校生や大学生の青年を適用対象とし, 抑うつ, 不安, 怒りの 3 つの下位尺度からなる「情動反応」15 項目, 情緒的反応, 引きこもりの 2 つの下位尺度からなる「認知・行動的反応」10 項目, 身体的疲労感, 自律神経系の活動性亢進の 2 つの下位尺度からなる「身体的反応」10 項目の計 35 項目により構成される。各項目は, 「悲しい気持ちだ」, 「頭の回転が鈍く, 考えがまとまらない」, 「体が疲れやすい」といった内容で構成される。項目内容から青年のストレス反応を測定する項目として妥当であると判断し採用した¹⁴。得点化においては, 「あてはまらない」を 0 点, 「ややあてはまる」を 1 点, 「かなりあてはまる」を 2 点, 「非常にあてはまる」を 3 点とし, 得点が高いほど青年のストレス反応が高いことを意味する。

5-3 結 果

1. 各測定尺度の得点化

はじめに, ICHIGEKI により査定した夫婦間, 父子間, 母子間それぞれの「結びつき」, ならびに「勢力」得点の記述統計量

¹⁴ 全 35 項目のうち「憤まんがつのる」という項目内容は, 意味理解の観点から「不満がつのる」に改定して用いた。

を算出し、得点化を行った¹⁵。

次に、SSCA（40項目）を先に示した換算方法により得点化を行った。まず、各項目の分布の偏りを検討したところ、大幅なフロア効果がみられた20項目を除外した。さらに、ストレスの種類を家族関係によるものと家族関係以外の学校や日常生活で経験するものとを分類するため、SSCAの下位尺度である、「親に関するストレス」に該当する項目を「家族内ストレス」、それ以外の項目を「日常生活ストレス」とした。「家族内ストレス」、ならびに「日常生活ストレス」に分類された各項目に対し、IT相関ならびに信頼性係数の観点から項目を選別し、最終的に「家族内ストレス」として3項目、「日常生活ストレス」として13項目を採用した。信頼性の基準として α 係数を算出したところ、「家族内ストレス」は3項目全体で $\alpha=.79$ 、「日常生活ストレス」では13項目全体で $\alpha=.77$ という、いずれもある程度高い信頼性が確認された。以下、「家族内ストレス」における3項目の総得点を「家族内ストレス」得点、「日常生活ストレス」における13項目の総得点を「日常生活ストレス」得点とする。「家族内ストレス」の項目内容は、「親が自分の要求を聞き入れてくれなかった」、「親と意見が合わなかった」、「親に叱られた」という項目で構成されている（Table 5-1）。「日常生活ストレス」の項目内容は、「成績が下がった」、「朝起きてからの登校の準備が面倒だった」、「自分の将来のことについて悩んだ」等、青年が日常で経験する学業や学校生活、自分自身の進路等に関する項目で構成されている（Table 5-2）。

¹⁵ 第4章（【研究Ⅱ】）の得点化にならない、ICHIGEKIの下位尺度である勢力得点は、父から母への得点から、母親から父親への得点を引いた値を夫婦間の勢力得点とした。また父親（母親）から青年への得点から、青年から父親（母親）への得点を引いた値を、それぞれ父子間、母子間の勢力得点とした。夫婦間では、得点が高いほど父親の勢力が強く、父子間・母子間では、勢力得点が高いほど父親（母親）の勢力が強いことを意味する。

Table 5-1 家族内ストレッサー測定項目

1 親が自分の要求を聞き入れてくれなかった
2 親と意見が合わなかった
3 親に叱られた
α 係数 .79

Table 5-2 日常生活ストレッサー測定項目

1 成績が下がった
2 テスト前の勉強をしなけりばならなかった
3 授業の内容がわからなかった
4 授業の内容に興味を持てなかった
5 睡眠食事などの生活が不規則になった
6 朝起きてからの登校の準備が面倒だった
7 自分の将来のことについて悩んだ
8 友達に嫌な思いをさせてしまった
9 自分自身の性格について悩んだ
10 友達に誤解された
11 何か気の合わない先生がいた
12 学校で気の合わない人達と一緒に行動しなけりばならなかった
13 先生に叱られた
α 係数 .77

最後に、SSRSにおいて測定したストレス反応の得点化を行うため、SSRSの35項目における分布の偏りを検討した。その結果、大幅なフロア効果がみられた22項目を除外した。残りの13項目に対して、項目数ならびに項目内容から単一因子構造を仮定し、IT相関ならびに信頼性係数の観点から1項目を除外した12項目を最終的に選定した。信頼性の基準として α 係数を算出したところ、12項目全体で $\alpha=.91$ であり、高い信頼性が確認された。以下、ストレス反応の12項目の総得点を「ス

「ストレス反応」得点とする。「ストレス反応」の項目内容は、「不安を感じる」、「気分が落ち込み、沈む」、「体がだるい」等の項目で構成されており、SSRSと照らし合わせると、主に「情動反応」の因子に分類される項目内容となっている（Table 5-3）。

以上、得点化を行った ICHIGEKI の下位尺度得点、「家族内ストレス」得点、「日常生活ストレス」得点、「ストレス反応」得点の記述統計量を Table 5-4 に示す。なお、本研究の前提となるストレスとストレス反応の概念的妥当性を検討するため、「家族内ストレス」得点、「日常生活ストレス」得点、「ストレス反応」得点の相関係数（spearman の順位相関係数）を算出した。Table 5-5 に示すように、「家族内ストレス」得点と「ストレス反応」得点（.25）、「日常生活ストレス」得点と「ストレス反応」得点（.52）のいずれも正の相関を示し、ストレスが高くなるとストレス反応も高くなるという関連が確認できた。

Table 5-3 ストレス反応の測定項目

1	不安を感じる
2	さみしい気持ちだ
3	気分が落ち込み、沈む
4	悲しい気持ちだ
5	不満がつのる
6	重苦しい圧迫感を感じる
7	不機嫌で、怒りっぽい
8	いらいらする
9	体が疲れやすい
10	体がだるい
11	話しや行動にまとまりがない
12	頭の回転が鈍く、考えがまとまらない

α係数 .91

Table 5-4 ICHIGEKIの下位尺度得点, 家族内ストレス得点, 日常生活ストレス得点, ストレス反応得点の記述統計量 (N=441)

	<i>M</i>	<i>SD</i>
ICHIGEKI		
結びつき		
父母間	4.23	1.38
父子間	4.06	1.32
母子間	4.68	1.07
勢力		
父親から母親へ	3.92	1.30
父親から青年へ	3.99	1.28
母親から父親へ	3.83	1.22
母親から青年へ	4.27	1.13
青年から父親へ	3.54	1.23
青年から母親へ	3.83	1.13
家族内ストレス	9.64	7.29
日常生活ストレス	48.95	20.70
ストレス反応	10.64	8.58

Table 5-5 家族内ストレス, 日常生活ストレス, ストレス反応の相関係数 (N=441)

	家族内ストレス	日常生活ストレス
ストレス反応	.25***	.52***

Spearmanの順位相関係数. *** $p < .001$.

2. ストレッサーとストレス反応に関連する家族構造の検討

青年の家族内外のストレスとストレス反応に関連する家族構造の検討を行なうため, 全サンプルにおける家族構造の類型を行なった。なお, 家族構造の類型は, 第4章の【研究Ⅱ】において男女共に類似した家族構造を示していたこと, さらに青年のストレスとストレス反応に関連する家族構造を検討するという目的に沿い, 性別による差異の検討は行わず実施した。類型には, 夫婦間, 父子間, 母子間における ICHIGEKI の下位尺度得点を Z 値に変換し, Q モードによるクラスタ分析を

実施した。クラスタ数の検討には，クラスタ数を 2～5 まで変化させ，各クラスタに含まれる被験者数や各クラスタの解釈可能性から検討し，解釈可能な 3 クラスタを採択した。クラスタ分析の結果を **Figure 5-1** に示す。

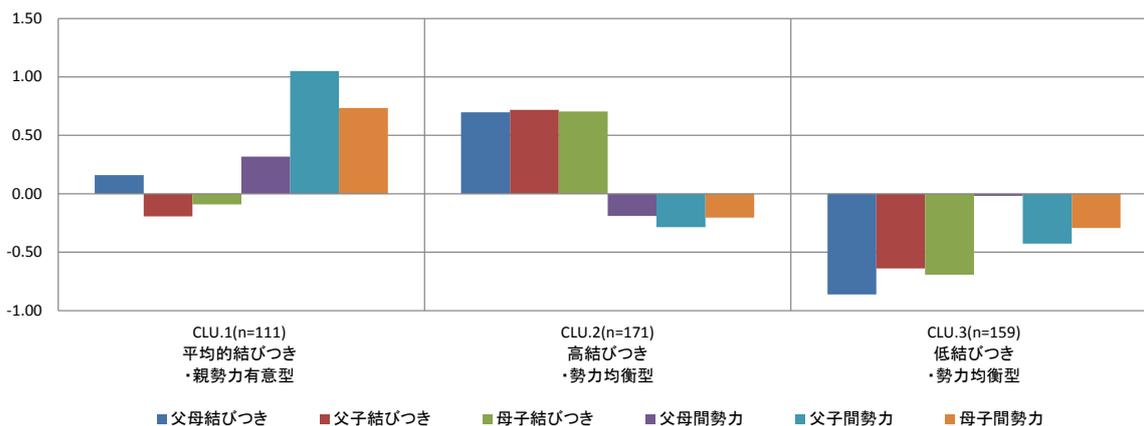


Figure 5-1 3クラスタの家族構造プロフィール

第 1 クラスタは男性 45 名，女性 66 名，計 111 名（25%）が位置し，特徴として各関係の「結びつき」が 3 者間いずれも .00 に近い値を示し，「勢力」においては父子間で +1.0 以上，母子間で +.50 以上の値を示し，親の勢力が青年よりも優位であることがわかる。よって，第 1 クラスタを「平均的結びつき・親勢力優位型」と命名した。第 2 クラスタは男性 63 名，女性 108 名，計 171 名（39%）が位置し，特徴として各関係間の「結びつき」が +.50 以上を示し，「勢力」においては +.50 から -.50 の間をとり，3 者がほぼ均衡した値を示している。よって，第 2 クラスタを「高結びつき・勢力均衡型」と命名した。第 3 クラスタは男性 79 名，女性 80 名，計 159 名（36%）が位置し，特徴として，いずれの関係も「結びつき」が -.50 以下の値を示し，「勢力」ではいずれの関係においても .00 から -.50 の間

をとり，3者がほぼ均衡した値を示している。よって，第3クラスタを「低結びつき・勢力均衡型」と命名した。大まかにみると，第2クラスタは「結びつき」の強さに伴い，「勢力」が均衡した構造であるのに対し，その他のクラスタでは平均的な「結びつき」，もしくは弱い「結びつき」に伴い，親の「勢力」が強い構造や「勢力」が均衡した構造であることがわかる。

家族内外のストレスとストレス反応に関連する家族構造の検討分析に先立ち，家族内外のストレスの程度によりストレス反応が異なるか否かを検討した。まず，家族内，ならびに日常生活ストレス得点の記述統計量を算出し，「家族内ストレス」と「日常生活ストレス」の高低の類型を行なうカットオフ・ポイントを検討した。いずれの変数においても得点分布に偏りがみられたため，中央値を用い高群，低群に分類し独立変数とし，各ストレスの高低を独立変数，ストレス反応得点を従属変数とした対応なしの t 検定により検討した。なお，従属変数となるストレス反応得点の得点分布に偏りがみられたため，得点を開平方変換 (square root transformation; 石田, 1990, pp.1-42) により変数変換を行い，疑似的に分布の偏りを解消した値を用いた。

その結果，「家族内ストレス」では，高群は低群より「ストレス反応」が高く ($t(439) = -3.82, p < .01$)，「日常生活ストレス」でも同様に，高群は低群より「ストレス反応」が高かった ($t(439) = -9.47, p < .01$)。よって，ストレスが高い群は，ストレス反応も高いといえる。次に，家族構造の3クラスタ，ならびにストレスの高低 (家族内・日常生活) を独立変数，ストレス反応を従属変数としたストレス (高低の2水準) × 家族構造 (3水準) の2要因被検者間計画の分散分析を行った。その結果を **Table 5-6**，ならびに **Table 5-7** に示す。

Table 5-6 ストレス反応得点の記述統計量と家族構造×家族内ストレスラーの分散分析結果

従属変数: ストレス反応		家族構造			総和	主効果		交互作用	単純主効果と 多重比較による検討
		CLU.1	CLU.2	CLU.3		家族内 ストレスラー	家族構造		
		平均的結びつき ・親勢力有意型	高結びつき ・勢力均衡型	低結びつき ・勢力均衡型		F	F		
家族内 ストレスラー	高群	<i>n</i>	63	54	68	185			
		<i>M</i>	3.66	2.55	3.36	3.23			
		<i>SD</i>	1.36	1.33	1.42	1.44			
							11.57**	9.35***	3.36*
		<i>n</i>	48	117	91	256			
	低群	<i>M</i>	2.70	2.52	2.92	2.70			家内スト低群 < 家族内スト高群 (CLU.1)
	<i>SD</i>	1.35	1.54	1.31	1.43			CLU.2 < CLU.1, CLU.3 (家族内スト高群)	

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$. 「家族内スト」は「家族内ストレスラー」を示す.

Table 5-7 ストレス反応得点の記述統計量と家族構造×日常生活ストレスラーの分散分析結果

従属変数: ストレス反応		家族構造			総和	主効果		交互作用
		CLU.1	CLU.2	CLU.3		日常生活ストレスラー	家族構造	
		平均的結びつき ・親勢力有意型	高結びつき ・勢力均衡型	低結びつき ・勢力均衡型		F	F	
日常生活 ストレスラー	高群	<i>n</i>	62	76	82	220		
		<i>M</i>	3.90	3.21	3.52	3.52		
		<i>SD</i>	1.22	1.34	1.37	1.34	87.05***	8.51***
								<i>n.s.</i>
		<i>n</i>	49	95	77	221		
	低群	<i>M</i>	2.42	1.98	2.68	2.32	日常スト低く 日常スト高	CLU.2 < CLU.1, CLU.3
	<i>SD</i>	1.24	1.35	1.24	1.32			

*** $p < .001$. 「日常スト」は「日常生活ストレスラー」を示す.

まず、Table 5-6 に示したように、家族構造の3クラスタ、ならびに「家族内ストレスラー」の高低を独立変数、「ストレス反応」を従属変数とした2要因被検者間計画の分散分析を行った。その結果、「ストレス反応」において、家族構造とストレッ

サーとの間の交互作用に有意差が認められた ($F(2,435) = 3.35$, $p < .05$)。よって、単純主効果による検定を行なったところ、第1クラスタにおいて、「家族内ストレスサー」の主効果が有意であり ($F(1, 435) = 12.61$, $p < .001$)、高群は低群よりも有意に高い「ストレス反応」得点を示した。さらに、「家族内ストレスサー」の高群において、家族構造の単純主効果が有意であり ($F(2, 435) = 9.49$, $p < .001$)、TukeyのHSD法による多重比較の結果、第2クラスタは第1クラスタよりも有意に「ストレス反応」得点が低く ($p < .001$)、また、第2クラスタは第3クラスタよりも有意に「ストレス反応」得点が低かった ($p < .01$)。

次に、Table 5-7に示したように、家族構造の3クラスタ、ならびに「日常生活ストレスサー」の高低を独立変数、「ストレス反応」を従属変数とした2要因被検者間計画の分散分析を行った。その結果、「ストレス反応」において家族構造 ($F(2, 435) = 8.51$, $p < .001$)、「日常生活ストレスサー」 ($F(1, 435) = 87.05$, $p < .001$) それぞれの主効果のみ有意差が認められた。TukeyのHSD法による多重比較の結果、第2クラスタは第1クラスタよりも有意に「ストレス反応」得点が低く ($p < .001$)、また、第2クラスタは第3クラスタよりも有意に「ストレス反応」得点が低かった ($p < .001$)。家族構造の3クラスタと家族内、ならびに日常生活ストレスサー高低の組み合わせによる「ストレス反応」得点のグラフを、それぞれ Figure 5-2, Figure 5-3に示す。

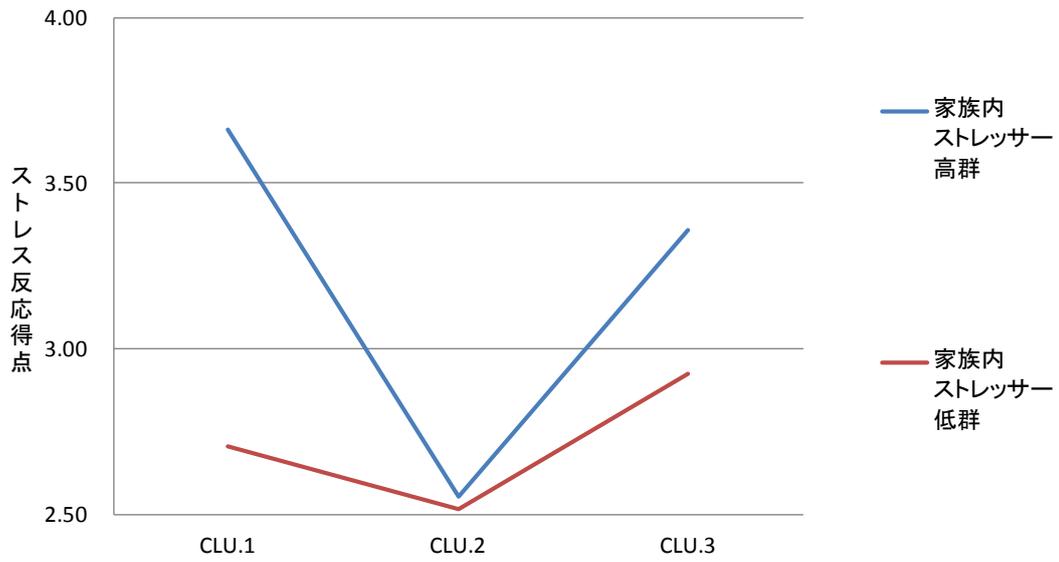


Figure 5-2 家族構造と家族内ストレスの組み合わせによるストレス反応得点

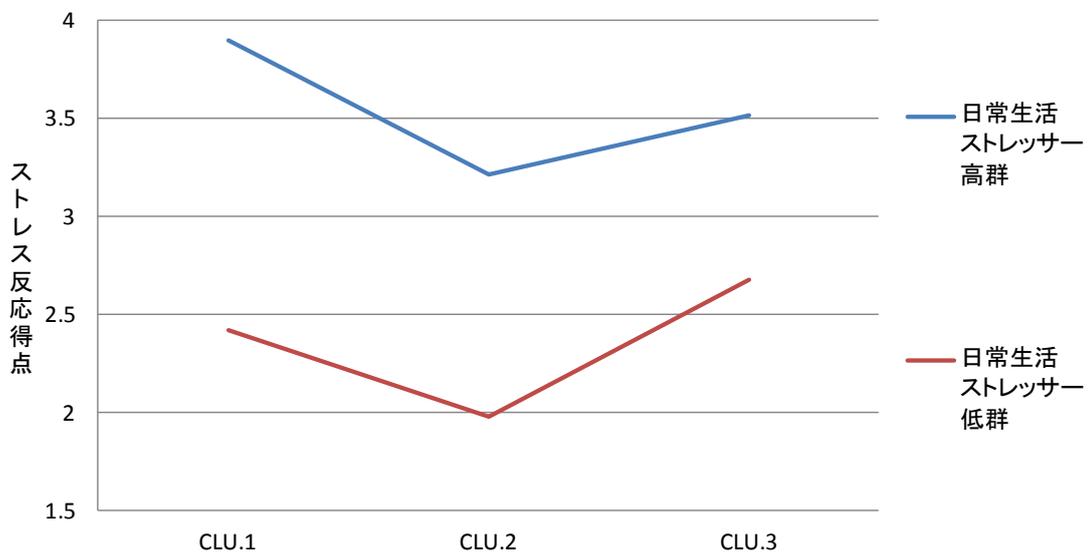


Figure 5-3 家族構造と家族内ストレスの組み合わせによるストレス反応得点

5-4 考 察

本研究は青年のストレスの認知とストレス反応に関連する家族構造について青年の視点から検討した。その際、青年のストレスを友人関係や学業といった家族関係以外で認知する「日常生活ストレス」と家族関係で認知する「家族内ストレス」とに分類した。さらに青年の家族関係を母子関係や父子関係といった単一の関係のみではなく、青年を含む各2者関係（夫婦関係・父子関係・母子関係）を査定し、それら諸関係の組み合わせから家族構造を捉えた。

1. 青年のストレスと家族構造

まず、青年の認知する家族構造をクラスタ分析により類型し、第1クラスタとして「平均的結びつき・親勢力優位型」、第2クラスタとして「高結びつき・勢力均衡型」、第3クラスタとして「低結びつき・勢力均衡型」の3つに類型した。第2クラスタは、結びつきの強さに伴い、勢力が均衡した構造であるのに対し、その他のクラスタでは平均的、もしくは弱い結びつきに伴い、親側の勢力が高い構造や3者で勢力が均衡した構造であった。分析の結果から、いずれのストレスにおいても、ストレス反応に対する家族構造の形態による軽減効果の可能性が確認され、青年からみる家族内の各成員間が、結びつきという親密なつながりを基盤として、親子、もしくは夫婦のいずれかが一方的に強い影響力を持つのではなく、3者の勢力が均衡している構造が、青年のストレス反応の軽減に関連することを示唆する結果が示された。

この結果は、個人のストレスに認知や対処が介在するように（Lazarus & Folkman, 1984, 本明他（訳）, 1991）、日常生活を共にする家族関係もまたその在り方によってストレスに介在する要因として当てはまることを意味する。さらに、家族からのソーシャル・サポートは青年のストレスを軽減するというこ

れまでの知見（例えば，嶋，1992；皆川他，2004）を支持する結果であった。しかし，ストレスターの性質，ならびに家族構造の形態の違いにより，青年のストレス反応の表出と異なる関連を示すことが明らかとなった。

2. ストレスターの性質による差異

ストレスター毎にみていくと，「家族内ストレスター」においては，「日常生活ストレスター」に比べ，より複雑な関連を示した。具体的には，ストレスター高群において，「高結びつき・勢力均衡型」が他の構造に比べ，「ストレス反応」得点が低く，また「平均的結びつき・親勢力優位型」では，ストレスター高群は低群に比べ，高い「ストレス反応」を示した。

この結果は，ストレス反応に対する家族構造の緩衝効果を示唆する結果である。つまり，青年が家族内でのストレスターを高く認識している場合に，「高結びつき・勢力均衡型」にみられる，夫婦間や親子間が親密な情緒的つながりで強く結ばれ，各関係の勢力が均衡している家族構造は，青年のストレス反応の低さと関連する。一方で，「平均的結びつき・親勢力優位型」にみられる各関係の結びつきが強くも弱くもない値を示し，親子間の勢力関係において父親，母親共に青年より優位な構造では，家族内で青年が認識するストレスターが高い場合に，青年のストレス反応の高さと関連する。

したがって，この結果から以下 2 つの考察を行う。第一に，これまで青年のストレスと家族との関係では，主に家族関係の在り方そのものが扱われてきたが（皆川他，2001；皆川他，2003ab；皆川他，2004），家族の在り方そのものが直接的に青年にとってのストレスターになるのではなく，青年が家族内でストレスターを認識する時に，はじめて家族構造の在り方が問題となるという観点である。つまり，親子間で青年自身の要求が通らない，意見が合わない，親から叱られる等のコミュニケーション

ョンが青年にとってストレスと認識されない場合，どのような家族構造の形態であっても青年にとって問題とならない。しかし，家族内のストレスを青年が高いと認識した場合，青年自らが属する結びつきの強さを伴わず，親の勢力が強い構造や親子間での勢力が均衡した構造は，親が強制的な勢力を行使する存在として，またとりわけ親と青年の間に関わりが無く，干渉しないという，関与しない存在として家族を認識している可能性が伺える。第2に，青年が主として親子間で認識する家族内のストレスは，そのストレス源となる両親との関係性が関与していることが考えられる。

Watzlawick *et al.* (1967) はコミュニケーションの内容と関係の側面が関連して情報伝達が行われることを指摘している。ここで述べる情報伝達の内容と関係をストレスと家族構造に当てはめると，コミュニケーションの内容は青年の認識するストレスであり，関係とはその伝達される内容がどのような家族の関係において伝達されているかということに対応する。つまり，第2クラスタの特徴である夫婦間や親子間の強い結びつきを基盤とする勢力が均衡した家族構造では，家族内で認識するストレスが高くとも，青年のストレス反応が低いという結果にみられるように，このような家族構造においては，家族内のストレスが青年にとってストレスとなりうるメッセージとして受け取られていない，もしくは深刻さを欠いたものとして受け取られていることが考えられる。同じ家族内のストレスでも，どのような家族構造でそれが生起するかにより，青年の受け取り方に関連し，ひいては青年のストレス反応を軽減しうる可能性も示唆される。

一方で，「日常生活ストレス」では，ストレスならびに家族構造の主効果のみ認められ，「高結びつき・勢力均衡型」に位置する青年は，ストレス認知の高低に関わらず「ストレス反応」が低いという結果であった。この結果は，家族から

のソーシャル・サポートは青年の日常生活ストレスの軽減と関連する（例えば、皆川他，2004；岡安他，1993；嶋，1992）という結果を支持するものである。加えて，青年が家族内で認識するストレスのみならず，家族関係以外で経験する，例えば学業や授業，友人関係等に起因するストレスに関して，「高結びつき・勢力均衡型」は青年のストレス反応の軽減と関連することを意味する。家族内外のストレスに対して，「高結びつき・勢力均衡型」の家族構造は，青年のストレス反応の軽減と関連するという結果は，家族構造自体が直接的に青年のストレス状況の軽減と関連するというより，第4章（【研究Ⅱ】）における，青年の情緒的安定に寄与する家族成員間の結びつきの高さや勢力の均衡した構造と同様に，親のみならず青年にも家族内の事柄に対して影響を与え，決定することができるといった，青年の自己決定を促し，青年を尊重するような柔軟な形態を示しているものと考えられる。このような家族構造を通して，青年は情緒的な安定を保ち，ひいては青年自身で行動を決定しストレス状況への対処を間接的に促進するものと考えられる。

3. 第6章（【研究Ⅳ】）への示唆

本章（【研究Ⅲ】）では，ストレス反応の測定において，尺度の精緻化に関する課題が残されるものの，青年のストレスに関与し，ストレス反応の軽減と関連する家族構造として，成員間の強い結びつきと勢力が均衡した構造を見出すことができた。しかしながら，第4章も同様に，青年の一般的なストレスにより家族構造を検討した（【研究Ⅱ】）。本章（【研究Ⅲ】）における家族内ストレスの検討から，家族の在り方そのものが直接的に青年にとってのストレスになるのではなく，青年が家族内のストレスを認識する際に，はじめて青年自身が属する家族構造の在り方が問題となるという観点を指摘したように，

家族との相互作用が，より顕著になる変数に焦点を当てた検討が求められる。そこで，青年期に多くみられる摂食障害傾向を，青年の特殊なストレス反応として取り上げ，第6章（【研究Ⅳ】）において検討する。第2章で指摘した，Minuchin *et al.*（1978，福田（監訳），1987）の先駆的な研究を始めとして，青年の摂食障害ならびに摂食障害傾向の問題は，ストレスの関与が認められる問題であり（例えば，Garner & Garfinkel, 1997，小牧（監訳），2004；小林・栗田，2005；Minuchin *et al.*, 2007，中村・中釜（監訳），2010），疾患の発症や経過，予後といった一連の過程の理解，さらには予防や援助の視点においても，青年を取り巻く家族関係の在り方は重要な役割を担う。またこの問題は，食行動に異常をきたし，とりわけANにおいては重症の場合，生命の危機にさらされるがゆえ，家族成員間の相互作用は顕著になりうると考えられる。すなわち，親は青年の食行動異常という状態を改善すべく，強制的に食べさせる行動や親子間の主張の衝突から，批判的，否定的な相互作用が顕著にみられることが想定される。

第 6 章

【研究Ⅳ】 青年期の家族構造と青年の摂食障害傾向との関連

第 6 章では【研究Ⅳ】として、青年女子に多くみられる摂食障害傾向を青年のストレス反応の一つとして捉え、摂食障害傾向と家族構造が、どのような関連があるかについて検討する。加えて、性差を踏まえ、青年の摂食障害傾向の実態についても報告する。なお、本研究における本章の位置づけは、青年期の家族構造を、摂食障害傾向という青年の特殊なストレスにより検討することである。

6-1 目 的

本章（【研究Ⅳ】）では、摂食障害傾向を青年のストレス反応の一つとして捉え、家族構造との関連について検討する。加えて、青年女子のみならず男女を含めた摂食障害傾向の報告も行ってみたい。近年、青年男子の摂食障害傾向（早野，2002）や瘦身願望の性差の検討（浦上・小島・沢宮・坂野，2009）が行われている。例えば、早野（2002）は男子大学生 245 名を対象とした摂食障害傾向の調査において、「やせることで頭が一杯である」という設問に対し 29.9%が「たまにある」から「いつもそう」と回答し、男女比においては、男性は女性の 3 分の 1 であることを報告している。しかしながら、本邦において、男女を含めた摂食障害傾向の実態の報告は少数であるため、改めて報告することは意義あることと思われる。よって、本研究では、本邦における①男女を含めた摂食障害傾向の実態を報告すること、②青年の摂食障害傾向と家族構造との関連について検討することを目的とする。

目的②に関して、第 4 章では非臨床群を対象に青年の視点から家族内の各関係（夫婦間，父子間，母子間）を詳細に検討した（【研究Ⅱ】）。その結果、男女共に類似する家族構造として、青年の認知するストレスが低い構造は、各関係の強い結びつきを基盤として、3 者それぞれが互いに同程度の影響力を持つとといったいわば対等な関係であった。さらに、非臨床群を用いた第 5 章においても、青年のストレス反応の軽減と関連する家族構造として、成員間の強い結びつきと勢力の均衡した構造が見出されている（【研究Ⅲ】）。よって、これまでの家族関係と摂食障害傾向との関連（Abrantes *et al.*, 2006; Byely *et al.*, 2000; McGuire *et al.*, 2002; Mellin *et al.*, 2002), ならびに青年の認知する家族内外のストレスの関与（Garner & Garfinkel, 1997, 小牧（監訳），2004; 小林・栗田，2005; Minuchin *et al.*, 2007, 中村・中釜（監訳），2010）を、第 4 章（【研究Ⅱ】），な

らびに第 5 章（【研究Ⅲ】）で得られた結果を参照しつつ，以下の仮説を検討する。

仮説：家族成員間の結びつきが強く，勢力が均衡した家族構造では，青年の摂食障害傾向が低く，一方，結びつきが弱く，勢力の差が大きい場合，摂食障害傾向が高い。

この仮説を，前者をバランス型，後者をアンバランス型として，便宜的に家族バランス仮説（Family Balance Hypothesis: FBH）とする。

6-2 方 法

1. 調査対象者と調査時期

関東，東北，関西地方の 4 つの大学と東北地方の 2 つの高校における大学生ならびに高校生 755 名を対象に質問紙による調査を行った。質問紙の配布と回収方法については，高校生では授業，またはホームルームの一部の時間，大学生の場合は講義の一部の時間を利用し，一斉配布を行った。その後，任意により記入を求め，同意した者のみ回答し，一斉に回収を行なった。これらの回答から質問紙の不備，母子，父子家庭の回答を除外した計 663 名分のデータを分析の対象とした。

対象者の内訳は，高校生は男性 197 名（平均年齢 16.7 歳， $SD=.67$ ），女性 136 名（平均年齢 16.5 歳， $SD=.80$ ），全体 333 名（平均年齢 16.6 歳， $SD=.73$ ）であり，大学生は男性 144 名（平均年齢 20.2 歳， $SD=1.83$ ），女性 186 名（平均年齢 19.9 歳， $SD=1.33$ ），全体 330 名（平均年齢 20.0 歳， $SD=1.57$ ）であった。対象者全体では，男性 341 名（平均年齢 18.1 歳， $SD=2.16$ ），女性 322 名（18.5 歳， $SD=2.01$ ），計 663 名（平均年齢 18.3 歳， $SD=2.09$ ）であった。

調査時期は 2010 年 12 月初旬から 2011 年 8 月下旬まで実施した。

2. 質問紙の構成

1) 基礎情報

対象者の年齢，性別，生活形態（同居・一人暮らし・その他）の記入を求めた。

2) 家族構造の測定

青年の認知する家族構造の測定には，家族内の各 2 者関係を効率よく，包括的に把握できる ICHIGEKI（狐塚他，2010；野口他，2009）を用いた。なお，第 4 章（【研究Ⅱ】），ならびに第 5 章（【研究Ⅲ】）における家族構造の検討を踏まえ，家族構造を測定する上での主軸と考えられる「結びつき」と「勢力」の 2 因子に限定して用いた。

ICHIGEKI の下位項目である「結びつき」については，お互いの仲の良さや親密さ，連帯感の強さを表すことを示し，夫婦間，父子間，母子間において「全くそう思わない」～「非常にそう思う」までの 6 件法により回答を求めた。「勢力」については，誰の誰に対する勢力かを明確にするため，夫婦間，父子間，母子間の双方向（計 6 方向）から査定を行った。それぞれの影響力や発言力，決定力の強さであることを示し，「全くそう思わない」～「非常にそう思う」までの 6 件法により回答を求めた。「結びつき」は得点が高くなるほど各関係における「結びつき」が強いことを表し，「勢力」においても得点が高くなるほど，各関係における相対的な「勢力」の強さを意味する。

3) 摂食障害傾向の測定

摂食障害傾向の測定には，摂食障害に特徴的な症状や関心に対する標準的測定法として使用されている Garner, Olmsted, Bohr, & Garfinkel（1982）の Eating Attitudes Test 26（EAT-26）の翻訳版（Mukai, Cargo, & Shisslak, 1994）を使用した。Mukai *et al.*（1994）によれば，本尺度は健常者と臨床群やリスク・グループを弁別するスクリーニングや臨床群の重症度評価，あるいは健常者が大部分と考えられるサンプルに

における摂食障害傾向を測定する目的で用いられている。本邦においても本尺度の妥当性の検討がなされ(例えば, Mukai *et al.*, 1994; 中井, 2003), 摂食障害傾向を測定する目的で, あるいは食行動異常の一指標として, 非臨床データを対象とした研究に用いられている(例えば, 小林・栗田, 2005; 向井, 2010; 齋藤, 2004)。本研究においても EAT-26 は摂食障害傾向を測定するための尺度として妥当であると捉え採用した。

各項目は, 「太りすぎることがこわい」「おなかがすいたときに食べないようにしている」「食べ物の中で頭がいっぱいである」といった 26 項目で構成されており, 「いつも」～「まったくない」までの 6 件法で評定を行う。採点方法は, 1, 2, 3 点を 0 点, 4 点を 1 点, 5 点を 2 点, 6 点を 3 点とする置換方法により得点化を行い, 26 項目の合計得点 20 点をカットオフ・ポイントとしている。本研究でも同様の項目, ならびに評定方法と置換法を用いた。得点が高くなるほど摂食障害傾向が高くなることを意味する。

6-3 結 果

1. 各測定尺度の得点化

はじめに, ICHIGEKI により査定した夫婦間, 父子間, 母子間それぞれの「結びつき」, ならびに「勢力」得点の記述統計量を算出し, 得点化を行った。

EAT-26 においては, 先に示した換算方法により得点化を行った。なお, 第 25 項目の「食べたことがないカロリーが高い食物を食べてみることは楽しみだ」という項目のみ逆転項目とした (Garner & Garfinkel, 1997, 小牧 (監訳), 2004)。信頼性の基準として α 係数を算出したところ, 26 項目全体で $\alpha=.73$ というある程度高い信頼性が確認された。夫婦間, 父子間, 母

子間それぞれの「結びつき」得点,「勢力」得点,ならびに EAT-26 の得点に関する記述統計量を **Table 6-1** に示す。

Table 6-1 ICHIGEKIならびにEAT-26の記述統計量 (N=663)

	高校生				大学生				
	男性 n=197		女性 n=136		男性 n=144		女性 n=186		
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	
ICHIGEKI									
結びつき	父子間	3.81	1.32	3.71	1.53	3.72	1.24	3.65	1.41
	母子間	4.19	1.12	4.68	1.25	4.37	1.08	4.87	1.13
	夫婦間	3.92	1.33	3.99	1.44	3.94	1.41	3.97	1.39
勢力	青年から父親へ	2.91	1.30	3.35	1.35	3.09	1.13	3.20	1.28
	青年から母親へ	3.23	1.25	3.29	1.23	3.49	1.18	3.58	1.20
	父親から青年へ	3.74	1.42	3.38	1.41	3.64	1.24	3.49	1.31
	父親から母親へ	3.44	1.39	3.39	1.33	3.51	1.45	3.66	1.36
	母親から青年へ	3.89	1.19	4.10	1.12	3.73	1.22	3.99	1.17
	母親から父親へ	3.61	1.39	3.57	1.35	3.65	1.21	3.62	1.25
EAT-26	6.81	4.80	10.06	7.38	6.40	4.26	9.14	6.96	

2. EAT-26 を用いた青年の摂食障害傾向の実態

青年の摂食障害傾向の実態を報告するため, まず, 本邦において妥当性の検討を行った中井(2003)の知見に基づき, EAT-26 の総得点の 15 点をカットオフ・ポイントに設定した。EAT-26 の総得点が 15 点以上を食行動異常高群, 15 点以下を食行動異常低群として群分けを行った。性別, 高校生・大学生, 全体の結果を **Table 6-2** に示す。

Table 6-2 EAT-26による群分けの結果

	<i>n</i>	%	EAT-26			
			高群 15点以上		低群 14点以下	
			<i>n</i>	%	<i>n</i>	%
高校生						
男性	197	100.00	10	5.80	187	94.92
女性	136	100.00	28	20.59	108	79.41
合計	333	100.00	38	11.41	295	88.59
EAT-26得点高群の男女比（男性：女性）				1 : 2.8		
大学生						
男性	144	100.00	9	6.25	135	93.75
女性	186	100.00	25	13.44	161	86.56
全体	330	100.00	34	10.30	296	89.70
EAT-26得点高群の男女比（男性：女性）				1 : 2.8		
全体						
男性	341	100.00	19	5.57	322	94.43
女性	322	100.00	53	16.46	269	83.54
全体	663	100.00	72	10.86	591	89.14
EAT-26得点高群の男女比（男性：女性）				1 : 2.8		

高校生のサンプルでは、男性 197 名中 10 名（5.80%）、女性 136 名中 28 名（20.59%）、全体 333 名中 38 名（11.41%）が EAT-26 において 15 点以上の「摂食障害傾向高群」に分類された。一方、大学生サンプルでは、男性 144 名中 9 名（6.25%）、女性 186 名中 25 名（13.44%）、全体 330 名中 34 名（10.30%）が EAT-26 において 15 点以上の「摂食障害傾向高群」に分類さ

れた。高校生ならびに大学生を含めた全サンプルでは、男性 341 名中 19 名 (5.57%)、女性 322 名中 53 名 (16.46%)、全体 663 名中 72 名 (10.86%) が EAT-26 において 15 点以上の「摂食障害傾向高群」に分類された。なお、男女比では高校生、大学生、ならびに全体での比率は同様に男性 1 名に対し女性が 2.8 名という比率であった。

3. 家族構造と青年の摂食障害傾向との関連

家族構造と青年の摂食障害傾向との関連を検討するため、まず家族構造の類型を行った。なお、EAT-26 により測定した摂食障害傾向の男女差は顕著であり、男性においては高校生、大学生共に高群に分類される人数比は 10% に満たず、少数であった。したがって、サンプル数の制限から女性のみデータの限定した。さらに、青年女子が家族と日常的に関わる頻度を考慮すると、別居よりも同居の方が家族との関連が強いことが想定されるため、女性の全サンプルから一人暮らしや家族と別居しているサンプル、計 88 名のデータを除外した 234 名分 ($M=18.24$, $SD=2.13$) のデータを分析対象とした。家族構造の類型には夫婦間、父子間、母子間における ICHIGEKI の下位尺度得点に対し、Q モードによるクラスタ分析を実施した¹⁶。クラスタ数の検討には、クラスタ数を 2~5 まで変化させ、各クラスタに含まれる被験者数や各クラスタの解釈可能性から検討し、解釈可能な 4 クラスタを採択した。クラスタ分析の結果を **Figure 6-1** に示す。

¹⁶ 第 4 章 (【研究 II】) ならびに第 5 章 (【研究 III】) の得点化にならい、ICHIGEKI の下位尺度である勢力得点においては、父親から母親への得点から、母親から父親への得点を引いた値を夫婦間の勢力得点とした。父親 (母親) から青年への得点から、青年から父親 (母親) への得点を引いた値を父子間、母子間の勢力得点とした。夫婦間では、得点が高いほど父の勢力が高いことを意味し、父子間・母子間では、勢力得点が高いほど父親 (母親) の勢力が高いことを意味する。

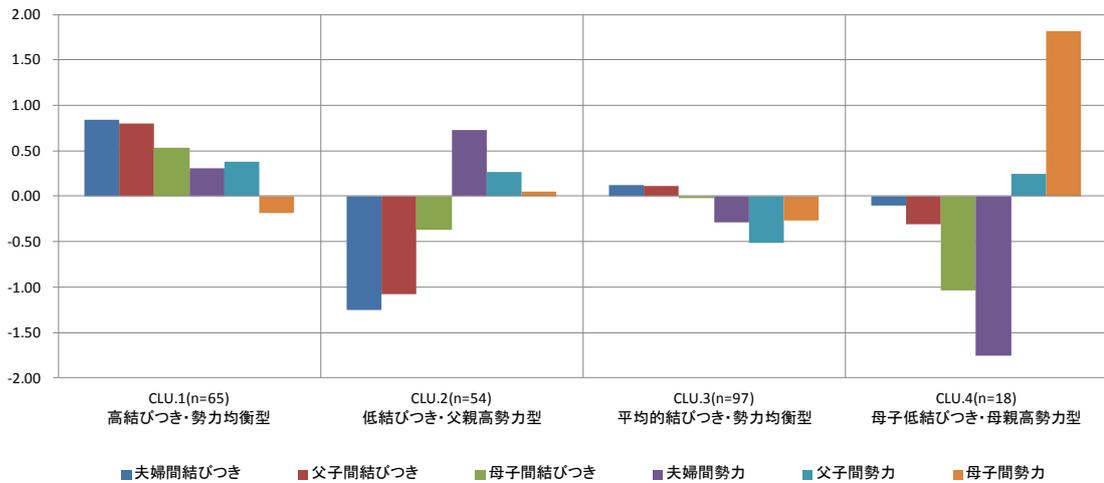


Figure 6-1 青年女子における4クラスターの家族構造プロフィール

第1クラスターは65名（28%）が位置し、特徴として各関係間の「結びつき」が+.50以上を示し、「勢力」においては+.50から-.50の間をとり3者がほぼ均衡した値を示している。よって「高結びつき・勢力均衡型」と命名した。第2クラスターは54名（28%）が位置し、特徴として夫婦間、ならびに父子間の「結びつき」が-1.00以下の値，母子間の「結びつき」においても-の値を示し，夫婦間における父親の「勢力」が+.50以上の値，父子間においても父親の「勢力」が+の値を示している。よって、「低結びつき・父親高勢力型」と命名した。第3クラスターは97名（41%）が位置し、特徴として各関係間の「結びつき」が3者間共に平均的な値を示し、「勢力」においては父子間においてやや青年が優位であるが，他のクラスターと比較すると3者がほぼ均衡した値を示している。よって「平均的結びつき・勢力均衡型」と命名した。第4クラスターは18名（8%）が位置する少数サンプルであり，特徴として，母子間の「結びつき」が-1.00以下の値を示し，「勢力」では父子間における母親の勢力が-1.50以下，母子間では母親の勢力が+1.50の値

を示している。よって、「母子低結びつき・母親高勢力型」と命名した。概して、第 1 クラスタは「結びつき」の強さに伴い、「勢力」が均衡した構造であるのに対し、その他のクラスタでは平均的な「結びつき」、もしくは弱い「結びつき」に伴い、いずれかの「勢力」が強いというアンバランスな構造であることがわかる。第 3 クラスタにおいては、第 1 クラスタと類似しているものの、「結びつき」において 3 者がとりわけ高い値を示していないことが特徴的である。

次に、家族構造の 4 クラスタを独立変数、EAT-26 を用いて分類した摂食障害傾向の高群・低群を従属変数とした χ^2 二乗検定を行なった (Table 6-3)。その結果、クラスタ間において摂食障害傾向高群・低群の人数比に 5% 水準で有意差が認められた ($\chi^2(3) = 13.58, p < .05$)。残差分析の結果、クラスタ 1 の「高結びつき・勢力均衡型」は、摂食障害傾向高群の割合が 5% 水準で有意に少なく、摂食障害傾向低群の割合が 5% 水準で有意に多かった。一方でクラスタ 2 の「低結びつき・父親高勢力型」は、摂食障害傾向高群の割合が 1% 水準で有意に多く、摂食障害傾向低群の割合が 1% 水準で有意に少なかった。その他のクラスタにおいては、摂食障害傾向との関連は認められなかった。

Table 6-3 家族構造クラスとEAT-26得点による高群・低群の χ^2 乗検定 ($n=234$)

		CLU.1	CLU.2	CLU.3	CLU.4	χ^2	
		高結びつき・ 勢力均衡型	低結びつき・ 父親高勢力型	平均的結びつき・ 勢力均衡型	母子低結びつき・ 母親高勢力型		
高群	度数	41	5	17	14	5	
	期待度数		11.39	9.46	17.00	3.15	
	調整済み 残差		-2.45	3.08	-1.05	1.19	
EAT-26 低群	度数	193	60	37	83	13	13.58(3) *
	期待度数		53.61	44.54	80.00	14.85	
	調整済み 残差		2.45	-3.08	1.05	-1.19	
合計	度数	234	65	54	97	18	

* $p < .05$

6-4 考 察

本研究では，高校生から大学生までの青年を対象に，本邦における摂食障害傾向の現状を報告すると共に，家族構造と摂食障害傾向との関連を検討することを目的とした。なお，家族構造と青年の摂食障害傾向との関連においては，家族成員間の結びつきが強く，勢力が均衡した家族構造では，青年の摂食障害傾向が低く，一方，結びつきが弱く，勢力の差が大きい場合，摂食障害傾向が高い，という仮説の検討を目的とした。

1. 青年の摂食障害傾向の実態

初めに，青年の摂食障害傾向の実態を報告するため，中井（2003）の知見に基づき，EAT-26の総得点の15点をカットオフ・ポイントに設定し検討した。まず，青年女子における摂食障害傾向高群の割合は322名中53名であり16.46%であった。EAT-26を用い中井によって15歳から35歳の女性（高校生・大学生・会社勤務者・主婦）961名を対象とした2003年の調

査では、EAT-26の総得点15点をカットオフ・ポイントにすると、15点以上の人数は142名であり、全体の14.8%であることを報告している（中井, 2003）。中井（2003）の調査と本研究の結果を比較すると、本研究は約2%高い割合であるが、サンプル数や年齢層の幅の違いを考慮するとほぼ同じ割合と考えられ、摂食障害傾向を有する青年女子は、一定の割合を保持していると考えられる。しかし、本研究のサンプルを詳細に検討すると、女性の摂食障害傾向高群の割合は、高校生136名中28名で20.59%であり、大学生186名中25名で13.44%であった。これらの結果は、サンプル数の制限や抽出した集団の差異を考慮しても、高校生、つまり若年層の割合は高いといえる。一方、男子青年における摂食障害傾向高群の割合は、341名中19名であり5.57%であった。男性に着目した調査は数少なく単純に比較検討することはできないが、高校生や大学生の男性には摂食障害傾向が高い者も少なからず存在していると言えよう。次に男女比に着目すると、高校生、大学生、ならびに全体での比率は同様に男性1名に対し女性が2.8名という比率であった。摂食障害の疫学では、男性は女性の10分の1以下であることが報告されている（例えば、American Psychiatric Association, 2000; Bruch, 1978）。摂食障害という病態としてみると、その男女差は顕著であるが、摂食障害傾向という食行動の異常に拡大してみると、男性は女性の約3分の1であった。この結果は、女性のみならず男性においても、食行動に関する問題は、決してまれではないことを示す結果である。よって、医療機関へ受診するか否か、または摂食障害という病態が認められるか否かに関わらず、社会に所属する青年には、何らかの摂食障害傾向の問題を有する者が、一定の割合で存在すると共に、男女を含めた非臨床群を対象とした調査の重要性が指摘される。

2. 家族構造と青年の摂食障害傾向との関連

次に、家族構造と青年女子の摂食障害傾向との関連を検討するため、クラスタ分析を用いて家族構造を類型し、摂食障害傾向の類型による差異を検討した。その結果、家族構造は4つのクラスタに類型され、クラスタ1の「高結びつき・勢力均衡型」は、「摂食障害傾向高群」の割合が少なく、「摂食障害傾向低群」の割合が多かった。一方でクラスタ2の「低結びつき・父親高勢力型」は、「摂食障害傾向高群」の割合が多く、「摂食障害傾向低群」の割合が少ないという結果が示された。クラスタ1の特徴をみると、夫婦間、父子間、母子間共に結びつきの強さを基盤として、勢力が3者で均衡している構造であることがわかる。一方で、クラスタ2では結びつきの弱さを基盤として、父親の勢力が強いという構造が示された。以上のことから、青年が家族関係を結びつきという親密なつながりで結ばれていると認識していること、そして3者の中でもとりわけ夫婦間と父子間が強い結びつきを示し、3者が互いに同程度の影響力を持つといった、いわば対等な関係であることが青年女子の摂食障害傾向を抑制することが示された。この結果は概ねFBHの仮説を支持する結果であった。したがって、第4章（【研究Ⅱ】）の知見で指摘した家族成員間の結びつきの強さ、そして勢力の均衡した構造は、摂食障害傾向を青年の不適応を示す一表現型として捉えた場合にも同様に当てはまることを意味する。さらに、家族の結びつきは肥満の青年に対する不健康な食行動の抑制（Mellin *et al.*, 2002）のみならず、高校生や大学生といった一般的な対象における摂食障害傾向の抑制にも寄与することが示された。つまりこの結果は、青年期という時期においても青年の問題に家族関係のあり方が関与することを意味している。さらに、親子関係のみならず、夫婦間の結びつきの強さを基盤として、一方的に親が影響力をもつのではなく、青年自身も親に対する影響力を有するという家族構造が重要であることが示

されたといえる。

しかしながら，本章（【研究Ⅳ】）で導かれた4つの家族構造のクラスタ間において，青年の摂食障害傾向の割合に有意差が認められ，家族構造との関連が示されたものの，摂食障害傾向高群に分類される青年は，いずれのクラスタにおいても存在していた。この結果は，どのような家族構造においても摂食障害傾向を有する青年は存在することを意味する。つまり，家族構造や各関係の在り方が，食行動の問題を引き起こすということではない。結びつきの弱さ，そしてアンバランスな勢力関係が青年の食行動の異常をもたらすのではなく，そのような家族構造と青年の食行動異常の脆弱性には，親和性が高い可能性が示唆される。本研究においては，家族構造と青年の摂食障害傾向の因果関係を特定することはできないが，家族構造の類型により青年の摂食障害傾向に差異が認められたこと，そしてどのような家族構造においても摂食障害傾向が高い青年が存在することを踏まえると，これらの関係は共変関係にあり，家族と青年の問題との悪循環的相互作用を通じて問題が構成されていると解釈することが現時点では妥当であろう。いずれにせよ，家族関係は青年の食行動の問題に関連する重要な環境要因であると共に，家族との関係の在り方は，青年の食行動の問題を低減しうる変数であることが示唆される。

4. 第7章（【研究Ⅴ】）への示唆

本章（【研究Ⅳ】）では，サンプル数の制限から女性のみを分析の対象とし，多変量解析による男性の検討までには至らなかった。今後は，性差を踏まえた検討の余地も有するが，青年の摂食障害傾向と家族構造の関連について検討し，青年が家族を結びつきという親密なつながりで結ばれていると認識していること，そして3者の中でもとりわけ夫婦間と父子間が強い結びつきを示し，3者が互いに同程度の影響力を持つといったいわ

ば対等な関係であることが、青年女子の摂食障害傾向の抑制と関連することが示された。このことは、FBHを概ね支持する結果であると共に、FBHは青年の摂食障害傾向をストレス反応の一つとして捉えているため、「家族成員間の結びつきが強く、勢力が均衡した家族構造では、青年のストレスが低く、一方、結びつきが弱く、勢力の差が大きい場合、青年のストレス反応が高い」ということを意味する。しかしながら、本章（【研究Ⅳ】）は、一般社会における食行動の問題から、非臨床群を用いた検討を行い、臨床群を用いていない。家族構造のタイプにより青年の摂食障害傾向に差異が認められると共に、いずれの家族構造においても摂食障害傾向が高い青年が存在したことを踏まえ、臨床群における青年の疾患と家族構造についての詳細な検討が求められる。

第 7 章

【研究 V】 青年の摂食障害，ならびに心 身症と家族構造との関連

第 7 章では【研究 V】として，第 4 章から第 6 章（【研究 II】，【研究 III】，【研究 IV】）における非臨床群の青年を対象として導き出された FBH を臨床例により検討する。そのため摂食障害，ならびに心身症周辺領域の疾患を有する青年を対象とし，家族構造との関連について検討する。その際，青年の病態を家族構造のあり方に起因させるのではなく，青年の病態の改善や心理・社会的な面での適応の回復という観点から検討していく。なお，本研究における本章の位置づけは，青年期の家族構造を，摂食障害，ならびに心身症周辺領域の疾患という青年の特殊なストレスにより検討することである。

7-1 目 的

第 4 章 (【研究Ⅱ】) ならびに第 5 章 (【研究Ⅲ】) の結果から生成した, FBH におけるバランス型の家族構造, つまり家族成員間の高い結びつきと均衡した勢力という特徴は, 第 6 章において, 摂食障害傾向という青年の特殊なストレス反応にも当てはまることが示された (【研究Ⅳ】)。しかしながら, 第 4 章 (【研究Ⅱ】) から第 6 章 (【研究Ⅳ】) は, 非臨床群の青年を用いた検討であり, 臨床群を用いた検討が求められる。

そこで, 実証研究の最後に, 青年の摂食障害, ならびに心身症周辺領域の疾患と家族構造との関連について, 少数事例検討を行う。加えて, 非臨床群の青年を対象として導き出された FBH を臨床例に適用し, その異同を検討する。その際, 青年の病態は個人の脆弱性を基盤として, 環境要因により誘発されるという観点 (Garner, 1993; Minuchin *et al.*, 2007, 中村・中釜 (監訳), 2010), 家族関係の改善と治療的予後の良好さ (Wewetzer *et al.*, 1996; Woodside *et al.*, 1996), 第 6 章で導かれた摂食障害傾向高群に分類される青年は, いずれの家族構造のクラスタにおいても存在していた点 (【研究Ⅳ】) を踏まえ, 臨床例において, 家族構造を病因論の枠組みよりも, 予後や適応の観点から検討を行う。つまり, 家族構造における成員間の結びつきの弱さ, そしてアンバランスな勢力関係が青年の病態をもたらすのではなく, 家族構造と青年の病態との相互作用の観点から検討する。したがって, 家族構造のあり方による病態の改善や心理・社会的な面での適応の観点も FBH の検討に加える。

7-2 方 法

1. 対象者と調査時期

2010 年から 2012 年までの間に, 東北地方の心療内科 A クリ

ニックを受診し、医師より臨床心理士である筆者に心理療法の指示があった摂食障害、および心身症周辺疾患の患者のうち青年期にあたる患者3名を対象とした。内訳は、男性1名(17歳)、女性2名(17歳、20歳)の計3名であった。調査はいずれも初診時をX年とし、X+1年の間に実施した。

なお、本章の臨床研究は、東北大学大学院教育学研究科研究倫理審査委員会の承認を受け実施した(承認ID:11-1-001)。

2. 調査への同意

調査を実施するにあたり、普段の医師による治療や心理面接の妨げにならないよう配慮し、数回の心理面接を経て、セラピストと患者との間に、ある程度の信頼関係ならびに治療構造が形成されたと(医師・筆者の2名それぞれが)判断した時点で依頼した。なお、調査は心理面接以外の時間で実施した。調査の依頼にあたっては、対象者の2名が未成年であったこと、また家族面接も併用して心理面接を実施していたことを踏まえ、対象者とその母親に対して同意書を基に、以下4点の説明を行った。

まず、①研究目的である、家族関係と青年のストレスとの関連を検討することを説明し、対象者とその保護者についての理解を深め、今後の支援に役立つ情報を得るために使用すること、②調査への協力は任意によるもので、随時、拒否・撤回でき、これにより協力者が不利益を被ることはないこと、③研究結果の公表に関しては、協力者のプライバシーを厳守し、個人が特定できないよう配慮すること、④調査はインタビュー形式であり、所要時間は10分程度であることを説明した。いずれの対象者、ならびにその母親も調査に同意し、同意書に署名を記載した。

3. インタビュー内容

インタビューの質問項目は以下の内容で構成される。

1) 基礎情報

年齢，性別，家族構成。

2) 家族構造の査定

青年の視点からみた家族構造を査定するため、ICHIGEKI(狐塚他, 2010; 野口他, 2009)を用いた。なお、第4章(【研究Ⅱ】)から第6章(【研究Ⅳ】)までの家族構造の検討を踏まえ、「結びつき」と「勢力」の2因子により査定した。

教示について「結びつき」では、お互いの仲の良さや親密さ、連帯感の強さを表すことを説明し、夫婦間、父子間、母子間において「全くそう思わない」～「非常にそう思う」までの6件法により回答を求めた。「勢力」については、誰の誰に対する勢力かを明確にするため、夫婦間、父子間、母子間の双方向(計6方向)から査定を行った。それぞれの影響力や発言力、決定力の強さであることを説明し、「全くそう思わない」～「非常にそう思う」までの6件法により回答を求めた。「結びつき」は得点が高くなるほど、各関係における「結びつき」が強いことを表し、「勢力」においても得点が高くなるほど、各関係における個人の相対的な「勢力」の強さを意味する。

これら各関係の「結びつき」と「勢力」について、「クリニックに通う以前の家族関係」と「今現在の家族関係」について、それぞれ筆者が口頭で質問した。

3) チェック項目

家族構造の査定について、Aクリニックに通う以前の家族関係の時期をどの程度、明確に想起出来ているかについてチェックするため、①いつ頃の家族関係を思い出したか、について質問し、現在から遡った年月を数値で確認した。②想起度については、どの程度思い出すことが出来たかを、「全く思い出すことが出来なかった」～「非常にはっきりと思い出すことが出来た」

までの6件法で口頭により回答を求めた。想起度については得点が高くなるほど、「Aクリニックに通う以前の家族関係」を良く思い出すことが出来たことを意味する。

4) 青年の経験するストレス

ストレスについては、「不安になったり，考え込んだり，動揺したりすること等」と説明し，①自分自身についてのストレス，②日常生活についてのストレス，③家族関係についてのストレスについて，「ある」か「ないか」について質問し，「ある」と答えた場合のみ，その内容の説明を求めた。次に，「ある」と回答し，内容の説明があった項目について，その頻度と認知について回答を求めた。頻度については「1 全くなかった～3 よくあった」まで，認知については「1 全く気にならない～6 非常に気になる」までのスケールを，筆者が口頭で説明し，回答を求めた。得点が高くなるほど青年の経験するストレスが高いことを意味し，0～18点までの値をとる。

7-3 結果

本研究の被験者は，いずれの事例においても，2，3週毎に約30分程度で筆者によるカウンセリングが実施され，経過途中であった。まず，事例の概要を示し，次いで，インタビュー調査を行うまでの経過を示す。

主な概要は，①受診時および現在の年齢，②家族構成，③受診時の主訴と診断，④身体状況¹⁷である。なお，事例1，ならびに事例2では調査実施まで6～9回の家族療法を実施している。これは，摂食障害の症例において，治療に抵抗を示し，難治，遷延化する可能性が示唆されているため（久保木，1997），そのリスクを回避し，良好な治療関係を構築することを優先し

¹⁷ ここで身体状況を記載するのは，3事例のうち2事例が摂食障害（いずれも神経性無食欲症の制限型）であるため，身体状況の回復は重要な指標であると思われるためである。

た結果である。

最後に、インタビュー調査で得られた ICHIGEKI により査定した家族構造，ならびに青年の経験するストレスについての情報を示す。

事例 1 摂食障害（神経性無食欲症制限型）の女性

初診時 15 歳であり，現在は 16 歳，東北地方の高校の普通科に通学している。家族構成は，父（会社員）・母（パート）・3 人きょうだい（兄と姉）の末子である。X 年に母親と共に来院し，現在も母親と共に通院している。主訴は，ダイエットでやせてしまい，月経も停止してしまっただことであった。X 年－1 年の夏に薄着になった際，体型が気になり，その後ダイエットを開始した。母親からみると激やせし，食事も家族一人が食べる量の 10 分の 1 以下で，毎日 40 分ほどの運動をしている。現在の自身の身体状態を自己認識しているものの，体重が増えることに不安や恐怖を抱いている。性格は真面目でかたく，頑張り屋である。初診時の身体測定では，BMI¹⁸は 15.6，月経停止であり，医師は摂食障害（神経性無食欲症制限型）と診断した。身体状況の認識と教育を目的とした入院の必要性が判断され，他院で 2 カ月間の入院治療が行われた。退院後，A クリニックにて通院治療が開始された。再来時の BMI は 16.4 であり，薬物療法が継続されていた。1 日につき，抗うつ薬であるフルボキサミンマレイン酸塩 25mg，抑肝散エキス顆粒 5g が処方されていた。再来 3 ヶ月後より，筆者による家族療法が開始され，2～3 週間毎，9 回の心理面接実施後に，インタビュー調査によってデータを収集した。

¹⁸ BMI（体格指数：Body Mass Index）は，以下の計算式で算出される。BMI＝体重（kg）÷（身長（m）×身長（m））。一般的に BMI の標準は 22 といわれる。

初回（心理面接への導入）

医師との共通課題として、心理面接の 3, 4 回はラポール形成、ならびに、変化を導く介入を行うことよりも、本人（Patient; 以下すべて PT と記載する）や母親の置かれている状況や困難を理解することを意図した面接を行った。

筆者は、まず母親と PT の前で自己紹介を行い、PT のみと個別面接を行った。PT は、飲食店でアルバイトを始めたこと、高校で友人ができたこと、お金を貯めて行楽地に行くこと、勉強はほとんどが嫌いな教科だが頑張っていることを話した。筆者は、初対面で緊張しているにもかかわらず、様々な事を話してくれたこと、学校に通いながらアルバイトも行っていることを賞賛し、次回また同じように筆者と PT の 2 人で話し、次に母親、最後に合同面接を行うことを約束し終了した。

次に、母親との個別面接では、PT のアルバイトについて、出来ないことも多く、家に帰ってきて泣くこともあるが、休まず頑張っていること、PT が友人とコンサートに出かけ、その時に友人とアイスクリームを食べたことが話された。一方で、PT は肉と炭水化物は絶対に食べない、魚と野菜を決まった量を量り、味見や他の料理を触った箸を一切使わない等、強迫的な側面があることも母親は話した。筆者は、「繊細なお子さんに対してアルバイトに送り出したり、そこでの愚痴を聞いたり、食事に気を遣ったり等、大変な状況で上手くやられている」と話し、「ご自身を責めてしまうようなこともあったかもしれません。母親のせいではないが、母親の関わりが PT の安定にとって重要なこともあるため、今後も、この面接構造でやっていきますか」と話すと、母親は涙を浮かべて同意した。最後に合同面接を行い、面接構造の確認を行い終了した。

第 2 回～第 4 回の面接過程（PT と母親の理解を目的とした面接）

PT との個別面接では、前回の面接から今日までの出来事として、PT は土日も含めアルバイトが週 4 回あり、週 2 回は塾があること、学校のテストの時もアルバイトを休めないこと等話す。PT は、「アルバイトはきつく、上手くいかないこともある。楽そうにみえる仕事でも、働いてみると色々大変なことがあるということを理解できたことが良かった」と話した。筆者は、大変な状況でもアルバイトを続けたいと思うことに賞賛と同意を示し、合わなかったら辞めるという決断もあるが、辞めるということを決めて、それを伝えることも重要なことであることを伝えた。一方、母親との個別面接では、アルバイトがきつく、たびたび自宅で泣くこと、体力を消耗しきってしまうこと等が語られた。また、高校では体育を休んでいるにも関わらず、アルバイトをしているという状況について、担任から指導があったことを話した。しかし、母親としては PT の意見を尊重すること、アルバイトで他者と関わることで柔軟になって欲しいことを話し、筆者も母親の意見に同意し、面接を終了した。

2 週間後の第 3 回目の面接で、PT から「アルバイトを辞めました。直接店長に辞めることを話したら、少し怒られました」と報告があった。筆者は「とても言いにくいことだし、アルバイトにそのまま行かなくなるという決断もあったと思うけど、よく辞めることを直接話せましたね。なかなか直接言えることではないよ」と伝えた。PT は今後、週 2 回程度のアルバイトを探すこと、今は学校のテストも終わり、少しリラックスしていること、学校のテストではクラスで 1 位だったこと、図書館で週 3 回程度、読書をしていることを話した。今回、PT 自身の問題点として、学校でトイレに行きたくなってしまうため、水を飲むことを面倒に思ってしまうことが語られた。筆者は「これから暑くなるから、体調崩した方がもっと面倒かもしれない。

特に校長先生の話は長いからね」と伝えると、PTは「一日で水を500mlのペットボトル1本は飲む練習をするようにしたい」と述べた。一方、母親との面接では、アルバイトを辞めた時について、PTが言いにくかったことをはっきり言ったことは良かったが、店長からは「普通の子だと思っていたのに」と言われ、PTはしばらく暗く元気がなかったことが語られた。PTのみならず、この件で母親自身も感情的になってしまい、アルバイト先の店長とケンカをしてしまったことが語られた。しかし、母親自身、そしてPTも2、3日で落ち着き、現在は気になっていない様子であった。その他、PTの食べるものはほとんど変わっていないが、体調が良いことが話された。さらに、最近では、食べ物のお話をするようになり、例えばTVを見ている時に「あの野菜食べてみたい」といった発言がみられるようになり、久しぶりに食べ物のお話を母子で交わしたことが語られた。

第4回の面接では、来院時間の都合から数分程度であったが、母子の合同面接を行い、毎日学校に通い、水を1日につき500mlを飲むという習慣を続けていること、また、家族で外食に出かけたことが語られた。筆者は外食のエピソードについて尋ねると、母親が誘うとPTはとりわけ嫌がる様子もなく出かけ、ほとんど食べなかったが楽しんでいた様子であった。筆者は、体のために食べるのではなく、楽しんで食べることを功を奏していること、また、母親の食事に誘った行動を賞賛し、面接を終了した。

第5回～第7回（PTの変化の兆しと短期的な目標設定）

PTとの個別面接では、ここ最近、PTは自宅近くの食料品店に自分でアルバイトを募集しているか否かを電話で確認し、面接に行き、再度アルバイトを始めたことが話された。PTは、「まだ始めたばかりだが、以前のアルバイトとは異なり、これからもやっていけそう」と話した。また、中学時代の知人も働いて

おり、PTの情緒的なサポート源として機能している様子であった。母親との個別面接では、以前のアルバイトとは異なり、まだ数日ではあるが特に疲れ切った様子もなく、とりわけアルバイトを始めてから、とてもいきいきしていることが語られた。一方で、PTの固さ、柔軟性のなさが目立つこと、例えば、先日も自宅で間食するか否かについて悩み、結局、間食することを我慢してしまった。母親としては、「もっと気楽に楽しんで食べて欲しい。それを言っても通じない」ことが話された。

合同面接において、筆者は、PTに対し、新しいアルバイトを探し、働くことを自分で決めたこと、母親に対しては、心配も多くあったと思うが、PTが自分で決断し実行することを見守った姿勢について賞賛した。その上で、筆者は、今後この面接で扱う目標や目的について尋ねた。PTは戸惑った様子で「今は思いつきません」と話し、母親は「高校生なので暇な時は家のことを少しやってほしい」と話した。加えて、これまで母親はPTの指示に従い、PTの食事のみ家族と異なる食事を作ってきたことや、仕事と家事の両立についての苦労を話した。筆者は、母親の要望に対し、「お母さんは、娘さんに家のことを少し頼みたいということだと聞いていて思いました。お母さんも仕事と家事だけでなく少しでも何か自分のために使える時間も欲しいのではないかと思いました」と伝えた。これに対して、母親は「仕事が忙しい時に何かお願いしたい」と話し、PTは「少しなら。でも味見をするのいやだな」と返答した。筆者は「食事ではなくても良いので、お母さんの帰宅が遅い時に、お母さんが何か頼むかもしれません。でも、お年頃の娘さんだから遊ぶことに夢中になって忘れることが多いかもしれませんね」と話すと、PTは何かできることがあったらやってみることを話し、面接を終了した。

第6回の合同面接では、PTは学校が休みになり、週3回程度アルバイトを行い、「覚えることが多くて忙しいけど、とても

良いアルバイト先で楽しい」と話した。加えて、高校の友人とコンサートに出かけ、「他のことが考えられないくらい興奮した」と楽しそうに語った。また、母親からは、家の手伝いを週3回程度、母親が仕事で帰りが遅い時、またそれ以外の時でも、自分で食べる魚を焼いたり、野菜を茹でたりといったことや家族で食べるお米を炊いてくれること等のエピソードが語られた。これに対して母親は「とても助かっている」と述べ、父親も「PTは気が利くんだな」と、とても喜んでいたエピソードが語られた。筆者は「週3回くらい実施しているとは驚いた。ちょっと頑張り過ぎじゃない」と、伝えると、それを聞いたPTは照れ臭そうに筆者から目を逸らし、苦笑いをしていた。筆者は、「この機会に、お母さんから花嫁修業として料理を教わったらどうですか」と話すと、母子共に笑いながら、PTは「お母さん全然料理駄目なんです。一緒に作ると遅くていらいらする」と冗談の意味を込めて話した。一方、母親も「本当に下手なんです」と苦笑いをしていた。筆者は、「では、お母さんも花嫁修業のため、お二人で料理教室へ行って下さい」と話し、皆で笑い、面接を終了した。

第7回の面接では、合同面接にて、学校に文化祭の準備で登校していること、クラスでダンスの練習を行っていること、アルバイトは休むことなく行い、段取りもつかめてきたこと、友人とショッピングに出かけアイスクリームを一緒に食べ、「とても美味しかった」と話すこと等、PTの様々な活動が語られた。母親からは、家族のための手伝いは続けてくれるので助かっていること、風邪を引くこともなく体調も良いこと、体重に変わりはなく、まだ増やした方が良くと思うことはあるが、PTはとても落ち着いて生活できていることが語られた。加えて、最近の変化として、専門学校の資料を取り寄せていること、進路への興味が出てきたことが語られ、「娘の意向を尊重しながら進めたい」と母親は語った。筆者はこれらの変化をフィードバック

した上で、「お母さんも PT も頑張りすぎでは。お母さんの仕事のない日に出かけ、たまには思いっきり遊んでみては」と提案し、面接を終了した。

第 8 回～第 9 回（PT の活動範囲の拡大と安定した生活状況）

PT は、文化祭の出し物として 1, 2 分程度のダンスを練習していること、それにより「ちょっと疲れている」ことを話した。さらに、アルバイトも順調に続けていることが語られた。一方、母親と映画を見に行ったこと、友人とは夏祭りに出かけたことも語られる。母親からも、PT が友人と出かけ、アイスクリームを一緒に食べたこと、また母親自身とも映画に出かけ 2 人で楽しんだエピソードが語られた。

第 9 回の PT との個別面接においても、PT は文化祭で練習してきたダンスを披露し、友人と騒いでとても楽しかったこと、友人と屋台でかき氷を食べ楽しく過ごしたことも語られ、いずれも、毎日が充実した日々であるという内容を話した。母親との個別面接でも、決まった量ではあるが毎日の食事を欠かさずとっていること、文化祭で友人と楽しく過ごした出来事を自宅で話すこと等を報告し、母親からみても PT は安定していることが語られた。また、母親自身も友人とお茶をしたり、食事をしたりするといったことを行い、「生活にゆとりが出て来た」と語った。一方で、母親は「PT の食べ物に対するこだわりや食事の量は変わらないが、定期的に食べているので、無理に食べさせることはしたくない」と話した。筆者も母親の方針を支持し、体のためにではなく、家族や友人と楽しんで食べることを、また食べる食べないにこだわらず、PT が元気になることといった方針を再確認し、面接を終了した。

筆者ならびに医師は、これまでの面接経過から、インタビュー調査の依頼が出来る時期と判断した。なお、筆者が PT と母親に調査の説明を行ない、同意を求めた。両者共に承諾し、母

親が同意書に署名を行い、その後インタビュー調査を実施した。なお、参考として、インタビュー調査時の身体状況は BMI17.6 であった。

次にインタビュー調査で得られた、ICHIGEKIにより査定した夫婦間、父子間、母子間それぞれの「結びつき」、ならびに「勢力」得点の記述統計量を算出し、得点化を行った¹⁹。A クリニック来院以前の家族構造、ならびに現在の家族構造を **Figure 7-1** に示す。なお、A クリニック来院以前の家族構造については、現在から約 1 年前の家族構造を想起し、想起度については「全く思い出すことが出来なかった」～「非常にはっきりと思い出すことが出来た」までの 6 件法で 4 点と回答している。自身の家族関係については、「家族と(特に母親と)口論はあるが、すぐに仲は戻り、基本的に仲は良い」とコメントしている。

ストレッサーについては、質問 2 の日常生活でのストレスが該当し、「担任から大学進学や勉強面でのプレッシャーをかけられる」と、回答した。具体的には「テストの成績が下がったら学校とアルバイトの両立ができていないじゃないかと、担任から言われる」と回答した。ストレッサーの経験度²⁰は 3 点であった。

¹⁹ 第 4 章 (【研究Ⅱ】) から第 6 章 (【研究Ⅳ】) までの得点化にならい、ICHIGEKI の下位尺度である勢力得点は、父親から母親への得点から母親から父親への得点を引いた値を夫婦間の勢力得点とした。父親(母親)から青年への得点から、青年から父親(母親)への得点を引いた値を、それぞれ父子間、母子間の勢力得点とした。夫婦間では、得点が高いほど父の勢力が強く、父子間・母子間では、勢力得点が高いほど父親(母親)の勢力が強いことを意味する。以下事例 2 から事例 3 まで同様の方法で計算を行った。

²⁰ 得点化は菊島(1999)の方法を参考に、経験頻度得点については「全くなかった」を 0 点、「時々あった」を 1 点、「よくあった」を 2 点とし、認知度得点については、「全く気にならない」を 0 点、「気にならない」を 1 点、「あまり気にならない」を 2 点、「少し気になる」を 3 点、「気になる」を 4 点、「非常に気になる」を 5 点として得点化を行い、経験頻度得点と認知度得点を掛け合わせた点数を各ストレッサー得点とした。なお、得点が高くなるほど青年が経験するストレッサーが高いことを意味し、得点は 0 点から 18 点の範囲である。事例 2 から事例 3 まで同様の方法で算出した。

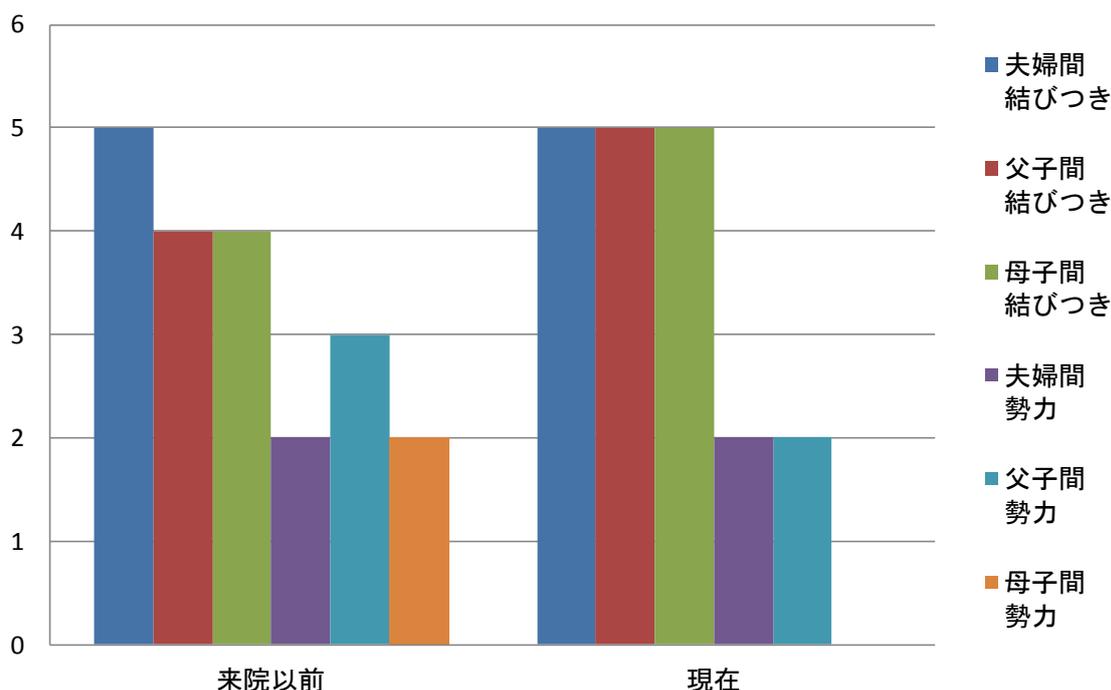


Figure 7-1 事例1の家族構造クラスタ

注. 現在の母子間の勢力得点は0点である

事例 2 摂食障害（神経性無食欲症制限型）の女性

PTは初診時18歳であり、現在20歳である。父（会社員）・母（専門職）・3人きょうだい（姉と弟）の第2子である。Aクリニックには、母親と共に来院した。主訴は、食欲はあるもののあまり食べられないということであった。体重が4年間で10Kg減少し、体力低下、元気が出ず、PTは「淋しい」と語っていた。X-4年から不登校であり、食後の悪心を恐れて食べないようにしている。性格は、神経質、負けず嫌い、不安が強いといった特徴であった。現在は自宅近くでサービス業のアルバイトに就いている。来院時の身体測定ではBMI12.8、月経停止であり、医師は摂食障害（神経性無食欲症制限型）と診断した。身体状況の認識と教育を目的とした入院の必要性を判断し、他院で入院治療を開始した。1カ月後に退院し、同月Aクリニック

クに再来した。再来時の身体状況は、BMI14.9、月経停止であった。薬物療法が継続され、1日につき、抗精神病薬であるスルピリド 400mg、睡眠導入剤であるニトラゼパム 10mg、抗不安薬であるロラゼパム 0.5mg、抗うつ薬であるミルタザピン 15mg、抑肝散エキス顆粒 5g が処方されていた。X+2年から、スルピリド 400mg、ニトラゼパム 10mg、ロラゼパム 0.5mg、ミルタザピン 15mg、抑肝散エキス顆粒 5g が処方される。X+2年から筆者による家族療法を実施した。それと併用して、スルピリド 300mg、ニトラゼパム 10mg、ロラゼパム 0.5mg、ミルタザピン 15mg、抑肝散エキス顆粒 5g が処方されていた。調査は2～3週毎、6回の心理面接後に実施した。

初回（心理面接への導入）

筆者は母親とPTそれぞれに自己紹介を行い、初めにPTのみと個別面接を行った。筆者が「初めてで緊張しますよね。お母さんと一緒の方がいいですか」と尋ねると、PTは「大丈夫です」と答える。面接室に入り、PTの比較的話しやすい最近の生活状況の話から始めた。PTは1ヶ月前から近所で接客業に従事し、月20日、1日5.5時間のアルバイトを始めた。アルバイトは、まだ慣れないこともあるが、アルバイト先はとても良い人達が多く、働きやすい環境であり、「まだアルバイトで覚えられないことが沢山あるけれども、充実している」と話した。また、休日は外出せず、昼寝やインターネットをして過ごしていることを話した。筆者が「アルバイトを始めたばかりだし、慣れないこともあると思うけど、この面接で話したいこと、今困っていることはどんなことですか」と質問すると、PTは「自宅で食べることや飲むことは大丈夫ですが、外出先で飲食をすること、特に水分をとることをしたくない」と話した。筆者が詳しく尋ねると、PTは、外で水分をとることで「もしかしたら気分が悪くなるかもしれない」という不安から、実際に気持ち

悪くなったことはないが、気になってしまうということ等、飲食にまつわる問題を話した。筆者は、面接の初回だが、様々なことを話してくれたことや水分をとることの不安もありながらアルバイトを頑張っていることをフィードバックし、「今日話してくれた問題も含め、今後は2, 3週間毎に母親も含めて3人で、何か課題を決めて解決策を話し合っていきませんか」と、提案した。PTは「わかりました。お願いします」と返答し、母親と2人で話しても良いかを確認した後、母親と個別面接を行った。

筆者は、「先ほど娘さんと話して、今、アルバイトをととても充実感をもって頑張っているようですね」と話すと、母親は「そうなんです、とても良い環境です。でも、娘は昔から負けず嫌い、完璧主義で自分の考えを曲げないところもあります。やはり飲食のことが気になります。自宅では、1日にみそ汁を朝晩で2杯、薬を飲む時の水、そして乳飲料を3本程度しか口にしません。これまでは家の周辺のみが活動範囲で、自宅ではほとんどリビングで寝ていました」ということ等、PTの問題も交えて話した。筆者は「そうすると、今のアルバイトは、娘さんにとって有益ですね。しかし、アルバイトはどういったきっかけで始められたのですか。難しかったのではないのでしょうか」と、質問した。母親からは、PTの姉が就職することになり、その時期にPTも20歳になることが重なり、PTに「いつまでお小遣いにする」と質問し、求人情報をみせて「家の近くだから行ってみたら」と声をかけたことが話された。また、「アルバイトを始めて人と話をする機会ができたことが何よりも良かったです」と付け加えた。筆者は、母親のPTに対する声掛けのタイミングや娘さんを尊重する接し方が素晴らしいことをフィードバックした上で、「娘さんは、大人として扱っていくことが良さそうですね」と伝えると、母親は、「初給料が出たので、夫婦2人で映画に行ったら」と、PTから提案があったことをとても嬉

しように話した。これを受け、筆者が、今後もこの面接構造で進めて行くことを提案すると、母親は「よろしくお願ひします」と答え、最後に合同面接で面接構造を確認し終了した。

第 2 回～第 3 回（飲食に関する PT の肯定的変化）

第 2 回の面接において、PT は、アルバイトを休むことなく続け、叱られることもあったが、今後も頑張りたいことを話した。また、休憩時間にスタッフと話すこともあり、給料は好きなアニメーションの DVD をまとめ買いしたことや貯金したことも話した。さらに PT は、立ち仕事なので足が痛くなることもあるが、これからも続け、今後は仕事を覚えて頼られる人になり、アルバイト先で少しでも役に立ちたいという目標を話した。前回の問題点として挙げた、出先で水分をとることについて、今回は麦茶を 2 口飲むことにチャレンジし、特に気分が悪くならなかったことを話した。筆者は、アルバイトへの意欲と水分をとることにチャレンジできたことについてフィードバックし、さらに良い状態に進むよりも、今の状態を維持できるように告げ、母親との個別面接を実施した。母親は、PT の様子について、アルバイトが始まる前、そして帰宅後は、疲れているせいか眠ることが多くなったが、今まであまり PT の意欲を感じられなかったので、アルバイトを通じてそれが芽生えてきたように感じられることを話す。さらに、PT は朝に洗濯の手伝いをしてくれるようになり、家族、特に父親との会話で、アルバイト先での失敗談を話し合う様子がみられるようになった。しかし、食事に関しては家族で気を遣ってしまい、外食に行きたいと考えているものの、3 年以上前から行くことをためらっている状況であった。筆者は、PT がアルバイトや家事といった活動を通して自信を持つことが重要であることを確認し、何かのイベント時に家族で外食する機会を設けることを提案した。母親は、父親が外食を希望していること、母親自身もそろそろ

外食に誘ってみようか考えていたことを話した。筆者は、「娘さんは家族で外食にいつでも食べないこともあると思います。しかし、家族でそういった時間を過ごすことが重要かと思います」と、伝え、PTの様子を観察しながら誘ってみることを確認し、面接を終了した。

第3回のPTとの個人面接において、PTは「父の日に家族で食事に出かけました」と話した。詳しく尋ねると、外食は、PT自身も楽しむことができ、また普段自宅で話さないような子どもの頃の話をしたことについて語った。また、食事もとることが出来たことを付け加えた。筆者は「とても楽しい時間だったと思うけれど、普段あまり食べないものだから気持ち悪くなったりしたのでは」と尋ねるものの、PTは「まったくならなかった」と答え、さらに、父親にお礼を言われたことについて話した。筆者が「外食は気分が悪くなるからあまりしたくないと言っていたので無理して行ったと思ったけれど、とても楽しかった様子が伝わってくる。素晴らしい機会でしたね。外食というのはとても大きな出来事だったと思うけど、今回どうして行こうかなと思った」という質問をすると、PTは、自分で「このままじゃいけない」と考えるようになったこと、アルバイト先の食事会があるので、その練習もしたかったことを話した。一方、母親との面接では、3年以上も家族で外食していなかったもので何より父親が喜んでいて、自然に普段話さないような会話ができるよい機会だったと話した。筆者は「外食に誘うことはとても大変だったのではないのでしょうか、どのようにして誘われたんですか」と尋ねると、母親は夫と相談して自然な誘い方をしたこと、アルバイト先の食事会の練習として誘ったことを話す。PTが食事することのみにこだわらず、家族で楽しむことができたことについて強調し、面接を終了した。

第 4 回～第 5 回（アルバイト先でのトラブルと新たな課題）

PT との個別面接において、PT は最近の大きな出来事として、アルバイト先でトラブルがあり働くことが怖くなってしまったことが語られた。詳しく聞くと、客からクレームがあり、PT では対応しきれず、店長に対応してもらった出来事について説明し、これを機に PT は 1 日休んでしまい、今では違うアルバイトを考えていることを話した。一方でアルバイト先の打ち上げとして、10 数名でレストランに行った出来事が語られ、とても楽しく周囲と話すことができ、また食事にも気にせず食べることができたことを話した。両親からは、たまたま変な客に当たってしまっただけで、今のアルバイト先は、職場環境も良く、アルバイトにも慣れてきたため続けた方が良いと言われていることを話した。筆者は、これまで休まずに頑張ってきたこと、打ち上げで楽しく過ごしたことを強調し、あと 1 週間続けてみて、その後再度検討し、どちらにするか自分で決めてみることを伝える。母親との個別面接では、両親共に今のアルバイト先は、業務のみならず人間関係もとても恵まれた環境であり、PT も様々な面で成長したため、辞めて欲しくないと考えていることが話された。そのため、PT がアルバイトを辞めたいという話を自宅で話した時に、「そういうことはよくあることだから」という内容で話してしまい、結果的に夫と共に説教してしまったことを話した。加えて、「今思えば PT の気持ちを汲んで、もう少し話を聞けば良かった」と後悔していることが話される。筆者は、「お母さんも旦那さんも、娘さんのことを思っていることですね」と伝え、合同面接を行なった。合同面接では、筆者がまず PT に対し「少し特別なことがあったけれど、打ち上げで楽しく過ごしたり、同僚と食事に行ったりしたことは素晴らしいことでしたね。ご両親も PT の生き生きと働く姿をみて、続けて欲しいという思いがあったと思います」と伝えた。また、アルバイトを一日休んでしまったことに対しても、自分の気持ち

や体調に合わせて、休みを取れたことは決して悪いことではないことに言及した。

第 5 回の面接では、PT は「いろいろありましたけど、山は越えました。アルバイトに行きたくない時もありますが、まだ頑張っていて続いています。少し年齢が近い同僚と話をすることが増えてきました」と話した。筆者は、どうしてまた頑張ろうと思えたのかについて質問すると、PT は「従業員から少し会話の不足を指摘されて、自分から話しかけるようにしました。そしたら、相手から話しかけられるようになって。他には、店長が変わり、とても厳しい人になったけれど、私の仕事をみて『とても上手いね』と褒めてくれた」といったエピソードが語られた。筆者はアルバイトを続けることを自分で決めて、休まず続けていること、積極的に他者と関わっていることを賞賛し面接を終了した。一方、母親との面接では、トラブル発生後から、1 日休み、また渋々行き始めた。しかし、アルバイト先から母親にメールで「もう帰りたい」、「やめたい」等のメッセージを送ってきたが、母親は「気にしないでやってみなさい」と言って対応していた。2, 3 日は気持ちが揺れた時期が続いたが、結局 PT 自身で克服し、今では文句を言わずに頑張っていることが話された。母親は、「今まで一つでも嫌なことがあると、全てを投げ出すことがほとんどだったので、PT が自分で納得し、葛藤を克服できたことに成長を感じた」と話した。筆者はこの考えに同意すると共に、改めて夫婦の PT に対する関わりを賞賛し、合同面接に移行した。合同面接において筆者は、今回のアルバイト先での出来事についての母親の考えを尊重し、母親の考えを PT に伝えることを促すと、母親は「相当動揺したと思うけれど、よく自分で決断して実行出来た。そしてやるからにはアルバイト先の人とコミュニケーションをとり、一生懸命休まずやっていることは本当にすごい。私もお父さんも今回のことでは、お説教みたいになってしまっこともあったけど、自分

で克服できたことは素晴らしいと思っている。これはお父さんも褒めていた」と話した。PTは照れた様子で何度も頷いた。

第6回（今後の課題についての設定）

PTとの個別面接では、アルバイトを休むことなく続けていること、以前の出来事（客からのクレーム）はなく、またそういったことがあっても、毅然とした態度をとっていることが語られた。また、アルバイト仲間と以前よりも自然に話せるようになったことが話された。その他、他県で働く姉が里帰りしたため、家族で食事に行き、その後カラオケにも行ったエピソードが語られた。筆者は、生活状況が落ち着いている点を含め、様々なことが上手くいっていることを伝えた上で、今の課題について質問した。PTは、「朝ご飯を食べ、一段落すると再度寝てしまうため、午前中、もしくは夜に時間を上手く活用すること」と述べた。筆者は、難しい問題だから母親を含め、3人で知恵を出し合って決めることを提案し終了した。合同面接では、まず筆者の感想として、PTはアルバイトや食事について、とても努力していること、そして両親もそのことを認めていることについて触れた後、「今、アルバイトに体力と気持ちを使って疲れてしまうこともあるので、現状を維持することも重要だと思う。一方で、時間を上手く使う、という次のステップに移行する時でもあるように思います。難しいので、PTやお母さんの意見も交えて考えたいと思います」と述べ、PTがやりたいことや出来そうなこと、母親の希望、筆者の希望をとりあえず出して、話し合うことを提案した。PTからは、絵を描くことと踏み台昇降、母親からは掃除とラジオ体操、筆者からは草むしりを提案した。話し合いの結果、まず掃除（モップ掛け）と絵を描くこと、そしてその絵を、次回の面接に持参することに決定した。最後に、筆者から「他に何か絶対今日言ってやる、と思っていることは」と、質問するとPTは「この前、家族でスイカを食べて、美味しかった」と話し終了した。

筆者ならびに医師は、これまでの面接経過から、インタビュー調査の依頼が出来る時期と判断した。なお、筆者がPT、ならびに母親に説明を行ない、同意書に署名を求めた。両者とも承諾し、母親が署名を行い、その後インタビュー調査を実施した。なお、参考として、インタビュー調査時の身体状況はBMI20.8であった。

次にインタビュー調査で得られた、ICHIGEKIにより査定した夫婦間、父子間、母子間それぞれの「結びつき」、ならびに「勢力」得点の記述統計量を算出し、得点化を行った。Aクリニック来院以前の家族構造、ならびに現在の家族構造を **Figure7-2** に示す。なお、Aクリニック来院以前の家族構造については、現在から約2年前の家族構造を想起し、想起度については「全く思い出すことが出来なかった」～「非常にはっきりと思い出すことが出来た」までの6件法で4点を回答している。自身の家族関係については、「基本的に家族関係は変わらず、口には出さないが親を信頼している」とコメントしている。

ストレスナーについては、質問2の日常生活でのストレスが該当し、「アルバイトに行きたくないという思い。接客したり、文句を言われたり等の業務内容」と回答する。ストレスナーの経験度は2点であった。

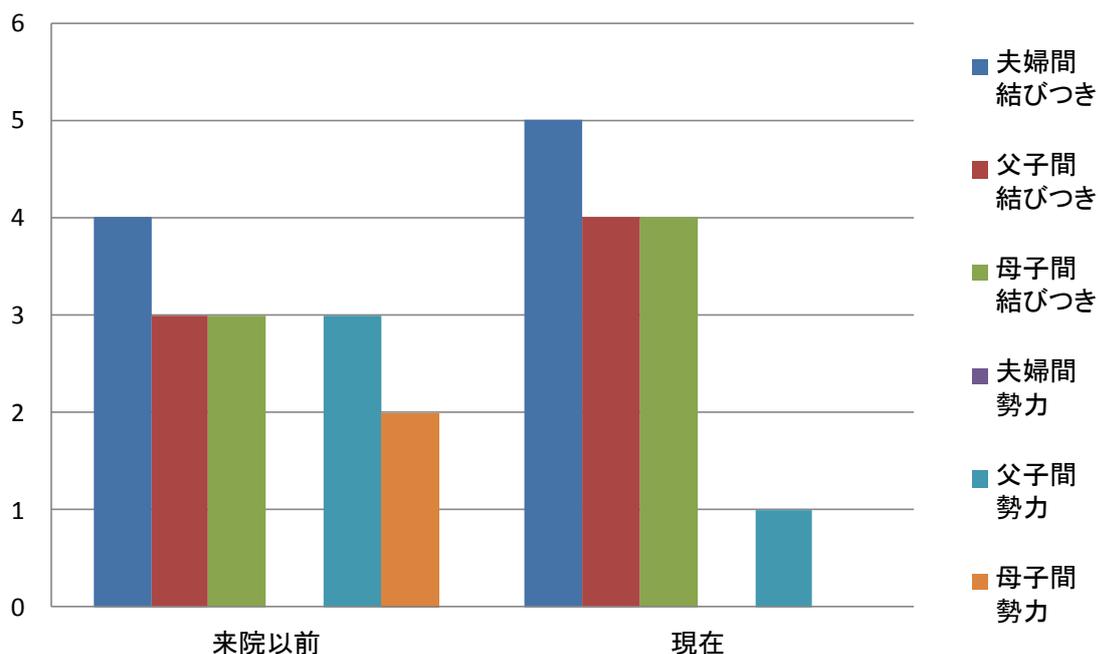


Figure 7-2 事例2の家族構造クラスタ

注. 来院以前の夫婦間の勢力得点, 現在の夫婦間, ならびに母子間の勢力は0点である

事例 3 倦怠感と腹部違和感を主訴とする男性

PT は受診時 17 歳であり, 東北地方の高校に通学している。家族構成は, 父 (会社員)・母 (専業主婦)・PT の 3 人家族である。X 年 8 月, 母親と共に来院した。口数が少なく, おとなしく, 根気がない性格。主訴は, 体のだるさ (毎日ではないが 1 日中), 腹部の違和感, 気力がない, 勉強も手につかない, 学校も休みがちというものであった。母親は, まったく勉強しない, 休みの日も家にずっといる, 友人との交流もない, 学校に行かず昼まで寝ている, 唯一の興味はスポーツ観戦のみであることを訴えた。初診時の検査では, 身体的所見は認められず, 同月, 筆者による心理面接が開始された。医師は, 心身症周辺領域の可能性から, 処方は 1 日につき整腸薬である酪酸菌配合剤 3 錠であった。なお, インタビュー調査は, 2~3 週毎, 3 回

の心理面接実施後に実施した。

初回（心理面接への導入）

合同面接により、母親を交えて問題の共有と目標設定、また、それに伴う PT の来院意欲を高めることを目的とした面接を行なった。PT は高校に入学した頃から、体がだるく気力が出ないため、入学してから勉強に意欲が出ず、15 日程度の欠席が続いていることが母親から話された。母親によれば、特に夏休み頃から、昼頃まで寝ている状況が続いているということだった。それに対し、PT は「横になっているのは寝ているのではなく、だるいので起きられないだけ」と話す。母親は、PT は昔から転校を繰り返して、友人も少なく、周囲に馴染めなかったことを話した。PT は特にだるさを感じなかった時として、中学時代を挙げた。その頃は、受験勉強に集中したり、スポーツに打ち込んだりしていた。現在は、夏休みも終わり、生活が変わったこと、軽い運動を始めたこともあり、夏休み時よりはやや改善していることを話した。このような状況で、PT は、「はやく治したい」と話す。筆者は、PT と母親それぞれに目標を確認した。PT は、まず早起き出来るようになること、勉強をやる気になり、少しでも取り組めるようになることを目標として挙げた。筆者は、「その気持ちは素晴らしけど、高校一年生で早起きや勉強に取り組むという目標は難しいのでは」と、質問すると、PT は「いずれはそうしようと思っていたので大丈夫です」と返答した。母親は、今より少しでも前向きになってほしい、家で寝てばかりではなく、少しでも元気に活動できるようになってほしいと話した。これらを受け、筆者は、今後も継続して面接を行っていくことを伝え、面接を終了した。

第 2 回～第 3 回（PT 自身の解決努力の促進）

PT はここ 2 週間、1 日も休まず登校し、15 分程度毎日ラン

ニングをしていた。加えて、週末に父親が帰宅した際に、キャッチボールを始め、「運動は好きなので続けたい」と述べた。また、母親は「早起きは出来ていないが、以前よりもいくぶん元気で、学校にも休まず通っています」と話した。加えて「今、私が何を言っても聞かない」と述べた。筆者は、「反抗期」と、切り出すと、PTは「まさに今それだと思います。すごくいらすらし、何か言われると、うるさいと思ってしまう。でも、親がいろいろ言う気持ちはわかるし、言われて当然だとも思っている」と話した。筆者は、「そういうことを自分で理解していること、そして、母親の前で、自分の気持ちを言えることも重要です」と返す。続けて、筆者は、前回の問題として挙げられた、だるさについて、「最悪な時を0点として、中学の時くらい元気を10点とすると前回は何点か、今回は何点か」を質問した。PTは前回は2点で今回は4点と答え、2点の上昇については、気力が以前よりも出てきたこと、その理由は勉強が少し出来ていること、休まず学校に行けていることを評価ポイントとして挙げた。筆者は、まずは、家族関係にPTの問題を関連させていくよりも、本人の対処行動に焦点を当て、「気力が少し上がったことは何が良かったか、自分で気分を上げるには何が有効か」を次回までに観察してくることを課題とし、面接を終了した。

第3回の面接では、PTが医師による診察の間、母親と個別面接を実施した。母親は、PTが前回に続き一日も休まずに登校していること、夜9時過ぎに15分くらいのジョギングを毎日続けていること、以前に試験を受けなかったので追試に追われる日々を送っていることを話した。その後、PTを交え合同面接を行い、週2,3回、朝5時頃に起きて、スポーツニュースやゲームを楽しんでいること、学校に休まず通うことができていることが話された。加えて、前回の課題については「暇な時、特にだるさを感じる。運動することは良いように思う」と、話

した。筆者は、「ちょっと改善が早過ぎて、逆に心配です。もう少しゆっくり行きましょう」と話し、面接を終了する。

筆者は、ここでインタビュー調査の依頼を行った。その後、母親の関心からフィードバックの依頼があったが、両者とも承諾し母親が署名を行った。筆者はフィードバックの約束を交わし、その後 PT のみにインタビュー調査を実施した。

次にインタビュー調査で得られた、ICHIGEKI により査定した夫婦間、父子間、母子間それぞれの「結びつき」、ならびに「勢力」得点の記述統計量を算出し、得点化を行った。A クリニック来院以前の家族構造、ならびに現在の家族構造を **Figure7-3** に示す。なお、A クリニック来院以前の家族構造については、現在から約 2 ヶ月前の家族構造を想起し、想起度については「全く思い出すことが出来なかった」～「非常にはっきりと思い出すことが出来た」までの 6 件法で 6 点を回答している。

ストレスナーについては、質問 1 の自分自身についてのストレスが該当し、「自分自身の性格について。何でもめんどくさいと思ってしまうこと、細かいところもあればおおざっぱなところもあり極端。自分自身の体格について、背が小さく、細いこと」と回答する。ストレスナーの経験度は 8 点であった。

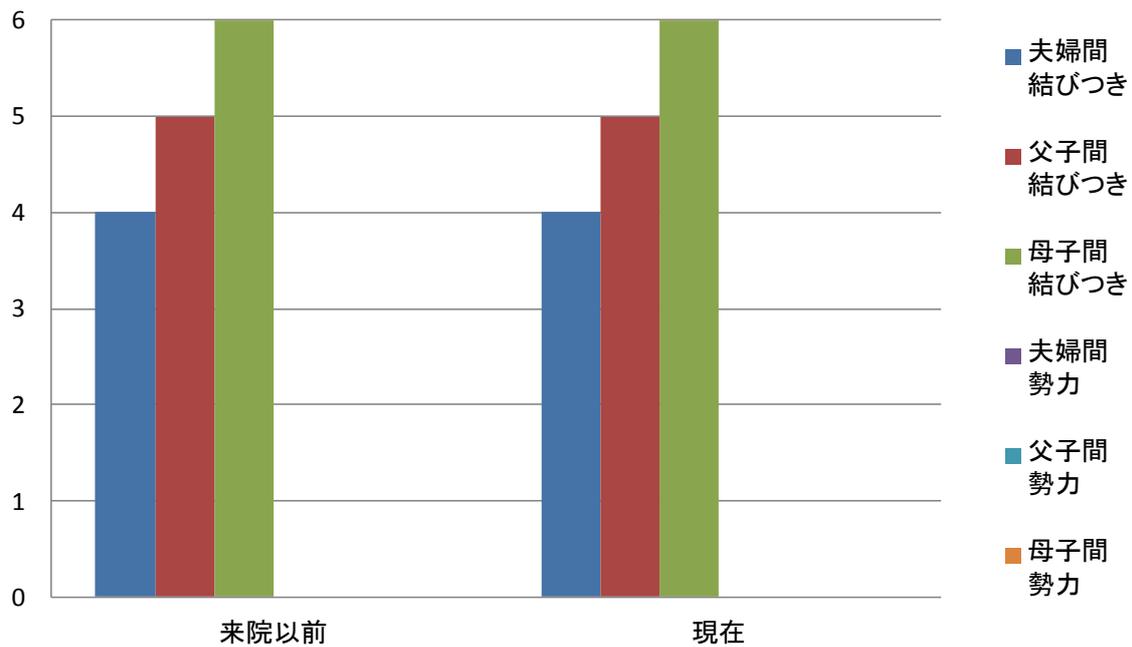


Figure 7-3 事例3の家族構造クラスタ
 注. 勢力得点は, 来院以前, 現在共に0点である

7-4 考 察

本章（【研究 V】）では，非臨床群の青年を対象として導き出された FBH について，青年の摂食障害，ならびに心身症周辺領域の疾患と家族構造との関連について，臨床例を用いて検討することを目的とした。その際，家族構造を病因論の枠組みではなく，予後や適応の観点から検討を行った。

1. 各データの妥当性に関して

いずれの事例においても治療関係を優先したため，3～9回の心理面接後に調査の依頼を行い，Aクリニック来院以前の家族構造は想起という方法を用いた。調査時の回数にばらつきがみられるものの，3事例全ての被験者が調査に対して同意し，インタビューに対しても真摯に回答する姿勢がみられた。なお，

A クリニック来院以前の家族構造の想起度については、「全く思い出すことが出来なかった」～「非常にはっきりと思い出すことが出来た」までの6件法で回答を求めた。その結果、事例1では、1年前を想起し想起度は4点であった。事例2では、2年前を想起し想起度は4点であった。事例3では、2ヵ月前を想起し、想起度は6点であった。よって、調査に対するコミットメントや態度、想起度についても4点以上を回答していることから、各データには一定の妥当性を付与できると考えられる。

2. 家族構造の変動と仮説の検討

次に本章（【研究V】）の主たる目的であるFBHの検討を、事例の概要と家族構造の変動、青年のストレスを踏まえ考察する。その際、事例研究という質的な検討を行うため、家族構造の得点ではなくクラスタが示すグラフの形状から読み解いていく。まず、3事例いずれも心理面接の途中経過であり、事例3においては来院から2ヵ月後にデータ収集を行ったため、来院以前と現在の家族構造に全く変動はみられなかった。しかしながら、事例1、ならびに事例2の摂食障害（神経性無食欲症制限型）の青年女性において、2時点における家族構造の形状にわずかな変動がみられた。

事例1においては、来院以前に比べ、現在において、父子間、母子間の結びつきの上昇と父子間、母子間において親側の勢力の低下と共に均衡した構造に近づき、FBHにおける3者間の結びつきを基盤とし、勢力が均衡した構造というバランス状態に近づくグラフの形状を示した。来院時において、BMIは16.4であったが、調査時にはBMI17.6とわずかな上昇があった。さらに、事例の概要に示したように、アルバイトに従事し、友人関係においても年齢相応の関わりをもち、食事に対する否定的な態度も低減するといった、心理・社会的な面での適応もみられた。現在のストレスについては、日常生活でのストレス

が該当し、「担任から大学進学や勉強面でのプレッシャーをかけられる」、具体的には「テストの成績が下がったら学校とアルバイトの両立ができていないじゃないかと言われる」と、回答している。しかし、ストレスサーの経験度は18点を上限として3点であり、とりわけ大きなストレス下にあるとは考えにくい。高校生の一般的なストレスサーとして解釈することが妥当であると判断する。

さらに、事例2においても来院以前に比べ現在において、3者間の結びつきの上昇と父子間、母子間において親側の勢力の低下と共に均衡した構造に近づき、FBHにおけるバランス型に近づくグラフの形状を示した。来院時における身体状況はBMI14.9であったが、調査時にはBMI20.8と大きな上昇を示した。さらに、事例の概要に示したように、アルバイトを行い、アルバイト仲間や家族で食事を行い、日常生活をより良くしたいという意欲もあることから、心理・社会的な面での適応も認められる。また、現在のストレスサーについては、日常生活でのストレスが該当し、「アルバイトに行きたくないという思い。接客したり、文句を言われたり等の業務内容」と回答する。しかし、ストレスサーの経験度は2点と低く、社会人がもつ一般的なストレスサーとして解釈することが妥当であると判断する。

これら2事例は、いずれも摂食障害（神経性無食欲症制限型）の女性であり、身体状況の回復の重要性を視野に入れつつ、筆者は以下の側面を面接の際の留意点とした。事例の概要に詳細に示したように、まず、PT個人には、PT自身が決断し実行したことを賞賛すると共に、その言動に対して肯定的なフレームの提示を行った。加えて、事例1では、友人との関わりやアルバイトに従事するといった行動を促進し、事例2でもアルバイトに対する話題を中心に行った。家族関係においては、家族で外食するという課題にみられるように、身体状況の改善のために食べることよりも、家族で楽しむことを第一とし、その一方

法として食事に行くという，家族の結びつきを強めることを意図した。また，自宅での手伝いを言い渡すのではなく，PTに家事を頼むという文脈でPTの活動を促した。これらの課題により，家族成員間の結びつきの上昇やPTの勢力を強めるという家族構造の変動を促したと考えられる。以上の摂食障害（神経性無食欲症制限型）の2事例では，家族構造の変動に伴う症状の改善，ならびに心理・社会的な適応の側面から，FBHのバランス型の家族構造を支持する結果であると判断することが出来る。

一方，体のだるさ（毎日ではないが一日中），腹部の違和感，気力がない，勉強も手につかない，学校も休みがちという主訴をもつ事例3の青年男子においては，2時点における家族構造の形状に変動がみられなかった。なお，ストレスナーについては，自分自身についてのストレスが該当し，「自分自身の性格について。何でもめんどくさいとってしまうこと，細かいところもあればおおざっぱなところもあり極端。自分自身の体格について，背が小さく，細いこと」と回答し，ストレスナーの経験度は8点であった。このストレスナーは，青年男性がもつ一般的なストレスナーとして解釈可能であり，また家族関係と関連のないものと解釈することが妥当であると判断する。この事例は，筆者による心理面接の開始から3回時でインタビュー調査を行っており，2ヵ月前の家族構造を想起した。そのため十分な期間が得られなかった。しかしながら，家族構造のグラフをみると，3者が結びつきの強さを伴い，勢力が均衡している構造であり，FBHのバランス型に位置する。面接の経過をみると，家族関係に介入するよりも，主訴である，だるさについてPTの運動や朝起きるための工夫を促進することに焦点を当てていることがわかる。また，母親に関しても，学校に休まずいくことより，PTが元気になるという目標を挙げ，PTを尊重する姿勢がみられた。父子関係においても，休日に父子で運動す

るといった良好な関係がみられる。さらに、調査時は学校に休まず通学し、主訴のたるさの軽減やそれに対する対処も行っている。よって、調査時までの期間の短さ、ならびに PT の対処努力に着目した面接であったことを考慮すると、家族構造の変動がみられなかった理由がわかる。したがって、家族構造の変動がみられなかったものの、主訴の短期間における軽減、ならびに家族の関わりの観点から、FBH のバランス型の家族構造を支持する結果であると判断することが出来る。

以上、摂食障害（神経性無食欲症制限型）の女性の 2 事例における家族構造の変動に伴う FBH のバランス型への移行、症状や心理・社会的な適応の改善が確認された。加えて、身体不定愁訴を呈する男性の症状や心理・社会的な適応の改善と FBH のバランス型の家族構造が確認された。これら 3 事例は、いずれも FBH のバランス型の家族構造であり、事例の経過と共に、青年の症状や心理・社会的な適応において改善の方向に進んでいた。臨床例において FBH のアンバランス型の家族構造は確認することはできなかつたため、バランス型の家族構造と青年の病態との関連についてはさらなる検討の余地を有する。しかしながら、FBH のバランス型の家族構造を有する 3 事例では、いずれも PT やその母親に対する、筆者や医師からの治療的介入への反応が良好であり、それに伴い PT の症状や心理・社会的な適応が改善の方向に進んだと考えられる。このことは、FBH のバランス型である、家族成員間の強い結びつきや勢力の均衡した構造を通して、PT の自己決定を尊重しつつ、家族自体で PT の病態の改善に向けた取り組みを実行できる家族構造であると考えられる。したがって、FBH のバランス型の家族構造は、青年の症状の改善や心理・社会的適応の促進と関連することが示唆される。

3. 第 7 章 (【研究 V】) の限界

本章 (【研究 V】) では、第 4 章 (【研究 II】) から第 6 章 (【研究 IV】) の非臨床群の青年を対象として生成した FBH について、臨床例を用いた質的研究により検討した。その結果、3 事例において FBH のバランス型の家族構造は、青年の症状の改善や心理・社会的な適応と関連していることが示唆された。しかしながら、本章 (【研究 V】) の限界として、研究機関ではなくクリニックでデータの収集を行ったため、セラピストである筆者と患者との間に信頼関係、ならびに治療構造の形成を意図し、数回の心理面接後に調査を実施した。この方法は、被験者の普段の治療を妨げないという倫理的配慮の観点、さらには被験者の調査に対するコミットメントの高さというデータの信頼性の観点から妥当な方法である一方、家族構造の想起についてはリコールバイアス (recall bias) の問題が指摘される。つまり、A クリニック来院以前の家族構造については、全ての被験者において一定の妥当性を付与できる想起度であったものの、筆者による全ての心理面接において、母親が PT に対して肯定的に関わるよう促し、また PT に対しても自身の家族関係を肯定的に捉えられるように働きかけた。これらの働きかけは現在の家族構造のみならず、PT が来院以前の家族構造を想起し、それについて説明する際の手掛かりとして関連していることが考えられる。また、3 事例という少数事例において FBH を検討した。3 事例というのは、青年の疾患と家族構造を検討する上で、青年の家族構造として一般化するにはサンプル数が少ない点も考えられる。以上、研究手法におけるリコールバイアスと少数事例であることを考慮した上で、家族構造、とりわけ来院以前と現在の変化についての解釈は慎重に行う必要がある。

第 3 部

討論

第 8 章

総合考察

第 8 章では，まず青年期の家族構造の望ましい形態を明らかにするという本研究の目的に沿い，実証研究の概要，ならびにそれらの主な結果を示す。次いで，実証研究から生成した **FBH** についての検討を行う。さらに，本研究の問題と目的部分で示した，家族構造の査定法，青年のストレス，摂食障害，摂食障害傾向の問題点を振り返り，実証研究で得られた結果から，それら問題点に対する結論を示していく。

本研究の目的は、青年期の家族構造の望ましい形態を明らかにすることであった。家族との関係は、幼少期のみならず青年期においても、青年の適応や発達にとって、とりわけ重要な要因であるという前提に基づき、青年期という青年自身や家族関係の質的な変化や再調整が求められる時期に着目した。その際、青年が自分自身の家族をどのように認知し体験するかという青年の視点を重視し、家族内の3者関係（夫婦間、父子間、母子間）の組み合わせを家族構造として捉えた。この青年の認知する家族構造の良し悪しを評価する指標として、青年が経験するストレスという要因を用いた。青年のストレスは、ストレスターの経験とストレス反応の表出、さらには青年のストレス反応の一つとしての摂食障害傾向や摂食障害、心身症周辺領域の問題から検討していった。その際、家族構造に青年の不適応や疾患の原因を求めるのではなく、青年のストレスと家族構造との相互作用の観点から実証研究によるデータを用いて明らかにすることを試みた。

8-1 仮説の検証

青年期の家族構造の望ましい形態を明らかにするという目的に沿い、主にシンボル配置技法の知見（例えば、Gehring, 1993, 八田（訳）, 1997; 亀口, 2003ab; 中見・桂田, 2007）にみられる、結びつきと勢力とのバランスの観点から、青年のストレスと関連する家族構造についての仮説を生成した。その際、青年のキャリアやアイデンティティに関連する領域において指摘されている、家族との情緒的なつながりや親密な関係の重要性（例えば、Cooper *et al.*, 1983; Fullinwider-Bush & Jacobvitz, 1993; Grotevant & Cooper, 1985, 1986; Hendry *et al.*, 1993; 高橋, 2008）、家族からのソーシャル・サポートの高さと青年のメンタルヘルスに関する変数との肯定的な関連（Cohen & Wills, 1985; 菊島, 1999; 皆川他, 2004; 岡安他, 1993; Roosa *et al.*,

1996; 嶋, 1992), 家族の結びつきの強さと青年のストレス認知の低さやストレス状況の改善への関連 (皆川他, 2001; 皆川他, 2003ab) の知見を参考に, 家族成員間の結びつきの強さを指摘した。一方, 勢力については, 本邦において Family System Test (FAST) を用い, 大学生の精神的健康と面接の応答から家族構造の詳細な検討を行った中見・桂田 (2007) の知見にみられる, 青年期の親子間における階層性の差の小ささを指摘した。さらに, 親孝行という観点から家族関係を検討した波多野・江口 (1965) の知見から, 本邦における戦後の親子関係の垂直的關係から水平的関係への変化の指摘を踏まえ, 親子間の勢力の均衡化を指摘した。これら結びつきと勢力に関する知見を踏まえ, 家族成員間の結びつきと勢力のバランスにより青年のストレスを説明しようという仮説を提示した。この仮説を検証するため, 5つの実証研究を行った。以下には, これら5つの実証研究の概要とそこから明らかにされた主な結果を示し, 本研究全体の仮説と照らし合わせて検討する。

まず第3章の「家族構造の測定における構成因子に関する研究」では, 家族構造と青年のストレスとの関連に先立ち, 家族構造を捉える上で, 被験者の負担や分析の煩雑性の観点から従来の質問項目を適用することは困難であることを指摘した(【研究I】)。そこで, 家族構造を構成する下位システム, つまり家族成員間(夫婦間, 父子間, 母子間)の関係性を捉える最少の因子構造を抽出するための検討を行った。ここでの着眼点は, 野口他(2009)が指摘する, 回答者の負担が少なく, 家族内の各関係性を複数要因から捉え, 高次の家族システム自体の研究を行うための査定方法の検討であり, 各因子を単一の質問項目で査定するための基礎的研究として位置付けられる。そのために, 主として本邦で開発された尺度, ならびに本邦において翻訳され, 研究に使用されている尺度を参考に質問紙調査を行った。その結果, 「結びつき」, 「利害的關係」, 「勢力」, 「開放性」

という 4 因子構造を見出し，家族構造の下位システムを把握する上で，最少の因子構造として 4 因子構造が妥当であることを示した。さらにその 4 因子の中でも，「結びつき」と「勢力」という 2 つの因子は，4 因子間の関連性や信頼性の観点，さらには先行研究との照合により，家族構造を測定する上での主要な因子であることを示した。

第 4 章の「青年期の家族構造と青年の認知する家族内ストレスとの関連」では，第 3 章（【研究 I】）で導かれた因子を，夫婦間，父子間，母子間という 3 者関係の査定に用いた（【研究 II】）。この査定法を用い，青年の視点から家族の下位システムの相互関係を類型し，家族構造を包括的に捉えた。家族構造の種類の差異により，青年が認知する家族内ストレスとの関連について，性差を踏まえ探索的に検討した。加えて，第 3 章（【研究 I】）で抽出した 4 因子それぞれが，家族成員間のコミュニケーションの頻度とどのように関連しているかについても検討した。その結果，男女共に概ね類似した家族構造において，家族成員間のコミュニケーション，ならびに青年の認知する家族内ストレスとの関連を見出した。すなわち，家族成員間の率直なコミュニケーションや媒介伝達の頻度が高く，青年の家族内ストレスの低い家族構造は，女性では母子間の結びつきが男性に比べやや低いものの，概して男女共に各成員間の結びつきの強さを基盤として，勢力が 3 者で均衡している特徴が示された。一方，男女共に，家族成員間の率直なコミュニケーションや媒介伝達の頻度が低く，家族内ストレスが高い構造の特徴は，成員間の結びつきの弱さを基盤として，極端な夫婦間の利害的關係の高さ，閉鎖的，開放的な組み合わせ，そして父親の極端な勢力の強さや弱さという組み合わせであった。この家族構造の種類の特徴から，家族構造を構成するサブシステム間の関係性を測定する上で，「結びつき」と「勢力」は主要な因子であることが示唆された。加えて，家族の下位シス

テムにおける関係性とコミュニケーションの関連では、各関係の率直なコミュニケーションの頻度の高さは、同一ペアの「結びつき」の強さとの関連が強く、つながりといった情緒的な関係のために使用されることが示唆された。「勢力」とコミュニケーションについてはさらなる検討の余地を有するものの、「結びつき」という関係性を表す根本的な因子（野口他，2009）の構成要因を明らかにしたことは重要であると考えられる。この結果から、具体的で即時的に変動するコミュニケーションに比べ、より抽象度が高く長期的で安定した性質を有する関係性の概念を査定する項目で家族構造を捉えることにより、安定した結果を導けることが考えられることを指摘した。

第4章では、青年のストレスに寄与する家族構造の特徴が示されたものの、青年の家族内で認知するストレス要因にとどまる検討であった（【研究Ⅱ】）。そこで、第5章の「青年のストレス要因とストレス反応に関連する家族構造の検討」では、青年の認知するストレス要因とストレス反応に関連する家族構造の特徴を検討した（【研究Ⅲ】）。その際、家族と日常的に接する年代である高校生を対象とした。さらに、家族外での交流が増加する青年期の特徴を考慮し、ストレス要因を家族関係に起因するものと友人関係や学業といった日常生活で経験するストレス要因の2つに分類し、ストレス要因を包括的に捉えた。家族構造の測定においては、第4章（【研究Ⅱ】）の家族構造の分類の特徴を踏まえ、「結びつき」と「勢力」という2因子に限定して用いた。また、第4章（【研究Ⅱ】）において男女共に類似した構造形態が見出された結果を踏まえ、男女を含め、家族構造と家族内外のストレス要因の高低を独立変数、ストレス反応を従属変数とした2要因分散分析を行なった。その結果、家族内外のストレス要因と家族構造との関連性が認められ、「高結びつき・勢力均衡型」の構造は、家族内外のストレス要因に対する軽減効果を示唆する結果が認められた。この結果は、ストレ

ス反応を測定する尺度の精緻化に関する課題が残されるものの、青年の家族内外のストレスナーに対し、ストレス反応を軽減する可能性を有する家族構造の特徴として、家族成員間の強い結びつきと勢力が均衡した構造を見出すことができた。

第4章（【研究Ⅱ】）ならびに第5章（【研究Ⅲ】）では、青年のストレスの低減に寄与する家族構造の特徴として、「高結びつき・勢力均衡型」の構造が見出されたものの、いずれも一般的なストレスによる検討であった。そこで、第6章の「青年期の家族構造と青年の摂食障害傾向との関連」では、青年期を好発期とし、家族関係との関連が指摘されている青年の摂食障害、ならびに摂食障害傾向を青年の示す特殊なストレス反応として取り上げた（【研究Ⅳ】）。この問題は、家族関係や青年の様々なストレスの関与が認められ（例えば、Garner & Garfinkel, 1997, 小牧（監訳），2004；小林・栗田，2005；Minuchin *et al.*, 2007, 中村・中釜（監訳），2010），とりわけ重症の場合、生命の危機にさらされるがゆえ、親子間の主張の衝突や親の強制的な言動の行使が予想された。したがって、家族成員間での批判的、否定的な相互作用が行われ、それにより青年の認知する家族内ストレスナーが高まることを想定したためである。そこで、一般の高校生、大学生を対象とした青年の摂食障害傾向と家族構造との関連を検討した。その際、家族関係と摂食障害傾向との関連（Abrantes *et al.*, 2006；Byely *et al.*, 2000；McGuire *et al.*, 2002；Mellin *et al.*, 2002），ならびに青年の認知する家族内外のストレスの関与（Garner & Garfinkel, 1997, 小牧（監訳），2004；小林・栗田，2005；Minuchin *et al.*, 2007, 中村・中釜（監訳），2010）に関する知見を第4章（【研究Ⅱ】）ならびに第5章（【研究Ⅲ】）で得られた結果と照らし合わせ「家族成員間の結びつきが強く、勢力が均衡した家族構造では、青年の摂食障害傾向が低く、一方、結びつきが弱く、勢力の差が大きい場合、摂食障害傾向が高い」という仮説を提示し、前者をバランス型、

後者をアンバランス型として、家族バランス仮説（**Family Balance Hypothesis: FBH**）を提示した。家族構造の類型と青年の摂食障害傾向の関連を検討した結果、家族成員間の結びつきの強さと3者が互いに同程度の影響力を持つといった勢力が均衡した家族構造は、青年女子の摂食障害傾向の抑制と関連することが示された。この結果は、性差について今後の検討の余地を残すものの、概ね**FBH**の仮説を支持する結果であった。**FBH**は青年の摂食障害傾向をストレス反応の一つとして捉えているため、「家族成員間の結びつきが強く、勢力が均衡した家族構造では、青年のストレスが低く、一方、結びつきが弱く、勢力の差が大きい場合、青年のストレス反応が高い」ということを意味する。しかしながら、4つに類型したいずれの家族構造にも摂食障害傾向の高い青年は存在した。この結果から、家族の在り方が青年の摂食障害傾向を引き起こすのではなく、青年の摂食障害傾向と家族との相互作用により、問題が維持されることを指摘した。すなわち、青年の摂食障害傾向の問題とアンバランスな家族構造は親和性が高く、悪循環的相互作用により問題が維持し、バランス型の家族構造は摂食障害傾向と親和性が低く、青年女子の摂食障害傾向の抑制に関連することを指摘した。

第4章（【研究Ⅱ】）ならびに第5章（【研究Ⅲ】）で行った家族構造と青年のストレスとの関連から生成した**FBH**は、第6章（【研究Ⅳ】）の青年の摂食障害傾向による検討により、概ね支持された。しかし、いずれの研究も非臨床群を用いた検討であった。そこで、第7章の「青年の摂食障害、ならびに心身症と家族構造との関連」では、摂食障害、ならびに心身症周辺領域の疾患を有する青年と家族構造との関連について、少数事例を用いた**FBH**の検討を行った（【研究Ⅴ】）。その際、青年の病態や症状は青年自身の脆弱性と環境要因との相互作用により形成されるという観点（Garner, 1993; Minuchin *et al.*, 2007, 中

村・中釜（監訳），2010），さらに第6章（【研究Ⅳ】）で示した家族構造の類型に関わらず摂食障害傾向が高い青年が存在することを踏まえ，臨床例において，家族構造を病因論の枠組みよりも，予後や適応の観点から検討した。3事例の調査時までの心理面接の経過，ならびに家族構造の変遷，ストレスナーについてのインタビューの結果から，摂食障害（神経性無食欲症制限型）の2事例においては，面接の経過と共にFBHのバランス型への移行，ならびに症状や心理・社会的な適応の改善が確認できた。さらに，身体不定愁訴を呈する1事例において，症状や心理・社会的な適応の改善とFBHのバランス型の家族構造を確認できた。この結果は，想起法という研究方法の課題やFBHのアンバランス型の家族構造が確認できなかった点について，課題が残されるものの3事例において，FBHにおけるバランス型の家族構造を概ね支持する結果が得られた。

これら実証研究を通して検討してきたFBHのバランス型の家族構造，つまり，「家族成員間の結びつきが強く，勢力が均衡した家族構造では，青年のストレスが低く，一方，結びつきが弱く，勢力の差が大きい場合，青年のストレス反応が高い」という結果を，青年期の家族構造の望ましい形態を明らかにするという本研究の目的に沿って提示した「家族成員間の結びつきと勢力のバランスにより青年のストレスを説明しうる」という仮説と照らし合わせると，概ね本研究の仮説を支持する結果となった。すなわち，青年のストレスという観点において，青年期の家族構造の望ましい形態は，家族成員が親密なつながりで結ばれた関係を基盤とし，夫婦間，父子間，母子間の勢力が均衡している構造が示された。「結びつき」に関しては，強すぎることで青年のストレスの高さと関連していることはなく，強い結びつきほど青年のストレスの低さと関連するという，いわば直線的な関連であると考えられる。「勢力」に関しては，夫婦間や親子間のいずれかが一方的に強い影響力を持つ，また，親子間

で親の勢力が青年より上回るといった構造ではなく、3者それぞれが互いに同程度の影響力を持つといたれば対等な関係を意味すると考えられる。一方、「結びつき」が弱く、「勢力」の差が大きいという不均衡な構造は、青年のストレス反応を高めるといふより、むしろ青年の経験するストレスの影響が家族関係によって軽減されることなく、いわばストレスの直接的な影響を受けることに関連しているものと考えられる。この結果は、本邦においてFASTを用い大学生の精神的健康と面接の応答から家族構造を検討した中見・桂田(2007)による、凝集性が高く(もしくは中程度)、階層性の差が中程度を示すバランス型の構造と同様に、凝集性が高く階層性の差が小さい群においても、青年の精神的健康度、ならびに家族を肯定的に捉えているという知見を支持する結果であった。しかしながら、本研究との相違点として、中見・桂田(2007)では凝集性が高く階層性の差が中程度を示す構造をバランス型とし、凝集性が高く、階層性の差が小さい群をバランス型の構造に付加する形態として捉えているが、本研究ではむしろその逆であった。つまり、家族成員間の結びつきが強く、勢力が均衡した構造が青年のストレスの軽減を示唆する主な家族構造の形態であった。中見・桂田(2007)は、Gehring(1993, 八田(訳), 1997)の家族構造の類型を参照し、FASTによって得られたデータを基に家族構造の分類を行っている。一方、本研究ではICHIGEKIにより査定した各成員間の得点を基に、クラスタ分析という手法、つまり観測データから家族構造を類型するといういわば帰納法的方法を用いた。このような家族構造の類型に関する方法上の相違を考慮すると、本研究のバランス型の家族構造、つまり家族成員間の強い結びつきと勢力が均衡した構造には、家族成員間の強い結びつきと勢力が中程度の差を有する構造が含まれている可能性も推察される。しかしながら、実証研究を通して検討したFBHの家族構造の観点では、親子間の勢力の差が

小さいか中程度かというよりはむしろ、親子間の勢力の差が過大か、もしくは各関係の勢力の差にばらつきがあるかということが、青年のストレスと関連する重要な要素であると考えられる。

本研究で明らかとなった青年のストレスに寄与する家族成員間の結びつきの強さに伴う勢力の均衡した家族構造は、本研究のみで導かれた特異的な構造であろうか。例えば、家族サイクル（Carter & McGoldrick, 1989）の観点では、青年は友人との関係に代表される家族外との接点、いわば社会との関わりを重視するようになり、家族への依存と自立への葛藤に揺れ動く。この状況に対して、家族の柔軟性が求められることが指摘されている。一方で、親自身も親役割として子どもに接する以外に、夫婦としての在り方や自分自身の職業への関心、親世代の老後に目を向けるといった、親自身の変化も求められる。さらに、渡辺（1996）は、個人と家族サイクルの両面から検討し、上記の青年期の家族の特徴に加え、青年の生活範囲の拡大により、親子間の価値観の相違が顕著になることを指摘している。また、岡堂（2006）は、親子間の信頼関係という観点から青年期について、自立と責任と制御の面で、基本的な信頼関係を損なわずに親子関係を再規定することの重要性について指摘している。具体的には、親側は子どもの家族外での情報の不足や子どもの行動を統制できないことに不信感を抱き、子ども側は自身の意思を認めない親の態度や年齢相応の自立性と自由を認めてもらえないことに不信感を抱くことを述べている。加えて、本邦における戦後の伝統的な家族制度の崩壊に伴う親子関係を律する規範の変化について指摘した波多野・江口（1965）は、親孝行という観点から、親子間の親密さを保持しつつ、垂直的關係から水平的關係への変化、つまり子どもが親に対する恭順や服従から、友人関係のような親和的關係へ移行すると述べている。このように青年期の家族関係の特徴は、青年の家族への依存と

自立の葛藤，親子間の価値観の相違，親子間の信頼関係，家族の柔軟性，夫婦関係の見直し，親に対する恭順や服従から親子間の親和的關係への移行など様々に述べられている。これら青年期の家族関係の特徴を，本研究で導かれたFBHのバランス型の家族構造と照らし合わせると，家族成員間の結びつきの強さに伴う勢力の均衡した形態は，親子のみならず夫婦間が信頼関係や親和関係を保持している関係であると解釈することが出来る。また，結びつきの強さに伴う家族成員間の勢力が均衡した構造は，親子間の親密さが保持された親和的關係を示しているものと考えることができる。一方で，家族成員間の結びつきの弱さに伴い，親子間の勢力の差が顕著な構造形態は，青年が親の無理解や不和，不信感に基づく親に対する恭順や服従，強制といった垂直的關係とも読み取れる。したがって，本研究で明らかとなった青年のストレスに寄与する家族成員間の結びつきの強さに伴う勢力の均衡した家族構造は，本研究のみで導かれた特異的な構造ではなく，これまで青年期の家族関係の特徴として指摘されてきた質的な見解を，いわば数量的な側面から明らかにした結果と考えられる。すなわち，家族成員間の関係性の在り方を相対的な位置関係から数量化を行い，家族構造の形態を客観的データにより明らかにした研究といえる。

8-2 家族構造について

次に，家族成員間の関係性を査定するために抽出した因子について考察する。第3章では，家族構造を構成する家族成員間の関係性の組み合わせ，つまり，夫婦間，父子間，母子間といった下位システムの相互関係を捉える上で，最少の因子構造として，「結びつき」，「利害的關係」，「勢力」，「開放性」の4つを抽出した（【研究Ⅰ】）。さらに，これら4因子を第4章において，家族構造の査定に使用すると共に（【研究Ⅱ】），第5章において，これら4因子構造の精緻化を行い，「結びつき」と

「勢力」という 2 因子に限定していった (【研究 III】)。ここでの着眼点は、野口他 (2009) が指摘する、回答者の負担が少なく、家族内の各関係性を複数要因から捉え、高次の家族システム自体の研究を行うための査定方法の検討に基づく。さらに、本研究では、家族構造を捉える上で関連する因子を付加していく方向性ではなく、家族構造に対して、より関連が強く、いかに少数の因子に限定していくかという、いわば収束的な方向性をもって検討していった。最終的に「結びつき」と「勢力」という 2 因子に限定し、これらを単一の質問項目で査定することによって、複雑な家族成員間の関係性を、複雑な性質を失うことなく捉えることが可能となった。これら「結びつき」と「勢力」の 2 因子は、明確な定義の差はあれど、家族構造の査定に関する領域において、多くの研究で主要な因子として支持されている (Gehring, 1993, 八田 (訳), 1997; 亀口, 2003ab; Nichols, 1984; Olson, 1991; Wood, 1985)。例えば、クリニックに子どもの問題で援助を求めてきた 8 家族の家族構造を検討した Wood (1985) では、VTR のコーディングを主とした分析から、家族構造と子どもの心理的機能の関連を見出している。ここでは、本研究の「結びつき」に該当する親近性 (proximity) と「勢力」に該当する階層性 (hierarchy) の 2 因子は、相互に直行する独立した領域であり、これら変数で家族構造を記述することは妥当性があることを指摘している。また、第 3 章においても、「結びつき」では $\alpha=.98$ と最も信頼性係数が高く、「勢力」においては、 $\alpha=.82$ と「結びつき」に次いで高い信頼性を有していた (【研究 I】)。さらに、野口他 (2009) によれば、複数項目と単一項目で測定した「結びつき」ならびに「勢力」との関連は、「結びつき」で $r=.70$ 、「勢力」で $r=.52$ という高い関連を示し、単一項目による一定の妥当性が認められている。したがって、「結びつき」と「勢力」という 2 因子は家族構造を構成する関係性の査定において主要な因子であると考えられ

る。

では、この「結びつき」と「勢力」の2因子はどのような関連をもつのであろうか。これら2因子の関連について、本邦の大学生を対象に、FAST (Gehring, 1993, 八田 (訳), 1997), ならびにインタビューの応答から家族構造を検討した中見・桂田 (2007) は、本研究の「結びつき」に該当する「凝集性」、ならびに「勢力」に該当する「階層性」について、意識化の強さという観点から考察している。つまり、日本の大学生にとって「凝集性」は顕在的であり「階層性」は潜在的な変数であるため、「凝集性」が高い場合、「階層性」は意識されにくいとしている。この観点から、本研究における家族構造の形状を検討すると、青年のストレスに寄与するバランス型の家族構造では、一貫して概ね成員間の結びつきの強さを基盤としている。一方で、アンバランス型の構造では、結びつきの弱さと共に、勢力の差がいずれかの関係で突出する、もしくは均衡している形状を示している。さらに、第6章では、青年が家族内でのストレスを認識する時に、青年自身が属する家族構造の在り方が問題となるという点を指摘した(【研究Ⅳ】)。この青年の認識する家族内でのストレスは、親の無理解や意見の相違、親からの叱責に関する内容である。この家族内でのストレスの認識を、各関係の仲の良さや親密さ、連帯感の低さを伴う関係として解釈すると、「結びつき」が弱い関係において、各関係の「勢力」が青年にとって問題となることも考えられる。つまり、中見・桂田 (2007) の考察する意識化の強さの観点、本研究で示した家族構造のバランス型、ならびにアンバランス型の形状、さらには、第6章(【研究Ⅳ】)の家族内ストレスと家族構造の関連を踏まえると、青年が家族内の各関係の「結びつき」の弱さを認識する際に、「勢力」の在り方が認識されることが考えられる。しかしながら、家族構造を把握する上で、「結びつき」のみが重要で、「勢力」という因子が軽視されることではない。

結びつきの弱さに伴い、勢力が認識される場合でも、家族成員間の勢力関係により、様々な情報が得られる。例えば、主に第4章から第6章（【研究Ⅱ】、【研究Ⅲ】、【研究Ⅳ】）において示されたアンバランス型の家族構造、つまり結びつきの弱さを伴う勢力の均衡化は、成員が相互に関わりを持たない無関与な関係を意味する可能性が示唆される。また、結びつきの弱さを伴い、青年側の勢力が強い場合、親側が影響力を行使しない、もしくは行使出来ない、いわば青年主導型の関係である可能性を有する。これら結びつきと勢力の関連にはさらなる検討の余地を残すものの、現時点では以下の解釈可能性を有する。

すなわち、青年が家族内の各関係の「結びつき」の弱さを認識する際に、「勢力」の在り方が問題となるということは、「結びつき」の強さを伴う「勢力」と「結びつき」の弱さを伴う「勢力」では、青年の認識する「勢力」の捉え方が異なる可能性がある。つまり、結びつきを伴う勢力では、波多野・江口（1965）が述べる水平的な親和関係を意味する可能性がある。例えば、子どもの立場であっても親の誤りに対し親密さをもって指摘できるような肯定的な関係を意味する。一方、結びつきを伴わない勢力では、親に強制や服従、もしくは無関与といった否定的な関係を青年が認識している可能性が推察される。加えて、結びつきの強弱により、勢力の意味合いが異なるという観点は、野口他（2009）が述べる、「結びつき」は家族を捉える上で最も重要な要因であり、その構成要因の根本であるという指摘を支持する見解である。したがって、家族成員間の「結びつき」は家族構造を構成する主要な因子と考えられる。

8-3 家族構造と青年のストレスについて

次に、家族構造と青年のストレスについて考察する。本研究では、主に青年の一般的なストレスという観点から、非臨床群を用いて検討した実証研究は、第4章（【研究Ⅱ】）と第5章（【研

究Ⅲ】)であった。第4章では、青年の認知する家族内のストレスから家族構造を検討することのみであったが(【研究Ⅱ】)、第5章においては、青年の認知するストレスを家族内、ならびに家族外に起因するものから検討し、それら2つのストレスの経験とストレス反応に対する家族構造の関与を扱った(【研究Ⅲ】)。また、家族構造においても第4章(【研究Ⅱ】)の結果を受け、「結びつき」と「勢力」に限定し、精緻化した検討を行った。その結果、家族成員間の結びつきの強さを基盤とする勢力の均衡した構造は、いずれのストレスに対してもストレス反応の抑制と関連することが示された。

では、家族構造と直接的には関連しない青年の学業や友人関係等の日常生活ストレスに対し、家族構造はどのように関連しているのだろうか。皆川他(2004)では、青年が家族に自らの思いを語ることで家族からのサポートを得、その結果、青年のストレス状況の改善やストレス反応の低減と関連していることを指摘している。また、第4章で示したように、結びつきという情緒的なつながりで結ばれた関係では、自分自身の考えや学校での出来事、頼みごと等の率直なコミュニケーションが生起しやすく(【研究Ⅱ】)、主に青年の情緒的なサポートとして機能していることが考えられる。さらに、岡安他(1993)では、家族からのサポートを認知的側面から検討し、青年の学校ストレスに対する効果として、サポートへの期待の高さは、出来事の嫌悪性の評価の低減やコントロール可能性を高めることを指摘している。これらの知見を参照しつつ、第5章(【研究Ⅲ】)の結果をみると、青年の認知する家族成員間の結びつきの強さに伴い、勢力が均衡している構造は、青年が家族とのコミュニケーションを通して情緒的安定を得、加えて親のみではなく青年自身も物事を決定し影響を与えることが出来るといった勢力関係を通して、青年自身のストレス状況に対する対処行動を促進する機能を担っていると考えられる。この点については

さらなる検討の余地を有するが、家族内の各関係における結びつきの強さを基盤とする勢力が均衡した構造は、青年の情緒的な安定に寄与し、さらには青年自身で行動を決定することを通して、青年のストレス状況への対処を間接的に促進する役割を担っていることが考えられる。

加えて、青年の家族内ストレスのみならず日常生活ストレスに対して家族構造が関与するという結果は、青年が経験する学業や友人関係等の日常生活でのストレスに対して、家族構造の在り方を扱う意義が見出せる。すなわち、青年の家族外におけるストレスに対して、家族関係の在り方を調整することは、家族関係に問題をすり替えることではなく、青年がストレスへの対処を促進する手助けとなるといった観点が見出せる。

8-4 家族構造と青年の摂食障害，摂食障害傾向，および心身症 周辺疾患について

最後に、家族構造と青年の摂食障害傾向，ならびに心身症周辺疾患について考察する。青年の摂食障害，および摂食障害傾向の問題は、ストレスの関与が認められる問題であり（例えば，Garner & Garfinkel, 1997, 小牧（監訳），2004；小林・栗田，2005；Minuchin *et al.*, 2007, 中村・中釜（監訳），2010），家族関係はこの問題に対して重要な役割を担う（Garner, 1993；Minuchin *et al.*, 1978, 福田（監訳），1987；大場他，2002；Russell *et al.*, 1987；Stierlin & Weber, 1989；Wewetzer *et al.*, 1996；Woodside *et al.*, 1996）。また，青年期の食行動異常に関連する問題は，病態の有無にかかわらず，医療機関へ援助を求めることに乏しく（中井，2000, 2003, 2010；中井他，2003；中井他，2004），ダイエット志向から進展する可能性（例えば，筒井，1999；山登，2003）や摂食障害が一般的な青年女子にも起こりうる可能性（Patton *et al.*, 1990；Patton *et al.*, 1999）を有

するものである。これは、摂食障害傾向と摂食障害の連続性の仮定を示唆するものである。このような背景を踏まえ、本研究では、青年の示す特殊なストレス反応の一つとして、また、生命の危機に至る可能性から家族と青年との相互作用がより顕著になる変数として、摂食障害、摂食障害傾向、および心身症周辺疾患を取り上げ、家族構造との関連を検討した。ここでの着眼点は、世代間境界（Minuchin, 1974, 山根（監訳）, 1984）にまつわる、家族成員間の結びつき（cohesion）と絡み合い（enmeshment）という概念の混合に関する問題（例えば、Perosa & Perosa, 1993; Rowa *et al.*, 2001）を踏まえ、「結びつき」という概念で統一した検討を行ったことである。さらに、青年の病態は個人の脆弱性を基盤として、環境要因により誘発されるという指摘（Garner, 1993; Minuchin *et al.*, 2007, 中村・中釜（監訳）, 2010）を踏まえ、家族構造のあり方に病態を起因する観点ではなく、青年の病態と家族関係の相互作用により病態が維持・存続するという観点から、家族構造のあり方により青年の病態や症状の改善、さらには心理・社会的な面での適応の回復が早いことを仮定した。本研究でこの点を扱った箇所は、摂食障害傾向と家族構造との関連を検討した第6章（【研究Ⅳ】）、ならびに、臨床研究として摂食障害2事例を含む3事例を用い、青年の摂食障害、ならびに心身症周辺領域の疾患と家族構造との関連を検討した第7章（【研究Ⅴ】）である。これら実証研究における家族構造の検討では、FBHの家族構造を概ね支持する結果であり、家族成員間の結びつきが強く、勢力が均衡したバランス型の構造は、青年の摂食障害傾向の抑制と関連すること、さらに、病態の改善や心理・社会的な面での適応の回復が早いという結果であった。一方、第6章における、「低結びつき・父親勢力有意型」の家族構造にみられるように、家族成員間の結びつきの弱さ、そしてアンバランスな勢力関係では、青年の摂食障害傾向の割合が高いという結果であった

（【研究Ⅳ】）。しかし，第 6 章で指摘したように，どのような家族構造の形態にも摂食障害傾向の高い青年が存在し（【研究Ⅳ】），さらに第 7 章においてもバランス型の家族構造に類似した形状を示す家族でありながらも，青年の心身症周辺疾患の問題を有していた（【研究Ⅴ】）。これらの結果から，家族構造の形態を，問題や病態の原因とするのではなく，青年の問題や疾患の脆弱性とアンバランス型の家族構造は，親和性が高く，青年と家族との相互作用を通じて，問題や疾患が維持・存続している，もしくは家族関係により低減されることなく問題や症状が表出されていると考えられる。

加えて，青年の摂食障害傾向，ならびに心身症周辺領域の疾患に対して以下二つの提案を行う。第一に，一連の家族構造の検討を通して得られた結果は，不明瞭な世代間境界による親子関係のもつれ（Minuchin, 1974, 山根（監訳）, 1984）, さらに，シンボル配置技法における FAST（例えば，Gehring, 1993, 八田（訳）, 1997）や Family Image Test（FIT; 亀口, 2003ab）で指摘されている明確な世代間境界の存在というよりはむしろ，青年のキャリアやアイデンティティ領域において指摘されている「結合性」の概念（例えば，Cooper et al., 1983; Fullinwider-Bush & Jacobvitz, 1993; Grotevant & Cooper, 1985, 1986; Hendry et al., 1993）によって，青年のストレス反応との関連を説明しうる結果であった。つまり，どのように世代間境界を区切るかという視点の違いはあれど，親子間の過度に絡み合った関係や親が青年よりも適度に強い影響力を持つことよりも，青年と家族との情緒的なつながりや親密な関係が，青年自身のストレス反応の軽減と関連する結果であった。

第二に，本研究では，家族という集団を成員間の相互影響の過程から捉えるシステム論の視点，つまり家族を“複雑な相互作用による関係性に基づくシステム”（若島他, 2010, p.92）という仮定に基づき，夫婦間，父子間，母子間という関係性の組

み合わせから家族構造を捉えた。この家族構造の視点を用いることにより、家族全体のみ、もしくは母子関係や父子関係といった単一の関係性のみならず、全体を構成する諸関係の関連や単一の関係に寄与するその他の関係を考慮することによって、複雑な家族関係を複雑な性質を失うことなく説明することができると考えられたためである。この観点から、例えば、摂食障害傾向群では父親からのソーシャル・サポートが低い（小林・栗田，2005）、父親からの過干渉気味の関わりは摂食障害傾向を抑制する（嘉手納他，2004；前川，2005）という父子関係についての報告、さらには、母親自身の価値観や容姿、体型への関心（向井，2010）、母親の食事に対する態度（齊藤，2004）と摂食障害傾向との関連といった母子関係についての知見をみると、これらは、複雑な下位システムが関連する家族構造の一部の説明である可能性が考えられる。つまり、父子関係や母子関係といった単一の関係性をいわば断片的に区切り、その関係により青年のストレス反応を説明している可能性が推察される。したがって、FBHの家族構造の検討は、父子関係や母子関係といった断片的な関係のみならず、それら関係に関連するその他の関係をも考慮することができる。つまり、複雑な家族内の諸関係を理解し、家族と青年のストレスとの関連に対して、より包括的な説明を行うことが可能であると思われる。

第 9 章

今後の課題と展開

本研究では青年のストレスに寄与する家族構造の形態について明らかにしたものの、いくつかの課題が残される。したがって、第 9 章では、今後の課題として、家族構造を把握する上で主要な因子として捉えた「結びつき」と「勢力」の関連、子どもの発達に伴う家族構造の変遷、ストレス尺度の精緻化についての課題を指摘し、FBH の家族構造に関するモデル化の展開を記述する。次いで、心理臨床場面への示唆として、セラピストが行う家族援助の観点に立ち、青年からみる家族構造の認識や青年の家族外での適応、青年の食に関する行動障害の問題と家族との相互作用について指摘する。最後に、本研究の意義として、家族構造という家族成員間の複雑な関係性を査定すること、ならびに、家族構造と青年の病態や問題との相互作用的な観点を持つことの重要性について示す。

以下には、本研究で扱うことが出来なかった箇所や方法論の限界を踏まえ、今後の課題と展開の可能性について記述する。次いで、本研究の結果に基づき、心理臨床場面への示唆を示し、最後に本研究の意義を示していく。

9-1 今後の課題

まず、本研究で家族構造を測定する上での主要な因子として検討した「結びつき」と「勢力」という2因子についての検討である。第4章の「青年期の家族構造と青年の認知する家族内ストレスとの関連」における重回帰分析の結果から、成員間の肯定的なコミュニケーションは「結びつき」との関連が示されたものの、「勢力」についてはコミュニケーションとの関連が示されなかった（【研究Ⅱ】）。加えて、「結びつき」の強さを伴う「勢力」と「結びつき」の弱さを伴う「勢力」では、成員間の関係性を表す意味合いが異なるという観点、さらに、青年が家族成員間の「結びつき」の強さを認識する際に、「勢力」の在り方が認識されることも指摘した。これらはいずれも、家族成員間での影響力や発言力、決定力の強さを表す「勢力」という因子についての精緻化が求められることを示唆する結果である。つまり、本研究では複雑な関係性を測定する上で、いかに少数の因子構造を用いるかという方向性で検討した。しかし、「勢力」という因子については、より細分化した検討を要すると思われる。「結びつき」という因子は、お互いの仲の良さや親密さ、連帯感といった、具体的で狭義の意味として解釈されやすいが、「勢力」に関しては、やや広義の意味として解釈されやすく、「勢力」が意味する内容には、いわば肯定的、否定的な意味合いも包含していることが推察される。この観点に関する示唆的な研究は、野口・若島（2007）の社会的勢力の概念を家族関係に適用する試みにみられる。野口・若島（2007）では、「勢力」という概念を、「参照・専門勢力」、「賞・罰勢力」、「魅力勢力」、

「正当勢力」に細分化した検討を行っている。この「勢力」の細分化に関する試みと、本研究における「結びつき」と「勢力」の関係を組み合わせることで、2因子間の関連が明確になると考えられる。

次に、子どもの発達に伴う家族構造の変遷の検討についてである。本研究では、青年期という親子関係に変化が求められる時期に着目し、青年のストレスとの関連を検討した。本研究の対象者は高校生や大学生といった青年期においても、やや後半に位置付けられる。青年期の家族構造について、家族成員間の相互関係の詳細な形態を示した一方、青年期の前後の時期に関する継時的な検討を行うことで、より青年期の特徴が明らかとなるものと思われる。この点については、FAST(Gehring, 1993, 八田(訳), 1997)を用いた Feldman & Ghering (1988)の知見において、年齢の上昇と共に親密さの低下と階層性の差の減少との関連が指摘されている。本研究において、青年期におけるストレスの軽減に寄与する結びつきの強さに伴う勢力が均衡した構造が、青年期初期や青年期以前の児童期や幼少期、青年期以後の成人期では、どのような意味をもつかを検討すること、また家族構造の継時的な変遷について検討することで、より明確になるものと考えられる。

最後に、青年のストレス反応の測定に関する課題である。この点に関しては、非臨床群を用い、家族構造と青年の認知するストレスとストレス反応の検討を行った第5章(【研究Ⅳ】)が該当する。ここでは、青年のストレス反応を測定する妥当な尺度として尾関他(1991)の大学生用ストレス自己評価尺度(Stress Self-Rating Scale: SSRS)を用い35項目により査定を行った。しかしながら、多くの項目で得点分布の偏りがみられ、22項目を除外し、単一因子構造を仮定することとなった。除外した項目をSSRSの下位因子と照らし合わせると、「動悸がする」、「胸部がしめつけられる感じがする」、「耳鳴りがする」

等の身体的反応を始めとして、「生きているのがいやだ」、「人が信じられない」、「話すことがいやでわずらわしく感じる」等の認知・行動的反応であった。第5章（【研究Ⅳ】）では一般的な高校生を対象としたため、これら項目の反応生起率は低いことも想定されるが、一般の青年にも十分適用できる項目の選別や概念の整理によるストレス反応尺度の精緻化が求められる。

以上、本研究の課題を指摘した上で、FBHの家族構造に関するモデル化についての展開を記述したい。本研究で検討したFBHの家族構造は、青年のストレスに寄与する家族構造の形態を明らかにするという目的に沿い、夫婦関係、父子関係、母子関係という3者の関係性の在り方を中心に捉えた。その結果、FBHのバランス型、ならびにアンバランス型の家族構造の特徴は概ね支持される結果となった。このことは、FBHのモデル化の可能性を有する。主に第5章、ならびに第6章（【研究Ⅲ】、【研究Ⅳ】）において、FBHにおけるバランス型の家族構造の特徴として考察した、成員間の結びつきの強さ、そして勢力の均衡した構造は、直接的に青年のストレスに関連するのではなく、青年の自主性や自己決定、ストレス状況に対する対処を促進し、その結果ストレス反応を抑制する可能性を指摘した。この観点を数量化するならば、家族成員間の「結びつき」得点の上昇、さらに夫婦、ならびに親子間の「勢力」得点の差の減少は、青年の自主性や自己決定、対処に関する変数の上昇とストレス反応の減少というモデル化の可能性が示唆される。こうしたFBHの家族構造に関するモデル化の取り組み、さらにはモデルの確証と修正を加えることを通して、青年期の家族構造と青年のストレスに関する理解を深めることを今後の展開とする。

9-2 心理臨床場面への示唆

本研究の試みのような、青年のストレスを家族という青年にとって身近で重要な集団の関係性の在り方から説明することを

目的とした家族研究は、心理臨床場面、とりわけ家族援助に関する基礎研究として位置付けられる。したがって、本研究より得られた知見を、臨床家が家族援助場面で用い、確証や修正を行うことによって、より精緻化したモデルが導かれるものと考ええる。よって、ここに本研究の結果から、臨床家が行う家族援助場面への応用について記述する。

心理臨床場面、すなわちカウンセリングや心理療法、心理面接と呼ばれる相談活動において、セラピストは、クライアントとのコミュニケーションを通して援助活動を行う。とりわけ、青年の問題についての家族との心理面接場面において、セラピストは、その場での家族成員のやりとりや各成員の視点から情報収集を行い、家族の諸関係を見立てる。さらに、その見立てを基に、セラピストは家族と共に問題の解決に向けた話し合いや介入の提案を行っていく。このような心理臨床場面における前提から、本研究の知見の応用について以下3点指摘する。

第一に、本研究では一貫して、青年の視点から青年のストレスに寄与する家族構造の形態を検討した。家族成員の各視点により、自身の家族の見方に違いはあれど、青年自身が家族構造をどのように経験し、評価するかといった視点を通じて、青年のストレスを低減しうる可能性が示唆される。心理臨床場面では、例えば不登校や引きこもりといった問題をもつ青年が、直接面接場面に参加することができない、もしくは心理面接への動機付けが低いという状況を、セラピストは少なからず経験することがある。このような問題を有する青年が直接面接場面に参加できなくとも、また強固に面接場面への参加を促すという手段を用いなくとも心理面接は成立する。つまり、セラピストは来談する家族成員からの情報を通して、青年がどのように自身の家族を認知、経験しているかという観点から見立て、介入しうる可能性を有する。その際、青年が家族内でのストレスを認知している構造、例えば、結びつきが弱く、親側の勢力

がとりわけ強い構造であるとセラピストが見立てた場合，結びつきを強め，勢力の均衡化を促すよう働きかけることを通して，青年のストレスを低減しうる可能性を示唆するものである。

第二に，家族構造の在り方は，青年が自身の家族関係において認識するストレスのみならず，家族外の日常で経験するストレスに対しても軽減効果が認められた点である。この観点により，青年のストレスに関連する何らかの問題に対して，親の養育態度の問題，すなわち青年の問題の原因を家族に求める，もしくは，家族関係の在り方に問題をすり替えることなく，現状の家族関係を調整することの意義が見出せる。例えば，筆者の経験において青年の学校場面での不登校や心身の不調を呈するといった問題では，その親と心理面接を行う際，親はこれまでの青年に対する親自身の接し方，いわば養育態度に関する問題について言及することは少なくない。このような場合，その文脈で家族関係のトピックをセラピストが扱うならば，親は少なくとも青年の問題を自分自身に帰属させてしまう可能性をもつと思われる。このような心理面接場面において，本研究の結果で示したように，家族成員間の結びつきを強め，勢力関係を均衡化するよう働きかけることにより，青年が自身の問題に対して主体的に取り組み，対処行動を促進するという観点を持ち込むことが有益と思われる。つまり，この観点は，家族に問題を帰し，家族の問題解決に対する動機付けを低下させることなく，家族構造を調整すること自体が青年のストレスを軽減しうる一援助手段であるといった，いわば家族の関わりについての意義が見出せるものと考えられる。

最後に，青年のストレス，とりわけ食に関する行動障害の問題と家族構造との問題について，それらの相互作用の観点から提案を行う。本研究では家族関係が青年の食に関する行動障害の問題を引き起こすのではなく，個人の脆弱性を基盤として，環境要因により誘発される（Garner, 1993; Minuchin *et al.*,

2007, 中村・中釜(監訳), 2010), さらには, 青年の食行動異常に関する問題が, 不均衡な家族成員間の相互作用を促進し, それぞれの関係を構成していくという観点(Archibald *et al.*, 2002; 下坂・秋谷, 1988)から検討した。問題が家族システムの在り方を構成していくという観点は, 食に関する行動障害の問題のみならず, 家族療法の分野における問題と対人システムとの関連で指摘されている(例えば, Anderson, Goolishian & Winderman, 1986; 長谷川, 1999)。このような青年の問題と家族関係の相互作用の観点からみると, アンバランスな家族構造は, 長谷川(1999)が問題を解決しようとする試みが問題を維持・存続させることを指摘するように, 青年の問題との悪循環的相互作用の一形態を示しているものと考えられる。つまり, 青年が不健康な食行動を呈する場合, 親はその食行動を止めさせるべく強制的な行動をとる。それにより, 各関係の結びつきを弱め, ひいては勢力が不均衡な状態, つまり親の勢力が強くなるというアンバランスな家族構造を構成している可能性が示唆される。したがって, 親子間の境界線(boundary)への介入(Minuchin, 1974, 山根(監訳), 1984), いわば, 絡み合った関係を適度な状態へ調整するのではなく, むしろ家族成員間の結びつきを強め, 青年と親の勢力関係の均衡化に働きかけていくことを通して, アンバランスな家族構造をバランス型の構造へと再構成していくことが重要と思われる。

このような心理臨床場面への応用を踏まえ, 青年のストレスに関連する家族構造の検討は, セラピストと家族成員の共同作業を通して, 操作可能な変数である。さらに, 近年複雑化する青年の問題の解明や心理・社会的援助につながる重要な視点であると思われる。

9-3 本研究の意義

最後に, 本研究の意義について記述する。なお, ここに示す

本研究の意義は、前述の考察部分における指摘といくつか重複するが、改めて要約する形で記述したい。

本研究は、青年期という青年自身の社会参加や親子間の価値観の相違に伴う、家族内の質的な変化や再調整が求められる時期に着目し、青年のストレスと家族関係の在り方との関連を検討した。青年のストレスは、Lazarus & Folkman (1984, 本明他 (訳), 1991) による、ストレッサーとストレス反応の媒介変数としての個人差の検討、つまりその中心的課題は個人であり認知や対処などの変数の検討であった。しかし、青年にとって身近であり、また青年の適応にとって重要な役割を担う集団である家族との関連についての検討は、その重要性の指摘に反して僅かしか行われてこなかった。家族関係と青年のストレスとの関連では、家族からのサポートがどの程度かという一元的な観点やどのような内容のサポートかといった、いわばサポートの質的な検討が行われていた。加えて、家族関係と一言でいえど、そこには夫婦関係や父子関係、母子関係といった様々な関係性があり、またそれら諸関係は複雑に相互が関連する。このような複雑な諸関係の関連があるにも関わらず、家族関係を一まとめにした家族全体の特徴や夫婦関係や父子関係、母子関係といった家族の一部の関連と青年の問題との関連を扱うにとどまる検討であった。一方、本研究では、家族からどのようなサポートがどの程度か、また、家族関係の全体の特徴や一部の関係との関連ではなく、青年が日常で経験する各家族成員間の関係性を査定し、それら関係性を組み合わせた形態を家族構造として包括的に捉え、青年のストレスとの関連を検討した。これには、例えば母子関係とった単一の関係性の在り方には、父子関係や夫婦関係といったその他の関係性が密接に関連し、それら諸関係の関連を考慮することにより、家族関係の性質をより詳細に説明することが可能であると考えられたためであった。このような家族の諸関係を包括的に理解する観点は、家族研究

の領域で抜け落ちていた観点であるというより、家族という集団の複雑な関係性を捉えるための方法論や査定を行うツールの限界によって、家族構造の査定が困難であったと考えられる。そこで、本研究では、回答者の負担を考慮しつつ、家族内の諸関係を捉えるために、どのような要因が強い関連を示しているか、そして、その要因の中でもいかに少数の要因で捉えることが可能かを検討した。最終的に「結びつき」と「勢力」という2因子を抽出し、これらを用いて関係性を単一項目で捉えた。この関係性に必要な因子についての収束的な検討に、本研究の意義が見出せると共に、家族内の複雑な関係性を捉えることが可能となった。すなわち、本研究は高次の家族システム自体の研究といえる。このような高次のシステム研究としての家族構造と青年のストレスとの関連により導かれた結果は、本研究のみの特異的な結果ではなく、青年期の家族関係の特徴として指摘されている親子関係や夫婦関係の再調整に関する質的な見解を包含する家族構造の形態であった。さらに、青年と家族との関係性を数値化して捉え、青年のストレスに関連する形態を数量的に明らかにした点においても意義が見出せる。したがって、本研究は青年のストレスを家族システムから捉えるという観点において、意義ある知見であり、また今後の家族研究の発展に寄与する方法論の一つを示したものと思われる。

加えて、本研究では青年の示すストレス反応の一つとして摂食障害や摂食障害傾向といった食に関する行動障害の問題を取り上げ、家族構造との関連を扱った。この病態や問題と家族関係との関連を扱う領域では、家族の青年に対する養育方法や青年の否定的な家族環境との関連（例えば、増田他、2004a；増田他、2004b；大場他、2002）にみられるように、明示的にも暗示的にも少なからず青年の病態や問題を、家族関係の在り方に起因するという視点で扱われているように考えられる。一方、本研究では、青年の病態や問題は青年の脆弱性と環境要因により

誘発されるという指摘（Garner, 1993; Minuchin *et al.*, 2007, 中村・中釜（監訳）, 2010）, さらに, 家族関係の調整と青年の病態における良好な予後との関連（Wewetzer *et al.*, 1996; Woodside *et al.*, 1996）, 青年の問題が不均衡な家族成員間の相互作用を促進し, それぞれの関係を構成していくという観点（Archibald *et al.*, 2002; 下坂・秋谷, 1988）を考慮した。すなわち, 青年の病態と現在の家族関係の相互作用により病態が維持・存続し, 家族関係の在り方によって, 青年の心理・社会的な面での適応の回復が早いという観点を対応させ検討していった。その結果, 青年の問題や疾患の脆弱性とアンバランスな家族構造は, 親和性が高く, 青年と家族との相互作用を通じて問題や疾患が維持・存続しているということを指摘した。この結果が意図するところは, 家族構造のあり方が青年の病態を形成することでも, 過去の養育方法や家族環境が病態のリスクを高めるとする視点でもない。本研究で示された結果により, 現在の青年の問題にまつわる相互作用を断ち, 家族関係を調整すること自体が, 青年の問題の低減に貢献できるという観点をもち込むことが可能となる。例えば, 第7章（【研究V】）の摂食障害, および心身症周辺領域の事例においても, 初回面接に親自身が青年の問題を自身の養育態度や家族環境に帰属して説明することも少なくない。このような青年の問題に関する原因帰属の観点, つまり家族が青年の問題の原因であるという認識を再度捉えなおすことが出来ることにも本研究の意義が見出せる。

以上, 要約すると, 本研究は, 家族構造という青年の経験する現在の諸関係の在り方について, 包括的, 且つ詳細な視点から記述, 説明し, 青年のストレス反応の低減に寄与する家族構造の形態を示した知見であるといえる。筆者は心理士として教育現場や医療現場を中心に, 家族援助を行う臨床家の一人である。臨床実践の観点から本研究における家族構造と青年のストレスとの関連をみるとき, 青年の問題の見立てや介入において

即座に応用できる有用な知見であると共に，青年の問題に対して，家族との協力関係を結ぶ糸口になるものと考えている。本研究のような青年のストレスを家族構造の観点から検討する試みは，複雑化する現代の家族と青年の諸問題を紐解き，解決策を見い出す手がかりの一つになると思われる。

引用文献

- Abrantes, A.M., Strong, D.R., Ramsey, S.E., Lewinsohn, P.M., & Brown, R.A. 2006 Characteristics of dieting and nondieting adolescents in a psychiatric inpatient setting. *Journal of Child and Family Studies*, 15(4), 419-433.
- American Psychiatric Association 2000 *Diagnostic and statistical manual of mental disorders. 4th ed-text revision*. Washington, D.C.: American Psychiatric Association.
- Anderson, H., Goolishian, H., & Winderman, L. 1986 Problem determined systems: Towards transformation in family therapy. *Journal of Strategic and Systemic Therapies*, 5, 1-14.
- Archibald, A. B., Linver, M. R., Graber, J. A., & Brooks-Gunn, J. 2002 Parent-adolescent relationships and girls' unhealthy eating: Testing reciprocal effects. *Journal of Research on Adolescence*, 12(4), 451-461.
- Bloom, B.L. 1985 A factor analysis of self-report measures of family functioning. *Family Process*, 24, 225-239.
- Bruch, H. 1978 *The golden gage: The enigma of anorexia nervosa*. Cambridge: Harvard University Press. (岡部祥平・溝口純二(訳) 1979 思春期やせ症の謎—ゴールデンゲージ— 星和書店)
- Byely, L., Archibald, A.B., Graber, J., & Brooks-Gunn, J. 2000 A prospective study of familial and social influences on girls' body image and dieting. *International Journal of Eating Disorders*, 11, 51-164.
- Carter, E.A. & McGoldrick, M. 1989 *The changing family life*

- cycle: A framework for family therapy. 2nded.* New York: Gardner Press.
- Christensen, A., Margolin, G., & Sullaway, M. 1992 Interparental agreement on child behavior problems. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 4(4), 419-425.
- Cohen, S. & Wills, T.A. 1985 Stress, social support and, and the buffering hypothesis. *Psychological Bulletin*, 98, 310-357.
- Coleman, J.C. & Hendry, L.B. 1999 *The nature of adolescence. 3rded.* London: Routledge. (白井利明・若松養亮・杉村和美・小林 亮・柏尾眞津子 (訳) 2003 青年期の本質 ミネルヴァ書房)
- Cooper, C.L. & Dewe, P. 2004 *Stress: A brief History.* Oxford: Blackwell Publishing Ltd. (大塚泰正・岩崎健二・高橋修・京谷美奈子・鈴木綾子 (訳) 2006 ストレスの心理学—その歴史と展望— 北大路書房)
- Cooper, C.R., Grotevant, H.D., & Condon, S.M. 1983 Individuality and connectedness in the family as a context for adolescent identity formation and role-taking skill. In Grotevant, H.D., & Cooper, C.R. (Eds.), *Adolescent development in the family: New directions in child development*, San Francisco: Jossey-Bass. pp.43-59.
- Dare, C., Le Grange, D., Eisler, I., & Rutherford, J. 1994 Redefining the psychosomatic family: The pre-treatment family process in 26 eating disorder families. *International Journal of Eating Disorders*, 16, 211-226.
- 榎本博明 1997 自己開示の心理学的研究 北大路書房
- Epstein, N.B., Baldwin, L., & Bishop, D.A. 1983 The

- McMaster family assessment device. *The Journal of Marital and Family Therapy*, 9(2), 171-180.
- Erikson, E.H. 1963 *Childhood and society 2nded*. New York: W. W. Norton & Company. (仁科弥生 (訳) 1980 幼児期と社会 2 みすず書房)
- Fullinwider-Bush, N. & Jacobvitz, D.B. 1993 The transition to young adulthood: generational boundary dissolution and female identity development. *Family Process*, 32(1), 87-103.
- Feldman, S.S. & Gehringer, T.M. 1988 Changing perceptions of family cohesion and power across adolescence. *Child Development*, 59(4), 1034-1045.
- Folkman, S. & Lazarus, R.S. 1988 Coping as a mediator of emotion. *Journal of Personality and Social Psychology*, 54, 466-479.
- Foucault, M. 1969 *L'Archéologie du savoir*. Paris: Garlilmard. (中村雄二郎 (訳) 1981 知の考古学 河出書房新書)
- Garner, D.M. 1993 Pathogenesis of anorexia nervosa. *The Lancet*, 341, 1631-1635.
- Garner, D.M. & Garfinkel, P.E. 1997 *Handbook of treatment for eating disorders. 2nded*. New York: Guilford Press. (小牧 元 (監訳) 2004 摂食障害治療ハンドブック 金剛出版)
- Garner, D.M., Olmsted, M.P., Bohr, Y., & Garfinkel, P.E. 1982 The eating attitudes test: psychometric feature and clinical correlates. *Psychological Medicine*, 12(4), 871-878.
- Gehringer, T.M. 1993 *Familien system test manual*. Weinheim: Beltz Test Gesellschaft (八田武志 (訳) 1997 FAST (Family System Test) マニュアル ユニオンプレス)

- Grotevant, H.D. & Carlson, C.I. 1989 *Family assessment: A guide to methods and measures*. New York: Guilford Press.
- Grotevant, H.D. & Cooper, C.R. 1985 Patterns of interaction in family relationships and the development of identity formation in adolescence. *Child Development*, 56, 415-428.
- Grotevant, H.D. & Cooper, C.R. 1986 Individuation in family relationships: A perspective on individual differences in the development of identity and role-taking skill in adolescence. *Human Development*, 29, 82-100.
- Grych, J.H. & Fincham, F.D. 1993 Children's appraisals of marital conflict: Initial investigations of the cognitive-contextual framework. *Child Development*, 64, 215-230.
- Gubrium, J.F. & Holstein, J.A. 1990 *What is family?* Mountain View: Mayfield Publishing Ltd. (中河伸俊・鮎川潤・湯川純幸(訳) 1997 家族とは何か—その言説と現実—新曜社)
- 花田里欧子 2010 パターンの臨床心理学—G.ベイトソンによるコミュニケーション理論の実証研究—風間書房
- Heider, F. 1958 *The psychology of interpersonal relations*. New York: John Wiley & Sons Inc.
- Haley, J. 1976 *Problem-solving therapy: New strategies for effective family therapy*. San Francisco: Jossey-Bass Inc. (佐藤悦子(訳) 1985 家族療法—問題解決の戦略と実際—川島書店)
- 長谷川啓三 1987 家族内パラドックス 彩古書房
- 長谷川啓三 1999 家族内コミュニケーション—その病理と援助—教育と医学, 47(4), 293-301.

- 波多野 誼余夫・江口 恵子 1965 親孝行についての母親の認知
年報社会心理学, 6, 89-99.
- 早野 洋美 2002 男子大学生の摂食障害傾向に関する心理学
的研究 心理臨床学研究, 20(1), 44-51.
- 林 晴夫 2008 ストレスとはなんだろうー医学を革新した
「ストレス学説」はいかにして誕生したかー ブルーバック
ス
- 林 弥生・小杉 正太郎 2003 女子学生を対象とした家族ストレ
ッサー尺度作成の試み 日本心理学会第 67 回大会発表論文
集, 313.
- Hendry, L.B., Shucksmith, J., Love, J.G., & Glendinning, A.
1993 *Young people's leisure and lifestyles*. London:
Routledge.
- 飛田 躁・狩谷 佳子 1992 両親の「仲の良さ」の認知と親子
関係 福島大学教育学部論集, 51, 197-207.
- Hoffman, L. 1981 *Foundations of family therapy: A
conceptual framework for systems change*. New York:
Basic Books. (亀口 憲治 (訳) 2006 家族療法の基礎
理論ー創始者と主要なアプローチ 朝日出版社)
- Holmes, T.H. & Rahe, R.H. 1967 The social readjustment
rating scale. *Journal of Psychosomatic Research*, 11,
213-218.
- 池田 由子 2000 児童虐待の認識と歴史の取り組み 母子保
護情報, 42, 4-7.
- 石田 潤 1990 データを数値で表現する方法 森 敏昭・吉
田 寿夫 (編著) 1990 心理学のためのデータ解析テクニ
カルブック 北大路書房 pp.1-42.
- 石川 清・岩田 由子・平野 源一 1960 Anorexia nervosa の症
状と成因について 精神神経学雑誌, 62, 1203-1221.
- 石原 邦雄 2004 家族のストレスとサポート 放送大学教育

振興会

- Jacobvitz, D. & Bush, N. 1996 Reconstructions of family relationships: Parent-child alliances, personal distress and self-esteem. *Developmental Psychology*, 32, 732-743.
- 嘉手納 悟・今井 章・嶋崎裕志 2004 女子学生における家族関係と摂食障害傾向 健康心理学研究, 17, 32-41.
- 亀口憲治 2003a FIT(家族イメージ法)マニュアル システムパブリカ
- 亀口憲治 2003b 家族のイメージ 河出書房新社
- 上長 然 2007 思春期の身体発育と摂食障害傾向 発達心理学研究, 18(3), 206-215.
- Kanner, A.D., Coyne, J.C., Schaefer, C., & Lazarus, R.S. 1981 Comparison of two modes of stress measurement: daily hassles and uplifts versus major life events. *Journal of Behavioral Medicine*, 4, 1-39.
- 柏木恵子 2003 家族心理学—社会変動・発達・ジェンダーの視点— 東京大学出版会
- 片岡佳美 1997 現代夫婦の勢力関係研究についての一考察 家族社会学研究, 9, 57-66.
- Kering, P.K. & Brown, C.A. 1996 *The Parent-Child Boundaries Scale*. Burnaby: Department of Psychology, Simon Fraser University.
- 菊島勝也 1999 ストレッサーとソーシャル・サポートが中学生時の不登校傾向に及ぼす影響 性格心理学研究, 7(2), 66-76.
- 菊島勝也 2004 児童青年期用ストレッサー尺度 (財)パブリックヘルスリサーチセンター(編) ストレススケールガイドブック 実務教育出版 pp.77-81.
- 小林由美子・栗田 廣 2005 女子高校生における摂食障害傾

- 向と食行動・ストレスとの関連 精神医学, 47(10),
1053-1062.
- 小高 恵 1998 青年期後期における青年の親への態度・行動
についての因子分析的研究 教育心理学研究, 46(3) ,
333-342.
- Kog, E. & Vandereycken, W. 1989 Family interaction in
eating disorder patients and normal controls.
International Journal of Eating Disorders, 8(1), 11-23.
- Kog, E., Vertommen, H., & Vandereycken, W. 1987
Minuchin's psychosomatic family model revised: A
concept-validation study using a
multitrait-multimethod approach. *Family Process*, 26,
235-252.
- 小杉正太郎 (編) 2006 ストレスと健康の心理学 朝倉心理
学講座, 19 朝倉書店
- 狐塚貴博・野口修司・山本喜則・若島孔文 2010 効率的家族
構造測定尺度の開発—ICHIGEKIの作成—
*Interactional Mind*Ⅲ, 86-91.
- 狐塚貴博・若島孔文 2009 コミュニケーション・パターンに
よる関係性の類型と変化—人間コミュニケーションの語用
論の視点から— *カウンセリング研究*, 42(1), 1-10.
- 久保 恵 2000 対人恐怖心性と認知的・投影的親子関係像
教育心理学研究, 48(2), 182-191.
- 久保木富房 1997 思春期・青年期の心身医学 *心身医学*, 37,
15-20.
- 黒川 潤 1990 円環モデルに基づく尺度(和訳版)の標準化
の試み—家族満足度, 親・青年期の子どものコミュニケーション,
FACESⅢについて— *家族心理学研究*, 4(2), 71-82.
- 草田寿子 1995 日本語版 FACESⅢの信頼性と妥当性の検討
カウンセリング研究, 28, 154-162.

- 草田寿子・岡堂哲雄 1993 家族関係査定法 岡堂哲雄（編）
心理検査学—臨床心理査定の基本— 垣内出版
pp.573-581.
- 草田寿子・山田裕紀子 1998 家族関係単純図式投影法の基礎
的研究Ⅳ—家族図式に表現された高校生の家族関係パター
ンと家族コミュニケーションとの関連— カウンセリング
研究, 31(1), 10-18.
- Larson, R.W., Richards, M.H., Moneta, G., Holmbeck, G., &
Duckett, E. 1996 Changes in adolescents' daily
interactions with their families from ages 10 to 18:
Disengagement and transformation. *Developmental
Psychology*, 32, 744-754.
- LaRue, D.E. & Herrman, J.W. 2008 Adolescent stress
through the eyes of high risk teens. *Pediatric Nursing*,
34(5), 375-380.
- Lazarus, R.S. & Folkman, S. 1984 *Stress, appraisal and
coping*. New York: Springer Publishing Company. （本明
寛・春木 豊・織田正美（訳） 1991 ストレスの心理学
—認知的評価と対処の研究— 実務教育出版）
- 前島芳名子・小口孝司 2001 父母の不和が子どもの自尊心、
情緒安定性ならびに攻撃性に及ぼす影響 家族心理学研究,
15(1), 45-56.
- 前川浩子 2005 青年期女子の体重・体型へのこだわりに影響
を及ぼす要因—親の養育行動と社会的要因からの検討— パ
ーソナリティ研究, 13(2) 129-142.
- Mann, B.J., Borduin, C.M., Henggeler, S.W., & Blaske, D.M.
1990 An investigation of systematic conceptualizations
of parent: Child coalitions and symptom change. *Journal
of Consulting and Clinical Psychology*, 58, 336-344.
- 増田彰則・平川忠敏・山中隆夫・志村正子・武井美智子・古賀

- 靖之・鄭忠和 2004a 思春期・青年期の心身症およびその周辺疾患の発症に及ぼす家族機能と養育環境の影響 心身医学, 44(5), 369-378.
- 増田彰則・山中隆夫・武井美智子 平川忠敏・志村正子・古賀靖之・鄭忠和 2004b 家族機能が学校適応と思春期の精神面に及ぼす影響について 心身医学, 44(12), 903-909.
- McGuire, M.T., Story, M., Newmark-Sztainer, D., Halcon, L., Campbell-Forrester, S., & Blum, R.W.M. 2002 Prevalence and correlated weight-control behaviors among caribbean adolescent students. *Journal of Adolescent Health*, 31, 208-211.
- Mellin, A.E., Neumark-Sztainer, D., Story, M., Ireland, M., & Resnick, M.D. 2002 Unhealthy behaviors and psychosocial difficulties among overweight adolescents: The potential impact of familial factors. *Journal of Adolescent Health*, 31, 145-153.
- 皆川州正・村井則子・小野直廣 2001 家庭・家族のストレスに関する研究—大学生を対象とした調査— 感性福祉研究所年報, 2, 221-229.
- 皆川州正・村井則子・渡部純夫 2003a 家族状況・生活状況・パーソナリティ特性・社会的支援・認知的評価・対処が家庭・家族のストレスに及ぼす影響 感性福祉研究所年報, 4, 193-204.
- 皆川州正・村井則子・渡部純夫 2003b 青年期における家庭・家族のストレスに関する研究—回想法による中学・高校・大学時代の比較— 東北福祉大学大学院研究論文集総合福祉学研究, 1, 59-78.
- 皆川州正・村井則子・渡部純夫 2004 青年期における家庭・家族のストレスに関する研究(2)—対処およびソーシャルサポートの効果の検討— 東北福祉大学大学院研究論文

- 集総合福祉学研究, 2, 35-53.
- Minuchin, S. 1974 *Family and family Therapy*. Cambridge: Harvard University Press. (山根常男 (監訳) 1984 家族と家族療法 誠信書房)
- Minuchin, S., Nichols, M.P., & Lee, W.Y. 2007 *Assessing families and couples: From symptom to system*. Boston: Allyn and Bacon. (中村紳一・中釜洋子 (監訳) 2010 家族・夫婦面接のための4ステップー症状からシステムへー 金剛出版)
- Minuchin, S., Rosman, B., & Baker, L. 1978 *Psychosomatic families*. Cambridge: Harvard University Press. (福田俊一 (監訳) 1987 思春期やせ症の家族 星和書店)
- 三浦正江・川岡 史 2008 高校生用学校ストレス尺度 (SSS) の作成 カウンセリング研究, 41, 73-83.
- 宮川充司 1992 家族関係調査票 (FRI) 子どもの心とからだ, 1(1), 10-18.
- 茂木千明 1998 個人の精神的健康と家族関係 仙台白百合女子大学紀要, 2, 127-136.
- Moos, R.H. & Moos, B.S. 1974 *Family environment scale (FES)*. Palo Alto: Consulting Psychologists Press.
- Moos, R.H. & Moos, B.S. 2002 *Family environment scale Manual: Development, applications and research. 3rd ed.* Menlo Park: Mind Garden, Inc.
- 盛岡清美・望月 嵩 1997 新しい家族社会学 4訂版 培風館
- 諸井克英 1996 家族内労働の分担における衡平性の知覚 家族心理学研究, 10(1), 15-30.
- 向井隆代 2010 母と娘と摂食障害傾向ー娘の思春期との関連においてー 人間環境学研究, 8(2), 97-103.
- Mukai, T., Cargo, M., & Shisslak, C.M. 1994 Eating attitudes and weight preoccupation among female high school

- students in Japan. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 35, 677-688. (堀 洋道 (監修)・松井 豊 (編) 2001 心理測定尺度集 (3) サイエンス社 pp.253-257.)
- 村瀬嘉代子 1988 不登校と家族病理一個別にして多面的アプローチ— 児童青年精神医学とその近接領域, 29(6), 374-389.
- Muuss, R.H. 1996 *Theories of adolescence. 6thed.* New York: Mcgraw-Hill College.
- 内閣府 2011 平成 23 年版子ども・若者白書 佐伯印刷
- 中釜洋子 2000 友人と家族 村瀬嘉代子・三浦香苗・近藤邦夫・西林克彦 (編) 青年期の課題と支援 新曜社, 22-27.
- 中井義勝 2000 摂食障害の疫学 心療内科, 4, 1-9.
- 中井義勝 2003 Eating attitudes test (EAT)の妥当性について 精神医学, 45(2), 161-165.
- 中井義勝 2010 摂食障害発症頻度と摂食障害関連症状の時代的变化 精神医学, 52(4), 379-383.
- 中井義勝・佐藤益子・田村和子・杉浦まり子・林 純子 2003 大学と短大の女子学生を対象とした過去 20 年間における摂食障害の実態の推移 精神医学, 45(12), 1319-1322.
- 中井義勝・田村和子・杉浦まり子・林 純子・佐藤益子 2004 中学生, 高校生, 大学生を対象とした身体像と食行動および摂食障害の実態調査 精神医学, 46(12), 1269-1273.
- 中見仁美 1999 Family System Test による日本の家族構造の研究—大学生の親子間の親密さと力関係を通して— 臨床心理学研究, 25, 83-92.
- 中見仁美・桂田恵美子 2007 大学生における Family System Test (FAST) の評価基準の検討—面接の応答, 精神的健康度の関連から— 家族心理学研究, 21(1), 20-30.
- 名越泰秀・原田倫治・山下達久・加嶋晶子・岡本明子・梶井裕

- 子・角掛奈奈子・和田良久・福居謙二 2003 摂食障害の家族に関する Family Adaptability and Cohesion Evaluation Scale at Kwansei Gakuin III (FACESKG III) による検討 心身医学, 43(11), 755-764.
- Nichols, M. 1984 *Family therapy: Concepts and methods*. New York: Gardner Press.
- Neighbors, B.N., Forehand, R., & Bau, J.J. 1997 Interparental conflict and relations with parents as predictors of young adult functioning. *Developmental and Psychopathology*, 11, 169-187.
- 日本心身医学会教育研修委員会 (編) 1991 心身医学の新しい診療指針 心身医学, 31, 537-576.
- 西出隆紀 1993 家族アセスメントインベントリーの作成 家族心理学研究, 7(1), 53-65.
- 西出隆紀 1995 家族システムの機能状態が子どもの学校適応感に与える影響に関する一研究 家族心理学研究, 9, 23-34.
- 西出隆紀・夏野良司 1997 家族システムの機能状態の認知は子どもの抑鬱感にどのような影響を与えるか 教育心理学研究, 45(4), 90-97.
- 野口修司 2009 青年期の子ども視点における家族構造と社会的勢力に関する研究 家族心理学研究, 23(2), 91-109.
- 野口修司・狐塚貴博・宇佐美貴章・若島孔文 2009 家族構造測定尺度－ICHIGEKI－の作成と妥当性の検討 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 58(1), 247-266.
- 野口修司・若島孔文 2007 青年期の親子関係における社会的勢力とコミュニケーションに関する研究 家族心理学研究, 21(2), 95-105.
- 野口裕二・齋藤 学・手塚一郎・野村直樹 1991 FES (家族環境尺度) 日本語版の開発 家族療法研究, 18, 147-158.

- 野末武義 1991 発達過程の観点から見た家族システムの健康性, 家族心理学研究, 5, 159-172.
- 小保方晶子・無藤 隆 2005 親子関係・友人関係・セルフコントロールから検討した中学生の非行傾向行為の規定要因および抑止要因 発達心理学研究, 16(3), 286-299.
- 落合良行・佐藤有耕 1996 親子関係の変化からみた心理的離乳への過程の分析 教育心理学研究, 44(1), 11-22.
- 岡堂哲雄 2006 家族というストレス—家族心理士のすすめ— 明光社
- 岡安孝弘 1999 ストレス 中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁榊算男・立花政夫・箱田祐司(編) 心理学辞典 有斐閣 p.475.
- 岡安孝弘・嶋田洋徳・坂野雄二 1993 中学生におけるソーシャル・サポートの学校ストレス軽減効果 教育心理学研究, 41(3), 302-312.
- Olson, D.H. 1991 Commentary: Three-dimensional(3D) circumplex model and revised scoring of FACES III. *Family Process*, 30, 74-78.
- Olson, D.H., McCubbin, H.I., Larsen, A., Muxen, M., & Wilson, M. 1986 *Family inventories*. Saint Paul: Family Social Science, University of Minnesota.
- Olson, D.H., Portner, J., & Lavee, Y. 1985 *FACES III: Family adaptability and cohesion evaluation scales*. St. Paul: Family Social Science, University of Minnesota.
- Olson, D.H., Sprenkle, D.H., & Russell, C.S. 1979 Circumplex model of marital and family systems I: Cohesion and adaptability dimensions, family types and clinical application. *Family Process*, 18, 3-28.
- 大場真理子・安藤哲也・宮崎隆穂・川村則行・濱田孝・大野貴子・龍田直子・苅部正巳・近喰ふじ子・吾郷晋浩・小牧元・

- 石川俊男 2002 家族環境から見た摂食障害の危険因子についての予備的研究 心身医学, 42(5), 315-324.
- 尾関友佳子 2004 大学生用ストレス自己評価尺度 (財)パブリックヘルスリサーチセンター (編) ストレススケールガイドブック 実務教育出版 pp.162-168.
- 尾関友佳子・原口雅浩・津田 彰 1991 大学生の生活ストレス、コーピング、パーソナリティとストレス反応 健康心理学研究, 4(2), 1-9.
- Patton, G.G. 1988 Mortality in eating disorders. *Psychological Medicine*, 18(4), 947-951.
- Patton, G.C., Johnson-Sabine, E., Wood, K., Mann, A.H., & Wakeling, A. 1990 Abnormal eating attitudes in London school girls- A prospective epidemiological study: Outcome at 12-month follow-up. *Psychological Medicine*, 20, 383-394.
- Patton, G.C., Selzer, R., Coffey, C., Carlin, J.B., & Wolfe, R. 1999 Onset of adolescent eating disorders: Population based cohort study over 3 years. *British Medical Journal*, 318, 765-768.
- Perosa, L.M. & Perosa, S.L. 1990 The revision and validation of the structural family interaction scale. Paper presented at the 98th Annual Convention of the American Psychological Association, Boston.
- Perosa, S.L. & Perosa, L.M. 1993 Relationships among Minuchin's structural family model, identity achievement, and coping style. *Journal of Counseling Psychology*, 40(4), 479-489.
- Rhodes, S.L. 1977 A developmental approach to the life cycle of the family. *Social Works*, 5, 301-310.
- Robyn, N.W., Christy, M.B., & Jackson-Newsom, J. 2004

- Mothers' and fathers' knowledge of adolescents' daily activities. *Journal of Family Psychology*, 18(2), 348-360.
- Roosa, M.W., Dumka, L.E., & Tein, J.T. 1996 Family characteristics as mediators of the influence of problem drinking and multiple risk status on child mental health. *American Journal of Community Psychology*, 24(5), 607-624.
- Rowa, K., Kering, P.K., & Geller, J. 2001 The family and anorexia nervosa: examining parent-child boundary problems. *European Eating Disorders Review*, 9, 97-114.
- Russell, G.F., Szmukler, G.I., Dare, C., & Eisler, I. 1987 An evaluation of family therapy in anorexia nervosa and bulimia nervosa. *Archive of general Psychiatry*. 44(12), 1047-1056.
- 貞木隆志・榎野 潤・岡田 弘司 1992 家族機能と精神的健康—Olson の FACESⅢを用いての実証的検討— 心理臨床学研究, 10(2), 74-79.
- 佐伯俊成・飛鳥井 望・三宅由子・箕口雅博・山脇成人 1997 Family Assessment Device (FAD) 日本語版の信頼性と妥当性 季刊 精神科診断学, 8(2), 181-192.
- 齋藤千鶴 2004 女子大学生の摂食障害傾向に及ぼす家族の食事文化の影響 家族心理学研究, 1, 43-55.
- Santisteban, D.A., Perez-Vidal, A., Coatsworth, J.D., Kurtines, W.M., Schwartz, S.J., LaPerriere, A., & Szapocznik, J. 2003 Efficacy of brief strategic family therapy in modifying: Hispanic adolescent behavior problems and substance use. *Journal of Family Psychology*, 17(1), 121-133.
- Selvini-Palazzoli, M., Boscolo, L., Cecchin, G., & Prata, G. 1978 *Paradox and counterparadox: A new model in the*

- therapy of the family in schizophrenic transaction*. New York: Jason Aronson. (鈴木浩二 (監訳) 1989 逆説と対抗逆説 星和書店)
- Selye, H. 1976 *The stress of life. revised ed.* New York: McGraw-Hill Book. (杉靖三郎・藤井尚治・田多井吉之介・竹宮隆 (訳) 1988 現代社会とストレス 原書改訂版 法政大学出版局)
- 嶋 信弘 1992 大学生におけるソーシャルサポートの日常生活ストレスに対する効果 社会心理学研究, 7(1), 45-53.
- 下坂幸三 1988 アノレクシア・ネルヴォーザ論考 金剛出版
- 下坂幸三・秋谷たつ子(編) 1988 家族療法ケース研究 1 摂食障害 金剛出版
- Skowron, E.A. & Friedlander, M.L. 1998 The differentiation of self inventory. *Journal of Counseling Psychology*, 45(3), 235-246.
- Smolak, L. & Levine, M.P. 1993 Separation-individuation difficulties and the distinction between bulimia nervosa and anorexia nervosa in college women. *International Journal of Eating Disorders*, 14, 33-41.
- Steinberg, L.T. & Morris, A.S. 2001 Adolescent development. *Annual Review of Psychology*, 52, 83-110.
- Steinhauer, P.D. 1984 Clinical applications of the process model of family functioning. *Canadian Journal of Psychiatry*, 29, 98-111.
- Stierlin, H. & Weber, G. 1989 *Unlocking the family door: A systemic approach to the understanding and treatment of anorexia nervosa*. New York: Brunner/Mazel Publishers.
- 鈴木幹子・伊藤裕子 2001 女子青年における女性性受容と摂食障害傾向—自尊感情, 身体満足度, 異性意識を媒介とし

- てー 青年心理学研究, 13, 31-46.
- 高橋 彩 2008 男子青年における進路選択時の親子間コミュニケーションとアイデンティティとの関連 パーソナリティ研究, 16(2), 159-170.
- 立木茂雄 1999 家族システムの理論的・実証的研究—オルソンの円環モデル妥当性の検討— 川島書店
- 筒井末春 1999 ダイエットの功罪 からだの科学, 7, 79-82.
- 浦上涼子・小島弥生・沢宮容子・坂野雄二 2009 男子青年における瘦身願望についての研究 教育心理学研究, 57, 263-273.
- Usami, T., Kozuka, T., Hiraizumi, T., Morikawa, N., Furuyama, A., & Wakashima, K. 2011 Examining family transition with the current narratives. *International Journal of Brief Therapy and Family Science*, 1(2), 111-116.
- 宇都宮博 2005 女子青年における不安と両親の夫婦関係に関する認知 教育心理学研究, 53(2), 209-219.
- van Furth, E.F., van Strien, D.C., Martina, L.M.L, van Son, M.J.M., Hendrickx, J.J.P., & van Engeland, H. 1996 Expressed emotion and the prediction of outcome in adolescent eating disorders. *International Journal of Eating Disorders*, 20, 19-31.
- 和田実 1992 大学新入生の心理的要因に及ぼすソーシャルサポートの影響 教育心理学研究, 40, 386-393.
- 和田実 1998 大学生のストレスへの対処, およびストレス, ソーシャルサポートと精神的健康の関係—性差の検討— 実験社会心理学研究, 38, 193-201.
- 若島孔文 2005 家族システム論の基礎 松原達哉・楡木満生・澤田富雄・宮城まり子 (共編) 心のケアのためのカウンセリング大辞典 培風館 pp.446-455.

- 若島孔文 2010 家族療法プロフェッショナル・セミナー 金子書房
- 若島孔文・狐塚貴博・板倉憲政・宇佐美貴章 2010
「ICHIGEKI」を用いた同時的・累積的家族関係に関する研究 *Interactional Mind* III, 92-98.
- 若島孔文・松井博史 2003 “情報回帰速度モデル”の理論的研究 立正大学心理学研究所紀要 創刊号, 43-67.
- 若島孔文・松井博史 2004 情報回帰速度モデルに基づく集団変移モデルの事例的検討 立正大学心理学研究所紀要, 2, 41-53.
- 若島孔文・佐藤明子・長谷川啓三 2000 不登校に対して短期家族療法が有効であった1症例—時間の概念を取り入れた新しいシステムモデル（情報回帰速度モデル）による考察— 心療内科, 4(5), 373-378.
- Waller, G., Slade, P., & Calam, R. 1990 Family adaptability and cohesion: Relation to eating attitudes and disorders. *International Journal of Eating Disorder*, 9, 225-228.
- 渡辺さちや 1989 家族機能と自我同一性地位の関わり—青年期の自我の自立をめぐる— 家族心理学研究, 3, 85-95.
- 渡辺さちや 1996 個人の発達・家族の発達 日本女子大学紀要, 43, 13-19.
- Watzlawick, P., Bavelas, J.B., & Jackson, D.D. 1967. *Pragmatics of human communication: A study of interactional patterns, pathologies and paradoxes*. New York: W.W.Norton.
- Watzlawick, P., Weakland, J.H., & Fisch, R. 1974 *Change: Principles of problem formation and problem resolution*. New York: W.W.Norton. (長谷川啓三(訳) 1992 変化の原理—問題の形成と解決— 法政大学出版社)

- Weakland, J.H. 1979 The double-bind theory: Some current implications for child psychiatry. *Journal of American Academy of Child Psychiatry*, 18 (1), 54-66.
- Wewetzer, C., Deimel, W., Herpertz-Dahlman, B., Matthejat, F., & Remschmidt, H. 1996 Follow-up investigation of family relations in patients with anorexia nervosa. *European Child & Adolescent Psychiatry*, 5, 18-24.
- Wood, B. 1985 Proximity and hierarchy: Orthogonal dimensions of family interconnectedness. *Family Process*, 24, 497-507.
- Woodside, D.B., Lackstrom, J. Shekter-Wolfson, L., & Heinmaa, M. 1996 Long-term follow-up of patient-reported family functioning in eating disorders after intensive day hospital treatment. 1996 *Journal of Psychosomatic Research*, 41(3), 269-277.
- 山中学・宮坂菜穂子・吉内一浩・佐々木直・野村忍・久保木富房 2000 大学生のメンタルヘルスと心身症－大学生の摂食障害－ 心身医学, 40(3), 215-219.
- 山登敬之 2003 若者文化、ダイエットと摂食障害－美の強迫と成熟の困難さのはざままで こころの科学, 112, 22-27.
- 遊佐安一郎 1984 家族療法入門－システムズ・アプローチの理論と実際－ 星和書店

付 記

本論文の研究は，日本学術振興会科学研究費補助金（特別研究員奨励費）の助成を受け実施した（課題番号：22・7245，研究代表者：狐塚貴博，助成期間：平成22年度～平成23年度，研究題目：家族構造と家族コミュニケーションが及ぼす子どもの家族内ストレスと独立意識への影響）。なお，以下に記載する公刊した論文を加筆，修正，改稿したものである。

博士論文に該当する公表された論文との対応

第1章	
第2章	狐塚貴博・若島孔文 2009 コミュニケーション・パターンによる関係性の類型と変化—人間コミュニケーションの語用論の視点から— カウンセリング研究, 42(1), 1-10. 狐塚貴博・野口修司・山本喜則・若島孔文 2010 効率的家族構造測定尺度の開発—ICHIGEKIの作成— Interactional Mind III, 86-91.
第3章	研究Ⅰ 狐塚貴博・野口修司・閨間理絵・石橋曜子・若島孔文 2008 家族構造の測定における構成因子に関する研究 立正大学臨床心理学研究, 6, 19-32.
第4章	研究Ⅱ 狐塚貴博 2011 青年期における家族構造と家族コミュニケーションに関する研究—子どもの家族内ストレスからの検討— 家族心理学研究, 25(1), 30-44.
第5章	研究Ⅲ Kozuka, T. 2013 A Study of Family Structure Relevant to Adolescent's Stress Process. The 7th Conference of International Academy of Family Psychology, Program & Abstract, 214.
第6章	研究Ⅳ 狐塚貴博 青年の摂食障害傾向と家族構造との関連 日本ブリーフセラピー協会第4回学術会議プログラム, 7.
第7章	研究Ⅴ
第8章	
第9章	

謝 辞

2013年10月現在,ここ仙台は,冬を迎えようとしています。思い返せば,大学入学から数えると10年が経過していました。博士号の取得を志し,東北大学に来てからは4年半。この4年半の間には,一生忘れることはないであろう東日本大震災という未曾有の災害を経験し,臨床心理士という立場から臨床活動を行いつつも,なんとか本論文をまとめることが出来ました。

本論文は筆者が現東北大学大学院教育学研究科,若島孔文准教授の指導の下,学部4年次より取り組んできた,対人コミュニケーションの研究に始まり,青年のストレスと家族構造との関連に至る一連の研究についてまとめたものです。本論文をまとめるにあたり,様々な先生方,同僚,後輩方からご助言,ご指導,ご鞭撻をいただきました。本論文は,このような方々からのお力添えによりまとめられたものと心得,この紙面を借りて,感謝の気持ちと御礼を述べさせていただきます。

まず,貴重な時間を割き質問紙やインタビューに協力して下さいました,様々な大学や専門学校の学生の皆様,高校の生徒の皆様,その他ご協力いただきました皆様に深くお礼を申し上げます。研究の対象者として,多くの皆様のご協力がなければ,実証研究を行うことが出来ませんでした。深くお礼を申し上げます。

また,Aクリニックの院長,ならびにスタッフの方々に深く感謝を申し上げます。とりわけ院長には,診療後に研究の相談をさせていただきました。院長はさぞお疲れだったことと思いますが,真剣に議論して下さい,私の研究を評価して下さいました。院長のお力添えがなければ,研究をまとめることは出来なかったと思います。ありがとうございました。

次に,本論文の研究においてデータの収集にご協力いただいた,生田倫子先生(神奈川県立保健福祉大学),佐藤宏平先生(山

形大学), 花田里欧子先生(京都教育大学), 水谷久康先生(ITC 家族心理研究センター・トレーナー)に深く感謝を申し上げます。生田倫子先生, 佐藤宏平先生, 花田里欧子先生は, 貴重な講義時間を割き質問紙の配布をしてくださいました。水谷久康先生は, 周囲に掛け合い, データ収集が可能な学校をご紹介くださいました。先生方にはデータの収集のみならず, 学会や研修会等で研究や心理臨床の実践について, 貴重なご意見と丁寧なご指導をいただきました。先生方にご協力いただいたことにより, 博士論文に用いた研究の質が格段に向上したと思っております。ありがとうございました。

また, 修士論文の作成や実習の指導をしていただきました片岡玲子先生(立正大学心理学部元教授)にも深く感謝を申し上げます。私が修士2年でゼミを変更しなければならない状況になった際, 先生は私を快くゼミに招いて下さり, 終始丁寧で温かい指導を下さいました。修士論文の質問紙から文章に至るまで, 一字一句細かく添削して下さい, 私の独りよがりな文章について, 読み手の立場からわかりやすく表現することの重要性をご指導いただきました。実習指導では, 医療や福祉, 教育現場での先生のご経験から, どのような領域においても信念をもって取り組む姿勢を学ばせていただきました。大学院修了後も, 先生は学会や研修会で常に私を励まして下さり, 先生の温かい関わりで, 私は成長できたと実感しております。ありがとうございました。

次に, 本論文を作成するにあたり, 貴重なご指導, ご助言のみならず, 終始温かい励ましを下さいました, 東北大学大学院教育学研究科, 若島孔文准教授, 長谷川啓三教授, 上埜高志教授の3名の先生方に心より感謝申し上げます。

若島孔文先生には, 筆者の立正大学心理学部, ならびに同大学院心理学研究科在学中から, 学部4年次の卒業論文, 修士2年次の修士論文, 東北大学大学院に転入してからの学位論文の

作成，さらには臨床実践に至るまで，ほぼ一貫してご指導いただきました。先生には，論文の作成や臨床実践のみならず，様々な執筆活動の機会や研究を行う環境，貴重な臨床実践の機会をいただき，研究や臨床実践の楽しさと厳しさを学びました。おそらく，若島孔文先生に学んだ数年間の思い出をここに述べようものなら，本研究の本文のページ数を超えてしまい，きりが無いであろうと思われれます。しかし，あえてここで述べたいことは，若島孔文先生に出会うことなければ，研究者としての進路，また臨床家として何とかやっていけるまでの技術や信念の獲得は出来なかったように思います。先生は筆者の人生に大きな影響を与えた人物であり，人生の師であります。ここに深くお礼を申し上げると共に，私の今後の研究者としての進路に期待していただきたいと思ひます。長谷川啓三先生からは，各研究発表の際に「この研究を一言で表すと何や」という言葉に代表されるように，世の中の複雑な事象の核心たる部分を把握し，拡散して捉えるのではなくシンプルに捉える視点を学ばせていただきました。また，様々な執筆活動の機会を頂き，常に温かいお言葉で励ましをいただきました。この場を借りまして深くお礼申し上げます。上埜高志先生からは，各研究における質問紙のスケールの妥当性や題目，本文中に用いたワードなど詳細な部分にまで丁寧にご指導いただき，学位論文は今後の研究者としての進路を左右する重要な研究であることをご指摘いただきました。深くお礼申し上げます。

加えて，東北大学大学院教育学研究科臨床心理コースの加藤道代教授と安保英勇准教授に深く感謝を申し上げます。加藤道代先生には，特定課題研究の発表を通して，論文の構成に関するご助言やご指導をいただきました。安保英勇先生には，ストレスに関する概念や測定するスケールについてのご指導をいただきました。ありがとうございました。

そして，大学学部生時代から共に学んできた二人の学友，野

口修司さんと板倉憲政さんに心より感謝申し上げます。長い学生生活を送る中で、彼らは時には同期として、時には先輩や後輩として、博士課程後期まで、研究や臨床活動を共にしました。お二人との研究や臨床についての議論により、本研究の質を高めることができました。私は彼らに、「もうだめかも」「間に合わないかも」という弱音を何度も言いましたが、決まって彼らは「今まで何とかならなかったことある？」と返答しました。このやりとりを何度行ったかはわかりません。しかし、今思えば、このやりとりは、私の情緒的サポートとして機能していたのだと実感しております。

さらに、若島研究室の院生の皆様、宇佐美貴章さん、小林 智さん、浅井継悟さん、平泉 拓さん、森川夏乃さんに深く感謝いたします。若島研究室は共同研究が盛んであるため、そのいくつか共に取り組む事ができました。その中での様々な議論を通して、本研究を精緻化するためのアイデアが生まれました。宇佐美貴章さんは英語が堪能であり、英語論文の添削をして下さいました。小林 智さん、浅井継悟さん、平泉 拓さん、森川夏乃さんには、各実証研究への貴重なご意見、丁寧な添削をいただきました。様々な面で、私を支えていただいたことに改めてお礼申し上げます。

最後になりますが、長年にわたり私を支えてくれた両親と妻に深くお礼を申し上げます。両親は陰ながら私を見守り、励まして下さいました。私は両親から、家族の大切さとモデルとなる家族像を学びました。また妻は、長年に渡り私を信じ、様々な面で温かく支えてくれました。

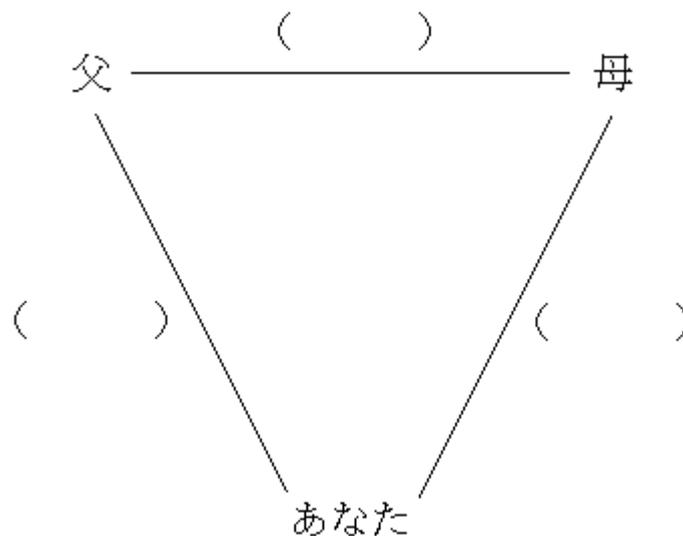
本論文の作成に関わって下さった多くの方に深く感謝し、執筆を終えることにします。

資 料

資料 1 第 4 章で使用した家族構造，コミュニケーション，家族内ストレスについての測定項目

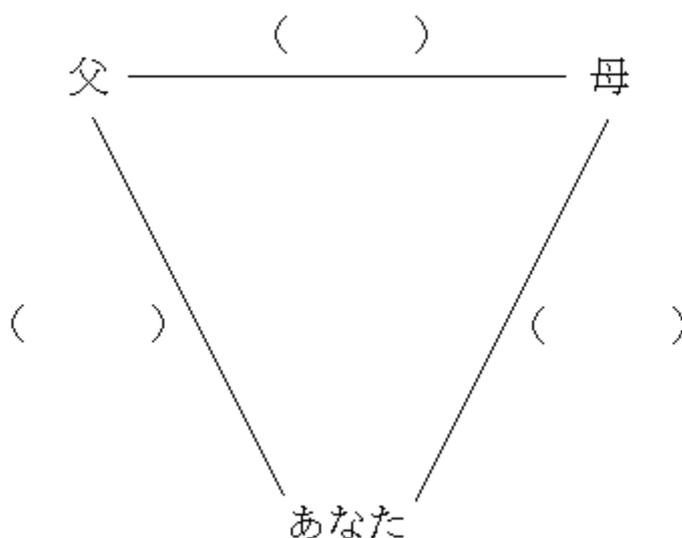
1-1 家族構造測定尺度

下記の図は「父・母・あなた」という 3 者の関係を示しています。2 者間（父 - 母，父 - あなた，母 - あなた）をつなぐ線は，それぞれの関係における「結びつき（お互いの仲の良さや親密さ，連帯感）」の強さを表しています。あなたから見て，「お互いの結びつきが非常に弱い」を 1 として「お互いの結びつきが非常に強い」を 10 とすると，2 者間におけるそれぞれの「結びつき」が 1～10 のどれに当てはまるかを，下記の表を参考に（ ）の中に記入して下さい



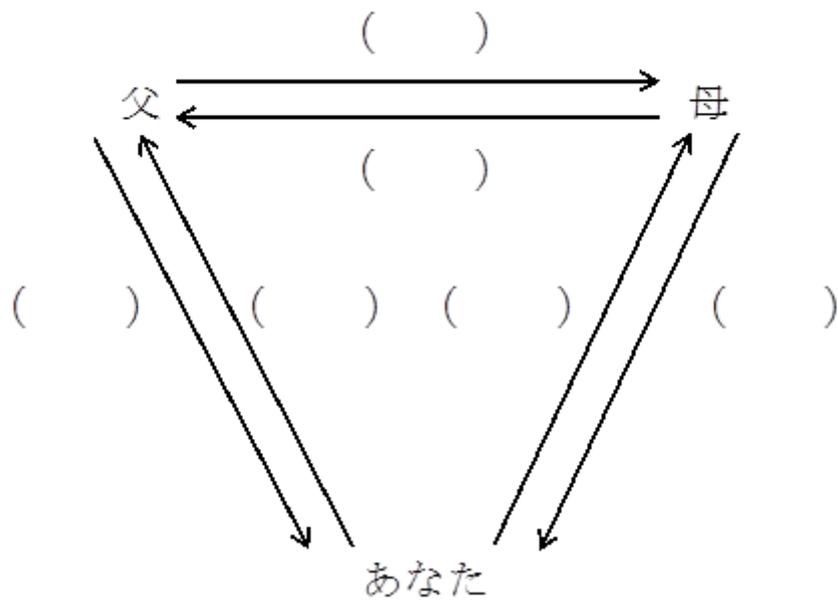
非常に弱い	かなり弱い	弱い	やや弱い	どちらかといえば弱い	どちらかといえば強い	やや強い	強い	かなり強い	非常に強い
1	- 2	- 3	- 4	- 5	- 6	- 7	- 8	- 9	- 10

下記の図は「父・母・あなた」という3者の関係を示しています。2者間（父 - 母，父 - あなた，母 - あなた）をつなぐ線は，それぞれの関係における「利害的關係(お互いが自分に何か得られるものや興味がある時だけお互いに関係する，または，家族に何か重要なことがある時だけお互いが興味・関心を示す)」の程度を表しています。あなたから見て，「お互いの利害的關係の程度が非常に低い場合」を1として「お互いの利害的關係の程度が非常に高い場合」を10とすると，2者間におけるそれぞれの「利害的關係」の程度が1～10のどれに当てはまるかを，下記の表を参考に（ ）の中に記入して下さい。



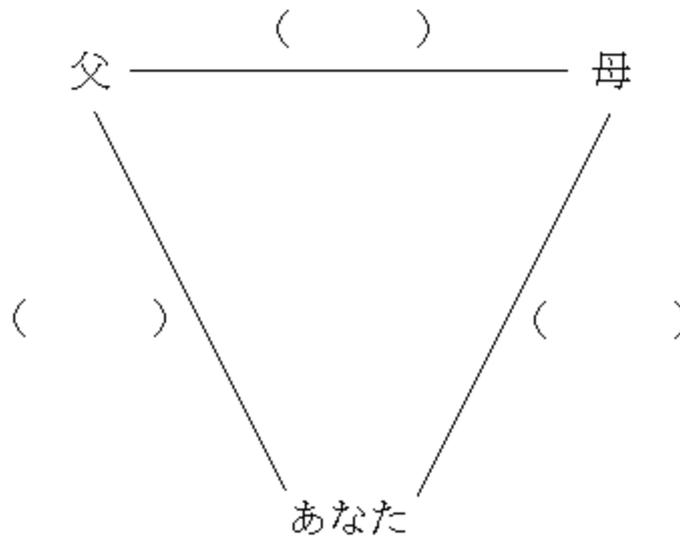
非常に低い		かなり低い		低い		やや低い		どちらかといえば低い		どちらかといえば高い		やや高い		高い		かなり高い		非常に高い
1	-	2	-	3	-	4	-	5	-	6	-	7	-	8	-	9	-	10

下記の図は「父・母・あなた」という3者の関係を示しています。2者間（父 - 母，父 - あなた，母 - あなた）をつなぐ矢印は，それぞれの関係における（矢印の向かう方向に対する）「勢力（影響力や発言力，決定力）」の強さを表しています。あなたから見て，「勢力が非常に弱い」を1として「勢力が非常に強い」を10とすると，2者間におけるそれぞれの「勢力」が1～10のどれに当てはまるかを，下記の表を参考に矢印から一番近い（ ）の中に記入して下さい。



						どちらかといえば弱い		どちらかといえば強い		やや強い		強い		かなり強い		非常に強い		
非常に弱い		かなり弱い		弱い		やや弱い		やや強い		強い		かなり強い		非常に強い				
1	-	2	-	3	-	4	-	5	-	6	-	7	-	8	-	9	-	10

下記の図は「父・母・あなた」という3者の関係を示しています。2者間（父 - 母，父 - あなた，母 - あなた）をつなぐ線は，それぞれの関係における「開放性（家庭に他の人が遊びに来たり夕食を共にしたりすることや家族以外の人を家に招くことを好む，また，2者の関係を家族以外の人に話す（オープンにする）」を表しています。あなたから見て，「開放性が非常に低い（閉鎖的）」を1として「開放性が非常に高い（開放的）」を10とすると，2者間におけるそれぞれの「開放性」が1～10のどれに当てはまるかを，下記の表を参考に（ ）の中に記入して下さい。



非常に低い	かなり低い	低い	やや低い	どちらかといえば低い	どちらかといえば高い	やや高い	高い	かなり高い	非常に高い
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10

1-2 率直なコミュニケーションの測定項目（代表例として、 青年から母親へ）

あなたと母親の間で、以下のようなコミュニケーションがあるかどうかについてお尋ねします。

以下の各項目について、最もよくあてはまる番号を1つ選び○をして下さい。

	1	2	3	4	5
	ま っ た く な い	た ま に あ る	と き ど き あ る	よ く あ る	い つ も あ る
1 私は母と話をしている時、自分の都合の悪い話になると話題を変える	1	2	3	4	5
2 私は母に伝えたいことを率直に伝える	1	2	3	4	5
3 私は母をよくほめる	1	2	3	4	5
4 私は母に自分自身の人生設計について話す	1	2	3	4	5
5 私は心配事や悩みがあったら母にそのことを話す	1	2	3	4	5
6 私は母に自分自身の仕事（学校、アルバイト、パート）でのグチを言う	1	2	3	4	5
7 私は母に気軽に頼みごとをする	1	2	3	4	5
8 私は何か重要なことがあっても、母に相談しない	1	2	3	4	5
9 私は何か重要なことがあると、母に話をきり出す	1	2	3	4	5
10 私は母によく連絡をする	1	2	3	4	5
11 私は母に自分自身の仕事や職業のことについての話をする	1	2	3	4	5
12 私は母に対して腹を立てた時、母を責め立てる	1	2	3	4	5
13 私は母に自分自身の友人関係のことを話す	1	2	3	4	5
14 私は母に感謝していることを伝える	1	2	3	4	5
15 私は母に自分自身のものの見方や考え方を話す	1	2	3	4	5
16 私は母に自分自身の病気やけがなど身体面のことを話す	1	2	3	4	5
17 私は母と話すのを避けることがある	1	2	3	4	5

1-3 親から青年への媒介伝達の測定項目

母親とあなたの間で、父親に関する以下のようなコミュニケーションがあるかどうかについてお尋ねします。

以下の各項目について、最もよくあてはまる番号を1つ選び○をして下さい。

	1	2	3	4	5
	まったく ない	たまに ある	ときど きある	よく ある	いつも ある
1 父は私のものの見方や考え方を尊重していることを、母から聞くことがある	1	2	3	4	5
2 父は私に直接は言えないが言いたいことがあるということを、母から聞くことがある	1	2	3	4	5
3 父は私のすることに賛成していることを、母から聞くことがある	1	2	3	4	5
4 父が私を信頼していることを、母から聞くことがある	1	2	3	4	5
5 父の私に対する要求を、母から聞くことがある	1	2	3	4	5
6 父が私を子ども扱いしていることを、母から聞くことがある	1	2	3	4	5
7 父親自身の病気やけがなど身体面のことを、母から聞くことがある	1	2	3	4	5
8 父親自身の人生設計について、母から聞くことがある	1	2	3	4	5
9 父が私の言動に対して喜んでくれたことを、母から聞くことがある	1	2	3	4	5
10 父が私の言動を否定的にとらえていることを、母から聞くことがある	1	2	3	4	5
11 父親自身の興味や関心事を、母から聞くことがある	1	2	3	4	5
12 父が私の言動に対して私をほめてくれたことを、母から聞くことがある	1	2	3	4	5
13 父親自身のものの見方や考え方を、母から聞くことがある	1	2	3	4	5
14 父親自身の仕事や職業のことについて、母から聞くことがある	1	2	3	4	5
15 父が私を理解しようとしていないことを、母から聞くことがある	1	2	3	4	5

1-4 配偶者についての媒介伝達の測定項目

あなたと母親との間で、両親の関係についての以下のようなコミュニケーションがあるかどうかについてお尋ねします。

以下の各項目について、最もよくあてはまる番号を1つ選び○をして下さい。

	1	2	3	4	5
	まったく ない	たまに ある	ときど きある	よく ある	いつも ある
1 父に言いたいことがあるが、はっきりと口に出して言えないと、母から聞くことがある	1	- 2	- 3	- 4	- 5
2 父はかけがえのない存在であると、母から聞くことがある	1	- 2	- 3	- 4	- 5
3 父と一緒に出かけたと時の話を、母から聞くことがある	1	- 2	- 3	- 4	- 5
4 父との関係に満足していることを、母から聞くことがある	1	- 2	- 3	- 4	- 5
5 父に対するグチや不満を、母から聞くことがある	1	- 2	- 3	- 4	- 5
6 父を信頼していることを、母から聞くことがある	1	- 2	- 3	- 4	- 5
7 父との関係は強固であることを、母から聞くことがある	1	- 2	- 3	- 4	- 5
8 父との関係に満足していないことを、母から聞くことがある	1	- 2	- 3	- 4	- 5
9 父の考えや気持ちを共有してあげたいと思っていることを、母から聞くことがある	1	- 2	- 3	- 4	- 5
10 父との夫婦関係によって幸福であることを、母から聞くことがある	1	- 2	- 3	- 4	- 5
11 父の人柄に魅力を感じていることを、母から聞くことがある	1	- 2	- 3	- 4	- 5
12 父に対する褒め言葉を、母から聞くことがある	1	- 2	- 3	- 4	- 5

1-5 家族内ストレスの測定項目

以下の各項目について、最もよくあてはまる番号を1つ選び○をして下さい。

	1	2	3	4	5
	全く当てはまらない	あまり当てはまらない	どちらでもない	やや当てはまる	よく当てはまる
1 親が異性との交際に干渉する	1	2	3	4	5
2 親が私のことをわかってくれない	1	2	3	4	5
3 門限が厳しい	1	2	3	4	5
4 家族がお互いに無関心である	1	2	3	4	5
5 家族がそろって食事をすることがない	1	2	3	4	5
6 家族同士で悪口を言う	1	2	3	4	5
7 親が過保護である	1	2	3	4	5
8 親が私のやりたいことを認めてくれない	1	2	3	4	5
9 親のしつけが厳しい	1	2	3	4	5
10 親の意見を押し付けられる	1	2	3	4	5
11 両親がよくケンカをする	1	2	3	4	5
12 親のグチを聞かされる	1	2	3	4	5
13 家族としてのまとまりがない	1	2	3	4	5
14 父親が母親を批判する	1	2	3	4	5
15 親が私のことを心配しすぎる	1	2	3	4	5
16 両親の仲が悪い	1	2	3	4	5
17 家族の交流がない	1	2	3	4	5
18 親が家庭のことに無関心である	1	2	3	4	5
19 親が私の携帯電話や手帳を勝手に見る	1	2	3	4	5
20 親が家族に暴力をふるう	1	2	3	4	5
21 自分の考えや意見を親に言えない	1	2	3	4	5
22 親の意見が絶対である	1	2	3	4	5
23 親が私に優しく接してくれない	1	2	3	4	5

資料 2 第 5 章から第 7 章で使用した, ICHIGEKI(Inventory for Character of Intra-Inter Generation in Kinship) による家族構造の測定項目

あなたの家族(父・母・あなた)についてお尋ねします。

以下の各質問について、主語に注意し、最もあてはまる番号を一つ選んで○をして下さい。

	1	2	3	4	5	6
	全く そう 思わ ない	そ う 思 わ な い	そ ど ち ら か と い え ば	そ ど ち ら か と い え ば	そ う 思 う	非 常 に そ う 思 う
例	あなたと父親は、お互いの仲の良さや親密さ、連帯感などの結びつきが強い					
	1	2	3	4	5	6
1	あなたと父親は、お互いの仲のよさや親密さ、連帯感などの結びつきが強い					
	1	2	3	4	5	6
2	あなたと母親は、お互いの仲のよさや親密さ、連帯感などの結びつきが強い					
	1	2	3	4	5	6
3	父親と母親は、お互いの仲のよさや親密さ、連帯感などの結びつきが強い					
	1	2	3	4	5	6
4	あなたは父親に対して、決定力や影響力、発言力が強い					
	1	2	3	4	5	6
5	父親はあなたに対して、決定力や影響力、発言力が強い					
	1	2	3	4	5	6
6	あなたは母親に対して、決定力や影響力、発言力が強い					
	1	2	3	4	5	6
7	母親はあなたに対して、決定力や影響力、発言力が強い					
	1	2	3	4	5	6
8	父親は母親に対して、決定力や影響力、発言力が強い					
	1	2	3	4	5	6
9	母親は父親に対して、決定力や影響力、発言力が強い					
	1	2	3	4	5	6

資料 3 第 5 章で使用したストレッサーとストレス反応に関する質問項目

3-1 ストレッサー測定項目

以下に、高校生時代におこりうる様々な出来事が並んでいます。まず、これらの出来事を実際経験したことがあるかをお聞きます。経験が（よくあった・時々あった・なかった）のうち当てはまるものに○をつけてください。

次に、経験した出来事について、あなたはそのような出来事についてどのように感じたかを答えて下さい。答え方は、（非常に嫌だ・嫌だ・少し嫌だ・あまり気にならない・気にならない・全然気にならない）の中から当てはまるものに○をつけてください。

	よく あ っ た	時 々 あ っ た	な か っ た	非 常 に 嫌 だ	嫌 だ	少 し 嫌 だ	あ ま り 気 に な ら な い	気 に な ら な い	全 然 気 に な ら な い
例 カゼで学校を休んだ	<input checked="" type="radio"/>								
1 授業の内容に興味を持てなかった									
2 何か気の合わない先生がいた									
3 授業の内容がわからなかった									
4 親が自分の要求を聞き入れてくれなかった									
5 家のきまりを守らなければならなかった									
6 友達に誤解された									
7 クラス役員や委員会の仕事をしなければならなかった									
8 学校の行事などで、集団で行動しなければならなかった									
9 服装や髪形など校則を守るよう注意された									
10 親に叱られた									
11 友達から自分の悪いところを指摘された									
12 仲の良かった友達とうまくいかなくなった									
13 朝起きてからの登校の準備が面倒だった									
14 家の手伝いを頼まれた									
15 友達とけんかをした									
16 自分の話を友達が聞いてくれなかった									
17 親と意見が合わなかった									
18 先生に叱られた									

	よくあつた	時々あつた	なかった	非常に嫌だ	嫌だ	少し嫌だ	あまり気にならない	気にならない	全然気にならない
19 親が自分を理解してくれなかった									
20 睡眠、食事などの生活が不規則になった									
21 親が自分のことを過度に期待していた									
22 やりたいことがなく、退屈だった									
23 テスト前の勉強をしなければならなかった									
24 クラス替えがあった									
25 授業中「静かにしなさい」と注意された									
26 学校でいじめられた									
27 先生から納得できない扱いを受けた									
28 学校で気の合わない人達と一緒に行動しなければならなかった									
29 自分の将来のことについて悩んだ									
30 塾、お稽古ごと、スポーツ教室に通っていた									
31 おこずかいが足りなかった									
32 成績が下がった									
33 自分のことに親が干渉してきた									
34 友達の話についていけなかった									
35 部活・クラブの練習が厳しかった									
36 気の合う仲間がなかなかできなかった									
37 先輩や後輩とうまくつきあえなかった									
38 自由な時間が少なかった									
39 自分自身の性格について悩んだ									
40 友達に嫌な思いをさせてしまった									

3-2 ストレス反応測定項目

ここ1週間のあなたの心と身体の状態や行動をよく表すと思う数字（0～3）を一つ選んで○をして下さい。

	あてはまらない	ややあてはまる	かなりあてはまる	非常にあてはまる
例 楽しい気分だ	0	①	2	3
1 悲しい気持ちだ	0	1	2	3
2 重苦しい圧迫感を感じる	0	1	2	3
3 不機嫌で、怒りっぽい	0	1	2	3
4 泣きたい気分だ	0	1	2	3
5 不安を感じる	0	1	2	3
6 怒りを感じる	0	1	2	3
7 さみしい気持ちだ	0	1	2	3
8 びくびくしている	0	1	2	3
9 不満がつのる	0	1	2	3
10 心が暗い	0	1	2	3
11 恐怖感をいだく	0	1	2	3
12 不愉快な気分だ	0	1	2	3
13 気分が落ち込み、沈む	0	1	2	3
14 気がかりである	0	1	2	3
15 いらいらする	0	1	2	3
16 頭の回転が鈍く、考えがまとまらない	0	1	2	3
17 他人に会うのがいやでわずらわしく感じられる	0	1	2	3
18 話しや行動にまとまりがない	0	1	2	3

	あてはまらない	ややあてはまる	かなりあてはまる	非常にあてはまる
19 話すことがいやでわずらわしく感じられる	0	1	2	3
20 根気がない	0	1	2	3
21 自分の殻に閉じこもる	0	1	2	3
22 行動に落ち着きがない	0	1	2	3
23 生きているのがいやだ	0	1	2	3
24 何も手につかない	0	1	2	3
25 人が信じられない	0	1	2	3
26 体が疲れやすい	0	1	2	3
27 呼吸が苦しくなる	0	1	2	3
28 体がだるい	0	1	2	3
29 動機がする	0	1	2	3
30 脱力感がある	0	1	2	3
31 吐き気がする	0	1	2	3
32 動作が鈍い	0	1	2	3
33 胸部がしめつけられる感じがする	0	1	2	3
34 頭が重い	0	1	2	3
35 耳鳴りがする	0	1	2	3

資料 4 第 6 章で使用した EAT-26

各文章を読み、あなたにもっともあてはまる表現の一つを選んで、数字に○をしてください。

	1 いつも	2 非常に ひんぱんに	3 しばしば	4 ときどき	5 たまに	6 まったくない
1) 太りすぎるのがこわい	1	2	3	4	5	6
2) おなかがすいたときに食べないようにしている	1	2	3	4	5	6
3) 食物のことで頭がいっぱいである	1	2	3	4	5	6
4) やめられないかもしれないと思うほど次から次へと食べ続けることがある	1	2	3	4	5	6
5) 食物を小さくきざんで少量ずつ口に入れる	1	2	3	4	5	6
6) 自分が食べる食物のカロリー量を知っている	1	2	3	4	5	6
7) 炭水化物が多い食物（パン、ごはん、パスタなど）は特に食べないようにしている	1	2	3	4	5	6
8) 他の人は、私よりもっと食べるようにと望んでいるようだ	1	2	3	4	5	6
9) 食べた後に吐く	1	2	3	4	5	6
10) 食べた後でひどく悪いことをしたような気になる	1	2	3	4	5	6
11) もっとやせたいという思いで頭がいっぱいである	1	2	3	4	5	6
12) カロリーを使っていることを考えながら運動する	1	2	3	4	5	6
13) 他の人は私のことをやせすぎだと思っている	1	2	3	4	5	6
14) 自分の身体に脂肪がつきすぎているという考えが頭から離れない	1	2	3	4	5	6
15) 他の人よりも食事をするのに時間がかかる	1	2	3	4	5	6
16) 砂糖が入っている食物は食べないようにしている	1	2	3	4	5	6
17) ダイエット食品を食べる	1	2	3	4	5	6
18) 私の生活は食物にふりまわされている気がする	1	2	3	4	5	6
19) 食物に関して自分で自分をコントロールしている	1	2	3	4	5	6
20) 他の人が私にもっと食べるように圧力をかけている感じがする	1	2	3	4	5	6
21) 食物に関して時間をかけすぎたり、考えすぎたりする	1	2	3	4	5	6
22) 甘い物を食べた後で、気分が落ち着かない	1	2	3	4	5	6
23) ダイエットをしている	1	2	3	4	5	6
24) 胃が空っぽの状態が好きだ	1	2	3	4	5	6
25) 食べたことがないカロリーが高い食物を食べてみることは楽しみだ	1	2	3	4	5	6
26) 食事の後で衝動的に吐きたくなる	1	2	3	4	5	6

資料 5 第 7 章で使用した研究同意書とインタビュー内容

5-1 研究同意書

ストレスと家族関係についてのアンケート調査協力同意書

このアンケート調査は、日常で感じるストレスと家族関係についてお尋ねするものです。質問の内容は、あなたとあなたの家族関係についての理解を深め、今後の支援に役立つ情報を得るために使用します。

アンケート調査への参加は協力者の任意によるものであり、随時拒否・撤回できます。また、これにより協力者が不利益を被ることはありません。結果が公表される場合、協力者のプライバシーは守られ、個人が特定できないように配慮いたします。所要時間は10分程度です。

説明日： 2012年 月 日

〇〇〇クリニック

臨床心理士 狐塚 貴博

院長 〇〇 〇〇

上記内容を理解し、承知した上で、アンケート調査協力を同意します。

同意日： 2012年 月 日

氏名： _____

5-2 インタビュー項目

stress (不安になる, 考え込む, 動揺する) の説明

1. 自分自身についてのストレスはありますか?

なし or あり→内容を尋ねる

[]

頻度: 1 全くなかった~3 よくあった

認知: 1 全く気にならない~6 非常に気になる

2. 日常生活でのストレスはありますか?

なし or あり→内容を尋ねる

[]

頻度: 1 全くなかった~3 よくあった

認知: 1 全く気にならない~6 非常に気になる

3. 家族内でのストレスはありますか?

なし or あり→内容を尋ねる

[]

頻度: 1 全くなかった~3 よくあった

認知: 1 全く気にならない~6 非常に気になる